
東方介入伝

N S E U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方介入伝

【Nコード】

N7302S

【作者名】

NSEU

【あらすじ】

現実世界の平凡な学生、桜之宮稟は死んでないのに神二人によって幻想入りされる理不尽な運命。

幻想郷にやがて訪れるであろう『異世界からの異変』に立ち向かう一人の少年の物語。いや、一人じゃないな……。

超不定期更新ですぞ。原作から離れキャラ崩壊する上に、異世界か

らのキャラも来ますぞ。不快に思われる方は今すぐ戻るかブラウザを閉じてくだされ。

第1話 全ての始まり（前書き）

この作品は「上海アリス幻楽団」様の「東方project」の二次創作となります。

気がつけば、そこは何もない世界。

第1話 全ての始まり

第一印象は白い世界だ。

俺は確か事故にも遭ってない。まだまだ先のある学生だ。しかし、目の前の光景は容赦なく非現実を映し出している。

となれば思い当たるのは一つ。

ここはどこにでもあつてどこにもない世界。天国とか地獄なら分かる。しかし、俺は死んでない。かといって急に目の前の空間が割れてそこに落ちたわけでもない。

全ては唐突だった。

とはいえ動く気にもなれん。それに、何もしなくても向こうから来るだろう。ま、たいてい神様でも現れるのがセオリーだ。二次創作の作品でよくある事だ。内容の濃いやつもあつて良かったな。まさか俺も現実となつてこんなところに来るとは……。

そしてお決まり通り、何処からともなく現れた神様っぽい老人……人？

老人ではなかった。結構若い。推定三十代の男性に見えた。

身体は質素な布に包まれ、頭には飾り帽子のようなものを被っている。その豪華な様からそこそこの神様と見た。

「我を恐るるに足らぬ。ヒトの子よ、心を休めたまえ」

見た目通りの若い声で話し掛けてきた。

「そのヒトの子が今から騒がしくなるぜ。まずどういった経緯で俺はここに来た？」

いくらなんでも神様が目的も無く俺をここにいさせる必要はないはずだ。一方的に連れて来られたんだ。聞く権利ぐらいあっても良からう。

「理由を聞く前にまずは名前を上げよ」

やはり無視したか。いや、無視ではないようだ。

「俺か？俺は桜ノ宮稟^{りん}だ」

「我が名は帝釈天である」

……おい、ちょっと待て。なぜ仏教の神様が現れる。帝釈天と言えば、頭上に宝髻を結び、中国式の礼服を着た二臂像しか知らない。修学旅行で行ったんだがあまり覚えてない。確か阿修羅とも戦闘したという武勇の神であったけど、仏教に取り入れられ、成道前から釈迦を助け、またその説法を聴聞したことで、梵天と並んで仏教の二大護法善神となった……って展示場の解説にあった……かも。まあ、いづれにしても目の前にいるのとイメージが全く違うが、神々しい雰囲気は本物だから多分本物だと思う。

「案ずることはない。貴公は選ばれたのだ」

必死で情報整理中だったので聞き逃しそうになった。

「何……だと！？ 一体どういう意味だ！？ いや、ですか!？」

一応神なんで敬語に訂正。

「貴公の持つ常識と知恵は我々にも都合なのだ。しかも他の者と違い独特の視点、考え、非常識も知恵として受け入れる妥協性。貴公ならばヒトの子に紛し、道理を外れた者を止められると判断し、ここへ連れて来た」

全く分らない。確かに前半は合ってる。だが後半は訳が分からない。

ヒトの子に紛し、道理を外れた者？化け物か？そいつを俺が止める？

俺は現実世界で生きていた正真正銘の平凡な人間だ。学生だ。いくらなんでも信じられない。

帝釈天と名乗る神様は続けた。

「貴公はこれより異世界へ行き、道理を外れた者を正しい道へ戻すのだ。我と話すのはこれまでだ」

と言い、稟に背を向けた。

まさか取り残される！？俺は大声で叫んだ。

「お待ち下さい！帝釈天様！！」

「案ずるな、ヒトの子よ。次期に新たな神が舞い降りる。それまで待たれよ」

と言い残して視界から消えた。

少し時間が経ち、帝釈天の言った通り、神様は現れた。白い衣服

に包まれた典型的な老人だ。

「お主、典型的とは何事かつ!？」

ばれたか。流石に神は伊達ではなかった。

「……まあ、良いわ。で、お主が桜ノ宮稟だな？」

「その通りだ。帝釈天と名乗る神様は何も言わなかったが、あんたなら話してくれるだろう？」

「いいだろう。話さねばこちとて話が進まん」

老人（神様）説明中：

「酷い扱われようじゃの、わしは」

「知らん。で、そいつは人間なんだな」

説明は簡単に言えば、帝釈天の言っていたヒトの子に紛し、道理を外れた者は人間。しかも女性らしい。ただし異世界の女性。技術が超越してこの世界にまで干渉できるようだ。

どこのチート野郎だよ。余計な仕事増やしやがって。学生だから仕事もないのだが……。

「で、そいつを止める為に俺はどこの異世界に飛ばされるんだ？」

「ふむ、干渉ルートから考えれば奴らは幻想郷を通過する」

幻想郷か……あそこなら知識はある。小数ながら二次創作もよく

見た。

「となれば俺も能力が貰えるのか」

「そうじゃ。話は終わり。逝ってこい」

「字が違う上に展開はy…!」

そのまま意識が薄れ、全ての感覚が閉じた。

「うっ……」

気が付いたら石段の前に倒れていた。

「マジで来たのか……?」

辺りを見渡せば森。石段へ続く道は獣道だ。そして石段の上には神社の鳥居。

日は既に傾いているのか、夕日に照らされた鳥居が美しく映る。

「……って俺何も聞かされてねえ! どうすんだよお! アホ神があつ!」

『誰がアホ神じゃ! そこは駄神じゃろ!』

あつ、聞こえたようだ。というか今、自分で駄神って認めたぞ。

『ゴホンッ、今は言葉のあやだ。それよりお主の能力を伝えに来た』

「仕事乙。教えやがれ」

『神様になぜ敬語を使わぬ!?』

「駄神と認めた上に帝釈天より下だから。それ以外に理由などないッ! って、うおい!!!?!?」

いきなり上空から頭目掛けて何か降ってきたのを紙一重で避けた。

「殺す気か!?!」

『うるさいわ! お主の能力は「ツルハシとスキルを操る程度の能力」じゃ。後は勝手にせい!』

そう言うのと徐々に気配が無くなる感じがした。もう二度と会うことはないだろう……。

というか……『ツルハシとスキルを操る程度の能力』って何だよ!?! 何この斬新な能力!?! ツルハシは分かるけどスキルって……?!

分からないので稟はとりあえず先程落ちてきた物を見た。

ツルハシだ。ついでにリュックまでご丁寧に。

これで幻想郷で生きていけるのか……?!

めちゃくちゃ不安なスタートとなった。いや、リスタートだ。現実世界の俺はもういないのだから……。

第1話 全ての始まり（後書き）

アドバイスまたは誤字・脱字指摘があれば感想で伝えてくだされ。

第2話 春色小路く博麗の巫女（前書き）

春色小路と書いて「はるいろこみち」と読む。

第2話 春色小路く博麗の巫女

仕方ないのでツルハシとリュックを背負って石段を登る。

やけにリュックが重い。何入れやがったんだ？

途中で確認は出来ない。鳥居に着いたら中身を確認するでしょう。

ほんの2分で登りきった。疲れはないが、リュックの中身が気になる。早速中身を出す。

「どうしてこうなった……」

中身は九本のツルハシ。手持ちのツルハシと合わせて十本だが小さい。十分の一ぐらいか？

と思って小さいのを一本掴むと、持ったツルハシが元のサイズにまで大きくなり、最初に持っていたツルハシが逆に小さくなった。

どうやら使い分けろって事か。

後は缶詰とかの非常食に俺の財布。どっから持ってきた、あの駄神め……。

それはさておきリュックに詰め込んで次は神社に向かおうと思った。えっ？もう神社じゃんって？本殿の事ですよ。ここ鳥居です。

相変わらず参拝客のない博麗神社。

でも逆にいい。そよ風に吹かれ木の葉が微かに揺れ、心地良い音色となって耳に入る。自然が奏でる調和はいつでも癒される。そういえば桜が最も綺麗に見れるとあったが今は季節が違うからか咲いてはなかった。

静かに夕日に照らされた境内もまた幻想の景色を創っていた。

そんな自然を満喫していると、

「あら、この時間に珍しいわね。参拝客かしら？」

本殿の縁側の陰から紅白巫女が現れた。

「参拝客としては人里の人間と服が違うわね……外来人かしら……？」

俺に近づいている間ずっと独り言をブツブツ言う。ちなみに俺の服は白いTシャツに碧のセーター、ジーンパンと完全に質素な私服だ。リュック背負ってるからオタクじゃね？って疑われても可笑しくないほど服のセンスはない。今すぐ着替えたいぐらいだ。どう対応すりゃいいのかなあ？

「ねえ、あなたは参拝客？ それとも外来人？」

ここは正直に言うべきだな。

「両方」

「即答ね。まあ、参拝客なら参拝したら？ あっ、賽銭だけは忘れないでね！ ほら、あそこにあるからちゃんと入れるのよ！ ねっ！」

人差し指でビシッと賽銭箱を指す巫女。
相変わらずだよ、この人……。

ご利益はわからんが悪い事にはならんだろう。御望み通りお参りしてあげよう。

まあとりあえず1円、5円、10円、50円、100円、500円、1000円、5000円、10000円、100000円をそれぞれで計16666円。財政難だから仕方ないな。賽銭箱に入れてっと。

鈴は……少し小さいけどあった。鈴を鳴らして……、確か……二拝、二拍、一拝……っとこんな感じかな？

で、振り返ってみると……巫女が号泣していた。
漫画みたいに大量の涙が一直線に出てる感じ。というより……

「何で泣いてんだ!?!」

「いやあ、だってえ……グスツ、真面目に参拝してくれるなんて……思わなかったから、つい……」

身長は俺が上なのかな？ こう見てると案外……いや、凄く可愛い!!! 泣き顔で上目遣い……、はっ、危ない危ない。でも放っておくと話ができない。

「と、とりあえず泣くの止めてくれないかな？ えっと、は、話したい事とかあるし、なっ?」

「うんっ、分かった……」

鼻をズズツと鳴らして涙を拭う。少し目が赤かった。しばらくしてから話し出す。

「で、あんた外来人でもあったわね？　どうやって来たの？」

「あー……、実は気が付いたら石段の手前にいて……」

「石段の手前？　あんたよく妖怪に襲われなかったわね」

「ああ、気が付いたらすぐ石段登ったからな」

すぐではなかったが。

「ふーん、珍しい外来人ね。そういや名前は？」

「おっと、そうだった。俺は桜ノ宮稟。苗字が長いから稟って呼んでもいい」

「博麗霊夢よ。この神社の巫女をしてるわ。……って言っても外人なら私の事知ってんでしょ？」

今の言い方、何か引っ掛かる。俺以前に誰か来たのだろうか？

「誰か俺の前に外来人が来た事があるんですか？」

「ええ、一人だったけどもういないわ。帰ったって聞いたけど……」

ちよっと待て！　帰ったって事は幻想郷を囲む博麗大結界を抜け

たというのか!?

「でも、その人いつでも幻想郷に行き来できるって言ってたわ」

「それって博麗大結界を越えてですか？」

「……………」

急に黙り込む霊夢。

「どうしたんですか…………？」

「……実は私も知らないのよ。どうやって幻想郷に行き来できるのか。でも博麗大結界を壊すとか無理矢理越えるところとかじゃなくて、こう……………いつの間にかいる……………みたいなの……………」

いつの間にかいる……………どんだけチート入った奴だよ。

「で、話変わるけどあんたこれからどうするの？」

「え？ どうって？」

「いや、だから旅とかするんじゃないの？」

そういえば大半は自分の能力を駆使して幻想郷を旅するキャラが多かったな。

とはいえ俺は「ツルハシとスキルを操る程度の能力」。スキルが何なのか分かれれば旅してもいいんだが……………。

逆に旅に出て何の能力も見極めるという手もあるが俺はそこまです度胸はない。それに身体能力も悪くはないが長く旅をするには知

識だけでは不十分。だから……

「出来たら神社に泊めてほしい」

断られたら諦めるが……

「いいわよ」

「即答かつあっさり!?!」

「だってお賽銭も入れてくれたし。じゃあ入りなさいよ」

ということでした。しばらく博麗神社に泊まることとなった。

夜、夕食を食べる前におかずにとリュックから缶詰を出した。霊夢は知らないのか、（銀色の円柱のように）缶詰を眺めた。

「それは何?」

「これか? これは缶詰って言って、いわゆる食料だ」

「この銀色の円柱が食料? でも固いわ」

缶詰を手にとって見つめながら喋る霊夢。この発言に俺はつい笑った。普通見た目の物を食料として見られるか? 出来るだけ声を

抑えるが肩が震える。

「な、なんで笑ってるのよ!？」

「だって…クフツ、どうみてもそれ自体が食料には見えんだろ。それは容器。中に食料が入ってるんだよ」

すると霊夢が赤くなって必死に弁解した。

「そ、それくらい私だって分かってたわよ! わざとよ、わざと!」

逆に滑稽に見えてまた笑った。

「ちょ!! 笑わないでよ!!」

その後、質素な夕食に俺の缶詰で豪華となって、

「久しぶりにうまい食事にありつけたわ、ありがとうね」

と感謝してから霊夢は開けた缶詰全てをたいらげて満足した。そんな感じで一夜は更けた。

第3話 風神少女と宵闇の妖怪

翌日、博麗神社で一夜過ごしたのだが、まず真っ先に理解してほしい。

俺は白だ、と

なぜこんな事を言うのか昨夜から順を追って説明しよう。

夕食後、部屋を案内されたのだが何故か霊夢が寝る布団のすぐ隣だった。「別の部屋がちよつと使えないから……」というのが理由だがわざわざ隣にしくなくても……と思っていたが仕方なくそこで寝た。

で、何事もなく布団で普通に寝て朝を迎えた俺は、気が付いたら霊夢が右腕を掴んでいて、所謂添い寝をしていた。

俺は完全に頭が混乱した。昨夜はぐっすり寝ていた。何もしていない。どうしてこうなったのか見当もつかない。

起き上がろうとしても腕を掴まれてて起きれない。

「ん……逃がさないわ……私の………むにゃむにゃ……」

今のは霊夢の寝言だ。最後何て言ったか聞き取れなかった。

なんか嫌な予感がするのは気のせいだろうか……。

「―――ですね。いやいや―――」

……誰だ？ 外から聞こえたがもしや……。

絡み付く腕を無理矢理解いて障子をスパアーンと勢いよく開けた。

「うわぁ！？ ば、ばれてしまいましたか！」

「あんたは射命丸文！」

「あややや！？ 私の名前知ってるんですか！？」

烏天狗の「文々。新聞」新聞記者。なぜここにいる？ いや真っ先に聞くべきは……

「お前、障子の隙間から中を盗撮していたな？」

「ギクッ！ い、いいえ！ 私はちょうどここに寄った時にあなたが障子を急に開けたからびっくりしたんですよ！」

「嘘つくな！！ 開けた瞬間に『ばれた』って言ってたし、さっき『ギクッ』って言っただろ！！」

俺の怒りはほぼ頂点だ。こんな現場を押さえられたら幻想郷生活に支障が出る。これだけは御免被りたい。とりあえず殺気を出せるだけ出して威圧する。

「よし、ならば今すぐ撮った写真を渡すか、そのカメラを壊して新聞記者辞めるかどっちか決めろ。それで許す」

「ヒイイイ…、そんなのって理不尽です……けどせっかくのスク
ープ！ 簡単に手放すわけには……！」

ほう。ここで新聞記者の意地を出すか。宜しい。ならば戦争だ。

「カモン、ツルハシ！」

「な、何ですかその変な掛け声は？ ……あややや、いつの間に手
に何か現れましたよ！？」

俺の手に現れたのは尖端の逆側にマゼンタの水晶が挟まれたツル
ハシ『トウルハシ』だ。スキルが使えるならスペカとして使えるは
ずだ。

眠符「トウルスリープ」

マゼンタの水晶が三個現れると文に投げ付けた。水晶が割れると
心地良い音波が発生した。

「なっ…！？これ…は……うつ………」

その場から飛び立って離れようとした文だが、音波が耳に届くと
急激に睡魔に襲われ、そのまま落下する。

「うおっと！ 危ない危ない……」

落ちてくる文を受け止めたが、文は完全に熟睡している。静かに
寝息を立てていた。それと拍子に手に持っていた手帖が地面に落ち

た。

とりあえず文を縁側に寝かせ、落ちた手帖から盗撮したと思われる写真数枚を抜き出して地面に埋めた。もとはツルハシだから埋めるくらい造作も無い。

まったく、どこが『清く正しい』だよ……。幻想郷は朝から疲れるな。で、文はどうしようか？

「うるさいわねえ、何の騒ぎよお……」

「おっ、グッドタイミング」

ちょうど霊夢が起きた。これなら大丈夫だ。多分……。

「ふわぁーあ、一体何やって……って文？　なんでここで寝てるの？」

「原因主に俺」

「でしょうね。外で霊力の変動を感じたわ。稟って能力持ち？」

「言ってなかったっけ？」

「言っていないわよ。勿体振らないで教えなさい」

「俺もよくわからんが『ツルハシとスキルを操る程度の能力』だ」

そういえばさっきは怒りでツルハシ使ってたけど違和感なかったな。というよりツルハシスキルをスペカ風に使えた時点で能力分かったんじゃない？

「まあ後でゆっくり聞いわ。それよりおかず頂戴。朝食の」

だったよ……。ここに泊まる条件に缶詰を差し出すことが追加されていたんだっけ……。缶詰は確かにうまいし俺も食べるから問題は無いんだけど……。

「それより霊夢さん、この寝てる烏天狗は「放っとけば？　ていうかあんた名前知ってるのにわざわざ烏天狗って言う必要がある？」そうか……」

でも文の寝顔もなかなか可愛いのだが……。

霊夢の鋭い視線が飛んできたので、拾った手帖を文の手に置いて中に入った。

今更気づいたんだが、リュックの中の缶詰は減ってない。最初は八缶ストックされてて、昨夜は三缶開けた。しかし、朝確認したら八缶しっかりあった。

真相を知るべくリュックを整理したら紙切れが一枚入っていて、その紙切れが『缶詰自動生成魔法陣』とこれまたチートな紙切れで、これで缶詰が復活したのが分かった。

食料に困らないという点では感謝しよう。

霊夢が用意したご飯と俺の缶詰が並んで食卓に出て、今それを食べていた。缶詰は「鯖の味噌煮」と「フルーツポンチ」。朝はこれで十分だ。

「にしてもこの鯖の味噌煮…だっけ？　なかなか美味しいじゃない。魚なんて久しぶりに食べたわ」

霊夢も上機嫌で箸を進める。こうやって笑顔で食べている霊夢も絵になるくらい可愛いと思うのは俺だけだろうか？

とか考えていると障子が開いた。入ってきたのは縁側で寝ていた文だ。

「あら、起きたのね。でもあんたにあげる飯はないわよ」

「要りませんよ。神社の食事情くらい承知の上ですから。それより私はこの人に用があるのですが……、取材しても…宜しいでしょうか…？」

そうだろうな。博麗神社に謎の男性。新聞記者にとってスクープだ。しかし、文は少しびくびくしている。最後の台詞が途切れ途切れだったし、やっぱさっきのはやり過ぎたのかなあ……。そういうつもりでした訳でないから少し罪悪感が……。

「まあ少しだけならいいぞ」

「（ホッ）ありがとうございます♪　では始めに、あなたは外来人ですよね？」

「ああ、しがない学生だ。名前は桜ノ宮稟」

「桜ノ宮稟さんですね。ありがとうございました」

「ん？　それだけか？」

「いえ、後日改めて取材しに来ますので、詳しい事はその時に」

「まあ、俺も今取材に答えようって気にはなってないしな」

「そうでしたか。あ、それと……」

と文は俺の耳元に近寄って恐る恐る囁いた。

「れ、例の写真は……」

この瞬間俺の手はまっしぐらに文の首を絞めていた。

「グエエ、ご、ごめんなさいごめんなさい！　もうそれには二度と触れ…ないと誓いま…すので…手を…離し……て…」

羽をばさばさとはためかせ苦しい表情を浮かべて呻くように許しを乞う文。反省しているようだし、文の言葉を信用して離す。

「ぷはあ、ゲホッ、ゲホッ」

「ちよ、一体どうしたのよ！？　急に文の首を絞めて!？」

ご飯を食べながら一人状況を理解できていない霊夢。むしろできなくていい。というより霊夢は今朝の事に覚えがあるのだろうか？

「ゲホッ……では、後日改めて……」

まだ若干苦しそうだったが、外に出ると一瞬で飛び去った。

「ねえ、何かあったの？」

「いや…何も…」

霊夢が朝の出来事を覚えているかいないか以前に聞くのが怖くな
った。

何度か聞いてきたが適当かつ曖昧に答えてやり過ごした。

何か納得いかない霊夢だったが、朝食後何やら支度をしている。

「霊夢さん、どこか出掛けるのか？」

「今から人里に米とか買いに行くのよ。というか『さん』付けしな
くていいわよ」

「じゃあ次からそうします」

「まあどうでもいいけど……。それより稟もついて来る？」

人里は幻想郷の至る場所を繋ぐポイントである以上場所を知らな
くてはと思っていたところなので、ちょうど良かった。

「是非ご一緒させてもらいます」

「ん…分かった。今は和服に着替えてあるから大丈夫ね」

俺といえどもあの私服はちょっと…:…と思ってたくらいだ。先程霊夢が「おかずのお礼」とか言って和服を持ってきてくれた。こっちの方がしっくり来る。でもリュック持ちだから変な事に変わりは無いがな。

「じゃあ、稟、行くわよ」

「今行きます」

しかし、神社から人里への道は決して楽ではなかった。

鳥居を出て、石段を下り、獣道を歩いている。霊夢は空を飛んでいるが、俺の歩く速度に倣ってゆっくり飛んでいた。

「稟が飛べれば楽に着いたんだけど」

「そりゃあ無理な話ですぜ、お嬢さん」

「誰がお嬢さんよ」

「その場のノリだ」

こんな感じで歩いていたら、出てきた。

「グルルルウ……!!」

狼っぽい妖怪だ。ざっと五匹。

「あら、今時妖怪が襲ってくるなんて珍しいわね」

「そんな悠長に言ってる場合か!？」

正直初めて出会うし対処の仕方也不知道だからパニックってる。

「グルルルウウ……」

狼っぽい妖怪は一步一步近づいてくる。

「あゝ、私は面倒だから稟、あなたが相手しなさい」

「っておいっ!!!!? 何丸投げしてんだ!? あんた専門だろ!

「グルルウアアア!!!!」

とか考えてるうちに一匹来たー!!!!

ええい、仕方ない! 適当にツルハシを取り出して自棄になって横スイング。これが連結部分に見事クリーンヒットして集団の一匹も巻き込んで空の彼方に飛ばした。

「お、いい線いったぜ」

とか一人で納得していると背後で大きい音と「キャイン!」とか言う声を聞こえた。

霊夢がやったのだろうと思って振り向けば……。

「コオオオオッ……」

？
どっからどう見ても妖怪って感じの妖怪がいた。よく分からない
？ ようは人型の妖怪で爪が長い奴。

正直な話だが、きつい。俺の記憶ではツルハシスキルには直接的
攻撃がない。だからツルハシで直に戦うしかない。

「グルル……」

「ギャアギャア……」

「ギギギギギ……」

あるえ？ 妖怪増えてない？ というか人里までにこんな多数の
妖怪に出くわすか？

考えている暇はなさそうだ。一斉に来た。近接しか出来ないから
怪我するかもしれないが命失うよかマシだ！ 覚悟を決めて……！！

「夢想封印・改っ！！」

突如七色の弾が妖怪目掛けて向かって、一気に蹴散らした。

「はあ……、あんたが遅いから私がやったわ。感謝しなさいよね」

まさかの救援か。正直助かった。しかし、感謝の言葉を言う前に
霊夢が制した。

「待つて。まだよ」

霊夢の見ている方向に黒い固まりが……いや、闇の固まりと言っ
てもいい。

「あれは……ルーミア」

宵闇の妖怪。しかし変だ。今は昼。なぜ今活動している？

と、闇が晴れてルーミアが姿を現した。

「あなたは食べられる人類？ それとも妖怪？」

お決まりの台詞か。前半だけ。

「あんた何言ってるの？ 私達が妖怪に見える？」

「じゃあ、食べられる人類？」

「その人間は食べられる人類よ」

「って、こらあ！！！！ なにげに仲間（？）売ってんじゃないえ！
！」

「そーなのか。じゃあ、襲っちゃえ」

完全にマークされたよ……。

「グルウアア!!」

ルーミアじゃなくてさっきの狼妖怪が襲ってきた。仕方ない。

「エンチャント『トウルハシ』!!」

眠符「トウルスリープ」

再びマゼンタの水晶を召喚し、割る。たちどころに狼妖怪が眠る。

「くらいなさいっ!!」

狼妖怪を眠らせてる最中に霊夢が高い密度のお札攻撃でルーミアを撃破した。それって手柄の横取りじゃない？

「うわぁ……!!」

ルーミアはその場で倒れ込んだ。多分気絶したのだろう。

ふと、ルーミアの左手首に紙が結んであるのを見つけた。ルーミアってこんなの付けてたか？ でも気になるので外してみた。

「何それ？」

霊夢も気がついて近づいて尋ねてきた。

「さあ？」

で、紙を開いたわけだが……

バン↓ドカツ↓じわじわあ↓わはーなのだ

意味が分からない。ルーミアは分かるようだが……。霊夢もキョトンとして見ている。

ところが裏にも何か書いてあるので裏も見てみた。そしたら凄い事が書いてあった。

『闇を操る程度の能力』の考察。

なんなら精神征圧をしよう。

人間でも妖怪でも心に闇、則ち欲望がある！！ ならば心の闇を操ってあいつらを見返せ！！ 妖怪を手下にして本能を思い出させろ！！ 本能なら相手が巫女でも襲えるぜ！！

「……………」

絶句。分かったことは、妖怪が襲ってきたのはルーミアが応用で心の闇 欲望を操ってたからということだ。

だから幻想郷最強と言われてる霊夢にも襲ってきたわけだ。妖怪

達も操られなければ霊夢を襲うことは有り得ないからな。

見終わってから互いに顔を合わせて、

「ルーミアって頭いいのか？」

「さあ……？ さっきあっさり倒しちゃったし」

俺の知識以上の場所かもな。幻想郷って。

再び歩いて、ようやく人里が見え始めた。

「ようやく着いたわね」

「ああ、やっとだ」

ルーミアとの遭遇もあって時間が掛かったが人里を捉えて安堵した。

「しかし、俺も空跳べたり八雲紫みたいにスキマで移動出来たら楽だったのにな」

きわめて率直な感想を述べたつもりだった。しかし、霊夢から出た言葉は俺の全ての思考を停止させた。

「そうね。ところで、八雲紫って誰？」

第3話 風神少女と宵闇の妖怪（後書き）

もう気づいていると思いますが、「勇なま…3D」のツルハシです。破壊神です。稟は破壊神ではありません（↑ここ重要！）。

ついでですが次回、外来人追加されます。タグにもありますが。

第4話 驚愕の事実＋ α （前書き）

人里周辺に幻想入りした少女が一人。

第4話 驚愕の事実＋α

稟と霊夢が人里へ到着する約20分前、博麗神社へ向かう獣道とは正反対の森の中に、一人の少女が不可抗力で幻想入りを果たした。

「う、ううん?？」

森で目覚めた少女は身体を起こし、周りを見渡す。普通の人ならいきなりの展開にまず落ち着こうなどと言うかもしれない。だが、彼女は違った。

「……………ここってビルマ?」

あつれえ?？ 私何してんだろ? ジャングルの中で寝た覚えはないんだけどな。

まあ、それはいいんだけど……。やっぱサボってたのがばれて追い出されたかなあ?？

自分の置かれている状況にまったく意に介さないという具合だ。彼女は自分の左腕を見た。手首と肘のちょうど中間に血の付いた包帯が巻いてある。

おっし。私のアレも大丈夫だあ。……あれ? な〜んか足りない気が……。あっ!

少女は何かを思い出し、急に周りを見回す。どうやら物のようだ。

やっばいよ！ やばいよやばい！！ アレが無きゃ、私の楽しみが無くなるってもんだあ！

それから2分後に彼女は自分が寝ていた場所から約10mのところに探していたアレを見つけた。

お？ おおっ！ あったぞお！ 大事な大事なMy chain saw！！ ってあれ？ なんだろう……マスクかな？ なんか変なマスクだなく……外見が恐いっつか。

と、気が付いたら集落みたいな質素な家が沢山建っている場所を見つけた。勿論彼女はこれが幻想郷の人里であることは全く知らない。

そうだっ！ このマスク被って中の人を驚かしちまおう♪ フッフッ、今なら監視役も上官もないし、面倒な姉妹もないし、なにより私は自由だあー！ 実行するならまさに絶好のchain ce！！

ついでになんか食い物も頂いちゃお。戦争は常に物資の確保が優先だぜえ！ リーメンバーパールハーバ♪

さて、今の状況を説明したいのだが俺の頭は現在パーフェクトフリーズ状態だ。だって霊夢が恐ろしく残酷な一言をサラっと言ったんだよ？ 博麗の巫女だろ？ なんであんたが八雲紫を知らないって言ったんだ！？」

「り、稟？　なんかよく分からないけど大丈夫？　えっ、それとも稟が寝てる途中に私が無理矢理何か変な物食べさせたから？」

「ちょっと待てい！！　あんたは俺に一体何を食べさせたあ！？」

さすがに今のツッコむよ！！　寝てる間に一体何をしたんだ！

「じよ、冗談よ……ハハハ……」

「冗談と言いながら目を逸らさないで！　目を合わせて！　目を見て話して！　まじ勘弁してくれ……」

この巫女さんマジないわあ……。俺を何かの実験体と間違えてませんか？　永淋さんじゃあるまいし……。今すぐ泣きたいぐらいだ。既に落ち込みポーズ全開。

「わぁーっ！！　う、嘘よ！　嘘！　何もしてないって！　本当だから！　ねっ？」

さすがに霊夢も度が過ぎたと思ったのかすぐに謝る。

取り乱してしまった……。さて、真相をもう一度聞こうと思うが、異論はないな？

「さっきのは冗談だけど、本当にどうかしたの？」

「霊夢。お前、本当に八雲紫を知らないのか？」

「あ、そっち？ ……本当に知らないわ」

「大妖怪と畏れられ、妖怪の賢者として（ごく少ない者に）慕われ、幻想郷そのものの存続に欠かせない超重要人物！ 神隠しの主犯、スキマ妖怪、八雲紫を知らないのかっ！？」

俺が知ってる範囲だ。もっと言いようがあるだろうと思うかもしれないが仕方がないのだ。霊夢の反応を知りたかった。しかし、やはり同じく、

「こればかりは本当よ。知らない」

と言う。霊夢の一言一言が俺にとってとてもなく重い一言であった。そして、想定したくない最悪の状態がまさに今なのかもしれない。

『もしここが俺の知らない幻想郷の平行世界なら？』

もしその時、人里から悲鳴が上がらなかったら、俺はこの場にずっと立ち尽くしていただろう。

「今の悲鳴、人里から……。まさか妖怪がっ!？」

「考えてる暇なんてねえ! 霊夢、行くぞ！」

「え? 何そのテンション? さっきまで……って、待ちなさいよ！」

一人先走るも霊夢は普通に空飛んで追いついた。聞こえた悲鳴はあそこらへんだ。確かに外来人の俺がでしゃばる必要はないが、人が危険な目に遭っているなら助けてもいいはずだ。現実世界じゃよくボランティアに参加したもんだ。状況はまったく違うが。

正直、妖怪と渡り合うにはこのツルハシじゃ不十分だがスキルで少しは足止めはできるだろう。

そう思っで一氣に現場に駆けて行こうとしたら、近くを通り過ぎた人里の人間に話し掛けられた。

「お、おい! 君、危ないぞ! そっちは恐ろしい奴がいるぞ！」

「ちょっと待って、稟」

俺を止めたのは霊夢。どうやら情報を聞くつもりらしい。

「ああ、あなたは博麗の! どうか奴を退治してください！」

「その前に、どんな奴だった？」

「さっき逃げてたからちらっとしか見てなかったけど、ピンク色の長髪で背の低い女子おなこが片手に何やら変なもの持ってて、その形相が……ああああ！」

おいおい。これはよほどの奴が来たと推測出来る。髪がピンク色……外人か？　しかし形相を思い出すだけで震え上がるとかやべえじゃん！　半泣き状態だし。これは霊夢も手が掛かりそうだ。

「ナイスだ青年！　それじゃ「待ってくれ、それと、慧音先生が女子の隙を見て頭突きしたんだけど負けちまった！　早くしないと慧音先生が危ねえ！」……はっ？」

「嘘ッ！？　あの慧音の頭突きがっ！？」

うん。分かる。分かるとも。慧音の頭突きの威力は幻想郷でも屈指に入る。それを突破したとなると並クラスの外人人ではなくない。まさか例のチート野郎か？

真相を確かめるべく現場に向かった。

5分前、少女はマスクを被って早速人里に入った。少女は驚いた。それは全員が古風な和服姿だから、というわけでない。今まで見た町の中で逸脱した古い町だから、というわけでもない。そこが日本人の村だからだ。

「ひ、ひいいい！」

「よ、妖怪だ！　妖怪が来たぞお！　なんと恐ろしい顔だ！」

少女を見た途端に村人が逃げようとするが、足元が覚束ない。最近人里が襲われることが無く、本当に久し振りなのだ。

一方の少女は自分を恐がって逃げ惑う日本人を見てテンションが上がってた。かつて弱者を虐げたように。

ひゃっほう！！　につっきYellow Monkeyども！
ビルマの借りをここできっちり返済するぜえ！！　……んー？　私のところに来る人が？

少女はその人が近づいてくるのを見て手に持っているものを止めた。

「その妖怪！　人里の人間に危害を与えるのなら容赦はしないぞ！　今すぐ人里から出ていくんだな！」

急な出来事だった。人里を歩いていた時、悲鳴が聞こえた。私は人里の人間が妖怪に襲われたと思い、すぐに悲鳴が上がったところに向かった。

そこにいたのは、確かに顔は妖怪と言っているほど恐ろしい形相だが、身体はどうみても寺子屋の生徒とあまり大差ない少女にしか見えなかった。しかし、手には刃物のような物を持っている。油断は出来ない。

「んー？ あんた誰？」

「人里を襲う妖怪ごときに名を名乗るほどではない！」

しかし何故だろうか？ 言葉は話せるし妖怪には見えない。だが、妖怪は人を襲う。ならば人を襲おうとしたこの少女は妖怪には違いないのだが……。

少女は刃物を振り回しながら私に向かってきた。考える暇はなさそう。人里の人間を守ってからだ。

少女はかなり身軽で、自分の背丈ほどある刃物を振り回しているが単調だ。私は振り回す刃物を避けて少女の懐に入る。そこから頭を掴んでおもしろい頭突きした。

ガンツという鈍い音が響き渡る。私が生徒たちにやる頭突きより強くやった。……はずなのだが……。

「ぐっ、ぐあああっ?!」

少女には効いてないどころか、私の頭に痛みが走った。こんな馬鹿な……。私の頭突きが効かないなんて……。そして私は愚かな行為をしたと後悔した。やはり彼女は妖怪だった、と。今、少女が真上に刃物を振り上げて私に向かって……。

「待ちなさい！　そこまでよ！」

「おまつ……まじ早っ……くはないな」

やっとこさ現場に着いた。例の妖怪とやらが慧音にチェーンソーを振り下ろす瞬間だった。

「ちえ」

何やら妖怪……じゃなくて少女がチェーンソーを止めて俺と霊夢に向き合う。

「ギャアアアアー！　ジェイソオオーン！！！！？」

思わず叫んだ。その少女の顔。あれは伝説の「ホッケーマスク」じゃありませんか！？　ホッケーマスクが分からない？　ヒント！

「13日の金曜日」！！

「ちょ、びっくりするじゃない！？　急に大声出して！」

「う、スマン！」

やっぱり怒られると即謝る癖は治ってなかったか……。

それはさておき、少女の外見、見たことがある。まず身長が低く、下半身に届くピンク色のボサボサの長髪。だぼだぼのセーラー服。左腕に巻いてる血のついた包帯。背丈並のチェーンソー。そして何よりも両足首に付けてるキャタピラに背中には肩から掛けてある戦

車の砲塔。間違いない。コイツ人間じゃねえ!!

じゃなくて……

「お前、スチュアートだな」

瞬間、少女は驚いてこちらを凝視した。マスク被ってるからわからないけど。

「な、なななっ、なんで私の名前をつ!!? ハッ、お前日本軍のス
パイってやつか!?!」

急にチェーンソーを起動させて突進するスチュアート。

「いや違うわ! スパイじゃなくて「ならば生かすわけにはいかね
え! Kill more Enemy!!」

仕方ない。相手が分かれば行動は分かる。ツルハシをセット。オ
ードソックスなツルハシの形に紫の柄の『ザ・ツルハシ』。

震符「フィールドクエイク」

突如スチュアートの周りの地面だけが震度6強並に大きく揺れる。

「う…おお、な…んだ…こり…?」

スチュアートが揺れに翻弄されるなか、俺はツルハシを構えて突
進する。勿論、俺には揺れの影響はない。さっき狼っぽい妖怪にや

ったように横スイング！ 見事に顔面にヒットした。

だがこの行為は自殺に等しい行為だった。顔面に当てた事。マスキは衝撃で取れた。しかし、少女は眉一つ動かさずに平然と受け止め、口元をニヤツと歪めて俺の腕を掴んだ。

「によほほほっ♪ 馬鹿だねえ。自分から私に近づくなんて」

背中に付けていた砲塔を回して俺に向ける。まさか設定通りとは思わなかった。片腕で掴まれてるのにぴくりとも動けない。それどころか掴まれてる部分がミシミシしている。零距离砲撃。その先は死！！

「死いー……」

「二重結界ッ！！」

「ギャヒイイイー！！」

スチュアートと俺の間で爆発が起きた。爆風で両者吹っ飛ばされたが、俺は右腕に少し火傷しただけだが、尻から地面に激突してしばらく動けなかった。多分だが砲身の発射口に結界を張ってくれたようだ。

た、助かった……。今のは本気で死を覚悟した。マジナイスだ、

霊夢。

「慧音は稟が喋ってる間に保護したわ。あつぶなかったわね。それにしても何、今の威力？ 結界壊されたんだけど」

洒落にならないな。霊夢の結界壊すとか威力が半端ない。本物の戦車砲のようだ。スチュアート、恐るべし。

「ヒイイイ、痛い、痛い」

スチュアートは身体を押さえてのたうち回っていた。威力の高い自分の砲弾を喰らえばそうなるだろう。砲身の先が破裂したように割れている。

「稟、アレは何なの？ 妖怪じゃなさそうだし」

「そうだな……。アレは外来人で——霊夢、後ろっ！！」

「っ！？」

「……もういい……」

いつの間にか霊夢の背後で既にスチュアートがチェーンソーを振り下ろそうとして！？ 駄目だ、間に合わなっ……！！

「スターダストレヴァリテ!!」

スチュアートの真横から箒が一直線に飛んできてぶつかり、その衝撃でスチュアートがぶっ飛び、近くの民家に突っ込んだ。箒に乗った本人はそのままクルッと振り返り、

「オッス、霊夢」

「「まっ、魔理沙!？」」

思わぬ助っ人に声がハモった。幻想郷の住人は本当いいタイミングでピンチを救ってくれる。

「いやー、人里辺りの空飛んでたらなんか霊夢の後ろから攻撃しようとしてた奴を見たからそのまま突っ込んだんだけど何だったんだ？ 妖怪？」

「あれは妖怪じゃないんだけどな……」

まあ幻想郷側から見ればたいてい妖怪に見えるのだろうか。

「ん？ 見ない顔だな。外人か？」

「そういえば初対面だな。桜之宮稟だ。稟と呼んでくれ」

「私は霧雨魔理沙だぜ。よろしくな」

手を差し出したのがっちり握手した。さて、後処理をどうするか。

「で、稟、あれは外人なわけ？」

質問が途切れたので霊夢が再び尋ねる。

「ああ、外人だが人間じゃない」

「外人人には人間じゃない奴も来るのか。じゃああの突撃は大丈夫ってわけだな」

正直分らないが死ぬ事はないだろう。多分。

「多分、大丈夫。アレは人に創られた人造人間みたいな奴だ」

「……?」

「まあ、後で教えてやる。それよりアレをどうにかしないと」

俺は立ち上がって民家に突っ込んだスチュアートを見てみた。仰向けになって気を失っていた。手にしっかりチェーンソーを握って。

放っておけばまた人里に危害を加えるかもしれんし、一番有効なのは俺がずっと見ておく事なんだけど。

「魔理沙さん、これを包めるほど大きい袋持ってませんか」

「おう、持ってるぜ」

間髪入れずに袋を渡してくれた。これから紅魔館の図書館で本を盗む予定であったのだろう。

その袋でスチュアートを包む。

「一体どうするの？」

「神社につれて行きます」

「ハア！？ 何考えてんのよ！！ 私のおかず減らす気！？」

やっぱりそっちで怒り始めた霊夢。食料はあんまり人に頼るなど言いたいに住ましてもらってる以上言うわけにはいかない。

「おっ、なんか面白くなりそうだな。よし、私が神社まで送ってやるよ」

「ちょっと、魔理沙まで！？」

「お願いします」

「おう、任せろ」

「任せるなあ！！」

霊夢が文句を言ってるのをよそに俺は魔理沙の箒に乗って神社まで飛んで貰った。

神社に着いてから俺はスチュアートについて知ってる範囲で説明した。

見た目は少女だが実際は戦場の最前線で戦う兵器という人造人間の一種であること。

途中分らない単語もできるだけ分かりやすく説明した。

「じゃあ、つまりあんたが見張っていればそのスチュアートとやらが危害を加えたりしないんだな？」

「機械だからにとりが喜びそうね」

「確かにな。でも、彼女には知能もあるから言い聞かせれば大丈夫だ」

「そっか。……っと、そうだった。これから紅魔館の図書館に行くところだった。んじゃ、頑張るんだぜ」

「あんた懲りないわね」

「だから盗むんじゃないくて一生借りるだけだぜ」

そう言って魔理沙は箒に乗って一直線に紅魔館へと向かった。

さて、これからどうするかと思っていたら大事な事を思い出した。

魔理沙に紫のこと聞くの忘れてた……。

第4話 驚愕の事実＋a（後書き）

スチュアートについての補足

簡単に言えば兵器を擬人化した少女（鋼の乙女と言う）。

モデルは第二次世界大戦のアメリカ軍軽戦車『M3 スチュアート』
。日本軍にとって脅威の軽戦車。

左腕の包帯は決して怪我をして付けてるのではない。むしろ怪我はしていないが何やら秘密がある。

勉強も駄目で運動も駄目でマイペース。よくサボっているが、場をこまかすような悪知恵はよく働く。

第5話 人の形弄ぶ魔法の森（前書き）

後半が恐ろしいほどggggに……。

そしてアリスファンに申し訳ない程アリスのキャラ崩壊が激しい。

第5話 人の形弄ぶ魔法の森

俺は博麗神社に一ヶ月引きこもった。というのもスチュアートの考えを改めさせて幻想郷に順応させようとしてたわけだ。

最初は余り納得しなかった霊夢だが、時間が経つにつれて少し手伝ってくれた。手伝いと言っても神社の敷地に結界を張ってスチュアートを出さないようにしただけだ。誰か人が来た時は結界を解いて通すのだが、数日前珍しい人が俺に会う目的で訪れた。

「あなたが桜之宮稟さんですね。稗田阿求です」

幻想郷縁起の編纂をしている少女。普通、博麗神社に来るのは稀である。

「まあ、はい。私が桜之宮稟ですが何か？」

「この前里が襲われた時に妖怪に立ち向かったと聞きました。その妖怪の事も含めて今日は話を伺いに来ました」

うん、礼儀正しい子です。しかし、妖怪の話をするとなるとこれまた面倒になりそうなの……。

「あの……阿求さん、妖怪についてなんですがね……」

と言いかけている内にあいつが来た。

「おーい、りゅん、早く来ないと霊夢が結界張れないって怒ってたぞ」

おっと、そういえばここは境内で立ちっぱなしで話していたんだ。俺はすぐ返事する。

「そ、そうか、分かった！　じゃあここでもなんだし神社の方で話をしますよ」

しかし、阿求は動こうとせず、スチュアートに釘づけだ。

「あ、阿求さん？」

「あれは確か里を襲った……」

あれ？　もしかして外見を見たことあるのか？

「よしっ、今日は予定を変更してあの妖怪とどう過ごしているかまで聞きたいと思います！」

どうしてこうなった……。

結局神社の中の一室に入ってから妙に張り切った阿求から2時間質問攻めに遭いました。

自分の紹介から能力、ここに来た理由、博麗神社に泊まっている理由、リュックの中身、スチュアートについて、霊夢との関係、etc……。

前半は良かったんだ。良かったんだけど……後半から阿求自身が興味ある質問へと変わり、答えづらい質問連発してきたから精神的にまいった……。絶対あんな性格じゃないはずだが……。

「いろいろ話を聞けて良かったです。人里に来た時はたまに私の家にも寄ってください。それでは……」

最後にこう言って帰った。その日の霊夢の目つきがやけに厳しかったのはどこかで盗み聞きしてたからだろうか。食事中目を合わせなかったし。ちなみにスチュアートは終始ニヤニヤしていた。

一ヶ月が過ぎた頃にはスチュアートも自覚したのか勝手にふらふら歩いて行くことが無くなったので結界を解除した。

「ようやく終わったわね。じゃあ私疲れたから昼寝する」

と言って神社の中に籠る。二週間だけだか楽にスチュアートを幻想郷に順応させた。

「……じゃあ俺達はどうするか？」

「稟といっしょにどこか行きたい」

即答。しかし、俺の知っている場所は人里のみ。知識には他の場所とかあるけど、実際の地理を知らないからいけないのだ。人里から近い場所……。

と、ここであの場所を思い出す。

「あっ、魔法の森はどうだ？ 人里に近いからすぐ行けるぞ」

「森か。伐採OK？」

「答えはNOだ」

「ちえ、ま、いつか。じゃ、とつと行こうぜえ♪」

とりあえずスチュアートがいれば妖怪も襲って来ないので安心できる。

とその時、突然スチュアートが左腕の包帯を押さえて苦しがり始める。そして倒れる。左腕を押さえながらごろごろのたうちまわる。

「お、おい！？　どうした！？」

目の前の人がいきなり前触れも無く倒れたらたいい驚くだろう。

「ぐ、ぐううつ、こ、こんな時に！　だ、駄目だあ！　あゝ、まだ出てこないで！！」

俺がこの瞬間にとった行動はというと、傍観。ひたすら傍観。終わるまで傍観。

5分後

ようやく動きを止めたスチュアートが立ち上がると俺にこう言った。

「ふうっ。危なかったあゝ。もしあの時あゝしなかったら今頃私

のジャッキーGUNが現れてダークフォースに包みこまれるところだった」

「オオ、怖い怖い。危ナイトコロデシタネ（棒読み）」

俺が率直に思ったことを言おう。あの一ヶ月の間で幻想郷の順応よりこいつの妄想思考を改善すべきだった、と。

人里に到着したが、この前阿求に話しておいたのは正解だった。村人はスチュアートを見ても誰も騒がなくなった。危険性が無いことを知らせたのだろう。本当に感謝します、阿求さん。

さて、魔法の森は人里の外れにある香霖堂が入口とあったが……。

「おい、そこの君」

誰かに呼ばれて振り向くと、青服の女性――上白沢慧音がいた。

「君だろ？ 前に襲撃してきた妖怪を博麗神社で改心させたって聞いたのだが…」

十中八九俺のことですね。ここは素直に答えるのがベストです。

「あっ、そうです。桜之宮稟と言います」

「そうか。阿求の言ってた通りだ。私は上白沢慧音。ここから少し

歩いた場所にある寺子屋で教師をしている」

と、こいつは俺と慧音の間に割って自己紹介する。

「あたしはスチュアートだよ」

「むっ、確かこの子が襲撃してきた妖怪だな？」

「そうです。もう危害を加えたりしません」

慧音はスチュアートを見つめる。当の本人は明後日の方向を向いている。というか飛んでいる紋白蝶を見ている。

「こう見ても、本当に寺子屋の生徒となんら変わりのない少女なんだけどな。……そういえば君は外来人であるな」

後半からは稟に視線を戻して言う。

「はい、そうですが？」

「今度、寺子屋の授業を見に来ておくれ。私の授業がちゃんと出来ているか見てもらいたい」

「それなら構いませんが……何故でしょうか？」

すると慧音は後ろを振り返る。振り返った先には人里の子供が二、三人無邪気に遊んでいた。再び稟に振り返る。

「……実は生徒の中に私の授業を聞かない生徒がいてな。あつ、あの子達は関係無いぞ。それで、私の授業の何がいけないのか教えて

貰いたいんだ」

さすが慧音先生。まさに教師の鑑だ。現実世界にはここまでやる先生はもはや小数となってしまった……。

っと、話が逸れた。

「分かりました。機会があれば見学に行かして貰います」

「そうか。ありがとう」

慧音は軽く一礼をして歩き出した。

「あっ、ちょっと待って下さい！」

俺はあることを思い出し、呼び止める。足を止めてこちらを振り向く慧音。

「どうした？」

「香霖堂がどこ分かります？」

「香霖堂か？ この道を真っ直ぐ行って、角を右に曲がって、次の角を左に曲がって、次の角を右に曲がると見せかけて左に曲がると湖に出る。そこにあるY字路をL字に曲がると香霖堂だ」

「いや……からかわないで下さいよ……」

「フフッ、冗談だ。そこを右に曲がってから真っ直ぐ行けば見つかる。ではまた後日」

今度こそ歩き去る慧音。というか今の冗談はどこから仕入れたのか気になる。

言われた通りに行くと香霖堂は見つかり、そばに魔法の森の入口があった。

確かに魔法の森だけあって瘴気が周りの森と違って濃い。その為か妖怪もあまり近づかない。逆に魔法使いにとっては理想の場所と言えよう。

「おい、もう入ってるぞ。稟も早く」

……スチュアートは瘴気とは一生縁が無いのだろうか？ 俺は少し気持ち悪いのだが……。

別に目的も無く歩いてたわけだが、そうすると家を見つけた。

「ん？ 稟、あそこに誰がいるのか？」

知識だと確かアリス・マーガトロイド邸のはず。気は進まない。何故だろうか？ 家の周りから不吉なオーラが出ているように見える。

「オッス、稟」

不意に後ろから聞こえたので振り向いたが誰もいない。

「そこじゃないぜ。私はここだぜ」

「……次からは頭上にも気をつけろってか」

「そんな大それた意味で呼んだんじゃないけどな」

箒に乗って下りてきた魔理沙。どうやら上空で俺達を見つけて声を掛けたようだ。

「もう一ヶ月か。あいつも随分おとなしくなったな」

「おかげさまで」

「そういや、魔法の森に何か用か？」

「当ても無くふらふら散歩」

と言うと魔理沙は少し困ったような表情をする。

「散歩か……。まあとりあえずアリスの家……。そこだけど近づかないことを奨めるぜ」

「は？」

思わず聞き返す。何故近づいてはいけないのだ？ まさか俺が見えてる不吉なオーラと関係が？

「別にたいしたことないんだけど……。最近アリスは」

と言った瞬間だった。突然アリス邸のドアが開き、黒い物体にか見えない速い物が魔理沙目掛けて一直線。

「魔ああああ理iiiiiiii沙ああああー！ー！ー！！！！」

「うわっ、来るな！」

素早く箒で殴り飛ばした。

「ああーん！」

何とも言えない声を出して転がるアリス。

「魔理沙にぶたれた……魔理沙にぶたれた……ハアハア」

……もう駄目だこいつ。俺の第一印象がこうならざるを得ないのは仕方ないのだろうか。

「正直どうしてこうなったのか私にも分からないんだ」

お茶を啜りながら話している。今、アリス邸にいます。延びたアリスを家に引きずってから魔理沙が戸棚から勝手にお茶を出して淹

れてくれた。「私が淹れても何も言わないし、客だと言えば何も言わないと思うぜ」とのことだ。

ちなみにスチュアートは勝手にどっか行ったようだ。神社周りなら大丈夫だが新たな土地だと慣れないのかもしれない。森の中にはいると思うが……。

「急にアプローチしてきてな……ホント参るぜ」

魔理沙はアリスの変化について刻々と語る。相当苦労したのが目に浮かぶ。そういえば俺の妹もなんか俺に対して執拗に……いや、今は関係無い話だ。

「ふうっ♪」

溜め息とも分らない声がしたかと思うとアリスが目覚めた。……多分目の錯覚だと思うが、アリスの後ろに虹色の柱が見える。

「起きるたびに『ふうっ♪』って言うのやめろ。気持ち悪いぜ」

「あら、お客さん？」

「無視しやがった！」

「え、だってそうしないと私が起きたとか分からないじゃない。絵とか無いし」

「じゃあ、もっとマシな言葉使え！」

随分手厳しいようで。まあ余り関わりたくないのも分かるが……。

「私としては早くお客さんに帰ってもらって魔理沙と二人きりの時間を長く過ごしたいんだけどねえ」

「お前、稟にめちゃくちゃ失礼だな。言っとくけど一応外来人なんだぜ」

「えっ？ 外来人？ ふん……」

めちゃくちゃ興味ない目をしたよ、この人……じゃなくてこの妖怪。

「お前……ホント失礼だな……」

こんな感じで終わりのない会話をずっと聞くはめになった。

スチュアートは魔法の森をさ迷うように歩いていた。とは言ってもアリス邸の場所は分かるので散策に飽きてきたら行くつもりらしい。

「……ダークフォースが共鳴してる……また左腕が暴れ出すかもしれない……。暴走したらきつと世界が滅びるかもしれんし……」

とか独り言をぶつぶつ呟き、そして突然左腕を押さえるスチュアートはさっきみたいにそこら辺をのたうちまわる。森の中だから木にぶつかりまくっているが、その程度じゃ怪我しない。

「うお……おお、左腕に隠された私のジャッキーGUNが再び……！
ああ、駄目だ、もう（以下略）」

「疲れたからさっきの家に行こう。稟もいるかもしれないし」

スチュアートは決まって5分間左腕を押さえてのたうちまわるが、何を意味しているかは本人しか分からないそうだ。

「結局、あなたが言いたいのは魔理沙の浮気相手が八雲紫っていう訳ね！　いつからあんな女と関係持ったのよ！」

「ちげえよ、馬鹿。稟は八雲紫っていう妖怪を知っているかを聞いたんだよ。どう聞いたらそう聞こえるんだよ……。とにかく、私は知らないな」

「そうか、ありがとう」

「力になれなくて申し訳ない気分だぜ」

「構わないさ。霊夢も知らなかったし」

俺はこの一時間、これを聞き出すのにどれほど精神的疲労が蓄積しただろうか。

アリスが嫌な意味で前向きなのがやはり受け入れられない。（本

人は魔理沙以外受け入れる気など更々ないだろうが」

「お前」といって話がややこしくなるから私の左下にいてくれ」

「左……下？ 地中？」

「そう。地中だ」

「つまり……魔理沙覗き放題ッ！？ ハア…ハア…」

「ホント前向きだな、お前……」

魔理沙は半分諦めかけている。仕方ないと言えば仕方ない。

でもとりあえず八雲紫については知らないと返事したので良しとする。

「じゃあ俺はこの辺で……」

とドアに手を掛けた時、最初と同じくらいの速さでドアが引かれ、身体ごと外に投げ出された。

「あり？ 稟がない？」

スチュアートは俺が吹っ飛ばされたことに気づかずアリス邸の中を見る。

瞬間、アリスの怒声が聞こえた。多分矛先は魔理沙。

「な、何よこの女ア！ ちょ、魔理沙！ あんた私がいながら堂々

と…!!」

「ちげえって。あいつは稟の連れだ」

「嘘言わないで！ いつ知り合ったのよ！？ いつ、どこで、何時
何分何秒n「マスタースパーク！」ぶべらぁ！？」

こうしてアリスは塵となった。

「あつ、またやつちまった……」

「ねえねえ、稟はどこ行った？」

「お前の主人なら外にいるぜ」

魔法の森は今日も平和です。

ちなみにアリスは3分後に復活するから心配ないと魔理沙に言われて納得したので神社に帰りました。

第6話 連れられて紅魔館

初夏。春の趣が残る季節。季節の移り変わりもまた自然の摂理だ。さて、博麗神社では縁側に座って霊夢がお茶を啜っている。異変が最近起こらなくなり、暇なのだ。

「あー、暇ねえ…」

ボソッと呟くも聞こえるのはそよ風に吹かれて深緑の葉が微かに揺れるだけ。

ホント、暇ねえ……。最近あいつもよく外出するから私もどっか行こうかなあ……。まあ、食料には困らないから賽銭箱が空っぽでも凌げるけど、やっぱり信仰は必要かしら？ でもやっぱり賽銭箱にお金が入る音も新鮮な気がするのよねえ…。

とかあれこれ考えていると、いつもの魔法使いが来た。

「よう、霊夢」

「魔理沙。あんたちょうどいい時に来たわね」

「ん？ 何かあったのか？」

霊夢は縁側から降りて賽銭箱のある場所まで歩き出す。魔理沙もそれに倣う。

「ホントにどうした？」

「暇潰しのことで何かない？」

「あー、暇潰しねえ。と言っても私も暇だから神社に来ただけどなあ」

「やっぱり同じね……はあ……」

霊夢は分かっていたかのように溜め息をついた。異変でない時はたいてい魔理沙も暇である。

魔理沙の場合、魔法の研究とかやることはあるがずっと籠るのは紫もやしの如く不健康だと思い、時々神社に遊びに来る。

「でも、霊夢は人や妖怪を問わず惹き付ける不思議な雰囲気を出してるから、多分暇にはならないと思うぜ？」

「どんな雰囲気よ、それ……」

しかし、言葉とは時に現実となる。階段から足音が聞こえた。素早く反応するのは霊夢。

「もしかして久しぶりの参拝客！？ ヒャッホーイ！！」

「おいおい上がりすぎだ。まだ人と決まったわけじゃないぜ」

やがて階段を登りきり、鳥居に現れた姿は女性だ。しかし服装は明らかに幻想郷内の人物が着る服ではないのが二人はすぐ理解した。どうみても外来人です。ありが（ry

女性は二人を見つけるとさも当然のように話しかける。

「あつ、こんにちは。今日は少し暑いですね」

現実世界ならよくある挨拶のやり取りと言える。しかし、幻想郷ではあまり話すようなことではない。

「……最近の外来人はこうなのか？」

「私に言われても……」

「もしかして、取り込み中でしたか？」

「いや、全然」

一方の女性は戸惑う様子が伺える。知識が無ければ、たいてい幻想入りするところなるのが普通だろう。

女性と言うが、見かけ上十代後半か二十代前半である。

「えっと……博麗霊夢さんに……霧雨魔理沙さん……ですよ？」

どうも口調が覚束ないようだ。霊夢は吐き捨てるように言った。

「そうよ。そういうあんた、外来人よね？ 私のところに来たなら外の世界に帰る為？」

「い、いえ！！ 滅相ありません！ まだ帰るわけにはいかない
ので！」

と、強く否定した。これには二人とも驚いた。外来人が博麗神社に寄る理由は例外があれば大半は帰ることだからだ。

となれば、二人の知らない場所で長い年月を幻想郷で過ごした人物なのかと思った。

「一つ聞くけど、あんた何処に住んでるの？」

「えっ？ えっと……は……白玉楼です」

「「はいっ!!?」」

二人からすれば外来人が冥界に住んでいるのは珍しい。

「あ、そうでした。今日ここに寄ったのは、折り入って大事な話なのですが、時間は大丈夫でしょうか？」

「時間なら腐るほどあるわ」

「そうですか。魔理沙さんも聞いてください。すぐ終わりますので」

「んー、まあ私も暇だし、聞いてやるとするか」

「じゃあ、中に入りなさい。お茶くらいしか出せないけど」

「あ、ありがとうございます」

軽く一礼して霊夢達について来る。こうして霊夢と魔理沙、外来人の女性は神社の中に入る。

もし……もし、彼がいたならばその女性の服装を見て、十中八九こう質問しただろう。

「あなたは何処か高校の応援団ですか？」

最近、人里から徐々に遠い場所に行くようになってきました。……じやなくて行かざるを得なくなりました。原因？ 九割スチュアートです。

例の動作ではなく、スチュアートが趣味とする行動が問題なのです。

数分前、人里にて……

「スチュアート？ 双眼鏡を持って何をしている？」

「ウォッチング」

双眼鏡を何処から出したかは知らないが、自然の多いことからバードウォッチングの類だろうと思っていた。

しかし違った。

双眼鏡を覗きながら人里を歩く姿はどう考えても目立つので人通りの少ない場所を歩いていた。

と、突然スチュアートが走り出し、とある曲がり角で止まると辺りをキョロキョロ見回し、そこでしゃがんだ。地面にあった何かを拾ったように見えた。

スチュアートは戻ってくると何もなかったようにまた双眼鏡を覗き始める。

誰がどう見ても怪しい動作だ。聞かなければ良かったと思ったのは何度目だろうか……。

「おい、今何を拾った？」

「んゝ、落とし物のお金♪」

「猫ばばじゃん！ 今すぐ元の場所に返してらっしゃい！！」

「でも、誰も落ちてるのに気がつかないんだよう？ だったら放っておくより貰ってた方がいいじゃん」

瞬間、俺は呆れてツッコむ気力をも失せた。というか、こいつの趣味を覚えていなかった自分に憤りを感じてしまった。

いわゆる「落とし物ウォッチング」。ある意味質の悪い蒐集癖だ。

この一件以来、行き先が妖怪の山方面へ決定したのは言うまでもない。

妖怪の山の麓は霧の湖があるが、まさに名前通り霧が濃い。

「さて、ここに中継地点でも設けるか」

俺はリュックからツルハシを取り出し、ツルハシスキルを発動。

通符「ぶきみなあな」

スキルが発動し、足元に小さな穴が現れる。

この穴は「フォレ・マスター」のスキルで、穴に入ると亜空間的作用によって穴から穴へ移動出来る今世紀最も注目を集めたツルハシである！ これを手にした者は（ry

ちなみに穴は俺しか通れないから誰かが上を通っても大丈夫。スキマより安全。中継地点に博麗神社、人里、魔法の森入口にセットしてある。

重要なのは俺しか通れないこと。スチュアートも例外。しかし、スチュアートは常に監視せねばならない。

結論、俺一回も使ったことないよ……（泣）

「稟？ 涙が流れてるぞ？」

「何でもないさ……。自然と目からしょっぱい水が出てるだけさ……」

これぞ宝の持ち腐れと言うのだろう。

で、霧の湖を周回していると……

「だから！ 見たのは見たんだってば！」

「チルノちゃん、多分見間違いだと思うよ」

「なんで信じてくれないの!? とにかくあたいは見たんだよ!」

「だって、人間がいきなり消えるなんて聞いた事ないし……」

近くで氷の妖精チルノと大妖精が口論していた。というか話の中心が飛躍してるんですけど。気づいていないようなのでとりあえず声を掛けてみる。

「おーい、その妖精達」

「チルノちゃん……って人が!？」

「だから……ってなんだお前は! ここはあたいの縄張りだよ!」

俺に気づいた二人(二匹)は警戒するが、

「人が消えたってのはどういう事だい?」

と言うとチルノが素早く反応する。

「お、あんたはあたいの言ったことをしんりやくするのか?」

「そこは侵略するじゃなくて信用するだよ」

まあ大別すればあながち間違っではないが…。

「あたいは見たのに大ちゃんは信じてくれないんだ」

「だって……単に入っただけかもしれないし」

話が掴めない。消える？ 入る？

「ちょ、ちょっと待ってくれ。見たというのは何処で何を見た？」

「あゝ、人間だよ。確か……」

と、チルノはある館を指差す。全体が血で塗られたような紅い建物。

「あそこ！ あそこにいた人間がいきなり消えたんだ！」

門を指差すチルノだが趣旨が分からない。

「正確にはあの館に寄った人間です。人里のある方向から来たところまでは私も見ました」

「でね、門番と何か話してると思って見てたら急に消えたんだ！」

「そうか……だったら実際に行けば分かるんじゃないかな？」

するとチルノは何かが閃いたときにする動作――手をポンツと叩き、

「そうか！ あそこまで言って門番に聞けばいいんだ！ あたいたら天才ね！ なら、大ちゃんも行こう！」

「え、あ、うん。……えっと、ありがとうございます」 軽く一礼する大妖精。別にお礼を言うほどじゃないんだけどな……。

「じゃあ、俺も来ていいか？ 俺もその消えた人間が気になる」

「いいよ！ あたいを信じてくれたから！」

……チルノのキャラが違うと思うのは俺だけか？ 頭が悪いと言
う割に純粋な雰囲気が出ている。

きっと表現の仕方が悪いんだね。国語を勉強しようよ。

メタ発言はこの辺にしといて……。

俺はチルノと大妖精＋αと共に紅い建物——紅魔館の門前にやっ
てきた。

「ぐうー……ZZZ」

予想通り門番・中国は立ったまま寝てました。

「中国じゃないですうー……むにゃむにゃ……」

否定しても寝言なら誰も耳にしない。まったく哀れな立場にいる
な……。

「これじゃあ聞けないね……」

「じゃあたたき起こそう！ 『電符 ヘイルストー……』」

しかし、チルノが言い終わる前に中国が爆発した。

「うおっ！？　な、なんだ！？」

突然の爆発に驚く二人（二匹）。

だが、俺は怒りが込み上げていた。矛先は勿論あいつ。

「おい……」

「だってえ、たたき起こすって聞こえたから、てへっ☆」

手を頭に当てて舌をチロツと出す。本人反省の色無し！

だあああーっ！！！！　どうしてこいつは空気読めねえんだ
よおーっ！！！！　そして人に主砲撃つなってあれだけ言った
のにいいーっ！！（心の叫び）

泉符「ハイドロライド」

スチュアートは一瞬にして水の檻に溺れる。

「はあー！！　ぶくぶく……」

「チルノ！　これを凍らせてくれ！」

「よくわかんないけど『凍符　パーフェクトフリーズ』！」

究極のキング・オブ・KYは氷の中に封印された。

KYは門の前に飾っておくとして、燻っていて身体から白い煙を立たせている紅美鈴は気絶していた。また当分起きそうにない。

「仕方ない。直接中の人に聞くか……何か知ってるかも」

「よし、じゃあ突撃だあ！」

「待って、チルノちゃん！」

今にも飛んでいきそうな勢いで突撃しようとしたチルノを呼び止める。

「大ちゃん、どうしたの？」

「ちょっと……耳を傾けて————」

大妖精が耳打ちをするとチルノは落胆したような顔をして、けどすぐ元気な口調で、

「……今回はあたいは別の用事があるからあんたが調べといて！」

それじゃあ!」

「本当にすみません。行かないといけない場所があるんです。それでは…」

と言って紅魔館から離れた。

………急に一人になると寂しいな……。だけどこいつを解凍するわけにもいかない……。でもどうせ八雲紫の事も聞かなければならないから行くしかない。

で、門を開けて敷地内に入った時だった。

「あら、珍しいわね。紅魔館に何か用?」

えっ? なぜ庭に貴女がいる?

第6話 連れられて紅魔館（後書き）

博麗神社のある一室から、霊夢と魔理沙は一緒に部屋から出て縁側に座る。お茶菓子も持ってきている。

魔理沙がつまむと霊夢もつまみ、お互い一言も話さず座っていた。

時刻は昼。桜之宮稟とスチュアートはまだ帰って来てない。

青々とした深緑の木々に、初夏の日差しが照らす。

と、不意に魔理沙が口を開く。

「なあ、霊夢」

「何よ」

「私は夢を見てたのかなあ……？」

「夢ねえ……でもあれは現実よ」

「やっぱりそうだよ……」

「私はむしろ、あんたが何か知っているかを聞きたいんだけど」

「私の研究管轄外だ。私にもわからん」

「じゃあ……冥界に住んでいたから？」

「いや、生きている外来人だったぜ？」

「外来人って不思議な能力ばかりね。目の前から急に消えるから…」

しかし、いくら考えても分からないものは分からない。

で、魔理沙が出した結論は、

「やっぱり外来人は外来人同士でどうにかするしかないだろ？」

「はぁ……やっぱりこうなるのね……。稟、早く帰ってこい」

多くの謎を残す外来人の女性。冥界——白玉楼に住んでいるのと突然消える以外何も分からない。

「最後にあいつ何て言ったっけ？」

聞いたのは魔理沙。それに霊夢は応える。

「聞いときなさいよ。確か、邪魔しなければなにもしないって」

第7話 **L o c k e d G i r l** 図書館大掃除 (前書き)

大丈夫じゃないかも……。小悪魔は紅魔館メンバーに反抗的です。
どうしてこうなった……。

第7話 **L o c k e d G i r l** 図書館大掃除

紅魔館の庭先には巨大なパラソルにテーブルと椅子が置かれ、周りに薄い本から分厚い本が無造作に置かれ、その椅子に本を読みながらこちらを見る紫のネグリジェ姿の『動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジ』その人がいた。

本来なら滅多に地下の図書館から出ない人がなぜここにいるのか全く分からない。

そんな様子を察したのか本を閉じて話しかけた。

「今、図書館の整理をしてるの。魔導書が多くなったから」

「そーですか……」

これで分かった。本の整理ならば確実に埃が飛ぶ。喘息持ちのパチュリーにとってまさに死活問題。つまり、避難を兼ねてここにいるわけだ。

「で、紅魔館に何か用？」

再び質問されて本題を思い出す。

「さ、先程門番が誰かと話していたと聞いたのですが、その人を見ましたか？」

「門番と話しを？ ああ、奇妙な服装の女性かしら？」

おっ、どうやら知っている。これはチャンスです。

「どんな人でしたか？」

「どんな……と言われても私はずっとここで本を読んだり書いたりしてたから知らないわ。そういえば美鈴が途中驚いた声を上げてたわ。確か『き、消えた!？』だったかしら？」

思わぬ収穫です！ あの全貌を知ってる人がいて助かった。これでチルノの勝訴が決定したも同然！ 良かったな、チルノ！ でも何で奇妙な服装の女性と分かったのでしょうか？

「それはそうとして、さっきの爆発はあなた達でしょう？」

瞬間、今最も思い出したくない奴を思い出してしまいました。

「いやあー……、あれは何と言うか……あれだ、あれ……あれっ？」

はぐらかそうにも不自然過ぎた。目茶苦茶怪しい！

その様子を見てクスリと笑う少女は再び本を開いて魔導書を読みはじめる。

これってどうすれば良いのでしょうか？ 知識だけじゃどうしよう

もありません。

不意にパチュリーが話しかけた。

「ねえ、あなたは何か能力があるの？」

「あ、はい。えっと」言わなくていいわ。言ったところで能力は使

えないから」……えっ？」

その言葉に思考が再び停止した。使えないってなんで？

「知りたければ図書館に行きなさい。あなた、外来人だから紅魔館のメンバー知ってるわね？」

「はい……」

「図書館の整理が終われば能力は解除されて使えるようになるわ。それまで私も魔法が使えない。ちょうど良かったわ。今人手不足だったから」

パチュリーはテーブルにあった呼び鈴をチリンチリンと鳴らした。

しばらくして紅魔館の正面玄関の扉が開き”走って”来たのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜だった。

「パチュリー様、何か御用ですか？」

「その外来人を図書館に連れていってもらえる？ 労働要員兼客人として」

ちよい待ちい！！ いつの間にか労働要員！？

「外来人ですか……。畏まりました。では、外来人の方、私について来て下さい」

と、咲夜は再び紅魔館へ向かい、不本意ながら俺もそれに急いでついて行った。去り際にパチュリーは、

「使い魔のこあから詳しく聞きなさい」

と言った。

紅魔館は確か咲夜的能力で外見から判断できない程の広さがある
と聞いたが、例の「能力が使えない」のか、地下の図書館入口へ徒
歩10分で着いた。

「では、入る時にはゆつくりと入り下さい。一応客人として扱いま
すので、何かありましたら何なりと申し付け下さい。本は膨大なの
で飲み込まれないように御気をつけ下さい。それでは……」

そういつて咲夜は”歩いて”離れて行った。

いろいろツツコみたいがもう誰もいないし、逃げられない。やは
り広くなくても入り組んでいたので迷うのは必至だ。というか何故
労働要員にされただろうか？　こうなるならあいつでも連れてくれ
ば……それは止めよう。

とかいろいろ思考するも無駄と悟り、扉を勢いよく開け放った。

ブワッ!!

素早く俺は閉めた。想像以上の現象が……あ……ありのまま今起こった話を話すぜ！

『俺が勢いよく扉を開けたら大量の埃が舞い上がって壁となって立ちはだかった』

な……何を言ってるのかわからねーと思うが「うわっ！ 埃が！

埃があ！」俺も何が起こしたのかわからなかった。

頭がどうにかなりそうだった……。

ハウスダストだとかアスベストだとか「うわっ！ ペっ、ペっ！」

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろ「だ、誰ですか！ いきなり扉を開けたのは！ パチユリー様やお嬢様やお嬢様もどきといえども許しませんよ！」

ネタに走ると邪魔されるのは宿命なのか？ むやみにネタに走ったのは悪いとは思ってる。反省は「あゝもゝ！ これじゃあ作業が進まないじゃないですか！ 慰謝料を請求してやります！」

……うん、やり過ぎた。諦めて手伝いしましょうか。俺は今度はゆっくりと図書館に入った。

幻想郷最大の図書館と言っても過言でないほど大量の本、本、本！
そこに付着する埃、埃、埃！

一步踏み出せば舞い上がる埃の量は尋常でない。そして現在紅魔館に発動している（？）という「能力が使えない」はまさに地獄でした。

すると、本棚からひよっこり顔を覗かせ、出て来たのは両手に本を抱えている図書館の司書でもある小悪魔が現れた。

「おや？　あなたは誰ですか？」

「お、俺は……その……パチュリーさんから無理矢理……」

「あつ、わかりました！　助っ人ですね！　さすがパチュリー様、
気遣ってくれますね！」

「あ……うん、もういいや……」

若干投げやり状態。仕方ない。勝手に入った俺が悪いんだ……。
霊夢、今日おかず無しだ。すまない……。

「で、さっきお嬢様もどきって言ってなかった？」

入る直前に聞いたがお嬢様もどきって何だ？

「いや、急に頭に浮かんだ言葉ですので別に深い意味はありません。
それより早く手伝ってくださいませんか？　魔導書と同人誌を整理する
のに時間が掛かってたんです」

……紅魔館の図書館には外の世界の本があると聞くがまさか……。

そんな訳で小悪魔指導のもと図書館の大掃除に付き合わされた。

一時間経ったが、一向に整理が終わらない。当然と言えば当然か。俺は箒を持って舞い上がる埃と死闘を繰り広げた。収集袋には袋8枚分の埃が詰まっていたにもかかわらず、隙間に隠れていた埃が姿を現しては再び本に付着するという悪循環を繰り返していた。

小悪魔は依然本を抱えて本棚を行ったり来たりを繰り返す。

三時間経過。収集袋14枚に達するも一步踏めば舞い上がる埃達。それらを蹂躪し、収集袋へかき集める俺。
本をせっせと運ぶ小悪魔。

五時間経過。収集袋19枚突破。ようやく埃が少なくなったがまだ一角に過ぎないことが分かり落ち込む俺。
それを横目で見ながらも本を運ぶ小悪魔。

そしてふと気が付いた。何故俺達しかいないのか？ 今更気づくのはおかしいがとりあえず聞いてみることに。

「あの、小悪魔さん」

「こあでいいですよ」

「え、えつと…こ、こあ、紅魔館の住人はどうして来ないんだ？」

「お嬢様と妹様は特別ですし、パチュリー様は知っての通りで、咲夜さんは能力が使えないので「そこっ！ そこだよ！ 今一番聞き

たいの！　なんで能力使えないの！？」　そうでしたか。気付かなくてすみません」

で、ようやく今の紅魔館について話を聞いた。というかもっと早く気づけ、俺。

「能力が使えないのはパチュリー様がある結界の試験をしているからです」

「ある結界の試験？」

「いわゆる『能力・魔法封印結界』です。ネーミングが普通だと思いますか？　私だったら『アビリティーバリア』と言いたいのですが」

「いや聞いてないし、なんか変だぞ」

「とにかくそのおかげで咲夜さんが使えないので私一人で整理することになって……全く悪魔を行使するにも酷いと思いませんか？」

「聞いてない上に咲夜さんに失礼だぞ」

「それに普段から掃除……じゃなくて清掃してないから埃がひどくて……大変だったでしょう？」

「確かにそうだが、何故掃除を清掃と言い直した？」

「“掃除”は咲夜さんの特権ですよ。清”掃”と排”除”ができるのですから」

「上手いっ!?!」

「あと、パチュリー様も魔導書はともかく同人誌書き過ぎですよ。整理する身にもなってほしいですね」

「ちょ!?!? 同人誌って外の世界のじゃないの!?!」

「そうですねー……。せいぜい2割ですかね。残りはパチュリー様が書いたもので…」

※以下小悪魔の説明が延々と続きますが割愛させて貰います。

つまり、結局は誰も手伝わないことと結界の試験をしていることは分かった。えっ? 他にもっと聞いたんじゃないのかって? 俺は聞きたいこと以外は頭に残らなかったなあ。

もし能力が使えるればあるツルハシスキルが使えて埃を集められたというのに残念極まりない。

コンコンツと図書館の扉からノック音が聞こえ、俺が扉を開けると咲夜さんが入ってきた。

「作業中申し訳ありませんが、ちょうど食事の準備ができましたので一旦休憩されてはどうですか?」

「そうですか。じゃあお願いします」

「ではついて来て下さい」

初め図書館に案内した時と同じように歩く咲夜さんについていく俺。俺っていつになったら解放されるかなあ。

しかし問題はそこでない。夕食に出席するなら吸血鬼姉妹と御対面です。能力の使えない今、もし攻撃されれば一たまりもありません。客人扱いはされていますがどうなるか分かりません。とりあえず何も無いことを祈って夕食に参加することにした。

「お嬢様、図書館の清掃を手伝って下さる外来人をお連れしました」

「いいわ。入りなさい」

声は幼く聞こえ、それでも威厳があるはっきりした声だった。ん？何か変な気を感じる……。

ゆっくり扉が開かれ、中は長いテーブルと複数の椅子。その奥に座るのは紅魔館の主人、レミリア・スカーレット。

そのすぐ右斜め隣に座るのは悪魔の妹、フランドール・スカーレット（こあから聞いたが能力が封じられているのでとりあえず大丈夫

らしい)。

左斜め隣に座るのは……………、

「へえ、図書館でお手伝いかあ。私のことほったらかしにしてねえー、稟…………？」

黒いオーラを身体から出している博麗霊夢！？

「いやっ、これには事情が…………！」

「ふうん、事情ねえ…………」

ああ、駄目ですっ！ 眉間がピクピクしてる！ 言い分聞く気無しの状態です！ まさか霊夢がいるとは計算外です！ あっ、立ち上がった！

「霊夢、まず私達に紹介するのが先じゃないかしら？」

「…………分かってるわよ」

立ち上がった霊夢は洪々座る。いやあ、今のは怖かった。

「その人間、名のりなさい」

まさにカリスマ溢れる威厳ある声。圧倒されそうです。

「じ、自分は桜之宮稟と言います。能力は『ツルハシとスキルを操る程度の能力』です」

「ふうん、変なスキルね。まあいいわ。パチエから客人として扱う

「よう言われたから危害は加えないわ」

「そう言うと、席に座るよう促す動作をしたので霊夢の隣に座った。えっ？ 自殺行為？ まさか、ね。」

案の定、脇腹に霊夢のストレートが入りました。

「うぐっ！」

「あんた、何で私に黙って来てんのよ！ 一言くらい言いに戻りなさいよっ！」

「いや、空飛べないし」

「あんたがいなかったから苦労したわよ！ 急に神社に外来人の女性が出来たと思えば」突然目の前から消える”し」

「ちょおおおーっ！と待ったあああーっ！！！！！」

俺は伝説の「ちょっと待った」コールを発動！ この日、紅魔館を微震させる程の声を出しました。

「霊符『夢想封印』！」

「紅符『不夜城レッド』」

「幻世『ザ・ワールド』」

「禁忌『レーヴァテイン』！」

「すいません！ すいません！ いきなり大声上げてすい——」

「で、大声上げた理由は何？」

「その消えた女性という言葉が出たからです。すいません」

すっかり意気消沈しました。

「まあ、うっかりスペルカード使ってしまったけど大丈夫そうね」

レミリアさん、満身創痍のどこを見ればそう言えるのですか？

「で、女性がどうしたの？」

しつこく追求する霊夢。

「実は……紅魔館に現れたと聞いて門番の代わりにパチュリーさんに聞いたら……」

「それで？」

「同じように突然消えたと言っただけで……霊夢には何か言ったのか？」

「急に口調砕けた！」

フランのツツコミを他所に答えてくれた。

「確かあの女性、白玉楼に住んでるって」

「分かりました。ありがとうございます」

白玉楼に……冥界なら霊夢も同伴しなければ行けません。

「ずいぶん親密に話すのね、霊夢」

レミリアはこちらをまじまじと見ていた。

「そりゃあ、金づるとは仲良くしないと逃げられるから「おい、コラァー!!」うるさいわよ」

当然と言えば当然か。便利なおかず屋としか見てないのだろうか。

理由はどうであれ、俺は紅魔館で働かなければならない。図書館の整理はまだ終わってないのだから。

第7話 L o c k e d G i r l 図書館大掃除（後書き）

誤字・脱字があれば指摘をお願いします。

第8話 紅魔狂死く狂気に当てられた感情（前書き）

フランの狂気は自己解釈です。

第8話 紅魔狂死く狂気に当てられた感情

満身創痍となりながら夕食を済ませた俺は咲夜さんの誘導のもと再び図書館に着きました。時刻は多分午後11時。

ちなみに霊夢は「終わったら帰ってきなさいよ。あと、紅魔館の門に飾ってたスチュアートも持って帰るから」と言って帰りました。

あれは放つといてもいいような気がしますが霊夢のご好意に甘え、持って帰らせました。

例の結界は霊夢にも及び、門を飛び越えたら急に飛べなくなってしまう落ちたとのこと。

でもスペルカード発動できるのはきつかった……。

「あっ、お帰りなさい！ 食事はどうでしたか？」

小悪魔は笑顔でこちらに話し掛ける。ああ、ここではこあだけが味方です。

「美味しく戴きました。満身創痍ですが」

「そうですかー。大方妹様のスペルカードが一番の原因でしょうね」

「何故知ってる!？」

「悪魔ですから♪」

理由になってないよ、それ。

こんな感じで作業再開。とっとと終わらせたいです。

「えーっと、『魔導書研究メモ』これは要りますね」

こあは本の整理担当だが、ある程度捨てる本とかを独断で決められるそうだ。

「えー、『来たれ、炎の料理教室』……要りませんね、ポイツと」

「『相対性理論』んー、必要ですかなあ……？　まあとっときましよう」

「『フェルマーの最終定理の解答法』うーん、要りませんね」

「『魔法で出来るインテリア入門』これは私が貰う為にとっときましよう」

「『うにゅーアクションガンマ』ガンマって何でしょうか？　西部劇でしょうか？　使わないので廃棄です」

「『独裁者への道程』これは……要りますね。いや、むしろ貰いましよう」

「『フィーバー伝説物語』確か絵本でしたね。もう読み終わったか

「要りません」

「『30秒で出来る茸の鍋料理』迷いますね。とりあえずとつきましよう」

「『八雲紫の書』八雲紫って誰ですかね？ 捨てましよう」

「『ジェノサイド砲製造法』砲ということは魔砲かなんかの類ですかね？ 魔理沙さんが好みそうですが使いませんし、廃棄ですね」

「『パチュリー著の同人誌』パチュリー様を書いた同人誌は全部読破したので資源ゴミじゃなくて燃えるゴミでいいでしょう。どうしてリサイクル出来ない紙を使うのか不思議ですね」

「『太公望の心得』釣りの本ですね。多分要るでしょう」

「『愛宕』なんて読むんでしょうか？ あ……あい……分からないので捨てましよう」

「『六法全書』パチュリー様のお気に入りでもあるからとつときましよう」

「『がっぴがびの本』確か内容は卑猥だった気がします。悪魔に読めない字は少ししかありませんし、読破したので捨てますか」

「『修造監修熱血魔法あきらめんな！』やたらテンションが高くなるだけですから捨てますね」

きつとツツコみたいことがあるはずです。

俺だってツツコみたいです。しかし、足元に群がる埃が阻止してくるのです。気にしたら負けな世界が幻想郷です。あつ、今12時の鐘が聞こえました。

関係ないのでせっせと清掃再開。

5時間後、まさに徹夜と言ったところでしょうか。全身が疲れました。遂に図書館を全て掃き終わりました。集めた埃は実に収集袋39枚分。ちなみに青いポリバケツに使うような大きい袋じゃありませんよ？ せいぜいスパーで扱ってするような自分で引き出す小さい袋です。埃ってそれで十分ですよね？

しかし、まだ本の整理は終わっておらず、こあがあちこち本棚を移動しています。

「『機械人形入門』これはここですかね。次は……」

「あの……、こあ……さん」

「えっ？ あつ、はい、どうしましたか？」

「清掃が終わったので手伝いましょうか？」

「あつ、本当ですか！？ じゃあ少し休んで下さい。疲れたことでしょう」

「いや、でもまだ本の整理が「優しいですね。でもその気持ちだけで十分です。ですから少し休んで下さい」……じゃあお言葉に甘えて…」

本当にいい子です。純粹にいい子です。わざわざ氣遣うことなんか無いのですが、さすがはこあです。

とりあえず図書館にあるパチュリーが本来座ると思われる椅子に座って休んだ。休むと自然と溜まった疲れが少しずつ睡魔となつて……。

「おおおおおーーん！　ぐわあああんげえええーん！」

何やら奇妙な声が聞こえました。椅子でうつらうつらしていた俺は瞬時に脳が覚醒！　すぐに現場に向かうと……、

こあが両手を上げて意味不明に叫んでいました。が、数分で終了。振り向いた時に目が合いました。

「あ…、き……、聞いてましたか？」

「いや、聞こえないほうがおかしい」

「ですよー。今のはパチュリー様にテレパシーを送る呪文です」

どう考えても嘘八百じゃないですか！？ 一体何を召喚しようとしたんですか！？

すると、バンツと扉が勢いよく開き、そこにはパチュリー・ノーレッジ本人がいました。えっ！？ 本当に通じたの！？

「あら、本はまだ片付いてないけど空気は以前より断然澄んでる」

「それはその外来人のおかげです。ずっと清掃してくれたおかげで、私も整理するのに随分楽になりました」

「そう。見た目の割に随分働いたのね」

「まあ……、勝手に入ってきた俺が悪いわけだが……」

「まあ、いいわ。じゃあこの図書館を一階に移動させるわよ」

えっ？ 魔法は使えないんじゃない？

「キャアーッチ、アアードツ、リツリイース！」

呪文それだけ！？ どう考えても違うでしょ！？ 素人でもわか……って、数少ない窓から日の光が差し込んだ！！

「これでよし」

「さすがパチュリー様。一見何も変哲も無い無意味な言葉を呪文に

して移動させるなんてすごいですね!」

「いや、それ褒めてるの……?」

「これでパチュリー様の同人誌も半分以上は暖炉の燃料としてリサイクルされたでしょう」

「何勝手な事してんのよっ! ていうかりサイクルでも何でもねーじゃん! いつ燃やしたのよ!」

「先週ぐらいですかね。お嬢様に渡したら喜んで暖炉にぶちまけましたよ。資源ゴミに利用できる素材だったらきっと烏天狗に運ばれたことですし、良かったですねパチュリー様」

「よくないわよお!! 先週から急に百冊ぐらい本が失くなったから、ごっそり持って行かれたと思ったじゃない!!」

うん。とりあえず二人のコントは置いとくとして、窓の外を確認した。

眩しい朝日が紅い紅魔館を照らし、ずっと図書館にいたために自然の光に慣れていない俺の目を潰してきた。

本当に一階に移動したようで、正面の門が見えます。そして直立不動のまま頭だけ妙にこっくり動く中国……じゃなくて紅美鈴が見えた。

朝が来たことを実感したのと再び身体中の疲れが一気に出たのは同時。徹夜で清掃すれば……とりあえず寝たい。そう思って図書館

を出た。

はずだった。図書館の扉に手を掛ける前に勢いよく扉が開き、身体ごと吹き飛ばされた。

「また借りに来たぜ！ ……ってあれ？ 今なんかぶつかった音がしたような……」

どうして扉は必ず一度は勢いよく開けられるのでしょうか？

「あっ、稟じゃん。こんなところで何寝てんだ？」

「俺に安息の地は無いのか……」

「お、おい、どうした！？ 目が虚ろいでるぜ！ しっかりしろ！ しっかり——」

そのまま意識を失った。

気が付けば部屋の一室のベッドにいた。どうやらここに運び込まれたようだ。

しかし、妙に変な違和感を感じる。一人でないような感じで……。

って、ちょっと待てえええ!!!　なんで魔理沙がすぐ横で寝てるんですかあ!?!　シングルですよっ!?!　ある意味危ないですよこれは!!!

「う……ん……?　稟、起きた……のか……?」

魔理沙は目を擦りながらゆっくり身体を起こす。結構寝ていたのだろうか?　とりあえずベッドから出る。

「まず何がどうなったのか俺に説明してくれ」

「ん……おう……確か図書館の扉の後ろで気絶してたぜ」

そこは覚えてる。

「で、私が騒いでたらパチュリーに見つかったけど、ぐったりした稟を見たらすぐに小悪魔を呼んで図書館近くの部屋に案内してくれたんだ」

「説明乙。だがなぜ一緒に寝てた?」

「いやゝ、一晩中飛んでて疲れたのかなあゝ。私も眠くなったんで横に寝かせて貰ったぜ」

恐ろしく自分勝手である。平然と他人の横に寝る精神をどこで養ったのか聞いてみたい。勿論タブーなので聞きませんが。

「そーいや、稟はなんで図書館に?　司書にでもなったか?」

「いや、あれはな——」

少年説明中…

「——という訳」

「意外と誠意な奴だな。そもそも紅魔館でそこまでやる奴は幻想郷では外人人含めていないな」

「おかげで徹夜だったがな。さて、帰らして貰おうとするか」

「じゃあ私は窓から出るぜ。じゃあな」

魔理沙は窓を開けてそのまま飛び降りた。途中で箒に跨がってそのまま飛んでいった。俺も出ようと扉を開けて、廊下に出るところまでは良かった。

まさかすぐ横に悪魔の妹がいるなんて誰が予想出来ただろうか？

「あれ？ お兄さんもう帰っちゃうの？」

首を傾げてこちらを見る悪魔の妹——フランドール・スカレーツト。俺は背中を向けているが、周りに溢れる狂気に押し潰されそうな気がして、動けなかった。

「ねえねえ、帰る前にフランとアソバナイ？」

徐々に狂気が増長するのが身体で感じられる。

「黙ってないで、何かイッテヨ。じゃないとツブシチャウヨ？ あ
の木箱みたいに」

と、俺のすぐ横にある木箱が突然バリバリッと音を立てて小さく
圧縮され、ボンッと小さい爆発が起るとただの木片となって四散
した。

「最近になって館内なら歩き回れるけど……皆怖がって遊んでく
れないの……。だからね、お兄さん、私のレーヴァテインに耐えたか
ら簡単に……コワレナイヨネ？」

狂気に混ざる僅かながらの感情。その感情を育てたのは、誰にも
会えない恐怖。暗闇でずっと孤独に過ごした寂しさ。しかし、49
5年という余りに長い年月により感情は狂気へ互換された。

しかし、地下から解放されたことにより、再び感情が戻りつつも
互換され蓄積された狂気は衰えず、いまだ恐怖の対象であることが
拍車を掛けた。

今、背後にいるフランを読み取った情報だ。無意識で発動させた
のだろうか？ 頭に流れる情報。ツルハシ・ワミターのスキル（ス
ペルカード）の効果だ。

情報「スキルミル」

対象相手の現在、過去の情報を読み取り、危険度、身体情報など
をリアルタイムで瞬時に引き出し頭に流すスキル。

頭に流れた危険度情報は極大。生命の危機有り。
つまり、俺は今すぐここから逃げなければならぬ。だが動けな

い。

フランは一步、また一步と近づき始めた。

「ねえ、背中向けてないでこっち向いてよ。アソブナラコツチムイテヨ。それとも……ニゲタイノ？」

徐々に距離を詰めるフラン。対して俺は頭が真っ白だった。脳は逃げろと命令する。だが身体が動かない。

「……どうしても向かないんだ……。じゃあ、このまま……アソボウカ」

禁忌「レーヴァテイン」

手に持っていたフランの剣に炎と熱が纏われる。

「ニゲナイノ？ ジャアコノママコワレルカアソブカキメテヨ」

もはや自分が命を諦めてるのかと思いたくなるほど身体が動かなかった。

そう思うと笑いが込み上げてきた。自分の愚かさを自嘲するよう
に。

「は……ははっ……ははははっ、ハハッ、ハハハハハッ！」

発狂。そうとしか取れない笑いが口から漏れでる。フランは突然の笑い声に動きを一瞬止めたが、また近づき始める。レーヴァテインの輝きも衰えず炎と熱を纏う。

「オニイサン、キガクルツタノ？ フランミタイニ……。フラン……」

ミタイニ？」

今度はフランが動きを止めた。今、稟から感じた何かが自分と同じ狂気に似ていた。

「イマノ……フランとオナジ……」

狂気で失くなっていた理性がフランに少し戻った。多分今の不可解な何かを考えるために。

フランが足を止めた数秒間。笑いが止まると同時に身体に電気が走った。稟は呪縛が解けたと思った。

泉符「ハイドロライド」

直ぐさまミズノ・ツルハシのスキルを発動し、フランの前に水の壁が形成される。

「っ！！ 動けるっ！！」

狂気じみた笑いが止まるまでぴくりとも動かなかった足が動き、全力で駆け出す。

ジュウウウー！

僅か1秒後、フランはレーヴァティンで水の壁を蒸発させた。吸血鬼だから有効だと思っていたが絶対的な破壊を持つレーヴァティンに通用しなかった。

「アハハハッ！ ヤッパリニゲルンダ！ ジャア、オニゴツコダネ！
アッハッハッハッ！」

QED「495年の波紋」

全方位に放たれた弾幕が壁に反射して稟に迫る。
さらにフランはレーヴァテインを構えながら飛んできた。これではすぐ追い付かれる。

弾幕はタイミングを合わせて合間を避けたり、ミズノ・ツルハシで壁を作って減衰させたりしたが、フランはレーヴァテインで壁を蒸発させる。

「アハハッ、オイツイチャウヨ？」

ひたすら駆けているが同じ景色ばかりでいつまでも終わりが無い。体力も今朝からの疲労が十分回復してないためにそろそろ尽きそうだった。

時々レーヴァテインの斬撃が稟の横を掠めては壁が壊れる。

脳裏には生か死かの二択しか浮かばなかった。もう反撃もせず、ひたすら走った。

やがて希望が舞い降りる。窓ガラス。外の景色。一階ならば突っ込めるはず。後ろはあと僅かといった距離にフラン。

失敗は許されない。失敗すれば命は無い。
意を決して窓ガラスに体当たりした。

ガッシャーン！

窓ガラスは呆気なく粉碎した。ほんの数センチ後ろにレーヴァテインが掠める。

遂に逃げ切れたことに安堵するもつかの間、急激な重力が働く。一階ではなく三階だった。

「嘘……だろ……」

稟の身体は重力に引き寄せられ、自由落下した。

「おおっと、危ない！」

ドサッ。

そのまま地面にぶつかると思ったが、たまたま庭の手入れ中だった紅美鈴がキャッチしてくれた。ゆっくり地面に下ろされてようやく安堵の息を吐いた。

「あれ？ 誰ですか？」

そういえば初対面だ。

「えっと……図書館掃除を頼まれた桜之宮稟です。窓から落ちてきたのは妹様と鬼ごっこをしていて逃げる為に窓から出ようとした結

果です」

「ああー……それは災難でしたね……」

納得してもらえたようです。ふと、視線を感じたので破った窓を見るとフランが身体を出してこちらを見ていた。もう狂気は感じられなかった。じゃあ逃げれたってこと？

「お兄さーん、久しぶりの鬼ごっこ楽しかったよー。また遊ぼうねー、今度は弾幕でー」

と言って身体を引っ込めた。普通の口調に戻ったようだ。というか絶対遊びたくないわ。弾幕出せないから即死ですね。

一応出られたので帰りますか。

窓から飛び降りて美鈴がキャッチする一部始終をレミリアと咲夜はテラスから眺めていた。

「あの男、妹様から逃げ切ったようですね」

「そうね。フランにとっては霊夢と魔理沙以来の遊び相手になったようだけど」

レミリアは咲夜の淹れた紅茶を一口啜る。眼光を稟に見定めたままカップを戻す。

「あの男、稟と言ったわね。あいつからとてつもなく大きい運命が待ち受けているのが見えたわ」

「とてつもなく大きい運命……ですか？」

「幻想郷を揺るがす程の……私達も……」

「そうですか……」

とてつもなく大きい運命。レミリアはわざと大袈裟に言ったが、事実、稟に待ち受ける運命は必ず幻想郷に異変を起こすことを確信できた。

第9話 以津真天? Till When? 白玉楼? (前書き)

前半かなりgdgdですが気にしない人はいつでもどおりに。

第9話 以津真天? Till When? 白玉楼?

紅魔館の一件を終えてようやく博麗神社に”穴”を通過して帰ってきた矢先、賽銭箱の横に飾られた氷の塊にぶつかった。

「痛ッ!? ってなんでこんなところに……」

頭を摩りながら氷の塊眺める。

ああ、そういえば封印してたね。しかし、ここでは邪魔な気が……。

「あつ、帰ってきたんだ」

神社の陰から霊夢がお盆を持って姿を見せた。多分あれには神棚に奉る酒が入ってるのだろう。

と、お盆を縁側に置き、近づいてきたと思いきやリュックを強奪!

「うお!? いつの間に!?!」

「これぞ私のスペルカードによる瞬間移動よ。稟もまだまだだね。という訳でおかずは戴いたっ!」

神霊「夢想封印 瞬」

「ゴルァ! リュック返さんかぁ!」

某ヤクザ風な喋り方で直ぐさま神社に入る。もし気づいていれば

良かったが、頭はリュックに関することばかりでそこまで注意しなかった。

氷の塊にヒビが入っていたことに。

リュックに入っていた缶詰は霊夢のいけにえ……もといお昼のおかずとなりました。

さらに霊夢からある提案が出された。

「もしどこかに行くならば必ず私に言いなさいよ」

小学生じゃあるまいし……と思ったが紅魔館の二の舞は避けたいので素直に頷いた。

「でもなんで俺にそこまで？」

「そりゃあ、私の食事を豪華にする為よ」

「じゃあ好きだ、とかそういうのじゃないんだな？」

半分は軽くからかうつもりで言ったが、霊夢は急に顔が赤くなつて、目を背けた。軽く受け流すように自然に言っただけだ？

「……！！、そ、そそそ、そんな訳無いわよっ！……た、ただ……そのっ、……しょ、食事に困らなくなるから泊めてるだけでっ！」

「だよなあ。でもおかげで野宿せずに済んでるもんな」

「そ、そうよっ！ だから感謝しなさいよ！ 外来人にここまでするのほ稟だけなんだからっ！」

しかしこの動揺っぷりはどうか……。

霊夢の心中では……

いきなり何を言うかと思えば「好きだ」とか何なのよお！？ しかも私も動揺しすぎじゃない！？ これじゃあ実はそんな気が……って間違われるじゃない！ あーもー、私の馬鹿っ！

そんなわけでこの日だけ口を聞かなくなったのは言うまでもない。

そんなわけで空気が重いので人里に買い物に行こうとした時でした。

「氷が砕けてる……」

賽銭箱横に飾られていた氷塊が砕けて中の人物がいなくなっていた。

これは危険であると直感し、境内周りを捜してみるもいなかった。

（やばいな……もしあいつがまた問題を起こしたら厄介だ）

もしかしたらと思い、人里へ急いで向かった。

妖怪に出会わなかったただけ良かったと安堵しながら人里に到着（というか到着してから”穴”使えば速かったと後悔した）。さほど広くはないからすぐ見つかると思っていた。

途中買い物を済ませて捜したが、見つからなかった。しばらく捜し続けていると、声を掛けられた。

「おや、稟じゃないか。誰か捜しているのか？」

振り返れば慧音が立っていた。気づかない内に寺子屋の前を通っていたらしい。慧音の周りに里の子供達が群がっていた。

「あつ、慧音さん、実はあのピンク髪が何処か行ってしまったて……見ませんでしたか？」

「いや……私は見てないな」

「そうですか……」

となれば人里以外か？　これはこれで厄介なのだが……。

「フフッ、お互い小さい者の相手で大変だな」

稟の困っている顔が少し滑稽に見えたのか微笑する慧音。

「いやいや、慧音さんは教師ですから僕より苦勞しておられるでし

よう」

「まあ、今は例の件を頼む訳にいかんな。早く見つかることを祈ろう」

慧音から檄を貰い、その場を去った。しかし、日が暮れるまで捜したにも関わらず結局見つけられず帰途に着いた。

神社に着いた時は既に日は暮れていて、周りの木々が暗く染まっていた。重い足取りのまま鳥居をくぐり、本殿裏の居住建物に向かう。

「ただいま……」

と、低く適当に言って入ると、

「稟、買い出しの割に遅かったわね」

「そうだぞ。すっげー暇だったぞ」

霊夢とスチュアートが残っていた缶詰の中身をそのまま食べていました。

この時の俺の顔は多分理解不能だという表情を全面に押し出してフリーズしていただろう。

「……ちょっと待て。お前、いつ戻ってきた？」

低く冷静を装った声で尋ねる。

「えっ？ 私？ えっと、稟が帰ってくる二時間ちょい前ぐらいかなあ」

「では次に、何処に行っていましたか？」

「香霖堂って言うのかな？」

「何のために？」

「霊夢が外の世界のものを売ってるって言ったから、試しに行ってみたんだ。そしたら良いものあったから少し買っていった」

「お金は？」

「稟のから少し」

「何を買った？」

「私が飲むガソリンと携行ロケットエンジン」

ここで一旦間を置いてから、

「なら一言伝えんかいっ！ 俺はお前がまた問題起こすんじゃないかって半日中捜し回ったんだぞっ！ 俺の半日返せやっ！」

「えっ？ それって……まさか……私を……／／／／」

「なぜそこで顔が赤くなるっ！？ 勘違いしすぎだ！ 双子んところの世界に強制送還するぞ！！」

「何言ってるんだよ。そりゃ霊夢の仕事だぜえ」

「うがぁー！！ いつに増してうぜええー！！」

しっかり幻想郷の仕組みに慣れたスチュアート。

「私のこと心配して捜してくれたんだろ？ 素直に認めないとミニミニコンビには入れないぜ？」

「ちやうわあ！！ 問題を起こしたら俺に被害が及ぶから搜したんじゃないあ！！ あとミニミニコンビはそっちの世界だろ！」

するとスチュアートは信じられない一言を放つ。

「霊夢の顔を赤くした男がギャーギャー五月蠅いぜ」

「いきなり何言い出すんだっ?！」

「フッ、隠してもわかるんだな。私のジャッキーGUNに見通せないものなんてねえ！」

「おしっ、分かった！ お前障子から覗いてたな！」

「チッ、ばれたか」

俺の怒りは臨界点に達した！ こういう場面を見られたくないのは当然だ。

「もう容赦しねえ……！ 覚悟しろよ……！」

「一般peopleが私に勝てると思ってるのか」

「勝てるとも！ 喰らえ！ 必殺ツルハ……って、あれっ!? ツル

ハシが全部無え?!」

「によほほっ、私の仕掛けた罠にようやく気づいたか」

「なっ!? 卑怯だぞ！」

「戦いに卑怯も引ったくれもあるかあ！ 戦場は戦略と軍事力だぜえ！ Kill more enemy！」

「こうなったらツルハシが無くともスキルを操って……って霊夢！
? なぜ両腕を縛る!?」

「霊夢は私の味方だ」

「いや、逆でしょ!? 普通俺の味方に付くでしょ!? 霊夢、な

んでだ?!」

（霊夢）「……昼に言ったこと……／＼」

「まだ気にしてたのっ!? しかも顔があk……いや、違う！ あ

れは軽く受け流すと思って言ったことで……。って霊夢？ スペルカード出して何する気！？ ってスチュアートも！？」

「霊符『夢想封印』」

「砲符『38mmキャノン』」

「スチュアートのそのまんまじゃん！ とにかく逃げ……。って、ああっ！？ いつの間に足も縛られてた！？ ま、まままままま待て！ スペカは無しっ！ ここは話し合いだ！ 僕は話し合いで――」

ズドドドーンッ！！！！

この日の記憶はここで途切れたため次の日に移行。

「そうか。そいつは酷い目に会ったな」

神社の賽銭箱前の段差に腰掛けて頭を抱える俺の前にいる魔理沙が箒片手に言った言葉だ。

「ま、元を辿れば稟が悪いじゃん」

「うっ。そう言われたら反論出来ない……」

「アッハッハ！ 稟は面白いなあ！ まあ元気出せよ。今日は霊夢と白玉楼に行くんだろ？」

俺が頭を抱えていた理由はそこにある。昨日の一件で空気が気まずい。今日の朝だって時間ずらして一人で食べたぐらいだ。

「私が行ってあげてもいいが霊夢が何を言うか分からないし、こういう時は稟からしつかり謝るべきだと私は思うんだが」

何故か魔理沙がアドバイザーになっているが、この時はありがたかった。

「しかし、うまく道中で切り出せるか……」

「何も道中じゃなくても……今でもいいんじゃないか？」

「でも心の準備が……」

「おいおい……」

肩を竦め、両腕を横に上げて首を振る魔理沙。

「じゃあ私からの応援としてスペルカードを一枚貸そう。魔力を込めてるからカードだけでもちゃんと発動出来るぜ。こいつは量産型だから返さなくていいぜ」

魔理沙は自分のスペルカードを一枚渡してくれた。

「ってこれ、お前の十八番じゃん」

「まあいいからいいから。それじゃ私は茸狩りに行くぜ。頑張れよ」
魔理沙は箒に跨がり、魔法の森に一直線に飛んで行った。

「でも空飛べるっていいよなあ……」

独り言のように呟く。

そういえば冥界は空との接点じゃなかったっけ？ 結界に穴がつてあるからそう思うのだが……。

と、頭に瞬間ある情報が雷に打たれた如く浮かび上がる。

「そういや、スチュアートは携行ロケットエンジンを買ったって言うってたから……」

「フッフッフッ、お困りのようだな、稟君」

突如目の前に機械的な何かを持ったスチュアートが現れた。

「君付けするな。気持ち悪い」

「稟が欲しいのはこれでしょ？ これは背中に背負うことで空を飛

べるぜ」

まるで心を見透かしたように説明を始めるスチュアート。

「何なんだ？　俺から報酬を貰おうって魂胆か？」

「違うよ。たまには私も信じろや」

「サボリ魔のお前のどこを信じろって言うんだ……」

まったく油断も隙も無い……。なんでこいつが幻想入りしたんだ？

「へへッ、これはお礼だ。稟は空飛んで移動したいって言ってただろ？」

「そりゃ、幻想郷の住人はほとんど空飛べるし楽だから……。それとお礼ってなんだよ？」

するとスチュアートは俺の隣に座り込む。

「実はさ、もともと稟にあげるつもりで買ったんだ。私ってさ陸上兵器だから合わないし、買っても無意味じゃん？　私さ、ここに来て良かったって思ってる。向こうじゃ戦争ど真ん中でビルマの前線に放り出されるし。あん時は日本の奴とミニミニコンビ結成しようと思ったけど逃げられたし……」

一つ一つ向こうの世界の話が始めるスチュアート。勿論どのような世界でどのような結末を迎えたかは知っている。稟から見ればスチュアートは二次の人物だから。

「でもさ……、こっちに来てから……なんつーか、丸くなったって言うか変わったって言うか……とにかく平和な世界ってこんなものなんだって思った。最初は監視の目が無くなってテンション跳ね上がったけど……あん時が懐かしくなって……。でも稟に出会ってからここが好きになった。稟はここについていろいろ教えてくれたし……。こう……優しく接してくれてさ……。嬉しかった……。／＼。……へへッ、私には似つかない言葉だな。でも感謝してる。稟がいてくれたからこそ、迷惑かけたくないって思い始めて、だから……恩返し。presentだ」

途中から顔が赤くなる様子が見られ、最後だけ平気に笑って振る舞ったけど、まさかここまで思っていたなんて全然思いもしなかった。スチュアートは確かに頭悪い割に悪知恵は良く働く。でもやはり……こいつも乙女なんだ……。

スチュアートは機械的な何かを渡してきた。

「ありがとな、スチュアート」

俺は礼を言った。すると、顔を俯けてから、

「稟っ！」

抱き着いてきた。小柄だから受け止めるのは容易だった。……のはいいのだが……

「つて重っ！　ちょ、フル武装だから重い！　まさかわざとフル武装でいたんじゃ！　ってうおい、チェーンスー危ない！　そして苦しい！　う、嬉しいの分かったから離れてくれ！　押し潰されるゝ！」

「あらあら、お二人さんラブラブね」

「そうじゃn……って霊夢！？　さては陰から聞いてたな！？　いや、今回は不問にするからスチュアート退けるの手伝ってくれゝ！　肺が…潰れる！　命が…絶たれる…！」

「えゝ、でも昨日……」

「分かり…ました！　謝り…ます！　謝り…ますから…早くゝ…！」

とまあ、結局なんとかスチュアートを退けて呼吸が正常になった。

「早く白玉楼に行きましょう」

すぐに決断する。ちなみに解放されて呼吸が戻った後、真っ向から謝りました。魔理沙から貰ったスペルカードの意味がなくなりましたがこれ以外に使えるなら使わして戴きます！

「で、それ使えるの？」

俺の背中に背負ってる携行ロケットエンジンを不安そうに見つめ

る霊夢。そういえば昔いなかったか？ 魔法嫌いで科学を信じてここで携行ロケットエンジン創った人が。

「多分な……。説明書だとこれで制御して……」

説明書見ながらだいたい頭に叩き込み、実際に噴射ボタンを軽く押すと、背後からゴゴォーッと聞こえ、身体が浮き始めた。

「す、凄いっ！ 本当に飛べる！」

身体に感じる浮遊感はなんとも言えない。ボタンの押す深さで出力が変わり、下りるときは徐々に浅く押してゆっくり下りる。方向転換は身体を傾けたりねじることでも可能だ。ただし背中に背負うのでツルハシ入りリュックは手持ちでなければならぬ。

まあ、空が飛べれば問題は無い。

「じゃあこのまま行きましょう」

と、霊夢はそのまま上空に向かって飛んで行く。

「おい、スチュアート！ 留守番頼んだ！」

俺はそう言い残してから霊夢の後を追った。

さて、冥界に至るまでは結界を越えるのだが、越えたあとに待ち受ける長すぎる階段に差し掛かった。携行ロケットエンジンは有限

なので足で登ることにした。辛くなれば飛んで行くができるだけ節約したいからだ。

「じゃあ、私は先に行って話をつけてくるわ」

と霊夢は先行して飛んでいった。

「よし、頑張るか」

俺は階段を登りはじめた。

ここから先は読者の予想通りだろう。

途中で参りました。一端の学生に登りきれぬ訳がない。しかも目指すは冥界。本当に幽霊となって冥界に行ってしまうのか不安になった。少し休んでから再び登りはじめた。

しばらく登っては休憩を繰り返し、六回目の時だった。

「こんなところに侵入者が……」

階段の上で仁王立ちし、腕を組んでいたのは『半人半霊の庭師魂魄妖夢』だ。間違いない。ってあれ？ 霊夢が先に行って話つけたんじゃ……？

「その侵入者。ここから先は白玉楼——冥界だ。人間の来るところではない」

だがここで退く訳にはいかない。

「一つ聞きたい。その白玉楼とやらに外来人が来てないか？」

「……！」

「いるようだな。そいつに逢わせてほしい」

しかし、妖夢は一層警戒心を強くした。

「あの外来人と何の繋がりがある！ 返答次第では斬り捨てるっ！」

妖夢は左腰に備えてある短刀「白楼剣」に手を掛ける。

「いや、繋がりはない。ただ同じ外来人として顔を見に來ただけだ。
襲撃しようなんて魂胆はない」

「本当か？」

「本当だ」

「……………嘘だな」

「は？」

「白玉楼に外来人がいると知ってる時点で怪しい！ そうでなければわざわざここに來ない！」

どうやら通さないの一点張りだ。

「じゃあ無理にでも行かしてもらおう！」

すぐに携行ロケットエンジンを最大にして妖夢の横を横切る。

「あっ、待て！」

直ぐさま妖夢が追いついてきた。

スピードとしてはほぼ同等だ。

エンジンが保つか心配だった。白玉楼までの長い階段は一切容赦しない。

ところが、終わりは突然来た。気づかなかったのか、冥界の入口を示す門の外枠に真っ正面からぶつかった。エンジンを止めたが直前な為に間に合わなかった。

「あべしっ!!」

なんとも情けない声で言ったもんだ。気絶こそしなかったのが奇跡だ。

妖夢もすぐ追いついたが、この惨状を見て流石に気が引いたのか、

「だ……大丈夫ですか？」

と一言。

「だ……大丈夫だ……問題は「大有りですよ！ 血が出てます！」マジか!？」

振り向けば妖夢が驚いて怪我のことを伝えてくれた。相当強くぶつかって切ったのだろうか、木でできた門だから繊維が刺さったのだろうか。

とりあえず応急処置の為に白玉楼に入ることができた。妖夢は布切れを渡してくれて、俺はそれを額に当てていた。……マジで血が付いてた。

廊下を歩いていると八目鰻につけるような香ばしいタレが臭う。

「臭いが気になりますか？　今、幽々子様は鰻重という食べ物を食べてるので……」

「ふーん、なるほど」

「実を言うと夜雀を捕まえて厨房で作らしてるんです」

「現在進行形で食事中！？」

「良く分かりませんがそうですね。あつ、ここです」

と、側の障子を開けて一室に招く。すぐに頭に包帯が巻かれた。

「あつ、ひとつ聞いてもらいたいことがあるんですけど。霊夢見なかった？」

「えっ？ 霊夢さん来てるんですか!？」

ますます分からなくなった。この様子じゃ妖夢は霊夢に会っていない。なら霊夢は何処に？

「先に階段を飛んでいったんだけど……」

「そうですか……。幽々子様に聞いてみます」

「じゃあ俺も挨拶しに行きます」

「それならいいですけど……」

まだ完全に疑いは晴れてないようだ。慎重にしくは……。

しかし、白玉楼は本当に桜が見事に咲き誇っている。ここまで完璧に見れるのはここだけしかないだろう。

「幽々子様、入ります」

着いたらしく、再び障子を開ける妖夢。部屋にいたのは今なお鰻重を食べている西行寺幽々子と……。

「って霊夢!？ 何お前までいっしょに食べてる!？」

平然と鰻重を食べている霊夢にノリツツコミをする。

「幽々子がいいって言ったから」

「ほ、本当に来てたんだ」

「あら、霊夢の言ってた客人？　ほら、妖夢も立ってないで中に入りなさいな」

幽々子の誘いで部屋に入る俺と妖夢。だがここで驚愕の光景が飛び込んできた。

部屋の片隅に山のように積もる井型の容器。ほぼ俺の身長と同じくらい積まれている。それが六つ七つと置かれていた。食べ過ぎだろ……。

「妖夢、厨房に行って手伝いしなさい」

「幽々子様、まだ食べる気ですか!？」

「違うわよ。客人に出す分よ」

「ああ、それなら……分かりました」

と、妖夢は奥の襖を開けて厨房に向かった。

と、幽々子は妖夢が開けた襖から廊下に顔を出して、

「やっぱり十人前追加」

「幽々子様いい加減にしてくださいよお」

遠くから妖夢の悲痛な声が聞こえた。よほど苦勞しているのが伺

える。

「で、あなた、名前は？」

急に姿勢を戻してこちらを振り向く幽々子。いきなりだから少し戸惑った。

「あつ、はい、えっと、自分は桜之宮稟と言います。『ツルハシとスキルを操る程度の能力』を所持しています」

「ツルハシとスキル……？ 具体的にどんな能力かしら？」

「えっとですね、ツルハシはここにあるものですね——」

とリュックからツルハシを出して幽々子に見せる。霊夢は鰻重を食べている。

「へえ、いろんな種類があるのね」

「で、スキルというのは簡単に言えばツルハシの能力を使うことです」

「ツルハシの能力？ 具体的に見せてくれないかしら？」

「そうですね……では、このツルハシを使います」

俺が手にしたのはデス・ツルハシ。魔法陣が創れるツルハシだ。

「外じゃないと使えないので」

「構わないわ。縁側から見ときます」

と、俺は外——庭に出て、幽々子は縁側に座った。霊夢は鰻重を食べている。

「じゃあいきます」

俺はツルハシを掲げて地面に突き刺す。

召喚「メシデス」

突き刺した位置に魔法陣が完成。真ん中を突くとそこから青い小さい何かがたくさん出てきて、ぴよんぴよん跳ねながらあちこち移動。

「こんな感じです。この小人みたいなのはメシデスと言って食料にもなって——」

と言うや否や幽々子はメシデスをひよいとつまみ上げて頭からバリバリ食べた。

「美味しいー♪ お肉に似た不思議な食感ね。これはおやつにいいわね」

とりあえず一通り説明して（その間もメシデスを食べられ、ついに全滅）、納得してもらった。霊夢は鰻重を食べている。

「だいたい分かったわ」

「稟のツルハシって変なのばかりと思ってたら、ちゃんと使えるのね」

「ていうか、お前はいつまで鰻重を食べる気だ……」

再び部屋に戻って談話する三人。

と、廊下から妖夢の声が聞こえた。厨房からかなり大きい声だった。

「幽々子様ぁー！！ 八目鰻が尽きましたぁーっ！！ あと夜雀も倒れましたぁー！！」

「あらあら、残念ねえ」

いつの間にか扇子を取り出し、先を口に当てて残念そうな顔をした幽々子。

「夜雀が倒れるほどって……何時から食べてましたか？」

「ほんの30分だけど？」

30分でこの器の山なら相当な重労働だっただろう。犠牲となった夜雀に合掌。

奥の襖が開き、器を持った妖夢が入る。

「まったく、これで最後ですよ。後のはもう一人が持ってきます」

「ありがとね、妖夢」

妖夢から差し出された器を手にとった幽々子は再び箸を動かす。
亡霊に満腹の二文字は存在しないのだろうか。

「よ、妖夢さーん、ちょっと来て下さい！」

廊下から聞き慣れない若々しい女性の声がした。霊夢もその声に
反応した。鰻重を食べながら。

「今の、神社に来た女性の声！」

どうやら本当にいたようだ。そしてついに対面する時が来た。

「最後の鰻重ですよー」

襖を開けて妖夢と鰻重を抱えていたのは、茶髪に近い黒髪のボブ
カットで少し顔が細い女性で、長ズボンに男子制服を着て、頭に短
くて白い鉢巻きをしていた。そして左腰に二本の刀を備えていた。

それを見た俺はこう思った。

マジで高校の応援団の格好じゃん……。

第10話

究極を越えた真実〜Beyond the Ultimate T

お待たせしました。

べたな表現は苦手なもので。

第10話

究極を越えた真実〜Beyond the Ultimate T

現在、白玉楼の一室で鰻重を戴こうとしていたところですが、ようやく問題の外来人に会えました。

例の外来人は鰻重の入っていた器を妖夢と回収して、新しい鰻重を入れた器を三つテーブルに並べた。

ずっと見ているがこちらに気づいている様子は無い。器を並べ、お盆を置いてから顔を上げた時、初めて目が合った。

「あつ、お客様ですか？　つと、お茶を持ってきます」

別に気にする様子も無く、そのまま立ち上がった時、幽々子に止められた。

「お茶は妖夢に任せていいわ。それより、客人は貴女に会いに来たらしいから、一緒に座って貰えるかしら？」

「ふええ！？　わ、私……ですか？」

案の定驚いた表情を見せる。ついでに自分の顔辺りを指差す。幽々子達の関係から見えて住み込みの従者と言ったところだ。

渋々という感じで幽々子の隣に座る。勿論正座。

だが、膝に手を付けて顔を背けている。恥ずかしがり屋なのか緊張しているのかは想像に任せるが。

「あらあら、別に見合いをするわけじゃないのだから、リラックスリラックス」

「そ、そうですよね。ちょっと深呼吸……スー……ハー……」

ずいぶんわかりやすい説明付きの行動をしている。ようやく顔をこちらに向けてくれた。さて、まず名前から聞かないと……。

「まず、貴女の名前を伺いしても宜しいでしょうか？」

と切り出すと意外な返答が帰ってきた。

「べ、別に堅苦しく言わなくてもいいんですけど……。それに自分から名乗ってから聞くもんじゃありませんかな？」

回りくどい言い方をされた気がするが、今回はこちらに合わせておく。

「これは失礼しました。えっと、私は桜之宮稟と言う者で外来人です」

「あのー、そんな堅苦しく言わないで、こう……さっき幽々子さんに説明していたような砕けた口調でいいですから……」

意外と言動を気にするようだ。でも幽々子に説明していた時は砕けた口調ではなかったのだが。

「じゃあ……俺は桜之宮稟。外来人だ」

「桜之宮稟さんですね。外来人って……幻想郷の外、現実世界から来た人で知識がある人……のことですよ？　じゃあ私に似てますね」

同じ外来人だから似ているのは当たり前じゃないのか？　だがよく話す人だ。あの緊張した面持ちは何だったのか？

「つまり、同じ外来人だから私のところに來たわけか。ふーん」

「あの……そろそろ名前を……」

話が続きそうなので耐え切れず再び切り出す。

「あつ、そうでした。私は軍直轄異世界調査部隊幻想郷担当代理隊長の常盤楓ときわと言います」

「「……?？」」

俺はともかく靈夢まで（鰻重の器を持ったまま）同時に首を傾げる。というか何それ？　と思わざるをえない。

「わ、分かりませんよね。首傾げてますし……。ぶっちゃけ簡単に言えば、あなたと違う世界から來た外来人ってことです」

「「……?？」」

「えーつとですね、つまり、私は外来人ですけど、稟さんがいる世界と別の世界から來て……って、あれ？　難しいですか？　ちょ、ちよつと待って……あれ、なんか私まで混乱してきましたよ!？」

とあたふた身振り手振り。紆余曲折を経てなんとか説明が終わる。しかし、幻想郷にも別の平行世界から來る人もいるんだなあ。

「ううゝ、私のせいですいませゝん」

うまく説明出来なかったことに責任を感じているのか部屋の隅っこで体育座りして落ち込んでいた。

「大丈夫よ。気にしてないわよ。それに理解してもらえたし、ね？」

幽々子が肩を叩いて宥める。

なんだかんだで面倒くさい人だ。それが第一印象となってしまうた。

妖夢がお茶を淹れてから妖夢も幽々子の隣に座り、常盤さんの経緯を話してくれた。

先程の説明から纏めれば、本当に平行世界から来た外来人で、何かしら装置を使って転送されたそうだ。ちなみに年上なのでさん付けする。

「で、あんた何しに来たわけ？ 神社にも来たし」

霊夢が聞いた。確かに神社にも来たし、紅魔館にも来ていたその行動には謎である。

「あっ、あれはですね、幻想郷の地理を知るためです。私、3ヶ月間白玉楼で給仕してたから実際に顕界に来たことなくて……」

「はぁ!？　じゃあ、あの脅し文句は何なのよ!？」

突然怒りをあらわにする霊夢。というか脅し文句って何を言ったんでしょうか？

「ヒィ!？　そ、そこまで怒らなくても……。あれは口癖が移ったんですよ」

霊夢の怒りに驚いて少し涙目な表情で訴える常盤さん。男子制服とのギャップなのかすごくかわいいと思うのは多分俺だけだ。にしても性格が誰かに似ているような……。

「……って待ってください。さっき代理隊長って言っていましたよね？　口癖ってその……」

一瞬頭に浮かんだ疑問を聞いてみた。

「はい。実は先輩の口癖でして、たいした意味は無いのですが……
つい……」

「はぁ、呆れるわ」

霊夢はため息をついて再び鰻重を食べる。いつまで食べるつもりだ？

「話は終わったかしら？」

ちやうど鰻重を食べ尽くした幽々子が話を割って出た。

「幽々子さん、だいたい終わりましたよ」

答えたのは常盤さん。

「じゃあ私も質問するけど、あなたの頭、包帯巻いてるけど怪我したのかしら？」

「あ……」

そういえば怪我してたな。話に夢中(?)であまり気にしなかった。が、

「えっ!？　ちょ、稟!？　怪我したの!？　何時!？　大丈夫なの!？」

食いついてきたのは意外にも霊夢だった。パンツと器をテーブルに置くや否や俺に近づいて頭をぺたぺた触り始めた。

「あゝ、ですけど、入口の門の柱に頭からぶつかっただけでして」

勿論リアルタイムで見えていた妖夢が説明する。

「ちょ、妖夢!　あんた何したのよ!」

「私じゃないですよ?!　稟さんが自分から突っ込んだだけで私は何も…」

口論を始める霊夢と妖夢。霊夢、なんでそんなに突っ掛かる？

すると、その様子を見ていた幽々子が俺に声を掛けた。

「あら、そうなの。でも珍しいわね。霊夢が外来人を気にかけるなんて。何か思い入れがあるのかしら？」

また際どい質問を……。これ阿求にも聞かれたのだが……。聞いていたのか霊夢が幽々子に向かって言うには、

「当然じゃない。パトロンはしっかり確保しないと私の食生活に難が出るわ」

「要するに俺をおかず屋と解釈しているんです」

霊夢の説明を補足する。堂々と言われるのにはもう慣れた。

「おかず屋……？　あなた、料理できるの？」

「全く」

どうせ流れで聞くと聞いたからこう答えざるをえない。

答えを示す為にリュックから缶詰を取り出す。ツナ缶だが。

「これを精製できるのでおかず屋なわけですが」

「中身は食べ物ね。なるほど」

すぐに納得してもらえた。

「ねえ、それ貰っていいかしら？」

「ああ、いいですよ」

どうせまた自動的に精製されるからなあ。

手元のツナ缶を渡すや否やふたを開けてそのまま缶を逆さにして
食べる幽々子。

「ごちそうさまでした♪」

一秒で終了。さすが幽々子です。

その間もしばらく談話が續くがまだ聞いていないことがある。そ
ろそろ言おうかとした時、逆に催促された。

「さっきから気になってたんですけど、私に会う以外で何か目的が
あるのではないしょうか？ 何か考え事をしているように見えま
すから……」

「あ、実はそうなんです……御三方は八雲紫を知っていますか？」

俺が幻想郷に着いてから散々口にした疑問。そして誰も分からな
かった。幽々子なら友人関係であるから希望が持てた。今度こそ当
たってほしいと思っていた。

「八雲紫ねえ……妖夢、楓、聞いたことある？」

「いえ、私は存じません」

「私ものです」

結果は白。またしても外れ。しかも最も可能性が高かったただけにその落胆も大きかった。別世界から来た常盤さんとはともかく幽々子まで知らないとは……もしかしたら八雲紫は存在しないことに……。

「あつ、ちょっと待って。」

突然幽々子が何かを思い出した。

「ほら、同じ八雲の名前がいたじゃない」

「あ、あの九狐の……」

「藍！ 八雲藍よ！ 彼女なら知ってるわ！」

「八雲藍を！？ ほ、本当ですか！！！？」

思わず聞き返す。まさか式神の藍が出るとは思わなかった。俺の頭の中では紫と藍はコンビみたいだから紫がいなければ藍もないと思っていた。

「八雲藍かあ。私も知ってるわ。確か結界の境界に家があるって聞

いたわよ」

言ったのは霊夢。霊夢も藍は知っていたようだ。ついに有力な情報を得られました！

「霊夢！ 案内してくれるか？」

「あつ、でも待って。まだ鰻重が……」

（この状況）＜（鰻重）ですか！？ だが、そう言うと思っていたので対策はしている。

「今すぐ案内したらオススメ缶詰ベスト3食べ放題ですよ」

「！！！？、ま、マジでっ！？ よっしゃあ、じゃあ今すぐ「待って下さい！」」

今にも飛び出そうとしていた霊夢を制し、

「あの、私も連れていって下さい！ お願いします！」

名乗りを上げて頭を下げたのは意外や常盤さんだった。

「稟さんが気にかかる程の人物なら、私も一目会いに行きたいです！ いいですね、幽々子さん！」

「んー、まあ実質あと二日休み残ってるし、いいわよ。後は妖夢がしっかりするから」

聞いたところでは常盤さんは地理を知る為に一週間休みを取って

いたらしい。

「ありがとうございます！ では、早速行きましょう！」

すごく煌めくような純粋な笑顔で振り向いた。本当に年上とは思えない。

それはさておき、こうして白玉楼から八雲邸に向かうこととなった。

一度冥界を出る為に長い階段を飛びながら下る三人。霊夢が先頭、俺と常盤さんが並んで後ろからついて行った。

常盤さんは空間に作用する擬似魔法で空を飛べる。別世界の人だからあまり突っ込まないが。二人は普通に飛んでいるのに俺だけ科学で飛んでいる。別に惨めな気はしてない。ホントだよ？

と、途中で常盤さんが俺に近づいて来て、小声で話し掛けてきた。

「……すいません」

いきなり謝罪の言葉。無論心当たりは無い。だが常盤さんは話を続ける。

「実は先程嘘を言いました。私は八雲藍も紫も知っています。本当は八雲紫の消息を探る為に転送されて幻想郷に来たんです」

「……」

にわかに信じがたい話で無言になる俺。つまり、常盤さんのいる世界と幻想郷は何かしら接点があると言っているようなものだ。

しかし、奇妙な話である。現実世界を実物とすれば、対になる世界——二次の世界は複数ある。どの世界においても鏡のように対になっている。それに対し、二次同士の世界が繋がるというのはいかななものなのか？

残念ながら俺の頭では分からないし、作者も分からんだろうからこれ以上は触れないでおく。

それから数分、古い日本家屋を思わせる一軒家を見つけた。しかし、周りの景色は正午過ぎに関わらず暗い。

昼夜の境界が曖昧なのか。しかし、八雲紫がいるならば何故幻想郷の住人は知らないと言うのか。

とにかくにも入れば全てが分かる。俺達は意を決して八雲邸に入った。

中は意外とさっぱりしていて、家具も最低限。人……もとい妖怪

が住んでいた形跡がまるで無い。

「おい、ここで合ってるのか？」

霊夢に尋ねる。

「……確か……ここだったんだけど……」

「合ってますよ！　ここに強い妖力の反応があります！」

自信なさ気に言おうとした霊夢をフォローした常盤さん。手になにやらモニターらしきものがあるが……。

襖に閉ざされた部屋の奥に反応がある。間違いなく八雲藍だろう。

「まあ、無断で家に入っているわけだ、ノックぐらいはしといたほうがいいな」

二人にそう言って、「なんでそんな面倒なことを」と言いそうになった霊夢の口を常盤さんが抑える。

コンッコンッ

「誰だ」

返事が返ってきた。

「私達は外来人の者です。今、訳あって霊夢とこの屋敷に来た次第であります」

「待て。今外来人と言ったな？」

「はい」

「……………訳あってとはどういう意味だ？」

「単刀直入に言います。八雲紫について調査しています」

そう答えると、奥でがたつという音が聞こえた。机に当たった時の音に似ていた。

しばらく沈黙が続く。今の聞いて何を思っただろうか？ 襖一枚で隔てた先はどうなっているのか誰も分からない。

「……………入れ」

ようやく返事が返る。襖に手を掛けてゆっくり横に引く。

部屋は多数の書物や巻物が平然と並ぶいわば書斎だった。

その奥の机の横に八雲藍は立ってこちらを見ていた。

が、その視線に殺気が込められている。外来人がいきなり八雲邸に訪れたのだ。紫は別だが、本来なら藍の行為は正しい。

「外来人が二人に霊夢……………フウ……………」

そう言うのと胸を撫で下ろし、同時に殺気が薄まっていった。

「藍、私達があなたに何かしたわけ？ 会っていきなり殺気立てて」

言ったのは霊夢。藍は冷静に、

「いや、すまない。最近外来人と聞くとどうも警戒心を高めるからな。それに、無断で家に入ってきたんだ。当然警戒するのが自然だろう」

と返す。

「そりゃそうだけど、私は警戒なんかしないわ。参拝客が来なくなるし」

霊夢の場合当然だが、神社の巫女だから仕方ないだろう。

「まあ、いい。その外来人、さっきはすまなかった。名前は何という？」

こちらに振り向いて話しかける。さっき見た時より表情が和らいでいた。どうやら大丈夫なようだ。

「俺は桜之宮稟、外来人」

「私は常盤楓です。幻想郷担当の代理です」

常盤さんが自己紹介した時だけ、藍は驚愕の表情をした。

「なんと！ そうか……代理か……」

こう見るとどうも常盤さんと八雲藍は何かしら繋がりがあさうだ。ますます分からなくなる。

「そういえば、紫様を調査してると言ったが」

「ああ、あれはですね——」

と、俺達は今までの経緯を話した。途中霊夢と常盤さんに補助を貰いながら幻想郷に入る前から今に到るまでを一言一句漏らさず話した。

話が終わると、

「なるほど。話は分かった。君達は霊夢と来たし、男女の二人組。紫様について話してもいいだろう」

そして、藍から今の幻想郷の実態——異変を話しはじめた。

率直な感想を述べるのならこう言っただろう。

「ありえない……」

藍から聞いた話を簡潔に纏める。

まず、俺達より先に一人の外来人がやって来た。博麗大結界を行き来できるチート野郎だ。しかし、最初はいたって内気な性格で当ても無く幻想郷を歩いていた。勿論妖怪などはチート能力で簡単に倒した。

ところが、ある日そいつが異変を起こした。起こしたというより暴走という表現が正しいだろう。場所が無縁塚の為に幻想郷全体に伝わらなかったが、彼の力は圧倒的だった。周りの妖怪をことごとく破壊し、消滅させた。

彼を鎮圧すべく霊夢と紫が弾幕で交戦したが、チート能力も合わさって止められそうになかった。

長期戦に及び、霊夢は力尽き、紫も寸前まで追い込まれた。そこで最終手段として自身を犠牲にして強力な封印術を掛け合わした。同時に紫は境界をいじり、幻想郷に住む者全員の記憶から八雲紫に関する情報を全て脳の深層に閉じ込め、彼とともに封印された。

霊夢は封印前にスキマで魔法の森の入口に運ばれ、香霖堂の霖之助に発見・保護された。その時点でもう記憶は無かった。

以上だ。全ての謎は解けたが、同時に途方もない虚脱感に襲われた。

ここに俺の知る幻想郷は一人の外来人によって歴史を変えられた。

「っ！？　だ、大丈夫ですか！？」

倒れそうになった身体を掴んだのは常盤さんだった。

「相当なショックを受けてるわ」

「しかし、これが幻想郷の現実だ。理解してくれ」

霊夢も藍も複雑な心情だった。

そこから意識が消え、後は何も覚えてない。

目が覚めた時、こちらの様子を見る常盤さんと霊夢の顔が見えた。

「あっ、気がついた？」

「良かった。……全く、人ん家で何してんだか」

「……すまない」

何も考えられない俺は一言そう言って、身体を起こした。時刻は夜なのか、月明かりが障子を照らしていた。

「大丈夫そうね。今日は泊まっていって。まあ私は神社に帰るから、後はあんたが面倒見といてくれる？」

「あっ、はい。幽々子さんに伝えといて下さい」

「面倒臭いけど、分かったわ。稟、ちゃんと神社に帰って来てね。絶対だからね！　じゃあ……」

そう言って障子を開けて外に飛び出した。

霊夢が行ったのを見届けてから立ち上がる。「大丈夫ですか」と常盤さんが心配そうに聞いてきたが「大丈夫です。ちよつと外の空気を吸います」と言って縁側に出て腰掛ける。常盤さんも隣に腰掛ける。

「すみません。俺なんかの為に手を患わせて……」

と言うと、遠慮がちに、

「いいんです。人の世話は何度かしてますから」

と返す。続けて言うに、

「あの、稟さん。この後どうしますか？」

「え？ 後って……？」

「八雲紫さんを探しますか？」

確かにそういう行動をとるかもしれないが、

「捜すって……もう封印されてるなら意味がないんじゃない？」

と、半分諦めかけたような返事をする、

「まだです！ まだチャンスはあります！」

と、立ち上がってから力強く声を出す。

「実は幻想郷の何処かに紫さんが封印された場所が今もあるみたいで、そこが分かればなんとかできますって言っていました。場所までは分からないけど……藍さんが教えてくれましたから私、応えたいんですっ!」

顔を合わせながらの決意。凄い気迫だ。並ならぬ闘志が感じられた。

「でも……」

「大丈夫です! 情報を集めればなんとかなります!」

その確信が何処から湧くのか分からないが、そんな常盤さんを見ていると、自然と勇気が湧いてきた。

「……分かった。俺も手伝う」

「ほ、本当ですかっ!?! ありがとうございます!」

深々と頭を下げる。

自分で言った以上覚悟を決めよう。

それから、また常盤さんが隣に腰掛ける。言いたいことを全部言えて満足したのか、笑顔だった。

しばらく沈黙が訪れたが、また常盤さんから話し掛けてきた。

「ありがとうね」

「いえ、自分が言ったことですし」

「でも優しいんだね。……それでさ」

と、後ろが急に声が籠った。常盤さんは座ったまま身体をこちらに向けて、俺の左手を両手で握った。

「え？ 常盤さん？」

「嬉しいのは嬉しいよ。でも、私と稟さんはまだお互いのこと……知らないよね……」

さっきみたいな籠った声で続ける。顔が少し赤くなっていた。つてあれ？ これって……。

「し、仕事仲間になるわけだし……だから……少しでも分かって貰えれば……」

少しあがり気味なのか、途切れ途切れだが、はっきり声は聞こえる。何故か俺は身体が動かない？ 否、動けない！？ なんだ！？ が、お構い無しに常盤さんはゆっくり顔を近づけてきて！？

「稟さん……め、目を閉じて……くれますか……？」

今更心の中で騒いでも無断だ。顔を向けたまま硬直している俺はもう言いなりになって目を閉じ、事が及ぶのを待った。そして……

「……………?」

何も起きないので目を開けると、紙が一枚顔の前に出されていた。

「……………えーっとお?? これは……………つまり……………」

「すみませんけど、サイン書いてもらえませんか？」

紙の端の名前欄を指差す常盤さん。そういえばさっき左手を握られた時にボールペンを渡された。右利きなんだけど。

余計な期待をしたせいだろうか? とりあえず紙に署名した。

「で、常盤さん、これは何の紙で?」

「ラジオ運営契約書です」

「……………え?」

「契約書です。ラジオのパーソナリティで出演して貰います」

もう頭が追いつきません。何がどうなっているのでしょうか?

「情報を集め、かつお互いを知ると言えば、一対一で対話できるラジオ番組ですっ!」

「……………って、えええええーっ!……………!」

「じゃ、次回からやるので宜しくお願いしますね」

「ちょ、ちょっと待って！！！？ 初耳！ その発想初耳なんですけどおーっ！！！！ とうか一日見てくれるんじゃないんですかあーっ！！！！？」

曖昧な境界の世界でこだまする声は何を嘆いているのか分からない。

第11話 オーバーザ ゆっくり レインボー(前書き)

ようやくです。

残念ながらゆっくりは出てきません。

第11話 オーバーザ ゆっくり レインボー

結局一人で八雲邸に泊まり、明け方に神社に戻った。まだ眠い目を擦りながらの飛行だが、朝日に照らされた幻想郷の景色に心を奪われ、しばしの間堪能していた。

朝日で作られた幾重もの光と影の境界。新緑の木々に照らされ、僅かな水滴が光を反射して、これまた美しい幻想を生み出す。

しばらくほうけるように見とれている内に、博麗神社の上空にいた事に気づく。

「失われた自然ってのも幻想郷に流れ着くのかな……」

ただそう思っていたのをわざわざ口を開く。音を立てて起こさないよう鳥居の前で下りる。

博麗神社も朝日に照らされ、神社の背後から光が溢れ出る光景が神々しかった。東に位置するだけにだが、これこそ博麗神社の姿かもしれないと錯覚する。

まあ、中に住むのは面倒臭がりな妖怪退治の巫女とサボり魔の戦車少女だな。

と、ここであることに気づく。

「箒？ しかもこれ……」

縁側に立てかけるように置いてある箒は紛れも無く魔理沙の箒だ。つまり、魔理沙も泊まっていることになる。

「自由奔放な神社だな」

ボソツと呟いて中に入る。

が、中にいたのは、

「なっ……………!!!!?」

「——!!!!」

ちようど着替えて服を脱いで下着姿であつた魔理沙と目が合い!?

「ばっ、馬鹿やろおお——!!!!」

「ご、ごごご、ごめんなさい!!!!」

スパアンとすぐに障子を閉めて逃げようとしたが、マスタースパークが放たれ、障子もろとも巻き込まれた。

「い、いきなり障子開ける奴がいるかあ!／＼／」

「す、すまない! まさか着替え中だとか思ってたなくて!」

顔を赤くしながら怒鳴り付ける魔理沙に、身体から小さい黒煙を

上げながら正座で謝罪と土下座する俺。って何典型的な展開とフラグ立ててんだが……。さて、どう切り抜けるか……。

ふと、ポッケにある存在を思い出した。

「あっ、これ返す」

魔理沙が貸したスペカだ。案の定魔理沙は驚く顔をする。

「お、なんだ、使わなかったのか」

「というか存在をほぼ忘れていたし……」

「まあ……、その、なんだ……、とりあえず持つとけ。言っただろ？ そいつは返さなくていいって」

「でも……」

「もういいって、ほら！」

と、半ば強引にスペカを突き返す。

「じ、じゃあ私は行くぜ」

これまた強引に箒に跨がると一直線に空へ飛ぶ。それをただ呆然と見るしかなかった。

この後、問答無用で神社の修理と境内の掃除を押し付けられたの
は言うまでもない。

「終わった……」

壊れた箇所修理と境内の掃除を終えたころにはくたくただった。
というか早朝のアレで既に精神がアウトだったからなおさらだ。

賽銭箱前の階段に腰掛けて休んでいた時だった。

「こんにちは」

不意に声が聞こえたので顔を上げたが、誰もいなかった。周りを
見渡してもいない。

「……空耳？」

だが、耳にはっきり聞こえたはずだ。立ち上がってよく周りを観
察する。だが、誰一人いなかった。

「……？」

まあ、早朝から精神的に参ってたし、もしかしたら妖精の悪戯か
もしれない。そう思ってまた階段に腰掛ける。

「わっ！」

「うわあっ!？」

背後からいきなり聞こえた声に驚き、腰掛けようとした身体はバランスを崩してその場に倒れた。

「あはははっ、稟さんって以外と面白い♪」

「と、常盤さん!？」

声の正体は白玉楼に住んでいる男子制服を着た外来人の常盤楓だった。

「どうせ今日まで休みだから来ちゃった」

「来ちゃったって……疲れている人を脅かさないで下さいよ……」

「そうだったの? ごめんごめん」

謝りながらもどこか面白そうな表情を浮かべる。

「いやゝ、実はさ、ここに来る途中で妖怪に襲われてね。でも弱かったな。私の先輩の一億分の一ぐらいだったね」

「一億分の一と言われても実感湧かないし、そもそもあなたの先輩がどれくらい強いかわかりません」

「おお、冷静なツツコミ! やりますねえ♪」

親指を立ててグツとする常盤さん。全く分からない。この人の性格が掴めない。

「ま、前置きはそのくらいにすると、相談があるんだ」

と、さっきまでの軽そうな雰囲気と打って変わって目が真剣になる。その変化に睡を思わずゴクリとする。会って二日目で相談を受けるとは思わなかったが、そういう気ならこちらも真摯に対応するまでだ。

「最後の日だから、魔法の森に行きたいんだけど、案内を頼める？」

聞いた瞬間、身体が硬直した。

「えっ？ い、いい、今、な、なんて？」

いきなり声の上擦る。なぜ声の上擦ったのかは彼女には分からないだろうが、魔法の森は危険な場所だ。特にあそこに住むアリス・マーガトロイドにより危険性が倍増した。（別の意味だが）

とまで考えたが、実際はどうだろうか？ アリスは普通は親切に対応してくれるし、魔法の森で迷った人を家に入れてくれる。（でも終始無口で魔法の研究に没頭し、人形だらけなのが拍車を掛けてたいてい逃げ出す）魔理沙無しならば普通かもしれない。

「……？、ど、どうかしたの？」

「ハッ、す、すいません。今考えてたところでして」

「……ごめん。私一人で行けば良かったね」

と、背を向けて鳥居に歩み出す常盤さん。反射的に思わず、

「あ、い、行きます！ 案内します！」

つい叫んで後を追う。なんか遊ばれてるような気がするが、今回は場所が場所だけに危険だ。だが、心のもやだけは残ったままだ。

が、まったくの予想外が待ち受けていた。

「……さ、寒い」

魔法の森入口が異常に寒い。しかも何本が木が凍り付いている。それを眺めるとある妖精。

「……チルノか？」

話し掛けて、こちらに振り向かせる。その表情を見て驚いた。いつも無邪気で天真爛漫な表情は失せ、表情が暗い。

「あ、湖で見た……」

その声もチルノらしくない低い声だ。

「稟さん、あれは？」

「あれはチルノという氷の妖精で……一言で言えば、馬鹿。……って、常盤さん、知らない？」

説明して気づいた。八雲紫と藍を知ってるなら幻想郷については知ってるはずでは？

「はう、その……あくまで調査対象しか調べてないから……他のは……知らないんです」

まさかとは思ったが、ドンピシャだった。結局幻想郷を知る外来人は今のところ俺だけになるのか……。

「話終わった？」

不意にチルノから呼び掛けた。

このチルノはおかしい。なぜここにいて、表情が暗い？ 疑問は浮かんでも答えは出ない。それでもチルノは続けた。

「魔法の森の入口で待ってって言われた。あたいは今日魔法の森に来る人と戦う運命にあるらしい」

チルノ？ 発言がおかしい。馬鹿というレベルじゃない。一体チルノに何が起きてる？

「悪気はないけど、運命だから。我が全霊の弾幕を受けるがいい！」

電符「ヘイルストーム」

問答無用で弾幕を展開したチルノ。

「ちょ、稟さん！ 全然違うじゃありませんか！」

弾幕を避けながら文句を言う常盤さん。

「待ってくださいよ！ 彼女は何かおかしいんです！ いつものチルノと違う！」

凍符「パーフェクトフリーズ」

二枚目を発動し、弾幕の密度が上がる。

「くっ、ならば！」

弾幕に対処するためにあるツルハシを取り出し、スキルを発動させた。

激震「スペーススクエイク」

意図的に地面が、空間が揺れ、発生した弾幕は全て消え失せ、凍り付いた木が割れ、中身が露出する。

ガラスが割れた音に似たような音が響き、チルノは一瞬そちらに意識を向けた。それを見逃さず、次のツルハシを構えた。

眠符「トゥルースリープ」

射命丸文に使ったマゼンタ色の水晶を召喚し、チルノに投げ付けようとしたが、

氷符「アイシクルマシンガン」

スぺカ発動。水晶を途中で割られた。聞いた者を深い眠りに誘う心地良い音波が発生したが、チルノに届かなかった。しかもチルノは既に次の用意をしていた。

凍符「マイナスK」

放たれた弾幕がさらに小さい弾幕となって襲い掛かる。

「くそっ、もうあいつチルノじゃねえ！」

泉符「ハイドロライド」

紅魔館でフランから逃げた時と同じように水の壁を形成する。意味ない行動と思われるが、チルノの弾幕に触れると、凍り付き、文字通り壁を作った。厚さも十分だが、二十秒が限界だろう。

（攻撃しようにも近づかなきゃ出来ない……。しかし、どうやってあの弾幕を抜けるか……）

二十秒の間、必死に頭をフル回転させて打開策を考える。だが、どれもいい考えは浮かばない。壁がビシビシと弾幕を防ぐ度に氷が碎ける。万事休すだ。そう思った時だった。

「もうっ！　鬱陶しいなあ！」

傍らで弾幕を避け続ける常盤さんが刀に手を掛けていた。そして、目の前から消えた。

迅符「剣劇一閃　逡巡」

勝敗は決した。常盤さんの一撃でチルノは倒れ、弾幕も消失した。

「峰打ちだからね」

そう一言残して刀を納めた。

「あの、ありがとうございました」

助けられたという意味で感謝の言葉を述べる。

「で、でも、チルノちゃんに峰打ちしちやったし……」

常盤さんは峰打ちで気絶させたチルノを心配そうに様子見する。

「心配いりませんよ。妖精は自然の権化ですから明日になれば戻り

ます。それに峰打ちならなおさらですよ」

「あう…、その…、峰打ちと言っても、速度が……」

「？」

「つまり、刀の峰打ちは要するに鉄の棒で殴るようなもので、あの速度で殴れば……」

「ああ……」

常盤さんの心配事が理解できたと同時に恐怖を感じた。目に見えない速度は本物。もしその矛先が人間に向けられたならば……。

「ま、まあ、せっかく来たのですから入りましょう」

「はわっ！？　そ、そうでした！」

と、魔法の森に歩み出す。しかし、俺は別のことを考えていた。チルノもだが、霊夢と初めて人里に行った時に遭遇したルーミアだ。あれもよく考えれば心の闇を操るなど決して単体では思い付かないはずだ。チルノの台詞も然り。

さらに霧がかった心が晴れるのはまだまだまだなようだ。

先程のチルノの影響で魔法の森の気温はさらに低かった。そして、俺達はある家の前にやって来た。

「こんな辺境に家があるんですね」

現実世界の常識ならば斬新に見えるかもしれない。日の差さないじめじめした環境を除けば。

勿論、これはアリス・マーガトロイド邸。しかも何か声が中から聞こえる。片言しか聞こえないが、やたら「寒い」とだけ聞こえた。

「うう、寒い寒い寒い！ 何よこの寒さ！ 魔理沙なの！？
魔理沙の仕業なの！？ 私は何したっていうの！」

訂正。声が大きくなり、全部聞こえた。

「常盤さん、悪い事は言いませんので、ここから離れましょう」

「えっ？ 会わなくていいの？」

常盤さんは首を傾げてこちらを伺う。

「いや、会う会わないじゃなくてただ――」

言いかけた時だった。

「人ん家の前で談話しないでよ！ 魔理沙だけが許されるのよ！」

いきなりドアが開き、アリスが怒声を浴びせる。

目が合い、しばらく沈黙がその場を支配した。

と思ったが、

「あ、あら？ 見かけない顔ね？ どちら様？」

突然尋ねられる。何この展開。

「あの……魔理沙さんの知り合い……ですか？」

恐る恐る聞いてみる常盤さん。それドボンじゃないか？

「はあ！？ 知り合い！？ 私と魔理沙はね、知り合いというレベルを越えて今や愛人よ！ ハッ！ まさかあんたも魔理沙が狙い！？ そうなのね！？ 魔理沙と仲良くなるために私を消す気なのね！ なんて卑怯な！」

「ち、ちち、違いますよ！ そんな……略奪愛をする気なんて……」

「嘘おっしやい！ あんたに魔理沙を渡すもんですか！」

「もうっ、話を聞いて下さいよ！」

収集が付かない状態となってしまうたが、俺はどうすればいいんだ？

結局、アリスと常盤さんはそのまま弾幕勝負に突入。

一対多で苦戦を強いるかと思ったが、例の速さにアリスも人形も追いつけずに一閃され、勝敗は決した。

「くっ、参ったわ。さあ、煮るなり焼くなり好きにしてちょうだい！
ただし、やるときは魔理沙を呼ぶこと！」

「あの……だから話を聞いてもらいたいだけですって……」

困り果てた表情のまま常盤さんがアリスに経緯を説明をして、誤解は解けた。これって大丈夫なのか……？

第11話 オーバーザ ゆっくり レインボー（後書き）

おまけ

「第一回！ 幻想郷ラジオ番組の始まりですよ！ えゝ、パーソナリティを務めるのは私、常盤楓とご存知、博麗神社に住む外来人、桜之宮稟君ですっ！」

「……………」

「ほらっ、自己紹介！」

「いや、それ以前にまず説明しましょうよ。後書きにいきなり書かれても読者が混乱しますし……」

「もうゝ、ノリが悪いなあゝ」

「俺自身いきなりこんな狭いスタジオに入れられて訳分からないんですけど……」

「そこは雰囲気です！」

「理由になってない……」

「んゝ……、じゃ、簡単に説明。後書きが何もないとつまらないと思った作者が思い付いた企画がこのラジオ番組風の対談なのです！ 勿論本編に必要な情報収集も出来るし、幻想郷の住民や読者からの質問に答える場もあるのです！」

「読者からって……どうやって？」

「感想に書いて貰えれば結構です。質問だったらここで答えますので、感想からの直接返信はしないのでご注意ください」

「じゃあ、幻想郷の住民は？」

「ハガキ」

「ハガキ!？」

「幻想郷の住民には、天狗の射命丸文さんに協力して貰い、ばらまいてもらいました」

「……だいたい分かりましたが、質問ってどういうのが……?」

「ストーリーに関する疑問とか、キャラ設定とか、まあ、ネタバレしないぐらいなら何でもいいです」

「物凄く不安になった……」

「じゃあ、例として一枚読むね」

稟が持つてるあのツルハシって何本あるの？

博麗霊夢

「さ、マイクに向かって答えて下さい！ ほらっ、早く」

「え、えーとですね、確か……十種類です。……こ、こんな感じ
で？」

「イエス！ オッケーですよ！ そんな感じでバンバン答えて下さいね！」

「ハハッ……」

「読者の皆さんも気軽に投稿して下さいね。あの子との恋愛話とかも勿論！ というか私が聞きたい！」

「？、何か言いましたか？ というか小声で……」

「い、いえっ、何でもありませんよ！ で、では今回はこのくらいで、次の後書きで会いましょう！」

「恐ろしく不安な気がして堪らないんだがな……」

第12話 幻想郷放浪、蠢く野望（前書き）

二週間ぶりに。今回は三つ場面があります。

ついてこれるか不安ですが。

第12話 幻想郷放浪、蠢く野望

一体全体どうなっているのか分からなくなった。今俺がいるのはアリス・マーガトロイド邸の一室にいますとだけ記しておく。

先程誤解が晴れてすっかり打ち解けたアリスと常盤さんだが、話の内容がどうも……。意識して聞いていた訳では無く、会話に入らぬよう椅子を窓の側に移動させて外を見ていた。以下の会話は常盤さんとアリスの会話の断片である。

「えーっと、つまり魔理沙さんをどうにかして振り向かせたい訳で？」

「まあ、そんなところかしら」

「アリスさんは結構押すタイプだから……」

「でも押すだけじゃあ魔理沙は振り向いてくれないわ」

「じゃあ、いつその事襲ってみたり」

「何回かしたことあるけどマスパで昇天したわ」

「時間帯とかは？ 休んでる時とか？」

「魔理沙ってなかなか休憩しないからねえ」

「でも魔理沙さんは人間だから……やっぱり……夜？」

「つまり、魔理沙に夜這い!？」

「あゝ、でも魔理沙さんの用心深さを考えると成功確率は低い」

「やっぱ魔法陣で魔力を封印させてからが確かかしらねえ」

「だとしたら罾みたいな魔法陣を展開したほうがいいですね。例えばこれをこーして……」

「あっ、それいいわね♪」

「何かに釣られさせないといけないから……」

「魔導書で釣れるわ」

「あと魔力の相殺にこの魔法陣を使って……」

「待つて。こうしたほうが確實よ」

「なるほど。じゃあ後は――」

打ち解けたのはいいですが一緒になって魔理沙捕縛案を提案しないで下さい。

こんな調子で会話が続いていく。俺から魔理沙にこっそり伝えておこう。貞操の危険がありそうだ。

「今日はありがとうね」

「いえいえ、私も楽しかったです。頑張ってくださいね！」

「ええ、これで魔理沙は私の物ね！」

話終わってがっちり握手を交わす二人。完全に友情が芽生えたようだ。この場に俺って必要か？

頭を抱え込んでいると、外から不意に視線を感じた。

「あれっ？」

外に振り向くと一瞬、木の陰に影が見えた。影から見てもあれは人だった。だが魔理沙で無いのは確かだ。彼女ならこんなこそそするはずが無い。ましてやここは魔法の森だからなおさらはずだ。

「……誰だったんだ……？」

当て嵌まりそうな人物を考えるが、魔法の森という場所からなかなか繋がらず、独り言をボソツと呟いた。

「？、どうしましたか？」

外を眺めて考え事をしていたように見えていたのか、常盤さんが話し掛ける。即座に振り向いてから何でもないと答える。

「そうですか……。ずっと会話に入らないでいたからちょっと気になっただけですけど……」

「いえ、大丈夫です。心配をかけて申し訳ありません」

「い、いえ！ 別に謝る必要なんて……」

とにかく大丈夫とだけ答えて俺と常盤さんはアリス邸を後にした。

博麗神社では、いつもと変わらず部屋でお茶を飲んで時間を過ごす霊夢と昼寝をするスチュアートがいた。最近ではスチュアートの数々の奇行こそなくなったが、やっぱりこっそりいなくなる。が、霊夢はたいして気にせずお茶を啜る。どこか行っても必ず帰ってくるからだ。霊夢はお茶を啜り、ちゃぶ台に置くとあることを思い出す。

「ん、そういえば賽銭箱チェックの時間かしらねえ」

と、スチュアートを起こさぬように部屋を出て、賽銭箱に向かう。到着すると蓋の端をしっかりと掴んで、

「今日こそは……！」

と、淡い期待を乗せて賽銭箱の蓋を開ける。

無論、やっぱり空だった。

「……はあぁ……」

そして落胆する。毎日のように賽銭箱チェックをするが、今だに
お金が入っているのを見た試しがない。

「どうしてうちの神社って賽銭より変人が現れるのかしら……」

全くもって素直な発言をする。しかし、ただ虚しく感じるだけなので、重い足取りのまま部屋に戻った。すると、

「霊夢、このお茶は新葉かしら？」

「幽々子っ!？」

いつの間にか勝手にお茶を淹れて飲んでいる幽々子がいた。

「ちょ! 私的茶菓子食べないでよ!」

「あらあら、出しっぱなしのまま放置してたらご自由にと言ってる
ものよ?」

「だからって躊躇い無く食うなッ!!」

何故ここにいるという疑問よりも勝手に茶菓子を食べられた事に
腹を立てたが、代わりにお土産持ってきてるわと幽々子が言い、そ
の場は丸く収まった。

「で、あんた何しに来たの? 茶菓子は出さないわよ」

「もう十分戴いたわ。それより、聞きたい事があるのよ」

「聞きたい事?」

「……随分うたぐり深い眼差ししてるけど」

霊夢からすれば幽々子のような強者クラスの妖怪（亡霊）からそのような問われ方をされれば、ろくなことにならないのを直感で感じている。

「別にろくなことではないわよ。彼女を知らない？」

「彼女？ 誰の事よ。妖夢？」

幽々子から彼女と言われれば普通妖夢を思い付く。

「違うわ。妖夢だったら名前で呼ぶわよ。楓ちゃんよ。私の元に来てる外来人の」

「あ…、ああ。あの変な服着た」

「どこに行ったか知らない？」

「さあ…、稟がいつしよにいたと思うけど？ どうして私に？」

すると幽々子は扇子を開き、口元に寄せる。その動作はさながら八雲紫がする動作と同じだ。今の霊夢では分からないだろうが。

扇子を隔てた幽々子の目は真剣に見えた。

「妙な胸騒ぎがするの」

「胸騒ぎ？ それって勘でしょ？ 私の方が鋭いわよ」

「どうかしら？　ここに来る途中、魔法の森を見たけど、木が何本か凍っていたわよ」

「は、はぁ！？　何それ！？　どういう事！？」

突然の告白に霊夢も声を荒げた。しかし、幽々子は落ち着いてた口調で続ける。

「多分水の妖精だと思うけど、木を凍らせる程強力な存在だとは思わないわ。行ってみたら？　貴女は異変解決の専門家なんでしょ？」

「……分かったわよ。面倒臭いわね」

渋々ではあるが、魔法の森に向けて飛んで行く霊夢。

幽々子は側のお茶に手を伸ばし、飲み干す。

「霊夢も行ったから、残りの茶菓子でも……」

と、皿の上の茶菓子に視線を向けた時、茶菓子は無かった。

「えっ？　おかしいわね？」

素っ頓狂な声を出して辺りを見回すが、茶菓子は無い。

代わりに幽々子の目はある人物を捉えていた。すぐ傍に寝ている。

「もし、貴女が茶菓子を食べたの？」

「……」

返事は無い。しかし、今の部屋には幽々子と寝ている人物しかい

ない。

「正直に答えればそれでいいわ。でも、答えないなら……」

幽々子は殺気立てて寝ている人物に問い掛けた。

すると、いきなり目を開けて、上半身を起こして幽々子を見た。

「ふふっ、お目覚めね。でも狸寝入りは駄目よ」

「……そんなに殺気立てるあんたの意味が分からない。じわりと殺す気だったの？」

「……良く分かったわね」

内心、幽々子は驚いていた。初対面であるはずのに殺気に気づき、さらに能力まで知っている。

いや、知っているとは語弊があるが、いずれにしろ感じていたのは間違いない。見た感じ桜之宮稟と同じ外来人のようだが、人間でないのは直感した。

「あたしのジャッキーGUNで見れない物は無い」

耳慣れぬ言葉を聞いてそれは何、と幽々子は聞き返す。すると彼女は血の付いた包帯を巻いた左腕を見せた。

「ここに、ジャッキーGUNが隠されている、と同時にダークフォースが封印されている」

しかし、幽々子が見る限りそんな大層な力が封印されてるようには見えない。

「まあ、とりあえずそれで私の殺気に気づいたって事？」

「まっ、ジャッキーGUNは使うとダークフォースが出てくるからあんまり……。所謂現場の勘だ」

幽々子はますます混乱した。変な能力を使わずに勘で気づいた？では現場の勘とは？ 霊夢の勘と違うのか？

「貴女、なかなか面白いわね。で、茶菓子は貴女が食べたの？」

一度考えを振り切り、本題に戻す。先程と同じくらいの殺気を出して。

「だから、殺気立てる意味が分からないって」

「どういう意味かしら？」

幽々子は自然かつ優しく話しているが、殺気はかなり高い。それでも臆さず反論する。

「だって霊夢は余ったら食べていいって言ったし、それはあんたのじゃなくて霊夢のだろ？ だから食べても問題無い」

もし稟が聞いたら卒倒しそうな正論に幽々子も納得せざるを得なかった。

確かにこれは霊夢のである。自分のなら有無を言わず殺してたが、ここで殺すのは私情的判断。人のを食べられたからと言って人を殺すのは道理に適わない。幽々子はそれなりの強者クラスなので、自然の摂理には従う。

「うふふふっ」

突然笑いが込み上げてきた。まさか自分が食に関して納得させられたのは初めてだった。

いきなりの笑い声に、ど、どうした？ と聞く。

「いえ、貴女なかなか賢いわね。ごめんなさいね」

「分かってくれればオールOKだ」

「貴女とは気が合いそうね。貴女、名前は？ 私は西行寺幽々子。冥界に住んでるわ」

「あたしはスチュアート。稟と同じ外来人で訳ありでここに住まして貰ってる」

「そう。また近い内に遊びに来るわ。霊夢に宜しく言っというて」

そう言うと、スチュアートの前でスウツと消えた。

しばらくしてスチュアートは、

「……………夢？ まあ、いつか」

と、仰向けになって畳の上に再び寝る。だが、西行寺幽々子。その名前だけは覚えていた。

「ふむ、なかなか観察眼のある方でした」

アリス邸の裏側、木の背後に隠れるように立つ人間が呟く。アリス邸から稟が見た影は確かに人間だった。

（少し厄介ですね。私ですら場所も分からないこの辺境の地でや々と家を見つけて中を覗いてみたら……）

人間——男は先程中で見た人物を思い出し、その一人に注目していた。

（あの制服を着ていた小娘。まさかあのPMCの傭兵がいたとは……。全く、数奇な運命な事だ。さて、長居は無用です。私は私の仕事をしますか）

その容姿は金髪の好青年だが、どこか飢えた狼の如く鋭い目つきをしており、服は旧ドイツ軍の正式な軍服に似ているが、独自アレンジした軍服であった。腕章には「RRF」と。

青年はポケットに手を突っ込みながら森の奥へ姿をくらまそうとしたが、

「待ちなさい！」

突然呼び止められた。振り向くと紅白衣装の少女が空を飛んで接近していた。

（ほう。この世界には空を飛ぶ人間もいるそうですね）

驚く様子も無く、少女が目の前に降りるまで待った。
少女――霊夢は降りると指を突き出して叫んだ。

「あんたが異変の元凶ね。私の勘が言ってるわ」

「おや、それは誤解です。私はここに迷い込んでいるだけ」

男は気に留める様子もなく、平然と返す。

「いや、あんたが犯人よ。この森に迷い込む人間はいない。あんた、外来人ね」

「一体何の話をしているか分からないが、私は関係無い。これだけは言えます。では、異変とは何の事で？」

霊夢は後ろの森を指差す。

「あそこで木が凍っているわ。普通、気候から自然的に木が凍るなんて有り得ないわ」

すると突然男が笑い出す。

「あっはっはっはっ、それで私を疑うわけですか。実に面白い人だ。だが、全く説得力がない。第一、あれは氷の妖精の仕業ではないのか？」

瞬間、霊夢はこいつが犯人だと確信した。が、確かめる為にいくつか聞いた。

「あんた、ここが何処か分かるの？」

「さあ。私は車の運転中に突然光に包まれたと思ったら身体だけこの森にあった。だから、場所を確かめるべく周りを散策した」

「周りって湖とかも？」

「湖？ それは見ていない。私はすぐ後ろの家と中の人物しか見ていない。三人いましたかな」

「三人？」

霊夢はそちらに気を向けそうになった。家はアリス邸。アリスしか住んでいないから一人はアリスだが、あと二人は誰だろうか？ 魔理沙は一人だから違う。

しかし、今は異変解決が先。それを思い出し、再び聞き出す。

「つまり、中の三人以外は誰も見てないって事？」

「そういうことになりました」

「じゃあ聞くけど、何で木を凍らしたのは氷の妖精って知っているのよ！」

「…！」

一瞬男の表情が崩れた。つまり、この男が関与した証拠でもある。

「やっぱりね。覚悟しなさい！」

すると、男は右手をポケットから出し、何かを上投げた。その

物体は程なくして強烈な閃光を放ち、たちまち霊夢の視界を奪った。

「ううっ!？」

すぐ目を覆い、閃光が消えるまでその場に佇んだ。光が消えた頃には既に男の姿は無かった。

「逃げられた……」

あの男は危険だ。そう直感した霊夢は一旦神社に引き返す。森を出て、入口に差し掛かった時だった。

「霊夢っ!」

後ろから聞こえ、振り向くと稟と楓がいた。

「あつ、稟と…か、楓…だっけ?」

「あはっ、名前覚えてくれたんですね♪」

「いや、それよりさっきの光は何だったんだ?」

感激している楓を差し置いて説明する霊夢。外来人の男と木の異変も伝えた。

「そうか。ならチルノの異変も……」

霊夢の説明の後に、森の入口で出会ったチルノの異変を説明した。稟はこれが何処か繋がっていると確信した。

「でも厄介だわ。外人が関わる異変ってのは」

「確かに。得体の知れない奴でもあるし。常盤さんも気をつけた方が――」

言いながら振り向いた時、楓は驚いている様子が見れた。

「あの、常盤さん？ 聞いてますか？」

そう問い掛けた時だった。

「……ます」

「え？」

「その人を追いかけてみます」

そう聞こえた時には踵を返して再び魔法の森に入ろうとしていた。
一瞬早く気づいた霊夢が肩を掴む。

「待ちなさい！ 何する気」

「は、離して下さいっ！」

霊夢の手を無理矢理解くと魔法の森奥に姿をくらました。

「常盤さん……」

いきなりの出来事に稟はただ眺めるしかなかった。霊夢は稟に一

言言った。

「RRFって言った時、彼女、表情が強張ったわ」

RRF。一体何を意味するのだろうか。

第12話 幻想郷放浪、蠢く野望（後書き）

おまけ

楓「第2回！ 幻想郷ラジオだぜえ！ 前はかぎかつこだけだったから、このおまけだけ名前表示することになりました」

稟「……」

楓「むにいゝ、駄目ですよ。始まって黙り込むのは」

稟「いや本編の終わりの雰囲気から一気に掛け離れたから……その……」

楓「そんなことは全く関係ありません！！ 盛り上げたくないんですかつ！！」

稟「いや、そういう訳では……」

楓「じゃあ、ちゃんと楽しくO・H・A・N・A・S・H・Iしましょうよ！」

稟「……はい、すみません……（使い方違うような……）」

ラジオとはこれまた面白い事をするのだな。河童が造った製品だそうだが、里でも結構人気があるぞ。ただ、少し夜遅いから子供達には悪い影響がありそうだから注意してほしい。

では質問だが、霊夢と稟が退治したあのピンク髪の妖怪は改心しただろうか？ 神社に住んでいるとはいえ何をやらすか分からないからな。最近の動向を教えて欲しい。

上白沢慧音

楓「ほえゝ、長いですねゝ。しかも達筆」

稟「わざわざこんな丁寧に書かなくてもいいのだがな……」

楓「ま、まあ、質問ですから答えて答えて」

稟「え、えっと、まあ確かにあいつの行動にはまだまだ問題はありますが、それでも自制心は出てきたようなので、特に大きな問題を起こすような事はしなくなりましたね。でももう少し改心の余地があるかな？」

楓「へえ、妖怪と住んでるんですか。霊夢さん大変ですね」

稟「いや、妖怪ではなくて実は外来人なんだが」

楓「うに？　だってハガキには妖怪って……」

稟「あいつはいきなり里を襲ったから、妖怪と認識する人がいるよ
うなんだ」

楓「そうなんですか……可哀相です……グスッ」

稟「いや、別にそこ泣く所じゃあ」

楓「人里の人々から理解されず迫害を受け、いつか認められる日が来るまで神社で修業。こんな悲劇的な運命に泣かないわけはないですよ！……グスッ」

稟「それ違う……」

楓「え、えーっ！？　ち、違うんですか？　じゃ、どんな感じなんですか！　説明して下さい」

稟「え、いやそう言われても……」

楓「後三秒！」

稟「無理！　恐ろしく無理！」

楓「じゃあ次回までにね。ちゃんとしなかったら前身頃をチェーンソーで斬るから」

稟「何それ！？」

楓「あ………いいや。この際今やっとこ」

稟「ちょー！！　どっからチェーンソー出した！？　何もない空間から出てきましたよ！？」

楓「じゃあ逝くよ？」

稟「洒落にならないですよ！　マジで逝きますって！　ちょ、ちょ
ちよちよちよ待ってえー！！　死ぬって、マジ死ぬって！！　話聞い

「と、うあゝあゝあゝー！ー！ー！ー！ー！」

この後額に数センチ傷を残しながら脱出した。

第13話 迷いの竹林、トラップマスターの策略（前書き）

遅れました。

おまけがなんか上手くない……見てからの楽しみですが。

第13話 迷いの竹林、トラップマスターの策略

一旦神社に戻った俺達は賽銭箱の前でとりあえず今までの異変を纏める事にする。

まずはルーミア。心の闇を操るというトンでも応用を身につけていた。が、これ以外に実害は無いので終了。えっ？ EX化？ 関係無いから省略。次にチルノ。馬鹿とは一転天才のような悟った話し方、そして魔法の森の木を数本丸ごと凍らせるという大所業を成し遂げた。チルノに関しては霊夢が逃がし、常盤さんが追いかけていった謎の男が関係している。

「でもあの男、外来人なのに何故妖精と関係を持ったのかしら？」

霊夢の言い分も正しい。だが引っ掛かるのは車で移動中身体だけ森にいた事。そしてRRFという単語に反応した常盤さん。

二人は何かしら関係があるのかもしれない。常盤さんは異世界から来たわけだし、辻褄は合う。

例外では八雲紫の件だがこれは棚上げでいいだろう。封印場所が分からない内は手出しできないからだ。

まあ、今はこのくらいだろう。解決せねばならない異変だが、俺はあくまで知識のみ。仕事は霊夢か魔理沙がする。相手が外来人ならそれなりのサポートはさしてもらおうつもりだ。

と、ここで珍しく神社に訪れた人がいた。

「あら、霊夢に図書館の労働要員さん」

「咲夜じゃない。なんでここに？」

「その前に、俺は桜之宮稟っていう名前があります」

「あらそう。じゃあ桜之宮さんでいいの？」

「いや、名前で呼んで下さい。苗字じゃ言いにくいですから」

訪ねてきたのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。話によると買い物ついでに寄ったとか。実際買い物袋を持っている。

しかし、買い物ついでには言うが遠回りである。何か目的がないと立ち寄らないはずだ、と思った。

「ああ、それとお嬢様から伝言を預かってるわ」

「やっぱりな」

「？、なんで咲夜の言おうとする事が分かるの？」

疑問を放つのは霊夢だった。

「地理を考えれば分かるだろ。紅魔館から人里までは直線上で考えれば近い。でも神社は紅魔館からだ人里より遠い。わざわざ遠回りするなら何か目的がある以外ないだろ？」

「ふーん、そんなもんかな？」

「空ばっか飛んでるなら分かるだろ、普通」

「私は気にした事ないからねえ」

ま、意外と細かい事は気にしない人だから仕方ないのだが。

（つと、咲夜さんを待たせては失礼だ）

「失礼。それで伝言とは何でしょうか？」

「はい、それでは――」

それから咲夜は夕食時に見た運命について話した。幻想郷を揺るがす程の大きな運命が見えたのを。

「これは確定と言っても間違いではありません。既にその運命の中にあなたは組み込まれていますから」

「……………」

話を聞き終えてから終始無言だったが、今でも無言のままだ。

「随分と長い無言ですね。受け入れられないのは当然ですか」

普通なら受け入れられない。だが、ようやく口から出た言葉はこうだった。

「いや、十分受け入れられるさ。どうせこうなると思った」

「と言いますと？」

「どうせ俺には安息の場所はないんだ、って。外でもそうだし、幻想郷でも。外じゃあ人間同士が争い始めて戦火が広がった。外ではここが日本ってところは知ってるよな？　まだ完全ではないけど親父が自衛隊でさ……って分からないか。とにかく親父は敵地に送られて敵と戦って戦死したんだ」

「「……………」」

「しかも同時におふくろが病気で亡くなった。俺は親戚に引き取られたが仲が良くなって、どの道、安息の場なんてなかった。正直幻想郷に迷い込んだ時は嬉しかった。しかも神社手前だったのが。でもやっぱり同じだった。今、外来人によって異変が起こされている。だから、その運命に巻き込まれるのは必然じゃないかって。だから受け入れられる」

言い終わってから重苦しい空気が流れる。

（うっ。やっぱり分からない……かな…）

いきなり身の上話をされて分かる人がいるだろうか。しかも唐突に。つい口走ったことを後悔した。

ようやく口を開いたのは霊夢だった。

「……よく分からないけど、一つ聞かせて」

「？」

「私なら外に帰すことは出来るけど、稟の言う安息の場……って言うの？　それが幻想郷にないなら稟はどうする？」

「…っ！」

確かにそうだ。幻想郷に安息の場がなければ帰ってもいい。だが、はたして外に安息の場は存在するのだろうか？　今はまだ日本は参戦していないから探す時間はあるだろう。

しかし、幻想郷と外。非常識と常識。虚と実。どちらか一つを取るならどちらだろうか。ここで今、自分の人生を左右する重大な決断に迫られているように思えた。考えを纏めるには短すぎる。だが今言わねばならない気もした。

不意に顔を前に向けた。映ったのは幻想郷の景色。夏もピークから徐々に涼しさが出てきた今の季節。いまだ多くの木々が深緑を保ち、日光に照らされる。本来あるべき自然の姿。

はたして外ではこの景色を拝めるのか、否、無理であろう。

外で見た忌ま忌ましい景色。核によって灰になった死の山を。雪が溶け、生命の存在を拒む完全な死の世界となったエレベスト山。中継で見ただけでも忌憚すべき景色だった。

ならどうすべきなのか？

現実逃避が現実となり、幻想郷へたどり着くも同じ危機が迫っている。一分が一時間のように感じられた。

散々悩みに悩み抜いたあげくに出した結論は。

「俺は……幻想郷に生きる。幻想郷に安息の場がないなら創つてみせる」

「そう……分かった」

霊夢はそう言うと、稟に近づき、

「幻想郷は全てを受け入れる」

そう言って、神社の中に入って障子を閉めた。

しばらく取り残されたような気分だったが、咲夜が呼び掛けた所で意識を戻した。

「あの…」

「えっ？ あっ…」

「申し訳ありません。私がこのような話をしたばかりに…」

見ると咲夜から戸惑いと申し訳ない表情が読み取れた。

「あっ、い、いえ。そんな事ありません。むしろスッキリしましたよ」

すると咲夜はキョトンとした表情で尋ねる。

「す、スツキリ……ですか？」

「何て言うか……言いたいことを言えてスツキリした……みたいな。とにかく咲夜さんは悪くないですよ！」

何だかこじつけみたいになるが、これは自身の問題だから咲夜は関係ない。

「……稟さんがそうおっしゃるなら……」

と言ってこの件には引いてくれた。と、ここで咲夜は何かを思い出したようにポケットから紙切れを取り出す。

「そういえばパチュリーさまからも伝言を預かっています」

と、その紙切れを稟に渡す。

「パチュリーが！？ それにこれは？」

「はい、まあ、伝言と言うよりお願いですが……、先程の話を聞いてからなんで図々しいのは承知の上ですがお伝えます。永遠亭をご存知ですか？」

「永遠亭って迷いの竹林の？」

「はい。その紙切れを届けて欲しいのです。紙切れには薬の調合依頼が書いてありますので」

確かに紙切れには調合依頼が書かれている。

「でもなんで俺に？」

「その……パチュリーさまが言うに、稟さんは真面目で優しいから多分拒むことはないということですが」

ここから察するにまだ図書館の労働要員として見ているわけだ。しかも性格を完全に把握している。さすがは知識と日陰の少女。

「はあ……、分かりました。持って行きます」

「あ、ありがとうございます」

承諾してくれたことにホッと安堵する咲夜。

承諾したのにはもう一つ。顔合わせも兼ねるつもりだ。

「では、宜しくお願いします」

軽く一礼して、神社から消える。

「あっ」

今それを見て思い出した。そういえば時を操れた。だったらそのまま永遠亭に行けたんじゃないか？

と思っても依頼を受けて咲夜がいない以上仕方ない。

一人で行くのは気が引けるし、かといって霊夢に案内を頼むにも空気が重い。

「……………あいつを連れていくか」

久しぶりの外出ということで、なんかテンションが高い。

「稟と久しぶりの散歩♪」

最近感情豊かになっている。本当に笑顔である。ただチェーンソーをぶんぶん振り回さないで欲しい。危ないしさつき枝何本か斬れたし。勿論稼動していない、のにこの威力。チェーンソーに細工したか？

とチェーンソーはさておき、今、迷いの竹林で絶賛迷子中です。やはり自然は知識だけじゃどうにもならないことを改めて知らされました。

「えっと……あれ？ さつき通ったような？」

「鬱陶しいなあ。伐採していい？」

「却下。伐採した所で竹は成長が速いからすぐ元に戻る」

「ちえゝ、斬りがいがないなあゝ」

とこんな感じで歩き続ける。

と、不意に景色が茶色一色に染まる。と同時に浮遊感を感じたと思いきや下から衝撃が走った。

「いってえ！」

落とし穴に掛かったようだ。しかも深い。身体がすっぱり入るくらい……って普通か？

勿論空を飛べないのでスチュアートに助けを求める。

「おい、スチュアート？」

ひょこつと顔を出してくれたスチュアート。

「悪いけど、引き上げてくれないか？」

「……」

「……おい？」

「……」

何故か無言。顔は覗かせるが一向に動かない。何か嫌な予感がするのだが……。

「いや、見てないで助けてくれって」

「……」

「聞こえてるだろ？」

「……」

「お前……まさか……」

「……観察♪」

（言うと思ったよ……）

ツルハシを取り出し、おもむろに目の前を掘る。するとスチュアートが立っていた地面が沈下し、スチュアートを巻き込んで崩れ落ちる。フル武装で重さが増しているので耐えられずに崩れたのだ。

「うぼあー！ー！！」

崩れ落ちた土砂が山のように積み重なったので、それを足掛かりにして地上に出た。

「……まあ後で迎えに来るか」

やっぱり連れてきたのは間違いだったと後悔しながら永遠亭を目指してゆっくり歩を進めた。

が、三步目で再び落とし穴。ズボツという効果音が出そうな程鮮やかに落ちた。まったく今日は厄日か？

「アハハッ、お兄さん運が無いねえ」

聞き慣れぬ声と同時に顔を覗かせたのはウサ耳の少女。

「まさか二連続で掛かるなんてツイてないねえ」

哀れんでいるように聞こえるがその顔は完全に悪戯に喜ぶ顔だった。

「……………」

無言のままスチュアートと同じ目に遭わせようと思うが、二連続と言ったから多分何処かで見ていたのだろう。なので、

震符「フィールドクエイク」

ツルハシスキルで地面を揺らして縛り付け、動けない隙に地面を素早く掘る。重さに耐え切れなくなった地面は地表にヒビを入れて崩れ落ちる。勿論、ウサ耳少女も巻き込んで。

「ちょ、ちょっとおー！」

そして埋まる。同じように足掛かりにして再び地上へ。というより普通足元を掘ったぐらいで崩れるとは思わないのだが、崩れたものは仕方がない。地面の軟らかさが関係するのか？

地上に出てしばらくすると、土を掻き分けて地上に出てきたのはウサ耳少女だった。

「いやー、さすがお兄さん、まさか私を巻き込ませて落とすなんて発想が違うねえ。さっき見てたから注意してたのに地面を揺らすな

んてたいした人だ」

とさっきと打って変わり低姿勢で話す。

「気に入ったよ。良かったら案内してあげる。私は因幡てゐ。お兄さんは？」

「俺は桜之宮稟。外来人だ。実は永遠亭に行く途中だったんだけど」

「永遠亭に？ 何で？ 外来人が来るなんてだいたい変な状態の人ばかりなんだけど」

確かに普通ならそうだ。迷いの竹林に進んで入り込む人間はまずいない。竹が生い茂って日光があまり届かず、妖怪も多数隠れている。筍取りに精通したプロでない限り普通の人間はまず助かる確率は低い。『普通』の人間なら。

とりあえず訳を説明する。

「俺は紅魔館の人（？）から依頼されて薬を調合して貰いたいだいだ」

「あー、成る程。じゃ、ついて来て」

と、先導するように歩こうとしたが、不意にこちらを振り向いて見る。いや、正確には後ろの落とし穴を見ている。

「そういえば連れの女の子はいいの？」

「ああ、あれは別に大丈夫だ」

ちなみに今腕一本だけ山から出ている。ほっとしても勝手に出てくるだろう。

と、次の瞬間、地面から姿を現したのは……チェーンソーの刃の部分だった。

「いや、そこもう一本腕を出すところだろ！」

ついツツコミを入れる。一瞬ゾンビが地面から出てくるのを再現してるのかと思ったがそうでもなかった。

「……本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ。まず人間じゃない」

なんやかんやで説明して永遠亭へ歩み出す。後ろから「りいーんーんーん」という重低音の声が聞こえた気がしたが空耳だと無視した。

それから10分後、程なく竹林を抜け、日本家屋を思わせる永遠亭へと辿り着いた。

「じゃあ私はここまでね。後は適当に呼べば誰か出てくるから。それじゃ」

とてゐが踵を返そうとした時だった。

「あつ、てゐっ！ 見つけたわよ！」

「うげっ、れ、鈴仙！？」

ちょうど襖が開き、中から出てきたウサ耳のブレザー姿の少女と鉢合わせした。

「今日という今日は逃がさないわよ！」

と言うや否や走りながら弾幕を展開する。俺は勿論脇にすぐ回避する。

「ちょ！？ いきなり弾幕！？」

、てゐもすぐに踵を返して竹林に向かって逃げ込む。

「待ちなさーい！」

「そう言って待つ奴がいるかあ！」

ところがこの追撃は早々に集結した。てゐを追った鈴仙の姿が消えた。残ったのは穴。

「よしっ、掛かった！ 今のうちに！」

そのままてゐは竹林へ姿を消した。

ちなみに鈴仙が落ちた穴は竹林で落ちた穴と形が違って、棺を入れるのに十分な四角の落とし穴だ。

「痛たたっ……」

頭を押さえて立ち上がる鈴仙。頭から突っ込んだようだ。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ、すいません。なんか巻き込んでしまって。このくらいいつもの事ですから」

鈴仙は穴の淵を掴み、地上に上る。

「全く、いい加減にしてほしいわ……。っと、それよりあなたは？」

「あ、はい、自分は桜之宮稟と言う外来人です」

「外来人？ 外来人が永遠亭に何の用かしら？」

「実は紅魔館のパチュリー・ノーレッジからの依頼で薬の調合依頼をしに来ました」

すかさずポケットの紙切れを渡す。鈴仙はしばらくそれを眺めてから、

「分かったわ。中に入って」

と、屋敷に入れさせて貰う。

が、入る直前に再び落とし穴。今回は浅かったから良かった。

「！、大丈夫ですか？」

「まあ、これぐらいなら大丈夫です。それに竹林で二回落ちましたから」

「あー……。最近てゐが大量に落とし穴掘って、屋敷にもいろいろ仕掛けをしたんで叱り付けようと思ったんですが」

だからさっき問答無用で弾幕を出したわけだ。

とりあえず屋敷の部屋に案内された。

その間てゐの仕掛けが幾つか確認出来たが、パンチングマシンみたいな棒が飛び出すわ、板が一枚外れて顔面に当たるわ、障子が倒れてタンスが突っ込んでくるわ、竹槍が飛んでくるわの惨事に見舞われた。

無事に帰れるのかなあ？

第13話 迷いの竹林、トラップマスターの策略（後書き）

おまけ

楓「ラジオをお聞きのあなた！ 常盤楓と」

稟「桜之宮稟の」

楓＆稟「第3回！ 幻想郷ラジオの始まりでえす！」

稟「……って何をやらされてるんだ俺は……」

楓「ふふっ、今回は一緒にタイトルコールする約束をしましたからね♪」

稟「いつした」

楓「前の回の後ですよ。傷付けない代わりにつて」

稟「ああ……（あれ無理矢理だよな。ある意味トラウマだ）」

楓「今日はゲストがいますよ」

稟「ただでさえ苦しい空間にさらにもう一人！？」

ボカツ

稟「ちょ！ 何で鈍器でえ！？」

楓「放送中に文句言わない！」

稟「すいません……」

楓「分かれば宜しい！ ではでは本日のゲストは神社から来ました……『東風谷早苗』さんです」

稟「！……！！？」

早苗「よ、宜しくお願ひします（汗）」

楓「ちよつと緊張気味かな？ では、ゲストが来たところで早速ハガキを——」

稟「ちよ——っつと待ったああああ——！！！！！」

ボカツ、ボカツ

楓「放送中に大声出さない！ 早苗さんに迷惑です」

稟「いや流れがおかしい！ 『まだ本編に出てない』 早苗さんが出ていいの！？」

楓「細かい事は気にしないの、ね、早苗さん」

稟「まず自分達が何者かも知らない早苗さん連れて来て大丈夫なんですか！？」

早苗「あつ、でもラジオは毎日聞いてますし、神奈子さまも諏訪子さまも許可をくれましたから」
稟「それで大丈夫なのか……？」

おっ？ 香霖から聞いたぜ。ラジオを始めたんだってな。里じゃ結構人気があるらしいな。稟もやる時はやるんだな。私もやろうかな？ 魔理沙の弾幕ラジオとか。（冗談だけだな）

それじゃ、質問に入るぜ。霊夢とはあれ（白玉楼出発前）から上手くいってるか？ あいつは根はいい方だから、神社に住み続けるならちゃんと仲良くしていきな。

それともう一つ。紅魔館で本を盗m……じゃなくて借りる前に聞いたんだが、パチュリーが稟をえらく気に入ってたらしいが一体何かあったか？

たいした質問じゃないけど、また何か思い付いたらまた送るぜ。

霧雨魔理沙

早苗「へえー、博麗神社に住んでるんですか」

楓「えっと、これって……つまり…（ぽっ）」

稟「つまり何も普通の質問でしょう。頬を赤くする意味が分かり

ません。

えーっと、霊夢とは白玉楼に行く前にもう仲直りして今じゃ普通に暮らしてますよ。時々おかずのメニュー（缶詰）で衝突しますけどね。

で、パチュリーに関しては単に図書館掃除を真面目にしていたから頼れる労働要員と見ているだけです」

早苗「でもよく霊夢さんといられますね」

稟「まあ、ある意味食料で釣ってるようなものだが……」

楓「本当にそれだけですか？」

稟「はっ？ いや、それだけです」

楓「いや、あなたはまだ隠しています」

稟「だから意味が……」

楓「じゃあ聞きますけど、霊夢さんと何処までいきましたか？」

稟「はあ！？ いきなり何を！？」

楓「屋根の下で若い男女が一緒に生活して何もないわけがないじゃないですか！」

早苗「そ、そうなんですか！？ あっ、でもこういうパターンはありますし……、ま、まさか？」

稟「どうしてこうなる！？」

楓「うふふ、さあ、正直に告白しなさい。何処までいきましたか？」

稟「あんたがラジオの空気壊してるじゃん！ ちゃんと放送しようよ！ しかも早苗さんまでいるのに」

早苗「で……でも、私も……少し……聞いてみたい……かも……」

稟「嘘オ！？」

楓「さあ、言い逃れは出来ませんよお。今夜は逃がしません。たっぷり聞かせて貰いましょうか。うふ、うふふ……♪」

稟「な、何故こうなる……」

楓「こんな胸キュン話を無視するなんてとんでもない！ 早苗さん、この人を羽織い締め」

早苗「あっ、はい！」

ガシッ

稟「ちよおおー！」

楓「じゃ、早速話して貰いますよ♪ 恋の話は押して駄目なら押し倒せーっ！っ！……！！！」

ちようど終了の時間となりましたので放送を終了します。

第14話 the Brain of the Moon（星の降る日）（前書き）

お待たせしました。最初だけ別キャラ視点です。

第14話 **t h e B r a i n o f t h e M o o n** 星の降る日

私は今、永遠亭の一室にいます。一室というより入院患者専用の部屋なのですが、永琳先生から特別に許可を戴いて入室しています。

私の目の前には入院患者が布団に寝て療養中です。永琳先生が言うに危険状態は脱したと言っていました。今だ目を覚ます気配はありません。

あともう少しだと思うのですが……。

あ、申し遅れました。魂魄妖夢です。

何故私が永遠亭にいるのかと思っておられる方がいると思いますので、今から簡潔に説明致します。

まず、目の前の入院患者ですが、私と幽々子様が住む白玉楼に厄介している外来人の常盤楓さんです。

正直、私は非常に驚きました。ちょうど買い出しから帰って階段の様子を見に行った時でした。

白玉楼に続くあの長い階段を右足を引きずり、覚束ない足取りでフラフラと血の跡を付けながら登ってきたのです。額からも少量ながらも血が流れ、片目に垂れていたのでしょうか、左目をつむりながら痛みを堪えるように。右足は……例えではありませんが、破壊されてました。出血が酷く中の肉がチラチラ見えていて。長ズボン

も所々血がべつとりと付いていて、とにかく弾幕で傷ついたようなものではありませんでした。その後、楓さんは俯して倒れました。

私は咄嗟に踵を返し、楓さんの持っていた医療道具を持ってきてその場で応急処置を行いました。しかし、止血が十分でないのかすぐに血に染まる包帯。それでも身振り手振りで右足の止血をした私は直ぐさま永遠亭へおぶっていききました。その時点で楓さんは意識は朦朧としていて、焦点が合っていませんでした。

そして今に至ります。正直あと7分遅ければ一命すら絶望で、仮に一命を取り留めても右足切断という結果となっただろう。既に右足から感染が始まっていたそうで、いわゆる破傷風になりかけだった。つまり、長い間あの状態で歩き続けたからだそうだ。

本当にゾツとしました。幸い命に別状は無いし、薬治療で良好だそうです。幽々子様からは楓さんとの同伴の許可を貰ってはいますが、やはり心配だ……。何処かに迷惑かけてなければいいのですが……。

てゐのトラップをくぐり抜けてようやく永琳がいる一室まであと僅か。

だが、最後の最後に小型地雷とは思いつける訳が無い。ちなみに引っ掛かったのは鈴仙だった。小型だけに威力は小さいが宙に浮かせるパワーはあった。おかげでひっくり返って地面に激突した鈴仙のスカートの中を一瞬チラッと見てしまった。否、見えてしまった。

あえて何も言わないが、決して意識していたわけでない。これは事故なんだ。そう、事故なんだ。決して……。

「あの、入りますけど大丈夫ですか？」

気がついたら鈴仙がこちらを向いて様子を伺っていた。いつの間にか着いたようだ。

「あ、失礼しました！　か、考え事をしてまして」

慌てて説明したが、鈴仙は氣にとめる様子もなく障子の方に向く。

「師匠、外来人の客人が来てます」

「いいわ。入りなさい」

凜とした声が聞こえ、鈴仙は障子を開けて中に入れてくれた。

永琳は丁度水？のためであるビニールのような袋に薬を溶かしている最中だった。

「失礼だけど、今手が放せなくて。作業しながら用件を聞くわ」

と、ビニール袋を閉じると空気を抜かして真空にする。下にコックみたいなのを取り付けて……。

（あれって点滴じゃないか？）

そうだ。あれはボトルやバッグに入れて吊した薬剤を、静脈内に留置した注射針から一滴ずつ投与する点滴だ。と、なれば誰か患者がいるのだろうか？

「ちょっと、君聞してる？ 自分から訪ねてきて黙り込むのは失礼よ」

「はっ、す、すみません！ 今すぐ言います！」

永琳に注意されてすぐにメモの内容を読む。

「えっと、紅魔館のパチュリー・ノーレッジが服用している薬を調合して貰いたいのですが」

「ああ、それね。じゃあウドンゲ、頼んだわ」

「そう言うと思ってもう調合しておいときました」

指示されて間もなく棚から薬を取り出した鈴仙。

「あら、気が利くわね」

「そりゃあ時期を見えますから。はい、これが薬よ」

「後は頼んだわ」

そのまま薬を受け取り、同時に永琳は部屋の奥へ姿を消した。

薬は貰ったのであとは紅魔館に行って届ければ終了だし、もう永遠亭に必要は無い。が、先程の点滴を見て、一度どんな患者なのか知りたいという気持ちも湧いているのは確か。永琳が点滴を作成するというのは稀だからだ。つまり、かなりの重傷患者と推測できる。

「あの、まだ何か用があるの？」

薬を与えても出て行こうとしない様子を見かねて鈴仙が話かけてきた。

ここでどうこう言っても無駄なので、正直に言った。

「いや、あの、先程のは点滴か何かですよ？ 誰か患者がいるのですか？」

「……それを聞いて何になるわけ？」

当然の返事をする鈴仙。確かに聞いてどうするかは自分でも分からない。

「ただ好奇心で聞いただけです」

「……」

鈴仙は目を細め、じっと見つめてくる。もし能力で見つめられたら確実にやられている。しかしそのような素振りはなく、だけど考えを見通されてるような感覚だった。しばらく沈黙が続き、俺は鈴仙の目から全く外すことは出来なかった。

「……そういえば妖夢が同伴してた」

ようやく鈴仙から出た言葉は全く予想外の言葉だった。

「えっ！？ な、なんで妖夢が？」

「妖夢を知ってるの？ ……言っていないか分からないけど患者を教

えるだけなら……」

鈴仙もしばらく考え込み、決心したようにこちらに振り向いて言う。

「入院患者は外来人」

「なっ!？」

確実に結び付いた。妖夢と外来人。入院患者は常盤楓さんだ。いつの間にか俺は身を乗り出して鈴仙に詰め寄っていた。

「ちょ、ちよつと君」

「教えてくれませんか! その外来人と知り合いなんです!」

「……」

圧倒されたように少し後ずさる鈴仙。とはいえこれ以上話す訳にはいかない。やはり追い返すべきだったと後悔したが遅い。

「り、稟さんじゃないですか!」

鈴仙に助け船を出したのは奥からここに來た妖夢だった。永琳に一旦戻るように言われて來たのかもしれないが。

「妖夢! 本当にいたのか」

妖夢に気づくと直ぐさま妖夢に駆け寄る。

「な、なんで稟さんが？」

「ああ、紅魔館の依頼で……って妖夢こそなんでだ？ 常盤さんが入院してるなんて聞いてないぞ！」

「私にも分からないんです。帰ってきた時には既に重傷だったんです。……本当に何が何だか分からなくて……それで……」

よく見ると妖夢は震えていた。多分見つけた時の事を思い出したのだろう。

「……スマン」

反射的に謝る。入院患者が常盤さんと聞いて若干冷静を失っていたようだ。

それから妖夢からここに至るまでの状況を聞いた。治療に関しては鈴仙も少し教えてくれた。

「すみません……すぐに連絡しなかったから……」

「いや、妖夢は悪くない。逆だよ。妖夢がいてくれたから常盤さんが助かった。そうだろう？」

「……あ、ありがとうございます」

自分に非があるのだろうと思っているのか、いまだに顔の浮かない表情の妖夢。これほどの表情を見るのは稀であろう。苦労人だが

誠実で真面目な妖夢の性格からしても一目瞭然だ。霊夢も一目見ればすぐ分かるぐらい。

「妖夢、君は一旦白玉楼に帰った方がいい。後は俺が見ておく」

「「えっ!?!」」

妖夢だけでなく鈴仙まで驚愕した声を出した。

「そ、そんな、私に気を使わなくても大丈夫ですよ! そ、それに、紅魔館からの依頼はどうするんですか!?!」

「あの、悪いですけどそればかりは師匠から許可を貰わないと」

「大丈夫。依頼に期日は無い。妖夢は幽々子の事も心配してるだろう? それに俺と常盤さんは同じ外来人。多分分かってくれると思う」

一言で二人に答える。呆然としたまま二人は顔を見合わせてから、

「……分かりました。後はお願いします」

「私も師匠にお願いしてみます」

「すまない、二人とも」

それから妖夢は白玉楼に帰るために永遠亭を出発した。昼頃神社を出発し、着いたのは三時間後。もう辺りは薄暗い。

で、鈴仙が奥の部屋に在るであろう永琳のもとに行こうとした時だった。

「なら、話が早いわね」

「ひゃあ!？」

いつの間にか鈴仙の背後にいた永琳が言った。

「お、脅かさないで下さいよ。何時からいたんですか？」

「妖夢が説明していた時かしら。随分とあなたの話を熱心に聞いてたわね」

「!?!？」

何故か顔を赤くしてダッシュで部屋を出る鈴仙。

「あらあら、少しからかっただけで本気にしちゃって……。まあ、いいわ。あなた、あの子の知り合いって本当？」

「まあ……正直に言えば……昨日今日知合ったというか……」

無論、目を丸くして俺を見つめる永琳。当然だ。散々言っという昨日今日知り合ったと聞けば疑う。

「……それ本当？」

「残念ながら」

「……」

再び沈黙が訪れる。非常に気まずい。自信満々で一発芸をしたが失敗して一気に空気が冷めるくらい。な、何を書いているのか分からないが俺も分からない。

しばらくしてから、声がした。奥の部屋から。その声にハッと意識を戻した。永琳も聞いたようだ。

「……あまり信用ならないけど、騒いだら傷に響くわ。勝手についてきなさい」

そう言って永琳は再び奥の部屋へ行く。

（勝手に……か）

俺も言葉通りについていった。

部屋は八畳の間で真ん中に布団が敷いてあり、患者はそこに寝ていた。傍に先程見た点滴のボトル。一滴ずつ薬剤を含む水がポタポタと管を通して落ちている。

常盤さんの姿は本当に酷い状態だったことが伺える。頭には包帯を巻き、右足は宙ぶりの状態で療養中だった。しかも血が染み込んでおり、右足がかなり重傷なのが分かった。

が、今の俺は常盤さんの痛々しい姿を考えることは頭から吹っ飛んでいた。今、俺と永琳は『謎』に直面していたからだ。

「と、常盤……さん？」

試しに呼び掛けたが反応は無し。永琳も気難しい表情で常盤さん

を見る。

「おかしいわ。声がしたはずなのに……」

永琳は常盤さんの身体を触って脈拍や意識を確認する。

「まだ意識は回復してない。どういふことかしら？」

「でも声は確かに常盤さんのだ。そんなハズは……」

常盤さんは意識はまだない。つまり、声が聞こえたなら意識は回復しているはずだ。だが全く意識は回復してない。なのにさっきはつきりと耳に届いた。永琳にもしっかり聞こえていた。そこが謎なのだ。

「まさか空耳……いや、永琳さんにも聞こえてましたよね」

「ええ……」

空耳だったら一度神社で体験したが、もしあの時と同じだったら？ 頭を振り、すぐにその考えを捨てる。永琳にも聞こえていたのだ。空耳なはずが無い。

ところが、

『ハハハ……』

「「――！」」

空耳。はっきりと。

「まただ！ 常盤さんの声だ。間違いない！」

「どうなってるの……？ ウドンゲ、来なさい！」

不思議現象に永琳は鈴仙を呼ぶ。すぐに部屋に飛んできた。

「はい！ 師匠何か…ムグッ！？」

「少し黙ってて」

説明無しで口を塞いで鈴仙を黙らせる。

「むむうー、むぐむぐう（師匠、何を！？）」

「とにかく静かに」

俺も同じように静かにして耳を澄ませる。

それから十四秒後、

『（ん）……』

「！？」

今度は鈴仙が飛び上がりそうになった。

「し、師匠！　い、今のは患者の声！？」

「さあ。私も彼も分らないの」

辺りを見回すも変わった様子は無い。だがやはり常盤さんの声に違いない。鈴仙はすっかり怯えて永琳にしがみつく。

「な、なななな、げ、幻聴ですか？　何なんですか？」

完全に怖じけづいた鈴仙。常盤さんは全く動く気配は無い。一体何が起きてる？

『ここ……気付いて……』

再び空耳。幻聴。しかも一言増える。

「ヒイイイイ！　な、何！？　何なのよー！！」

「ウドンゲ、落ち着いて」

「な、なんで師匠が落ち着いていられるのかがもっと分かりません！」

凄い勢いで取り乱す鈴仙。こんな怖がりだったか？

逆に俺は予測ではあるが気付いてしまった。不思議現象のトリックに。

「永琳さん」

「何か分かったの？」

「予測ですけどもしかしたら……」

「……分かった」

永琳は鈴仙を引きはがすと常盤さんが寝ている上布団を持ち上げる。

しかし、いつもの男子制服で下に包帯で巻かれた部分があるだけでおかしい部分は無かった。

と思った矢先、

『……』

また空耳。だが、先程より音量が高い。つまり、音源が近くにある。

「もしかしてあそこかしら？」

永琳も気付いたらしく上布団を鈴仙に押し付けると、常盤さんの胸ポケットをまさぐる。すぐ目を反らす俺。さすがにこれを堂々と見る訳にはいかない。

「何かあったわ」

永琳が手にしていたのは四角形にアンテナの付いている物体。

「それは通信機！」

空耳の音源は通信機だった。今も電源が付きっぱなしだ。

「そ、それですか？ 正体はそれなんですか？」

いつの間にか上布団を包まった鈴仙が恐る恐る尋ねる。

「多分だけど…」

「あの、失礼を承知ですが、それ貸して貰えませんか？」

「大丈夫よ。通信機なら月にいた頃に扱ったことあるわ」

と、側面の電源のスイッチを切ろうとした瞬間だった。

『気付いた？』

通信機から声。完全に常盤さんの声。

「常盤さん！ 常盤さんですか？」

俺は無我夢中で通信機に叫んでいた。

『……稟君？ 近くにいるの？』

「謎が解けたわね」

「幽霊じゃないですよね？　だ、大丈夫ですよね？」

永琳がホッと一息して胸を撫で下ろすと同時に鈴仙が上布団から出て来る。

しかし、まだ解明されていない事がある。声の主が常盤さんなら、目の前で療養しているのは誰だ？

「あの、常盤さん、何処にいるんですか？　凄く心配してるんですけど」

『あう…、それが、私も分からないの。ただ、和室で療養中なのは分かるんだけど。どうも白玉楼じゃない場所なの。神社でもなく私の知らない場所』

常盤さんの知らない和室で療養中？　永琳も鈴仙も首を傾げる。

「和室で療養中なら、人里かしら？」

永琳がそう答えるが、

『いや、人里ではありません。人里は何度か行ってますので雰囲気です分かります』

即座に否定。じゃあ何処だろうか？　俺が知ってる幻想郷の知識を引き出して該当場所を探す。だが、やはり分からない。二人も同様に思い付かない様子だ。

「あの、他に分かりませんか？　お願いします」

通信機に懇願する思いで聞いてみる。

『えーつとお……妖夢に医者のもとに運ばれたんだけど……』

「「「えっ？」」」

同時に顔を見合わせる俺達。そして次の言葉で思考がフリーズした。

『えい…、永遠……亭……って言ってたかな？　そこに医者があるって』

「それって私の事じゃない」

第14話 the Brain of the Moon（星の降る日）（後書き）

おまけ

楓「はい、やってきました！ 常盤楓と」

稟「桜之宮稟の」

楓&稟「第4回幻想郷ラジオ！」

楓「うん！ タイトルコールが揃うと雰囲気違うね」

稟「いや待て。本編で重傷の貴女が何故いるし？」

楓「本編の私とおまけの私は結び付かないの。例えば本編で私が死んでもラジオには出るわよ」

稟「うわぁー、何その超ご都合主義」

楓「そんな事は放っておいて、ゲストは再び早苗さんです。前回しつかり混ざれなかったからしつかりするとの事で」

稟「いや、十分混じってたよ。被害が主に俺の時」

アターーイ、参 上！

アターーイ、参 上！

さいきよーのアタイ、参 上！

アタ……あつ、スペースがもうな

さいきよーの妖精 さるの

楓「……な、なんか凄いのが送られてきたわね……」

稟「これチルノ以外にいないな」

早苗「妖精もハガキ送れるんですね」

稟「多分大妖精が手伝ったんだろうな。コメントしづらい…」

楓「さすがに私も……。じゃ、次いきますか」

にゃーにゃーにゃー。

にゃにゃにゃにゃにゃー。

にゃにゃ、にゃにゃにゃにゃにゃー。

にゃー！？ にゃにゃにゃにゃー！

にゃにゃにゃー！ にゃーあー！

黒猫

稟「意味不明なハガキ第二弾！？ どうなってんだこれ…」

楓「黒猫……。幻想郷って凄いね」

稟「黒猫は橙の事だ」

早苗「あのスキマ妖怪の式の式ですね」

楓「ちえん？ 式って？」 稟「式ってのは式神の事で、一言で言えば従者みたいな奴」

楓「あー、つまりこのハガキの二行目の二つ目の『にゃ』の部分ですね」

早苗「違いますよ。三つ目からの『にゃにゃにゃにゃー』の部分ですよ」
楓「えっ、そうなの？ さすが早苗さん！」

早苗「で、『にゃー！？』から後は大好物を見つけて飛び付いた様子を表して」

楓「じゃあ『にゃにゃにゃー！』は喜んでる様子なのね」

稟「っていうかなんで二人とも内容分かるの！？ 俺だけ！？ 分

からないの俺だけ!？　くそっ、俺には『にゃ』としか見えない!」
楓「じゃ、次」

橙から聞いたが、二人はラジオを始めたようだな。橙も出したようだし私も出すことにした。とはいっても合間合間で書いたから短いけどな。

質問だが、稟とかいったかな？　君の住んでいた外の世界を知りたい。君に会ってから君のいた外の世界の暦が分かってきてな。その、2036年の様子を教えてくれ。

八雲藍

楓「衝撃の新事実!」

早苗「稟さんって2036年から来たんですか!？」

稟「ま、まあそうだけど」

楓「ふふふ♪　もしかして…」

稟「おい、前回みたいな話じゃねえ。むしろ酷い話だぜ。世界戦争って言う戦争の真っ最中だ」

早苗「えっ？　第三次世界大戦じゃなくて？」

稟「そうだ。完全に分離しちゃったんだ。ヨーロッパ諸国はドイツを中心にロシアのモスクワ、中東、アフリカ北部を統合したAAEU。南北アメリカ大陸を統合したアメリカ大陸合衆国。日本やインド、東南アジア諸国、シベリア、オセアニアは独立状態だがいずれ取り込まれる。そんな世界がいやで堪らなかった」

早苗「そんな事が…」

稟「で、AAEUとアメリカ大陸合衆国が世界各地で戦争。同盟国日本はアメリカ側だが、自衛隊の親父が戦地に行って死んだのさ」

楓「そう……だったんだ」

稟「あんまり語りたく無いし、ラジオには合わない話だ。これぐらいでいいか？」

楓「うん……」

稟「ツ——！ やっぱり暗くなるか。すまない」

楓「いいです。謝ることはありません」

早苗「……」

稟「おい、もうすぐ時間だぞ。締めはどうする？」

楓「……」

稟「ったく。司会がそんな顔でどうする？ あんたが締めないと意味無いだろ？ そんな顔したら十分かわいい顔が台無しだぜ」

楓&早苗「！！？」

稟「お、おい、どうした？」

楓&早苗「あの、さっきの台詞もう一回お願いします」

稟「二人揃って……。まあ、その、そんな顔したら十分かわいい顔が台無しだ……ブッ！？」

楓「キャー、稟君ったら♪」

早苗「優しいですね♪」

楓「よーし、それでは時間が来ましたのでこれにて終了です！ ご試聴ありがとうございます！」

稟「なんで殴られたし……？」

第15話 意識繋ぐ通信機と人里へ降り立つ青年（前書き）

お待たせしました。

勢いでやってしまったが、人の性格の表現は難しい。

第15話 意識繋ぐ通信機と人里へ降り立つ青年

「今までのやり取りの分を纏めようか」

通信機から聞こえる常盤さんとのやり取りを一旦纏めてみる俺。

まず常盤さんは妖夢に担がれて永遠亭に到着。その時既に意識は無い。永琳の治療により一命を取り留めているが以前意識は戻っていない。

しかし、彼女は通信機で呼び掛けに応じ、会話も出来る。そして和室で療養中と言い、場所は永遠亭と判明する。

「まあ、要するに今日の前の怪我だらけの人が常盤さんに違いないって事か」

『説明乙』

だがますます分からないのは、『何故意識の無い彼女の声が通信機から発せられるのか』だ。考えられるのは通信機に細工がされてる事。

「あの、常盤さん」

『はい、何でしょうか？』

「意識が無いのに何故話が出来るのですか？」

さすがに通信機を解体して再びもとに戻せる程の技術は俺にはないし、下手に壊したら常盤さんがどうなるか分からない。だから聞

いてみた。

『えっ？ 意識はあるわよ？ ただ身体が動かないの』

この発言は鈴仙と永琳の頭を悩ますのに十分だった。尤も鈴仙はまだ落ち着きを取り戻していないが。だが、俺はある話を思い出した。

曖昧ではあるが、確か某国の青年がバイクで交通事故に遭った話だ。医師からは脳死判定を下された。ドナー登録者だったので、脳死移植がなされる場所だったが、寸前に自発行動が確認された。

確か、いとこの看護師がポケットナイフでかかとから足先までを引っ掻いたとき、足が上に動き、手の爪の下に痛み刺激を与えると手を強く動かしたらしい。それで蘇生装置を使い、最終的には生きてたという。今は既に退院している。

彼もまた、意識だけははっきりしていた。証拠に医師が親族にしか言っていない死亡推定時刻を正確に覚えていた。

この話に当て嵌めれば今の状況を説明できる訳だ。

「確認しますけど、今の常盤さんって意識だけが生きてるわけ？」

『意識だけじゃないわよ！ 身体だって直に動けるようになるわ』

どうやらあの話の青年の状態なのは確かだ。だが、通信機で話せるのは何故なのかは分からない。

「それは無理よ」

会話を割いて冷酷な一言を言ったのは永琳だ。

「よく分からないけど、私の診断で貴女の身体は全治一ヶ月よ。特に右足なんかえぐられたような傷だったし、破傷風の初期段階に入りかけてた。細菌やウイルスは薬で抑えたけど身体的なダメージが大きい分、すぐは無理ね」

『そ……そんな……』

震えたような声が通信機から絞り出される。

『身体が動かないんじゃ……、あいつを止められない……。どうしたら……うう……』

それを聞いて俺はハッと気付いた。前に常盤さんと魔法の森に行った時だ。アリスと別れて入口に向かう途中に閃光が森中にほとばしった。その後、霊夢と鉢合わせて外来人の男の存在を知った。常盤さんは有無を言わず男を追い掛けた。

まさかとは思いたくないが、そう結論せざるを得ない事実が自分の首を絞める感覚となった。

（つまり、常盤さんはその男にやられて重傷を負った。それ以外を考えたいがやはり……!）

そう思うと心の底から怒りが込み上げてきた。彼女は確かに強いが、何処かにいそうな幼さが残る少女の顔だ。それを容赦無く重傷に追い込んだ男に憎しみが広がるのを感じとれた。別に女性に紳士的であるという訳でない。その残酷なやり方に怒りの矛先が向いていた。

「常盤さん……」

気付いたら永琳から通信機を取って静かに語りかけた。

『どうしたの？ 声のトーンが低くなったけど？』

「俺が……俺がやります。俺が常盤さんの敵を取ります」

この時だけ決意したかのように力強く語っていた。

『敵って、まさかあいつを！？』

常盤さんの声は信じられない事を聞いたかのように声が上擦っていた。だが俺はもう一度言った。

「はい。常盤さんの敵であるその男を……潰します」

『ダメッ！！！ 稟君には関係無いし、命に関わるわ！ あいつは

私の世界から来た外来人！ 私で決着を——』

「その常盤さんは動けないでしょ！」

『ひう！？』

いきなり怒鳴り散らすように通信機に叫ぶ。突然の剣幕に二人も哑然とする。もう自分の意思では止められない。

「確かに常盤さんを重傷に追い込む程の人物なら俺みたいなツルハシしか取り柄の無い奴は敵わないでしょう！ しかし、幻想郷には協力してくれる仲間がいます！ 皆で連携して仕掛ければ倒せるはずですよ！ 貴女のいた世界にだって貴女の先輩や仲間と共に生

きていたんでしょう？　違いますか!？」

『……』

「俺ももとは外来人だし、幻想郷にも貴女の世界の人物にも直接関係無い。でも現実世界には帰りたくないんだ！　あんな戦争を繰り返す2036年に嫌気がさしてな！　その時理由もなく死んでもなく幻想郷に運よく訪れたんだ！　誰かに笑われようとも俺は幻想の中で暮らす決心をした！　そして男は幻想郷に危害を及ぼす奴と霊夢も判断した！　幻想郷で生きると決めた以上、俺も関係なくは無いですよ！」

自分の都合のいいように言ってる言い訳。だが圧倒。そう例えるしかない程の威圧感を漂わせて通信機に怒鳴り続けた。

ところが、それは途中で終わってしまった。

何故なら、通信機から声が聞こえなくなったのだ。夢中で怒り口調のまま話していたが、一時してから声が聞こえないのに気付いた。

「……常盤さん？」

試しに呼び掛けたが返事はない。もしかしてと思い、通信機をくまなく見てみるが、ランプはついたままだし、壊れた様子も無い。

「……？」

分からない俺は通信機に耳を当ててみた。

すると、ほんの僅か聞こえた。しかし、声では無かった。

『うう……ひぐっ……ぐすっ……』

聞こえるのは鳴咽だけ。それを聞いてようやく自分がしでかした事の重大さに気付いた。同時に既に遅かった事も。

「と、常盤さん？ 常盤さん？」

何度呼び掛けても鳴咽しか聞こえない。

（うむむ、さすがに言い過ぎて泣かせてしまったとか……？）

罪悪感だけが残り、どうすべきか分からず思考が路頭に迷っていた時。

バリバリッ

「うっ!？」

首から全身にかけてショックが起こり、そこで意識は途絶えた。直前にコードらしき物体を持った永琳がチラッと見えた。

「し、師匠！ 何を!？」

突然倒れる稟を見て永琳に振り向く。

「少し気絶させただけよ。よく考えたら彼女は重傷患者だし、あまり話をさせる訳にいかないわ」

「だからってそれ使わなくても……」

永琳は鈴仙の指摘を無視して稟の手から通信機を取る。耳を当てると嗚咽が聞こえる。

永琳はそっと声を掛けた。

「あなた、大丈夫かしら」

『うぐっ……んっ?』

声の変化気付いたのか通信機から聞こえた嗚咽が止まる。

「ごめんなさいね。重傷の貴女に怒鳴り散らすのを止めるのは医者
の役割だから」

『……医者……なんですか?』

そういえばまだ名前を言ってなかったわね、と自己紹介を始める。

「私はこの永遠亭で暮らす八意永琳と申します。医者というより薬師ですけど、貴女を治療したのも私」

『そう……でしたか。……すみません、なんか嗚咽なんか上げてしまっ
て』

「いえ、仕方ないのよ。今の貴女は自分の近辺情報からのストレスで精神が不安定なだけ。ゆっくり休めば落ち着けるわ。彼も強引だったけど目が覚めた時には落ち着いているわ」

『……ありがとうございます』

お礼の言葉を聞いた永琳は通信機を鈴仙に差し出す。

「え？ 師匠？」

「ウドンゲも挨拶ぐらいしなさい。身の回りは任せるから」

「つて、ええっ!？」

いつの間にか身の回りの事を押し付けられたが、嫌とは言えないし、患者を放っておくわけにもいかない。恐る恐る通信機を手に取り、顔に近付ける。

「あの……」

言いかけた時だ。

『わっ!!』

「うわぁ!？」

突然甲高い声が通信機で反響し、驚いた鈴仙は文字通り飛び上がり、天井にぶつかる。ゴツという音と共に鈴仙と僅かに付着した埃が舞い降りる。その拍子に通信機も落とす。

「ウドンゲ!？」

永琳も一瞬何が起きたのか分からなかったが、通信機だけは落ちる直前で受け止めた。

「いったッ! な、何なのよ〜！」

どうやら頭をぶつけたらしく頭をさする鈴仙。

『あはっ♪ ごめんね〜、さっきから怯えてたからつい脅かしたくなっただけ』

「ふう……全く」

永琳は通信機に向けて注意をしてから再び鈴仙に渡す。この時永琳は彼女の頭の切替の速さに感心していた。

「脅かさないで下さいよね！」

『はいはい、以後気をつけまーす』

「何か子供に言われたような感じでムカつく……」

険悪な状態だったが、お互い自己紹介をした。この時、鈴仙の本名と玉兎であることを知って凄く驚いたそうだ。まあ兎だからね！

しばらく時間が経った。時刻は既に新たな一日を刻み始めていた。午前4時。俺は気絶させられてからようやく気がついた。

「んっ……一体何が？」

辺りを見渡すが明かりは消えて暗い。光源が無い。いや、赤いランプのついた物体が目についた。

気絶から間もないせいか、頭がまだついていけないのか、赤いランプの付いた物体を手に取り、足元を照らす。僅かな光源の中、布団のような物を目にする。

この時の俺はまだ寝たいと思っていたのか、その布団に入っていた。入ったとはいえほんの端だけ。

だが、布団から伝わる温もりが俺を夢の世界へ誘うのには十分過ぎた。

身体に何かが当たる感覚がしているが、眠気が大部分を占めていた俺は気にせず再び眠りについた。

翌朝、部屋を見に来た鈴仙は永琳を呼んだ。部屋を見た永琳は、

「な……何と言えいいかしら？」

と呟く。重傷患者の布団は変わらないが、その端で静かに寝ている稟。

「師匠、引きはがした方がいいですかね？ 微笑ましいですが重傷患者に迷惑ですし」

「いや、放っておけばいいんじゃない？ でも代わりに」

と、何故か部屋を離れる。鈴仙はその行動が分からず立ち尽くす。

しばらくそのまま待っていると、この部屋に来たのは紛れも無くヤツだった。

「どうも！ おはようございます、鈴仙さん！ 清く正しい射命丸です」

姿勢を正してビシッと挨拶する射命丸文。そして間髪入れずにカメラを取り出して写真を撮り始める。

「いやゝ、これ、まさにこれですよ！ 遂に念願の現場写真をゲット！ 初日の失敗から反省して時期を待った甲斐がありました！」

もちろん被写体は同じ布団に眠る二人。

「あ……、あの」

「ササッ、私の事は気にせず普段通りにしてくださいね」

呼び掛けようにも写真を撮る事に集中して耳に入らない。

「師匠…、何故こんな面倒な人を……」

そう呟いてから、軽くため息をつく。

数分後、では私は失礼します、と言い残して文は去っていった。今のうかれっぷりから大量に新聞を出版する気だ。

しかし、何時までもこうしている訳には行かないので、稟を起す事にする。

「起きて下さい」

「むう…後3時間…」

「小学生ですか!!」

鈴仙は無理矢理起こすことにした。

「まさかグーで殴られるとは……」

数秒後に鈴仙の鉄拳が俺の頭を貫いた。それで目が覚めた。

「何度も呼んだり揺すったりしたんですけど……」

さすがにグーはないだろうという顔で鈴仙を見る。鈴仙もやり過ぎたようで、少し俯いていた。

「ま、まあ、それより昨日から何も食べてませんよね？ とりあえず向こうに朝食がありますので、それ食べてから神社に戻って下さい」

「ん？ ちょっと待て。どうして俺が神社に住んでるって知ってる？」

「妖夢から聞きました」

妖夢からなら仕方ない。とりあえず腹を満たすのが先だと思い、部屋をあとにした。

ここは魔法の森入口から離れた場所。人里からも離れ、何もない草原と湿地帯の場所。時刻にして楓が永遠亭で治療を受けてる最中の昼。ここに幻想郷に似つかわしくない服装の金髪青年と鉄の塊があった。

「ようやく見つけましたよ、私の愛車を。しかし……奇妙だ。一台は確かに私の愛車だ。だが、何故ガレージに置いてあったもう一台がある？」

見つけたのはいいが、二台ある。しかもメンテナンス用の工具まで置かれていた。

「……まあ、いいでしょう。それより動くかどうか」

彼は愛車にある上のハッチを開けて乗り、計器をチェックする。ガソリンのメーターだけEに近付いてる以外に異常は無い。エンジンを稼働させると簡単に稼動した。

「うむ？」

が、ほんの数メートル進んで戻ると動かなくなった。

「どうやら燃料切れだけで重大な損傷は無い。これなら中で過ごせるだけ是可以る」

確認が終わると彼はハッチを開けて外に出る。

「私の愛車『ナグマホン』は燃料切れだけ。問題はこんな時代遅れな場所で燃料が手に入るか、だ」

彼はひとりでに頷き、もう一台に向き直る。

「これは確認せずとも分かる。稼働できるな。さて、何処に隠すかだ。『PZH2000』は森の何処かに隠してカモフラージュすればいいが、燃料の無いコイツは……ここに置いといて見張りましよう」

青年はPZH2000と呼んだ車輛に乗り込むとそれを動かし、森に引き返す。彼も自分が特殊であるのを自覚しているようで、魔法の森の瘴気に気付いているが、影響は無い。

「あとは……一度集落に行ってみましょう。紅白の服の少女しか私を知らないなら大丈夫でしょう」

森に移動させた車輛から出て、人里に向けて歩もうとすると、ふと足を止めた。

「そういえばあのPMCの小娘、一体どうなったんだろうか？」

彼は霊夢（彼は霊夢の名前を知らない）から逃げたあと、魔法の森に建つ家で見た学ラン姿の女性が追ってきたのを直感した。

「あの小娘、勘だけはいいいようで、私ですら用心しないと命を落しかねませんからね」

彼は魔法の森の出来事を思い出すように視線を宙に浮かしながら

独り言を呟く。

やがて独り言に混じって笑い声が漏れ出てきた。

「状況が状況なんで追って来てるとは思いたくなかったが…、フツ、フツ」

そして抑え切れずに笑い出した。

「アツハハハハ、アツハツハツハ！　ほんっとうに可笑しかった！　私の仕掛けた地雷にまんまと引っ掛かったんですから！　あの時の見るも不様な姿、見ていて本当にスカッとしましたよ！　連動したナイフが左の額を掠っただけなのは不本意ですが、右足は完全に破壊された！　これであの小娘に恐れる必要も無くなった訳だ！　こんな嬉しさに笑わずにいられましょうか、アツハハハハ！」

内容を聞いた者なら悍ましさに加え怒りが彷彿しそうになる。

「フツ、しかし、あれでまだ動けたのは想定外でしたがあれでは当分動けまい。もし生きていたなら、私の準備が整い次第ゆっくり始末しましょう」

そう言い切ると青年は人里に向けて再び歩み始めた。

青年は人里に着いた。外れにナグマホンを置いてあるが、やはり距離があった。片道8分ぐらいだった。

「やはり昔の田舎時代に移したかのような光景……。燃料を望むのは無に等しいか」

彼の予想通り集落は片田舎のような家が建ち並ぶ。だが、人もそれなりにいて活気はあるようだ。

勿論彼自身の服装が合わないのを承知で足を踏み入れる。やはり服装が違う彼が通りを歩けば行き交う人々の注目の的となった。できるだけ気にしないようにして人里を散策する。

「以外と人口があるし、活気はある。まあ、こういう集落では普通か」

それが彼の印象だった。少なくとも安全なのは分かった。

(…………やはり視線が気になる)

何処に行っても注目されてしまう。彼は通りを外れて人の少ない脇道を通りながら散策し始めた。だが、これは間違いだった。

しばらく歩いていると酒を飲んで路上に座る一人の酔っ払いが話し掛けてきた。

「へっへっへっ、おい、そこの兄ちゃんよお」

(ちっ、酔っ払いに絡まれるとは……)

「人里のもんじゃねえなあ。兄ちゃんよお、金持っていないかい？」

「金？」

「そうだ、金だ。酒を買う金がなくなっちまったからよお、少し恵んでくれや」

凶々しい酔っ払いに苛立つ青年は無視して通り過ぎようとする、酔っ払いは立ち上がり、肩を掴む。

「離せ」

「兄ちゃん勘違いしてねえかい？ 俺は恵んでくれつつってんだ。騙し盗もうなんて考えてねえ」

「離せと言ってる」

青年は肩を掴む手を強引に引き離すと、足を引っ掛けて転ばせた。相当飲んでいたのか酔っ払いは受け身も取れず地面に全身を打つ。

「いってえ！ て、てめえ、何しやる！」

「いえ、私はただ離せと言っただけですが？」

「嘘つけえ！ 俺を転ばしやがって、許せねえ！」

酔っ払いはポケットからナイフを取り出した。

「酔っ払いが私に刃向かおうと？」

「うるせえ！ てめえが金を恵まねえからだ！ 覚悟しやがれ！」

酔っ払いはがらむしやにナイフを振るが掠ること無く、青年はま

た足を引っ掛けて転ばす。今度は鼻から地面にぶつかる。

「げへえ!？」

酔っ払いは鼻血を出しながらも身体を起こそうとする。

「ふっ、酔っ払いの分際が……」

青年は振り返ってその場を立ち去ろうとすると、何か飛んできた。咄嗟に腕で弾くと、酔っ払いの持っていたナイフだった。

「悪あがきか。うざったい」

酔っ払いはなおも立ち上がろうとしているが上手く立てない。そのうちに青年は去ろうと歩き始めた時だった。

チラッとナイフを弾いた腕を見ると、コートの一部が切れていた。痛みは無いが、青年の中で『何か』が切れた。

青年は酔っ払いに振り返ると近づいて、

「てめえええ、何してくれてんだあああ!!!」

酔っ払いの顔面におもいつき殴った。

「ぐはあ!？」

ふらついていた酔っ払いは大きくのけ反って尻餅をつく。青年は

間髪入れずに酔っ払いに蹴りを喰らわした。

「ぐふう!？」

「てめえ、このコートはなあ、世界に一つしかない特注品で俺のお気に入りなんだよお！」

突然の烈しい剣幕に酔っ払いも後ずさる。

「し、知るかよそんなもん！ そんな大事なもんならショーケースにでも飾って眺めてくれb：ガハッ!？」

「黙れや！ てめえがナイフ投げたせいで袖が切れたじゃねえか！
！ どうしてくれるんだあ！」

青年は酔っ払いを罵倒しながらさらに殴る蹴るを繰り返す。

「てめえらみてえな屑どもに関わって一度もいい事なんてねえんだ！
聞いてんのか、オイッ！」

「ひ、ヒイイ」

ボロボロの酔っ払いは身体を引きずるようにして離れようとするが、掴まれてしまう。

「おい、まだこっちの件は済んでねえ。逃げようとしてんじゃねええよおおお!!!」

「だ、誰……か、たす……け……」

酔っ払いの声は虚しく空を漂い、青年はただ殴ったり蹴り続けた。

「私とした事がまたやってしまった……まあいい。あいつとはもう絡まないだろう」

青年はナグマホンの置いてある場所に戻った。人通りが無かったのが幸いし、あれから騒ぎが大きくなる前に人里を出た。

「だいたい見終わったあとで良かった。私も自分の感情を保たねば。あの紅白の服の少女は私を『異変の元凶』としているのを言ってた。あまり目立つ行動をすると彼女が来そうだ。慎重に目的を遂行しよう」

日は既に傾き、夜が始まろうとしていた。彼はナグマホンの中で一晩過ごす事にする。

まだこの世界が分からないから、明日も何処かに行くだろう。

反政府反乱軍『R R F』副司令官兼戦略家にしてその二つの『キレる』性格から政府、否、政府軍に最も危険視されたテロリスト。それが彼だ。

第15話 意識繋ぐ通信機と人里へ降り立つ青年（後書き）

おまけだそうだ

楓「……………」

稟「どうした？ タイトルコールは言わないのか？」

楓「稟君一人でお願い」

稟「なんで！？ 今まで脅迫に近いやり方で言わされていたというのに！ だが言わねば始まらないか。常盤楓と桜之宮稟の第5回、幻想郷ラジオ！」

楓「……………」

稟「タイトルコールは言った。その沈黙が何を意味するのか今夜じっくり教えて貰おうか」

楓「稟君は前回私が言ったこと覚えてる？」

稟「？、いきなり何を言うんだい？ ラジオは始まってるんだ。さあ、早くハガキを読みたまえ」

楓「本編とおまけの私は成り立たない。つまり、本編にいないキャラクターがいても普通なこと」

稟「前々回と前回ゲストの早苗さんみたいなの、か。それが何だと言うのかね？ さあ、早くハガキを読みたまえ」

？「ウフフツ、あなたも鈍いわね」

稟「！！？」

楓「……………」

稟「もしかして…………今回のゲストって…………」

？「そう、私がゲストよ」

稟「待て、待てよ、落ち着け俺。まさかと思うが、ゲストは…………本編においてのキーパーソンではないのか！？」

？「ウフフツ、ご名答よ。2036年から来ただけあるわ」

稟「な、なんてことだ。俺は、今！ 信じられないものを見ている

！ 常盤さんの背後にある横に裂けた空間！ 無数の目！ 端がリボンで結ばれている！ 推測しなくても分かる！ あそこにいるのは紛れも無くあの妖怪の賢者にしてババ

？？ 「失礼しちゃうわねえ。こんな美少女に向かって」

楓「……と、という訳でゲストは八雲紫さんです」

紫「このラジオって面白いよねえ。でもあなた達のパーソナリティっぷりもこのラジオを魅力にする一つなのよねえ」

楓「きよ、恐縮です」

紫「フフツ、そんな固くなくていいわ。さあ、ハガキを読みましよう」

楓「で、では最初のハガキです！」

面倒だったけどまた出すわ。えーっと、そう、常盤楓とかいう外来人！ あなたは稟と違う世界から来たのよね。あんたが帰る際に場所間違えたら困るだろうからここで聞いわ。そして神社に来たらまずはお賽銭を入れるのよ！

楽園の素敵な巫女

賽銭募集中

楓「二回目来ましたか」

紫「ふう〜ん、あの霊夢がねえ、あなた達には何かあるのかしら？
霊夢がまともに仕事しようとするなんて」

楓「うーん、稟君とは仲いいって聞いているけど。前は稟君の世界を答えてたし、答えましょう」

紫「異次元の中間の世界でしょ？」

楓「はい、根本的な成り立ちは地球と同じですけど……、ってなんで分かったんですか!？」

紫「どうしてでしょうねえ」

楓「……まあいいです。私達の世界は大陸が一つで国が四つしかなく、東西南北で分けられています。」

紫「で、貴女が住む場所は西の国」

楓「当たってます……。そ、それで、技術や科学は西が最先端で、北が最も遅い国です」

紫「でも領土は北が最大」

楓「あの、紫さん、先輩に会ったんですか？」

紫「ええ。話が分かる人で楽しかったわ」

楓「そう……ですか。このくらいが妥当ですかね。全部言ったら三ページかかりそうだし」

紫「あら、もしかしてもう終わり？」

楓「前フリが長かったせいですから」

紫「残念ねえ。また次回に来ようかしら」

楓「あの、その言いくいのですが……次回は別の方に来てもらうの決まってるんですけど」

紫「じゃあ乱入しましょうか？」

楓「力の限り全力でお断りさせて頂きます」

紫「つれないわねえ」

楓「では、そろそろ時間なので締めますね。前から言ってますけど、読者からの投稿もありですよ。ついでにラジオのゲストも東方キャラで募集しますので、気が向いた方はぜひ感想にでも書いて頂けると嬉しい限りです。では、また次回、お会いしましょう。ご視聴

ありがとうございます！」

ちなみに稟はイスラエルに飛ばされたとか。スキマで無事戻れたようだ。

第16話 文々。新聞速報記事、霊夢の決断（前書き）

勢い余ってやってしまった。もう戻れないぜ。この回を読む方、グッドラック！

第16話 文々。新聞速報記事、靈夢の決断

稟が永遠亭で朝食を食べ始めた時から約15分前。

博麗神社には誰もいない。部屋の卓袱台にあるのは空の缶詰だけ。秋に変わりはじめたかのように新緑の木々は次第に色を赤や黄色に紅葉し始める。まだほんの一部であるが、涼しい風に過ぎしやすい気温。もうじき秋の足音が近付いてくる。

「ずいぶん涼しいわね。もう秋かしら？」

靈夢は紅茶片手に幻想郷を眺めながら呟く。

「そうねえ。ここに来てずいぶん経つけど、改めて見ると幻想郷は素敵ね」

靈夢と同じように紅茶片手に呟くのはレミリア・スカーレット。

靈夢は今、紅魔館のバルコニーで朝食を食べた。というのも缶詰ばかりでは足りないと思い、紅魔館に突撃訪問。そして今に至る。

「それにしても、靈夢」

レミリアは紅茶を置き、靈夢に振り向く。靈夢も紅茶を置いて頭だけ動かす。

「何よ」

「最近、外来人が多くないかしら？」

「あー、そうね。私も三人は見たし」

ここでレミリアは首を傾げる。

「三人？ 一人じゃないの？」

「そうねー、一人はあんたも知ってる桜之宮稟よ。もう一人は白玉楼にいて、妖夢みたいな奴で名前は常盤…楓だったかしら」

「……際どい場所に住んでるわね」

やはり冥界に住んでいると聞くと驚くのはレミリアも例外ではなかった。

「私もそう思ったわ。んで、あと一人はよく分からないけど、危険な奴だった」

「危険な奴？」

「そうね……昨日の朝に魔法の森の木が凍ったのを知ってる？」

「いえ、天狗の話じゃ入口付近でしょ？ ここからでは見えないわ。チルノの仕業と言ってたし」

「仕事が速いわね、天狗は。でもそれは裏で糸を引いてた奴がいて、そいつが三人目の外来人だったわ。私の勘がそういってるわ」

「そう。なら気をつけようかしら」

そう言うとレミリアはティーポットを手に取り、自分のカップに注ぐ。霊夢はテーブルに出されたクッキーを摘み、食べる。

「……霊夢、あなた何枚目かしら？」

「ん？ 何が？」

「クッキーよ。もう25枚食べてるわ」

「細かいわね。また咲夜に作らせればいいじゃない。今日は朝飯当番がないんだから」

実は稟が神社に泊まる条件に交代で朝食を作ることを決めていた。とは言っても缶詰の食材にアレンジするぐらいの簡単な準備で済む。

「そんなの決めてたんだ」

「まあ、前みたいに勝手に帰って来ない時があったから、そうすれば無理にでも帰ってくるかなって。稟って結構真面目だから」

「でも今日はいなかったのよね？」

「そうよ。だからここに来たのよ」

「寂しさを紛らわすために？」

そう言った途端、霊夢の頬が赤くなる。

「べ、べべ別に寂しいとか心配してるじゃなくて、朝食がないから来ただけよ!」

「ふん……」

レミリアは霊夢の様子を確認するとニヤリと笑う。

「な、何よ。何か言いたいことがあるわけ?」

「別に。ただ霊夢の反応が面白くて笑っただけよ」

「レミリア、あんたは今! 果てしなく大きな勘違いをしている!」

「つまり、霊夢さんにとってあの桜之宮稟さんとは関係が良好という訳ですか。ふむふむ、これは実に興味深い」

「だからそんな関係じゃn……」

言いかけて霊夢は止まる。今、レミリアがいる方向とは違う方向から声が聞こえた。霊夢はクルツと身体をレミリアに向けてから、

「レミリア、ちょーっただけバルコニー壊れても怒らないでね」

「ちょ、ちよっとと霊夢!？」

霊夢は笑顔で言っているが、目が笑ってない。むしろ恐怖を覚える程だ。かつて異変の元凶を退治するかのような鋭い眼光が。

「『霊符 夢想封:i……』」

「あやや、ストップ！ ストップ！ 霊夢さんストップ！！
気持ちを抑えてえー！」

「抑えられつかあ！ 『霊符 夢想封印』 ツ！！」

ドドドドドッ！！

バルコニーの一部が音を立てて崩れ落ちた。

「で、何しに来た訳？ 人の話盗み聞きして、こりないわね、この
ブン屋は」

「あ、あの…、首を絞められると…言いたい事言う前に…：白玉楼
へ…：飛んでいきそう…ですう」

文の首を絞め上げながら質問する霊夢。

文はちょうど出来上がった新聞を配る為に紅魔館に立ち寄ったところ、霊夢とレミリアが何か話をしていたから何かネタになるかものと思いバルコニーの下から聞いていた。

空中なのに、できるだけ羽音を立てずに盗み聞きできたのはもはやプロの新聞記者の精神である。

霊夢が首を離すと文はへたりこみながら呼吸を整える。

「きよ、今日の新聞です……」

力の籠らない手で文はレミリアに文々。新聞を手渡す。

「あら、どうも」

「そういえばあんた、それ定期購読してたわね。そんな面白くもない新聞読んでどうするのよ。資源の無駄だわ」

「そ、そんな事言わずに見てくださいよ。今日は朝早く手に入れたネタもあるんですから」

「どうせロクなネタじゃないでしょ」

と、レミリアの横から興味なさ気に新聞を見る。

「……えっ……」

思わず声がこぼれ落ちた。

スクープ！あの外来人の今！現場写真入手！

某日早朝にて、永遠亭で現在博麗神社に居候中の桜之宮稟（外人）氏が同じく白玉楼に厄介になっている常盤楓（外人）氏と寄り添いながら寝ているという何ともほほ笑ましい現場写真を手。発見者の一人、永遠亭在住の八意永琳氏によると「彼らの関係は日数にしてはあまりにも短すぎるのにあれほど親しい仲なのは意外でした」と驚きを隠せない様子で語った。

同じく現場を見た永遠亭在住の鈴仙・優曇華院・イナバ氏は「別にこれといった感想は無いんですけど……ちよっただけ羨ましいかも。でも患者側にとってはいい迷惑です」と語った。

理由は不明ではあるが、八意永琳氏の話では常盤楓氏は重傷患者

で治療が終わったばかりであつたようだが、それ以上は分からないとのこと。

今後この二人の動きに注目が期待されます。

「まあ、そんな訳で稟さんに親しい霊夢さんは何か知ってるかどうか取材を兼ねて来たんですけど……って霊夢さん？」

「…あっ……あっ……」

霊夢は新聞を見たまま見てはいけないものを見たかのように声をわなわな震わせていた。

「あのー、霊夢さん？ 聞いています？」

文が霊夢の肩に触れた時、霊夢はいきなり身体を文に向け、逆に文の肩をがっちり掴んだ。

「れ、霊夢さん！？ 一体何を！？」

「……だ……」

「へっ！？」

「場所はどこだ……」

「い、いや、だから新聞に書いてある通り、永遠亭ですが？」

霊夢の顔はもはや普段の顔で無かった。例えるなら……嫉妬に狂

う女の顔……とでも言うのか。兎にも角にも霊夢の殺気はレミリアさえ怖じけづく程の凄さだった。

「れ、霊夢…、一体どうしたの？」

「レミリア…、あとでまた来るから少し待っていてくれないかしら。ついでに妹も呼んでさ」

「ど、どうして？」

「決まってるじゃない。あんたの妹に新しいおもちゃを持ってきたあげるからよ」

レミリアはすっかりへたりこみ、動けなくなる。霊夢は文の肩を離すと竹林の方向を向く。

「あのあまゝ、私の朝飯当番を横取りしよゝなんて、度胸あるわね。覚悟できてるんでしょゝねゝ……？」

呟いてから、霊夢は最高速度で竹林に飛んでいった。霊夢が去ってから嵐が止んだような静寂が紅魔館のバルコニーを包む。

その沈黙を破ったのは、先程の騒ぎを聞き付けてやって来た咲夜だった。

「お、お嬢様！？　へたりこんでどうなさりましたか！？」

「え、あ、さ、咲…夜？」

「お嬢…様？」

「さ、咲夜あー！ 霊夢が凄く怖かったよおー！」

咲夜を見つけるとカリスマブレイクを果たした泣き顔のレミリアが咲夜に抱き着く。

一方の文は腰が引けてしまい、椅子を使って立ち上がった。

「はあ、はあ、ま、まさに嫉妬が生んだ怪物を見たような感じで生きた心地がしなかった……」

それでも文は霊夢に気付かれずにその顔を撮ってたのはもはやプロの新聞記者の（ry

「まあ、次回からは控えめにしましょう。場合によっては私に飛び火しそうだし」

そう呟くと新聞を人里に届ける為に飛び立つ。ついでにレミリアと鼻から少量の忠誠心を出しながら宥める咲夜を一瞬で撮ったのはもはやプロの（ry

「そういえば霊夢さん、三人目の外来人がどうのこうの言ってたから、もうひとつの記事を見て貰いたかったんだけどなあ」

途中、自分の作った新聞に目を通して呟く文。文が読んで欲しかった記事は短いが、こう載っていた。

人里で暴力事件！？男性全治三ヶ月の重傷！

某日昼頃、人里にある外れの通りで血まみれの男性を近所の主婦が発見、すぐに人里にいる医者と呼んだ。医者診断によれば複数ヶ所が複雑骨折、全治三ヶ月と診断した。

男性は「見た目からして衣服が人里の者ではなく、金髪の青年だから外来人なのは分かった。だけどいきなり俺を殴ったり蹴ったりしやがってあの時のあいつは人間じゃ無かった」と恐る恐る語ったという。男性の話から犯人は外来人で近くに住むと思われるが、場合によっては人妖の可能性があり、人里では注意を呼び掛けている。

「もしかしたら三人目の外来人の可能性がありますし、まあ、私ができるだけ解明してみましよう」

そう意気込むと、人里は目と鼻の先にあった。

トラブルとは人の都合なんか待ってくれない。これは俺が現実世界にいた時に考えていたことだ。まさか幻想郷でもこの考えが適用されるとは思いも寄らない。

俺は鈴仙に起こされた後、朝食を食べた。少し遅かったのかほかの皆は既に食べ終えていた。

結局この永遠亭の主人、蓬莱山輝夜には会えなかったが、まずは紅魔館の依頼を片付けるのが先だ。それに、常盤さんを口実にまた永遠亭には行けるだろうし、と考えていた時だった。

ドッゴォーーン!!!!!!

突如外で大きな爆発音が聞こえた。

「な、何だ!?!」

俺は咄嗟に身を屈めたが、数秒経っても何も無かったかのように時間が過ぎる。と、部屋に永琳が入ってきた。

「い、今のは!?!」

「お、俺にも分かりません!」

「そ、そう。今鈴仙が外の様子を見に行ったから」

とりあえず無事なのを確認して永琳はホッとため息をつく。が、

「師匠オォー!! 逃げてくだs…ぐほおー!?!」

鈴仙の悲痛な叫びが廊下からこだまする。

数秒後、廊下を歩く音が聞こえる。一步一步着実にこちらに向かっている。

「い、いいわね? 私が廊下に出たらあなたは反対から部屋を出なさい」

永琳は弓を取り出してゆっくり戸に近付く。だが俺は永琳と同じ方向に向かう。

「ちょっと君！」

「いえ、永琳さん、俺なら大丈夫です。能力を使えば相手を少しの間縛れます」

「……それは本当？」

「はい。必ずやり遂げます」

ひそひそ声の会話だが、俺は覚悟した。もしかしたら例の外来人かも知れない。だとしたらこのまま逃げる訳にいかない。俺は決心した。ツルハシスキルの能力の地震なら動きを止めれる。範囲は限定して被害をあまり出さないようにする。

俺の意志が通じたのか、永琳はそつと手招きする。

足音はもう近い。射程範囲は俺の視界内。予想では廊下の角から現れる。姿を見せた瞬間にお見舞いする。

ゆっくり近付く足音に俺にも永琳にも緊張が走る。俺は心臓まで暴れている。こんなことは始めてだが、やらなければやられる。そう心に言い聞かせて廊下を観察する。

そして、ほんの僅か、チラッと見えた瞬間に俺は廊下に飛び出し、スキルを発動させた。

震符「フィールドクエイク」

その一点だけに揺れ動くようにした。これで相手は縛られた。間

髪入れずに弓を引きながら永琳が近づき、俺はこう言った。

「この俺の神聖にして優雅な朝食を邪魔するとは何たる愚行!!
貴様、その罪、身を持って味わうがi…」

と近付いて相手を見た時、思考は完全にシャットアウト。そして
無意識に別のツルハシスキルが作動。

情報「スキルミル」

頭の中に流れてきた情報の警戒レベルは……MAX。今すぐ逃げるべし。

「あら、稟じゃなくいい。こんな場所で会うなんて奇遇ね」

「や、やあ、霊夢……さん」

目の前には霊夢。しかも尋常でない霊夢。周囲の殺気。その表情。
頭に流れる情報。永琳も弓が引けない。

直感的に殺されると思った。が、その前に何故こうなったのか理由が聞きたい。

「りゅん、今日は神社の朝飯当番じゃなかったかしら？」

思い出した。全て思い出した。紅魔館みたいに無断一泊で酷い目に遭った。それから神社に戻った後に霊夢が提案したっけ。この日は何があっても必ず戻ると。つまり、たった今この約束を破った。
言い逃れはできない。

「オワタ」

「稟？ 別にそれに関しては怒ってないのよ」

何！？ じゃなんでそこまで怒った表情を！？ 待て、これは怒りなんてレベルじゃない。

「ふっふふのふっ♪」

人をここまで恐ろしいと感じれるのか。あの霊夢の笑顔はもはや凶器だ。狂気と凶器を合わせた笑顔だ。

ところが、俺は全くの予想外の出来事で霊夢の怒りの理由を知った。

『もしもーし、稟君？ 何かあったの？』

ズボンの後ろポケットに突っ込んでいた通信機から常盤さんの声が聞こえた。と同時に霊夢の殺気が増幅した。もう地震は収まり、縛れない。

「あら、楓ちゃん、そこにいるのかしら」

『えっ！？ この声って霊夢さん！？ 声が凄く怖いんだけど、どうかしたの？』

「そうかしら？ そういえば私、楓ちゃんに用があるんだけど」

と、霊夢は再び一步一步近づき、それに呼応して俺も一歩、また一歩後ずさる。

「稟？　なんであんたが後ずさるの？」

「あ、あのな、霊夢、常盤さんは今な」

「庇う気なの？」

「そうじゃない！」

「ならいいじゃない」

一步一步近付く霊夢から遠ざかる俺。だって霊夢が凄く怖いんだ。もし常盤さんのいる部屋に行かれたら何するか分からない。俺は後ずさりしながら対処法を考えた。

『あの、私が何か？』

「そうね、この際はつきり言うわ。私の朝飯当番を奪おうなんていい度胸してるわね」

「『!?!?』」

「稟、どきなさい。私は安心した朝食を過ごすために邪魔物を排除しに来たのよ。幸福な朝食を食べる為にね」

もう完全にヤンデレ発言じゃねえか！？　しかもスペルカードまですしやがった！

『霊夢さん、勘違いしてない？ 別に私は稟君に頼んだ訳じゃあn』

「五月蠅いわね。食べ物の恨みは恐ろしいのよ？ そして習慣された楽しみを奪われた恨みはより根強く深いのよ」

もう何を言っても無駄だ。耳に聞こえてない。

「さあ、どきなさい。さもないと稟も吹き飛ばすわよ」

もう限界か。打開策も無い。だが覚悟はしている。

「もうやれ。いっそ俺ごとやれ」

素直にそう言って目を綴じた。

「……………」

目を綴じて待ったが何も起きない。少しずつ目を開けると、霊夢はスペルカードを高く掲げたまま静止していた。

霊夢からこぼれ落ちるように声が聞こえた。

「……で…できるわけ……無い…じゃない…。り…、稟と……一緒に…なんて…私の……食料係を…」

表情は柔らかくなった。だが腕は降ろさない。いつでも攻撃できる体勢を維持している。

「ど……どき……なさいよ」

これではっきり分かった。嫉妬だ。霊夢は嫉妬している。つまり、ある事実を肯定しなければならぬことになる。

「つまり、つまりだよ？ 霊夢は……その……俺が……好き……なのか？」

「そ……そんなわけない……。私は……食料係として……あんたを泊めてるだけで……！」

即座に否定するが、霊夢の頬がほんのり赤い気がする。しかも身体が震えている。

『あーもー、はっきりしないわね！ 霊夢は稟君のことが好きなの？ 嫌いなのか？』

「ちょ、常盤さん！ 今それを霊夢に言ったら油に火を注ぐ発言に……！」

「……よ」

「えっ？ な、なんて？」

霊夢が何か話していたが、小声で聞こえず、聞き返した。

そして霊夢ははっきり言った。

「ええ！　好きよ！　食料係なんかじゃなくて純粹によ！　だって稟は見かけは頼りないけど……芯の強い意志とか揺るぎない覚悟とか決心の強さを持ってて、私はそれに惹かれたのよ！　だから稟！　私はあなたがす、好きなの！」

靈夢の告白から時間が過ぎて行く。動き出した時を止めることは不可能だ。一瞬、あるいは一時間、もしくは半日ならできるかもしれない。でも、この場では、本当に時が永遠に止まったかのように思えた。

『…………グレート。やっと言えたじゃない』

靈夢が言い終わった後でようやく常盤さんが一言。

『勇氣を持って告白。それでこそ女の子よ、靈夢』

「……………」

靈夢はスペルカードを持った腕を降ろした。俺にはよく分からないが、解決したのだろうか？

『靈夢、正直に気持ちを言えたんだから、もういいでしょう？』

「……元はと言えばあんたたちが悪いんだから」

ばつが悪そうに言う霊夢。俺達に何か問題でも？

『天狗の新聞を見て来たってわけ？ 本当に好きだったから許せなかった、って事ね』

「えっ？ 常盤さん、それって？」

何も知らない俺はおもむろに通信機を取り出した。

「それ、通信機！？ か、楓はそこにいなかったの！？」

『そう。私は今は意識だけの存在。通信機を通してでないと話せないの』

霊夢はやはり何も聞いてないようで、驚く。

「って待って。意識だけ？」

『身体は全治一ヶ月の重傷。ぴくりとも動かないわ。そして、稟君は私を必死に看護してくれた。だからそのまま寝たんだと思う』

「あの写真……そうだったの……」

「そ、そう！ 俺も実は妖夢から聞いて、ついで見舞いに来た時に、看護を手伝って、その内に眠くなって」

正直俺は何も理解してないが、とりあえず常盤さんの言うことに従うことにした。

『だから稟君は悪くない。でももし許せないのなら、左の部屋を通って真っ直ぐ来なさい。私の身体があるわ』

「ちょ、常盤さん！ それ自殺行為じゃ!？」

「……」

霊夢は無言のまま言われた通り左の部屋を通り抜ける。

「霊夢、待て！」

直ぐさま追い掛ける。永琳達は武装解除しているがもはや止められないのを悟ったようだ。俺が部屋に着いた時には霊夢は既に常盤さんの身体の傍で正座した。

「霊夢、はやまるな！」

咄嗟に叫んだが、霊夢は上半身を動かし、頭を身体に近づけ、

「霊夢ッ！」

常盤さんの頬にキスをした。

全く理解不能、私の脳内の知識ではもはや推測不可能。これより気絶します。

と、霊夢は立ち上がって俺の持っていた通信機を奪う。

「あっ!?! 霊夢!?!」

霊夢は俺を無視して通信機に話しかける。

「いい? 私をここまでさせたんだから責任とってくれるわよね?」

『勿論、全力でサポートするわ。報酬の前払いは頬のキスで完了よ。これで和解』

赤面しながら霊夢は常盤さんと和解した。行動が俺には良く分からないが、一件落着ということにしておこう。あとで射命丸を縛り上げるか。

しかし、まだ終わらなかった。霊夢はこちらを振り向き、スペルカードを構えた。

「お、おい、霊夢? 解決しただろ? なんでスペルカードを構える?」

「思い出した。約束破ったら罰を与えるって」

俺の背筋に冷や汗がツウと降りた。

「あー、それはその……すいませんでした!」

と言って全力疾走。永遠亭を脱出。せっかくいい雰囲気が終わったんだ。このまま終わって欲しい！

だがこの願いが叶うことは無かった。

「『恋符　マスタースパーク』　ッ！！」

「ってなんで霊夢がマスパを！？　むっ、あれは確か俺に魔理沙が貸してくれたスペルカード！　いつの間に！？　って言ってる場合じゃ」

バキバキバキッ！

「うおーっ！　竹林が蜘蛛の子を蹴散らすが如く破壊されてる！　だが俺は諦めn：うお！？　これ、落とし穴か。見事にハマったーっ！　チキショー！　もう逃げられない！　あっ、もしかして今回恋愛話だから締めと恋符と掛けたか？　そんな理由で結局締めはぐだぐだーっ！　だが新しいフラグは立った！　そう、俺達の戦いはこれからダァーッ！」

ズドンッ！

それから数十分後、俺は自分の治療で永遠亭にカムバック。

第16話 文々。新聞速報記事、靈夢の決断（後書き）

変わらないおまけ

楓「第6回……だっけ？ げ、幻想郷ラジオ！」

稟「遂に省略した揚句に今回一回目か一瞬忘れたでしょ！」

楓「そ、そんなことはにやいにゃ」

稟「語尾おかしいし視線を外さない」

楓「私が視線を外すのは周りに何かいるだけですよ」

稟「現実逃避でもしましたか？」

楓「ではゲストです」

稟「スルーした上にゲスト来てねえ！」

楓「前回と同じですよ」

稟「前回と同じ？ まさか奴か！？ 俺をイスラエル送りした」

楓「あ、思い出した。イスラエルの感想聞かせてね」

稟「俺が振った台詞をことごとくスルーするのはやめてくれ！」

楓「では最初のハガキです」

稟（これもスルーしやがった！）

どうも、どうも、紅魔館図書館司書にして裏の権力者こと小悪魔です。この前の図書館のお礼を兼ねてハガキを出しました。本当はパチュリー様を書いたハガキをちよいと書き直して出したのは秘密ですよ。

では質問！ 『情熱のP、燃える男のン、ーッ』という題名の本があったんですけど何だか分かりますか？ パチュリー様がまた遊びに来ていいと言ってますんでたまに寄ってくださいねー。今パチュリー様は紅魔館中を爆——————を開発中だとか。紅

魔館大丈夫ですかね？ スイッチ一つでみたいにならなければいいんですけどねー。

こあ

稟「ツツコミ所満載だな！ 裏の権力者っておかしいだろ！」

楓「小悪魔だからこあ。なんかかわいいー。こあーこあー」

稟「言わないで下さい。質問の本は俺も知らん。だいたい図書館の本って変なのが混じり過ぎだ。掃除の時にG O Mもあったし」

楓「グリモワール・オブ・マリサ？」

稟「何故知ってるし！？」

楓「付録C Dがいいんですよねー。特に一番」

稟「俺も認めるがその話はもう止める」

楓「つれないねー」

稟「だが、この明らかに何かを消して線を引いた部分が気になる」

楓「うーん、ゲストさんなら分かるかも」

稟「なんでゲストが分かるんだ？」

？？「消えた一部を萃めるのは得意だからさ！」

稟「何！？ 誰だ！」

？？「ここだ、君の後ろだ」

稟「お、俺の背後に霧が集まって現れたのは……小鬼の伊吹萃香か！」

萃香「『小』は余計だ」

稟「いででっ、痛い痛い！ 折れる！ 腕が折れるー！」

萃香「騒がしい奴だな。まあ宴会好きの私という台詞じゃないけどな」

楓「では萃香さん、早速ですけどお願いできますか？」

萃香「おしっ、いいよ。あとでお酒頼むね」

楓「はい、お任せ下さい」

1分後

萃香「終わったよ」

楓「ぎりぎり読めるぐらいですね」

稟「えーっと、爆―させ―きの―雲弾……？」

楓「まっ、実際に行けば分かるからこれでおしまい」

稟「萃香に頼んだ揚句にまさかのスルー！？ 司会者空気読め！」

楓「あっ、これお酒です」

萃香「どうも、『黒霧島』か。確か焼酎だな。こいつはうまそうだ」

稟「もうどうにでもなれ……」

楓「稟君がいじけてしまったところでお知らせです。

読者の方から感想を頂いた際に、言葉の意味が取りにくい場所があったというコメントをいただきました。作者さんも読者の方々にできるだけわかりやすいよう努力してますが、もし今後『良く分からないな』という場面があったら感想で指摘して貰えれば助かりますとのことでした。

この場をお借りしてお詫び申し上げます。読者の方々によりわかりやすく伝えるよう頑張りますのでこの小説をゆっくり楽しんで下さいね」

楓「ではそろそろ時間ですので、また次回お会いしましょう。ご視聴ありがとうございます！」

稟（今回スルーされまくった……）

ちなみに本文書き終わった時、時刻は午前5時を過ぎていた。宿題はいいけどこれで徹夜するとは……。by作者

第17話 迷いの竹林T r i c k C o m p a n y総本山を突破せよ! 前編 (前書

お待たせしました。

出来事は永遠亭に来了時から始まっていた。

第17話 迷いの竹林Trick Company総本山を突破せよ! 前編

霊夢のマスパにより二日ほど永遠亭にお世話になりました。

気持ちがすっきりした霊夢は「二日後にはちゃんと帰って来てね。あとこれも届けてあげる」と少し親しみを込めた口調で依頼の葉を持って永遠亭を去った。

どちらかといえば申し訳ないという気持ちが優先したが、こういうのも悪くない。

まさか常盤さんが仲介役としてくっつけさせるとは本当に侮れない。俺はどちらかといえば鈍い方だからこういう重大な事に気付かせた常盤さんと霊夢に感謝する。

ちなみに常盤さんが言うに「恋の仲介で大事なのは自分を犠牲にしても相手の勇気を引き出すこと」だそうだが、多分俺には一生理解できない気がする。朴念仁に近い俺じゃまず無理だ。

そして、二日後、完治した俺は常盤さんと話していた。

「白玉楼に？」

『うん、私の荷物の中にアイツの情報が書いてある。それを見れば分かるわ』

三日前の夜におもいきり常盤さんに敵をとると宣言してしまったので、俺も例の外来人について調査することにした。

「今の時刻は午前8時。白玉楼には常盤さんの状態を報告しないといけないし、時間はあるからちゃんと神社には帰れるか」

『それじゃ、宜しくね。ちゃんと私も連れてってよ』

「はいはい、了解しましたよっと」

しかし、この二日間の間でこれほど周到な仕掛けに歓迎されるなんて思いも寄らなかった。

事の発端は三日前。稟が永遠亭へ行く途中について来てた一人の少女を覚えているだろうか？

稟が落とし穴に落ちた腹いせに落とされたあの少女――スチュアートを。彼女は簡単に言えば兵器から作られたアンドロイドの一種であり、人間同様の感情を持つ。

彼女を救ったのは因幡てゐ。竹林の落とし穴だから当然なのだが。

「もぉーしもぉーし、お嬢ちゃん大丈夫かい？」

「……」

正直てゐもさっき見た光景のままだとは思ってなかった。地中に埋もれ、地面から片腕とチェーンソーが飛び出していたあの状態。

「うーん、長年生きていたけどこんな人間は初めてウサ」

しかし、このまま生き埋めで死なれても困るのでスコップで土を退かしていく。

身長が小柄であるせい、かなり深く掘ったが全身が土から現れた。だが少女は目を閉じたままぴくりとも動かない。用心して上から枝で突いてみるも反応しない。

「もしかして、マジで生き埋めで？」

そこでてゐるは恐る恐る少女の右腕に手を伸ばす。てゐも永遠亭の一員。応急処置の仕方や脈拍の程度は習ってるから分かる。そっと少女の右腕を取って脈拍を調べようとした時。

「えっ!？」

てゐに信じられない事が起きた。突如少女の右手がてゐが伸ばした腕を掴むと凄まじい力で引っ張られた。

てゐは穴の淵に立っていた。前のめりになれば踏ん張れる地面は無い。バランスは崩れ、穴に引きずり落とされた。と、同時に少女は起き上がり、てゐを引っ張った反動で穴から脱出した。

「うわぁー!？」

穴に落ちていくてゐに代わり、スチュアートは地面にはい上がった。

スチュアートはしばらく周りを眺めてそして叫んだ。

「うおおおー！ ビルマよ！ 私は帰って、来たあー！！！」

「お、お嬢ちゃん、ここは幻想郷ですぜ」

穴に落ちたてゐがさりげなくツツコむ。

「で、あんた誰？」

スチュアートは穴に向かってゐに呼び掛ける。

「私は因幡てゐ。因幡の白兔さ」

「私はねー、スチュアート。M3スチュアートの」

「よく分からないけどスチュアートね。よいしょっと」

地面に上がりながら自己紹介するてゐ。スチュアートは何か言いたげそうにてゐを見る。

「どうしたの？」

「ねえねえ、さっきの死んだふり、どうだった？」

「驚いたの一言に尽きるウサ。マジで地獄に連れていかれそうな感覚がしたし」

「でしょでしょ。私ね、凄く練習したんだよ」

自慢げに死んだふりを語るスチュアート。となれば埋もれたままずっと死んだふりをしたことになる。

(むむっ、なんかコイツ私と同じ匂いがするウサ)

とか思っていると、ある事を思い出した。

「そーいや、もう一人の外来人とは何なの？」

「稟の事？ あいつは私のbest friendだぜえ！ あっ、どこ行ったか知ってる？」

スチュアートも一緒に来たことを思い出しててゐに聞く。

「知ってるよ。この道を真っ直ぐ行くといいウサ」

「サンキュー」

スチュアートはてゐの指差した方向に歩みを進める。が、後ろ姿のスチュアートを見てニヤリとするてゐ。

(フッフッフッ、確かに永遠亭には着くが途中に36ヶ所の落とし穴と5ヶ所の吊り上げ装置、3ヶ所の丸太発射装置があるウサ。ひっかかる様子をビデオに撮ってやるウサ♪)

と、いつの間にか用意したビデオカメラを手にして脇道からスチュアートを観察し始めた。

が、またしてもてゐるは驚かされた。スチュアートは真っ直ぐではなく時々右左、更には道の端から端へと不規則に進んで行く。外部からみればそれはふざけてんのかの一言に尽きるのだが、スチュアートは全く落とし穴に落ちないのだ。

（な、何なんだコイツは！？ 落とし穴の位置が分かるのか！？）

しばらく観察するも落とし穴にかからず、永遠亭はまだまだが落とし穴地帯半分を突破した。

（グググッ、これだけ用意した落とし穴に掛からない奴は初めてだウサ！ ……だが、吊り上げ装置は草木に同化してるし、ロープまで保護色だ。ひっかかる場面を撮ってやる！）

スチュアートに平行するように脇道から後をつける。

が、てゐるの期待と裏腹にスチュアートは突如背中 of 砲台を竹林に向けて放った。すると、小さな爆発音に混じってビシッという蔦が何かがちぎれる音が聞こえた。爆発で蔦を切断したのだろう。これをスチュアートは五回、装置の数だけ繰り返した。

罠にひっかかった場面を撮影して後で笑ってやろうとか、文にビデオを売り付けてやろうとか考えていたてゐるは焦り始める。

（何イー！？ 吊り上げ装置も見破られたウサ！？ ま、まずい…：こうなったら強行手段！ 破壊される前に作動させるウサ！ 丸太発射装置担当兎部隊に告げろ！ アイツ目掛けて丸太を発射するウサ！）

小声で伝令役の兎に伝え、兎は一目散に仲間のもとに去る。スチュアートがしばらく進む先の仕掛けが兎により作動する。

「♪」

スチュアートは全く意に介さない様子で歩き続ける。ふと、いきなり足を止めたスチュアート。

その約0・84秒後に前方約67センチ先に右から丸太が通り過ぎた。

（まただウサツ！？ あいつ超能力者か！？）

続く二本目は脳天にブチ当てる気で真上から発射されたが、また紙一重でかわされた。

（あ、あと一本だ！ 正確に狙え！）

心の中で当たるように祈り、その経過を見守った。が、三本目は何をトチ狂ったのか、顔面目掛けて真っ直ぐ飛んできた。

（あゝあ、全滅ウサ……）

意気消沈したてゐるはビデオを止めてその場を去ろうとした。

ドゴツ！

何かがぶつかったような鈍い音が背後で聞こえたので、何となくてゐるは振り返ってみた。

（ーッ！！！？）

てゐるは信じられない物を目撃したかのようにそれに釘付けになっ

た。

三本目の丸太はスチュアートの顔面と真ん中に綺麗すぎるほど簡単に命中し、大きくのけ反る瞬間だった。

（……いや、違う！ あれはのけ反った瞬間ではない！ のけ反ったあの体勢を丸太を顔面に受けながら保ってる！）

さらにスチュアートはその体勢のまま丸太を掴み、

「ぬおりゃああー！！」

前方におもいつきり投げた。

（こ、この迷いの竹林のトラップマスター（自称）の因幡てゐの罠を全て見破り、顔面に丸太を喰らっても顔に一切の傷が無い……！）

初めて感じる悪戯での敗北感。てゐは膝について頭を抱えた。

（う、私の自信が折られた気分ウサ……。コイツに弾幕を仕掛けても勝てる気がしない！）

しかし、これでゐが悪戯から手を引いた訳では無く、独特の逆転思考でこう考えた。

（ま、待てよ。もしあいつを私のところに寄せればより強い仕掛けも作れるのでは！？）

てゐるは早速お願いしてみる事にした。

「ちよいとスチュアートさん、待って下さいな」

「んっ？ あんたさっきの兎？」

「そうだよ。それより何で罨が全部分かったの！？ 成功の秘訣を教えてくださいませんか？」

自分勝手ではあるが、スチュアートはそれほど頭がいい訳ではないので、普通に答える。

「んゝ、半分は勘だけど、どれも訓練で慣れた装置ばかりだったからパターンは覚えてたんだ」

（ああ、そういうや外来人だったウサ）

「でもなゝ、罨が古いんだよなゝ。地雷仕掛けとか丸太じゃなくて大砲を使うとか」

その程度ならても理解できるが、小型のしか扱ってない。たまに竹林に見つけて使うけど、たいてい失敗する。威力が高いし、人工物で竹林では目立つ。

「うゝん、ストックはあるけど……私には扱いにくいんだよなゝ」

「そうなのか？ じゃあ私が見本でやってあげる。罨は数と威力が重要だぜ」

スチュアートはあっさりと承諾し、てゐると悪戯装置の作成に取り

掛かった。

作成途中に仲間に入った人がいる。偶然永遠亭に行こうとしたところスチュアートを見つけたからだ。

「おっ、スチュアートじゃないか。おーい、何してるんだ？」

「あっ、魔理沙。今ね、罨作ってるんだ」

魔理沙はスチュアートのもとに降りて、作業を見る。

「罨って？ 落とし穴か？」

「違うよ。ただの落とし穴じゃないよ。画期的な罨で稟を足止めしよう」と

見れば大砲やら速射砲やら幻想郷には見られない道具がある。

「あっ、てるもいるのか」

「ゲッ、魔理沙。何しに来た？」

「見学だぜ☆」

「嘘ついた上にカッコつけるなウサ！ その道具をパクろうとしてただろ。今竹林に壮大な悪戯装置を作成中なんだから邪魔するなウサ」

「失敗するのが目に見えるぜ」

竹林で悪戯装置を作る限度は底が知れてるし、どうせたいした物ではないだろう。と、思っていた魔理沙はスチュアートに振り返る。

「あんな、スチュアート。あんまりてゐに関わるとロクなこと無いぜ」

「違うよ。私が自分でほとんど作るんだよ。てゐは作戦指揮官だよ」

「そうか」

魔理沙はとりあえずスチュアートが何かやるっていう認識をして、ここから去ろうと思った矢先、スチュアートの発言を思い出した。

「さっき、稟を足止めって言ったけど、どうかしたのか？」

魔理沙も稟とスチュアートの関係は知ってる。何故足止めするのか？ 少なくとも関係が劣悪になったわけでないし、てゐと共謀するほうが不思議だ。てゐに言いくるめられたのか？

「あゝね、稟ってさ、どういう人か知りたいから」

「今更か？」

「私が見るのは体力面と頭脳の高さ。別にたいした理由じゃないけど」

別に興味があるわけでも無いし、他にも方法があるだろと言いた

くなるが、言わなかった。

（でも、このところ私も暇だし、ちょっとだけ手助けしてもいいかな）

と思ったが、逆だった。

「あっ、魔理沙も少し手伝ってくれないか？　できるだけ派手なやつ作りたいから」

逆に頼まれた。でもちょうどいい暇つぶしにはなる。

「そうだな～……、いいぜ。手伝うぜ」

「サンキュー！　これで魔理沙もTrick Companyの一員だぜ！」

「えっ？　と、トリツ…？　何だそれ？」

突然意味不明の単語に戸惑う。スチュアートは簡単に説明した。

「Trick Companyは悪戯中隊って意味で、全力で稟を足止めするために私が創案したんだ」

「そ、そうか…」

「私の読みでは明日の午前8時前後に稟が永遠亭を出て来るからそれまでに完成させないと」

（えらく大規模にやる気か……。ま、いいか）

こうして三人と兎達で竹林だけでなく入口、人里道中にまで仕掛けを施し、そして朝を迎えた。

第18話 迷いの竹林Trick Company総本山を突破せよ! 後編

「では気をつけて。常盤さんの身体は私達がしっかり看護致しますので安心してください」

わざわざ玄関に来てそう述べた鈴仙を尻目に竹林へ歩き出した。通信機は後ろのポケットに入れてる。わざわざ取り出さなくても普通に会話できるのが楽だった。

「とは言ってもなあ……」

通信機には聞こえないくらい小さく独り言を言う。

今考えているのは例の外来人。三日前はほとんど自分の感情の勢いに任せて敵をうつなど言ってしまったが、いざ対策や攻略を考えると今の時点で全くとっていいほど考えが無い。

それに治療した永琳の話だと常盤さんの破壊された右足は火傷の跡もあることから爆弾の類にやられた可能性があるという。

言ってしまうえば、敵はそれらの分野の扱いに長けている者と推測できる。

幻想郷の仲間と協力とは言ったが、相手の情報が皆無な今は正体を調べる以外に勝ち目は無い。最悪俺が殺される可能性もあるし、霊夢達もただでは済まないはずだ。

「これが咲夜さんが伝えてくれた幻想郷を揺るがす程の運命ってやつか……」

神社に咲夜が寄ってきた時に話した事を思い出した。レミリアからの言伝は確かに俺の運命を示した。そして俺はその運命に一步踏み出した。もう変えられないだろうし、変える気も無い。どうせ現実世界では行方不明で処理されてるだろうし、家族には迷惑をかけただろうが世間じゃ一学生が行方不明と新聞の端に載るくらいで騒ぎにならない。

俺自身この幻想郷で生きていく決意をしたし、現実世界の終わらない戦争にうんざりして世界を離れたいと願っていたのも事実。

でも、物事の変化には必ず避けて通れない運命という壁が立ち上がり、打ち破り越えなければならぬ。それがこれならば、素直に受け止め、越えてみせよう。

『あのく、聞こえてますか？』

「え？ あ、ああ！ すいません！ 気付きませんでした！」

『まあ、敵をとると言っときながら対策が無くてどうしようかとか考えていたんでしょう？』

「うっ…おっしゃる通りです」

やはり常盤さんの推測は鋭い。考えが見抜かれてるように思えた。

『とにかく白玉楼にある私の荷物の中を見れば正体は分かるから、それから対策を立ててくれればいいわ』

「分かりました……」

なんか主従関係な気がするが、多分気のせいだ。

しばらく竹林を歩いていると、不自然な糸が張ってあった。ちょうど竹に結んである。

「あいつ、また何か仕掛けたか」

と、糸に触れないように足を上げて越えようとした時だった。

プチッ

「えっ？ 今のは…？」

ちょうど越えようとした時に音が鳴った。そして次の瞬間、俺は大量の落ち葉に埋もれた。

「のあ！？ まさか糸は二本！？ 一本を目立たせ、越えることを見越して二本目が配置されていたのか！？」

落ち葉を掻き分けて結んである糸に近付いて見た。確かに二本だ。高さもちょうどひっかかる高さで地面と同じ色で糸は一本にしか見えな

ない。
てゐに一杯食わされたようだ。

「となれば先にもまだ仕掛けがある。なら、俺は全て突破してみせる！」

そう言って竹林を進む。

「α兎分隊から最初の罠に引っ掛かったと報告。これで全ての罠は作動したウサ」

「気を抜いたら駄目だぞ。奴はやるときはやるからな」

「へいへい、β分隊とγ分隊に指示を――」

竹林を進み、再び奇妙な光景を目にする。

「地面一帯が落ち葉で敷き詰められている。そしてちょうど四角形の角の形に置かれた緑のコーン。落とし穴か？」

ならば落ち葉を掻き分けて進むしかない。案の定、掻き分けた時に落とし穴があった。枝が編み目に置かれ、落ち葉が落ちないようになっている。

順調に掻き分けて進み、緑のコーンを越えた。だが、てゐは抜かりなかった。コーンを越えて足を地面に着けた時、ベキツという音がした。

「うっ、木の板！　しまった！」

落ち葉だけを掻き分けて土は本物と思い込んだのは間違いだった。板の上に敷き詰めていたようだ。片足に力が入らない。そのまま前のめりに倒れて穴にドボン。

板の面積はちょうどコーンの四方の位置の面積で、落とし穴もでなかった。

「痛てっ……」

頭を上げて様子を見た。全身を打ったようで、身体中が痛い。

「クソッ、俺ももう少し用心しねえと…」

眩いた時、コーンツと音に何か落ちてきた。何かと思い近付くいた時だった。

『稟君！ それに近づかないで！』

突然常盤さんが叫ぶ。

『穴に落ちたのよね？ 早く脱出して！』

「な、なんでだ！？ 何か分かるのか？」

『催涙弾よ！』

瞬時に俺は理解した。それと同時に落ちてきた物から煙が噴き出した。

「マジかよ！？ やばい！」

落とし穴の広さだけが唯一の救いだが高さがある。板も突き抜けた部分しか開いていない。ほぼ密室である。

「やばい、やばい、やばい！」

頭はパニックって考えがまとまらない。万事休すかと思った時だ。

『何の為にツルハシがあるの！』

「はっ、それだ！」

咄嗟にツルハシを出して掘り進む。永遠亭に行く途中でやったように徐々に上へと掘っていく。背後に煙が上ってきたがいち早く俺が地上に出られた。

「ハア、ハア、あ、危なかった……」

常盤さんのおかげで何とか危機を乗り越えられた。自分の能力を忘れるとは情けない。振り返れば掘った穴から煙が噴き出していた。俺は足早に去った。

「β分隊から突破されたと報告。γ分隊とθ分隊は待機済みウサ」

「油断禁物だ。やってこい」

（私はなんでここにいるんだぜ……）

しばらく歩いていると奇妙な事実気づいた。いくらてもあ

んな本格的に命を狙うような悪戯はしないはずだ。死にはしないが致命傷にはなる。催涙弾もよく考えたら幻想郷には珍しい。仮に誰か協力しているのだとしたら……。

「なんか嫌な予感が……」

そう呟いた矢先、バキツという音に加え突然横の竹が数本こちらに向かって倒れてきた。

「やっぱりか」

駆け出して衝突を避けた。が、頭上から剣山が落ちてきた。

「連動式か！」

持ってたツルハシを振り回して剣山を払う。罨がより狡猾になってきた。

『稟君！　すぐに動いて！』

再び常盤さんが警告する。俺は言われた通り移動した。直後、背後に何かを通った。

後ろを振り向いて確認した時、てるの協力者を確信した。

「これは銃弾！？　ならば思い当たる奴はたった一人！」

スチュアート。あいつ以外いない。悪知恵を働かせて協力したな。

だが息つく暇も無かった。なぜなら左の草むらから筒を括りつけた兎がいたからだ。

「おい、まさかよ…?」

兎が跳びはねた時、カチツと音がし、筒から弾丸が飛び出た。

「やっぱり俺を殺す気だぁー!」

兎に括りつけてあったので狙いは外れたがやばい。兎が集まっている。

俺はすぐ駆け出した。兎も追い掛けてきた。というか洒落にならない。早速命が狙われるとは……。

だが何故襲ってくるのか? 再び弾丸が飛び出し、すぐ横の竹に穴を開けた。

「もしかして、あいつ、置いていった事をか?」

そういえば思い出した。永遠亭に行く途中で一緒に来ていた。が、落とし穴に埋めてそのまま行ってしまった。ならば合点はつくが、ここまでされる必要はあるのだろうか?

だが、今考えたところで無駄なのは承知。一旦ここを切り抜けてから考えることにした。

突然身体が浮いた。走るのに必死で気付かなかったのか、ロープに足を取られた。すぐ手を出して倒れるのは防いだが、腕に衝撃による痺れが伝わった。

「うっ、あっ!?!」

肘が曲がって地面に倒れたが、すぐ起き上がる。その時、前方に黒い物があつた。深緑色で編み目があり、パイナップルのようで……。

脳内に警告が走った。すぐに離れると、

ボッゴーンッ！

「ま、マジかよ！」

物体は手榴弾。明確な殺意無しに使わない代物だ。

「全速力だ！ 竹林を抜けないと死ぬ！」

自分の足に言い聞かせるように呟き、一気に走った。

「V武装分隊追跡中。いよいよクライマックスウサ」

「派手に花火を上げてやれ！」

（手伝つといてなんだが、稟の奴大丈夫かな？）

あともう少しで竹林を抜けれると思う。手榴弾を越えてから速射砲、無人機銃、兎の落下傘など悪戯の域を越えた罠が次々襲い、敷き詰められている落ち葉に混じる落とし穴、竹のバリケードなど行く手を阻む。

『後ろから何か来るわ』

「なら急ごう」

でも後ろを振り向かずにはいられない。やがてバキバキツという竹を折る音に轟音が聞こえた。

「これってもしか、いつしか見たバイオ4の……」

ゴゴゴゴツ…

予想は的中した。いや、してほしくなかった。

「うおーっ！！ やり過ぎだ、バカヤロー！！」

後ろから俺の身長三倍程度の大岩が転がってきた。平地なのに転がるとはこういう訳か。兎だ。兎どもが押してる。なぜなら竹林は道が少し曲がっているが外れることなく背後について来ている。

ツルハシで破壊するには時間が足りない。走るしか、逃げるしかない。

入口が見えてきたのか竹の生えてない場所が見えた。が、入口付近は再び落ち葉が敷き詰められている。

「なら道を外れていけばいい！」

横の茂みを通して遂に竹林を抜けた。同時に轟音が最後に響き渡った。

見れば大岩は落ち葉のあった落とし穴にはまり動かなくなった。

「た、助かった……」

ようやく切り抜けた安堵感と疲労でへたりと座り込む。まさかここまでやるとは全く想像出来なかった。そして次からはスチュアートをしっかりと連れて来ようとも思った。

だが、悪夢はまだ続くそうだ。

『上空から何か来るわ』

「なっ！？ 竹林は抜けたはずだ！」

力を振り絞って立ち上がり、身構える。

上空に現れた影は、

「あれは魔理沙。いや、誰か乗ってる！ もう一人いる！」

魔理沙の後ろにはたばだぼのセーラー服に長髪のピンク髪、きわめつきに大型チェンソー。

「スチュアート本人が来たか！」

「おおーー！」

スチュアートの声だ。拡声器を持っている。

「竹林が全てではないぞ！ 我がTrick Companyの攻撃を乗り越え、果たして目的地に着けるかな？」

「Trick Company：？ 悪戯中隊だと！？」

やはりスチュアートが絡んでいた。

『上空に硝煙反応！？ 稟君まずいわ！』

「ど、どうしたんですか？」

『硝煙反応、つまり機関砲がある！』

それを聞いて再び上空の魔理沙を見遣る。スチュアートの手に確かに機関砲がある。

「ってまさか…」

「覚悟しろやぁー！」

予想通り機関砲を向けて発射してきた。術のない俺は再び走りを強いられる。

（まずいっ！ さっきので疲れが）

だが容赦無く機関砲の弾丸が地面をえぐる。更に、背後で爆発音が聞こえる。手榴弾だ。

「く、クソッ！　どうにかならないか！」

ここは何もない平原。人里は見えるがこれでは危険だ。

「このまま白玉楼に向かうにしたって、俺のロケットエンジンは神社だ。取りに行くにはキツすぎる」

本当に万事休すだ。もう手のうちようがないに等しい。

『いや、待って。まだあるわ』

「気休めで言っても無理ですよ。俺みたいな普通の人間じゃ…」

『気休めじゃない！　聞いて？　そのまま人里に行くのよ！』

何を言ってる？　今襲われているのにそのまま人里に行けば被害が増える。それだけは避けたい。

『違う！　人里なら攻撃できないはずだわ！』

確かに人里に危害を加えてはならないのは魔理沙も承知だ。しかし、

「スチュアートは知らない。多分無理だ」

『……なら、なおさらよ。ある意味賭けね』

常盤さんの言う意味が分からなかった。何故人里に逃げ込むのにこだわるのか。それに賭けとは？

「どりゃあ！ マジックボムだ！」

ついに魔理沙の私物をも使用し始めた。確かにこれ以上迷ってる暇は無い。

「…分かりました。その賭けに……乗ります」

きっと何かあると信じて人里に向かった。

「魔理沙！ 稟が人里に向かってる」

「ああ、分かってるが無理だ。人里に攻撃はできないぜ」

「ええー！？ 何でさ！？」

「何でって分かるだろ！ 関係ない奴まで巻き込む気か！」

「じゃあ降ろして。私一人なら問題無いぜ」

「そんな問題じゃねえ！」

本当にスチュアートは分かっていたなかった。

やっぱり人里では攻撃できない。それは正しかった。魔理沙は静止している。だが、賭けはこれだけか？

『あつ、そこを右に。お店がある』

「店？ 何で？」

『いいから！』

仕方なく右に曲がる。確かに店があった。どうやら食品関係で、客も数人いて……。

「えっ？」

客の中に見覚えのある人物がいた。白い短髪に黒リボン。腰に添えてある二本の刀に半霊。

俺は店の中に入り、声をかけた。

「妖夢」

「え？ あ、稟さん！ 怪我したって聞きましたけど大丈夫ですか？」

俺にここで会ったことで相当驚いたようだ。だが、今は一刻の猶豫もない。

「ああ。それより、話がある」

「あ、はい。少し待ってください」

そう言って品物を店の主人に持って行き、会計を済ませる。

「お待たせしました。で、話というのは？」

「幽々子に常盤さんの容態を報告したい」

「はっ、そ、それで常盤さんは大丈夫でしょうか！」

永遠亭のことを思い出したのか、必死に聞いてくる。

「大丈夫だ。詳しい事を伝えたいから白玉楼に連れていってくれな
いか？」

「そうでしたか。本当に良かった……」

ホッと安心する妖夢。常盤さんの重傷姿を見たのならそうなるの
は仕方ない。

「時間が無い。早く行こう」

「わ、分かりました」

と俺と妖夢は店を出た。もしもスチュアートの考えを予想出来た
なら驚かずにすんだだろう。

「見つけたぞおー！」

先程曲がってきた角からスチュアートが単体でいた。しかも機関
砲ではなく、チェンソーを構えていた。

「人を巻き込まないなら、狙いを定めてやれば問題 nothing
！」

「妖夢、逃げるぞ！」

「えっ？ えっ？ な、何が？」

スチュアートの考えは、個人で行けば巻き込まないだった。
だが、今回は幸運だった。

「ここは逃げる！ 早く白玉楼に！」

「わ、分かりました！ 手を掴んで！」

差し出した手に掴むと身体が浮遊感を感じた。どうやら賭けは成功したようだ。だが安心できない。何故なら奴は機関砲に魔理沙がいる。

人里を離れ、冥界の境界の穴に向かう途中だった。案の定魔理沙に連れられてスチュアートが追ってきた。

「おぉー、Trick Companyは最後まで粘るぞお！」
ちらっと見たが、魔理沙自身はうんざりした表情だった。

「あ、あの、魔理沙さんの後ろに乗ってる少女は誰ですか？」

そういえば妖夢はスチュアートを初めて見る。

「あいつはスチュアート。外人だが少し特殊で……」

「特殊？」

「詳しいことは後だ。早くしないと」

言いかけてもう遅いと分かった。背後で銃撃音。

「妖夢、来るぞ！」

言うと同時に弾丸が二人を襲う。

「うわっ！？ い、今のは？」

「弾幕のひとつだが、当たると負傷する。全部避けてくれ」

「えっ！？ 負傷ってそれルール違反……うわっ！？」

今弾丸が妖夢の身体に掠めた。

「ちょ、危ないじゃないですか！」

「うん、俺もあいつの危険性を警戒してる」

「じゃあ尚更です！ このまま冥界に連れて来たら危ないじゃないですか！」

「本音を言うとは冥界に引き取って欲しい」

「嫌ですよ！ 本音で言われても絶対に嫌ですっ！」

妖夢でさえスチュアートを妥協できない。まあ、当たり前か。

相変わらず機関砲をぶっ放すスチュアート。だが弾丸はそんなに

あるだろうか？

どうやらチャンスがようやく巡ってきた。たった今銃撃が止んだ。

「妖夢、今のうちに白玉楼に全速力だ！　じゃないとまた撃たれる」

「は、はい！」

さっきの掠り弾で焦りがあったのか、素直に返事する。妖夢も俺を掴んでだから相当疲労したかもしれないが、ようやく冥界との境界に入った。相変わらず先の見えない階段が続く。

「あの、白玉楼まで行きますか？」

「頼む」

竹林の騒動で疲れ果てているから、もう階段を登る気なんて全く無い。白玉楼まで頼むことにした。

「魔理沙、ここは？」

「ここは冥界、あの世だ」

「でも死んでないのに稟も魔理沙も大丈夫なの？」

「心配するな。私達は身体を鍛えてあるから大丈夫だ」

「へっ」

少しずつ嘘を吹き込まれるスチュアートだった。

おま け

楓「第7回、幻想郷ラジオの時間ですよ」

稟「T・C。(タイトルコール)はこれで落ち着いたのか?」

楓「どうしたの? 変な事いきなり言って。頭打った?」

稟「酷い言われようだな。俺は正常だ」

楓「……………」

稟「正常だよ! なんで疑いの目で見るんですか?」

楓「ですよ〜。それじゃあゲストの紹介です」

稟「ゲスト……またいないじゃん」

楓「稟君の右肩にうつすらと女性の手が見えるけど?」

稟「え、っ!?!」

どうも、清く正しい射命丸です。妖怪の山でもちらほら噂のラジ
オ番組と聞いて出しました。あなたがた二人のコンビってお似合
いですよね。これを期に妖怪の山にも番組を宣伝しますね。

ではでは、質問ですが……たまに全裸になりたいという気持ち
がありますか?

『私があります』

最速のブン屋

楓「全裸ですか? そうですねえ、私はともかくあの」

稟「ちょーっ！と待ったああーっ！！！！ 真面目に答えるなあーっ！！！」

楓「何か問題でも？」

稟「大有りじゃ、ボケェ！ 質問おかしいだろ！ しかもなんか強調してるし！」

楓「稟君も夏になったらそう思うんじゃない？」

稟「一瞬足りとも思った事は無い！ チルノに冷凍保存されろ！」

楓「あつ、今度は左肩にうつすらと」

稟「俺には見えないんだけど！？ 本当にあるの！？」

すいません。実は文様のハガキ見たんですけど出すのは阻止できませんでした。本当はあんな質問書く人じゃないんですけど……。妖怪の山でも守屋神社にとりを初め普及していますよ。まあ、にとりはこのまま外の世界のラジオ番組を電波ジャックするとか言うてましたけど。

それで、質問なんですけど、にとりの工房に「コマンチ」という名前の設計図があるんですけど。にとりも知らないという事でしたんです。お二人とも外来人ですので何か知っているのとりに教えられますので宜しくお願いします。

目覚めし白狼

稟「わざわざ謝罪するとは、苦勞が絶えないな」

楓「にとりさんってエンジニアの方？」

稟「そうだけど、河童だ。幻想郷の最先端は河童の技術なんだ」

楓「ほうほう」

稟「中でもにとりはかなり天才的で精密機械から車程度的大型機械

を作る。河童だから全て耐水性有り」

楓「じゃあ設計図があれば何でも作れる？」

稟「多分、な」

楓「じゃ、そのコマンチっていう物を作ってもらおうかな？」

稟「それ以前にコマンチって何ですか？」

楓「……コマンチおじさん？」

稟「それは某鋼漫画のキャラ！　なんでじいさんが設計図で作れるんだよ！」

楓「しょうがないなあ。企業秘密だよ？」

稟「いや、ラジオで喋ってる時点で秘密もないじゃないですか」

楓「多分架空だと思うけど、もしかしたら検索にヒットするかも」

稟「作者調べてないな」

楓「正式名『ARH-66 コマンチ』。かの戦闘ヘリ『AH-6

4 アパッチ』より上だね」

稟「戦闘ヘリ！？」

楓「幻想郷風に言えば、光学迷彩搭載ヘリ」

稟「ステルス、な」

楓「で、ゲストもステルスを使ってるから稟君には見えないわけ」

稟「急に話を振るな！」

楓「それより何か眠くならない？」

稟「だから話を……あれ……なんか……眠気……が……」

楓「徐々に死が迫ってる証拠だね☆」

稟「危ないわあ！　一気に目が覚めたわ！」

楓「そろそろ時間なので終わりますようか。あつ、次回も同じゲストが来ますよ」

稟「それゲストが一言も喋ってないからで……うつ、また……眠気……が……」

楓「では最期の稟君を見守りながらラジオの終了です。ご試聴ありがとうございました！」

稟「絶対眠らん……絶対……に……と……り……」

第19話 跳梁妖々跋扈く錯綜せし外来人（前書き）

それではどうぞです。

第19話 跳梁妖々跋扈く錯綜せし外来人

スチュアート創立のTrick Companyを突破し、ようやく白玉楼へと到着した。ちょうど幽々子が部屋から出てきて、俺と妖夢は鉢合わせした。

「あら、妖夢に稟さん。二人で手を繋いでどうしたの？」

「えっ？ あっ、いや、幽々子様！ これは別に深い意味はなくてですね！」

幽々子の指摘を受けて急に赤くなる妖夢。誤解される前に俺が説明した。

「ちょっと妖怪に襲われて逃げてきたところです。俺は飛べないから妖夢に手を引っ張ってもらったんです」

「そう。妖夢はお買い物帰りの途中だったのね？ それで妖夢に助けを求めたと」

「はい。おかげで助かりました」

半分嘘だが他に思い付かない。でも幽々子はそれで納得したようだ。

説明が終わると同時に、

「例え地獄の果てでも追い掛けるのが我がTrick Companionの真髓だあ！」

門から魔理沙と大声で叫ぶスチュアートが入って来て、そして俺達と対面した。当然幽々子とも。

「あら、魔理沙に……あれは神社にいた……スチュアートとか言ってたわね」

俺はつい幽々子を見てしまった。幽々子は知らないはずなのにスチュアートを知ってるのはどういうことなのか？

そして幽々子を見たスチュアートも、

「ん？ おお、あんたは西行寺幽々子！」

「あら、覚えていたのね」

スチュアートも幽々子を知っていた。まるで以前会ったかのような振る舞いと言葉遣いだ。魔理沙はともかく妖夢まで驚いた様子をしていた。勿論俺も例外でない。

「あらあら、皆目を見開いてどうしたの？」

真っ先に俺は質問した。

「あの、失礼ですが、幽々子さんはコイツをご存知なのですか？」

「ええ。確か楓ちゃんの最後の休暇の日に神社で会ったわ」

知らなかった。帰ってきた時スチュアートは仰向けに寝ていた。確か魔法の森の異変の時だ。霊夢からは幽々子が神社に来たと言わなかったから境内辺りで話していたのだろうとばかり思っていた。

「まあ、せっかく来たのだから部屋に入りなさい。ちょっとお茶の用意をするわ。妖夢も手伝いなさい」

幽々子の招きで四人は部屋に入る。スチュアートもはや戦闘意思は失くなったようだ。

部屋の卓袱台を囲むように座る俺達。俺の右にスチュアート、左に魔理沙だ。向かい側に妖夢と幽々子。

妖夢がお茶を配り終わり、腰を降ろすと話を始めた。

「さて、妖夢から聞いたんだけど、楓ちゃんの容態はどうなの？」

永遠亭を出る前に打ち合わせをしていたが正直考えがまだ纏めきっていないからどこから話せばいいかを考えたが、話題を振られれば範囲内での返答はしやすい。

会ったことの無い魔理沙とスチュアートには分からないから二人はとりあえず出されたお茶を飲み始める。

「はい、永琳さんから聞いた話によりますと、右足が重傷で、全治一ヶ月だそうで、依然意識は無いそうです」

「そう……あの子が…」

容態が深刻だと知ると心配そうに表情を暗くする幽々子。

「妖夢もどうして怪我をしたのか分からないって言ってたけど……
あなたは何か心当たりは？」

「うっ…」

一瞬返答に困った。常盤さんを怪我させたのは例の外来人。しかし、関連性、動機を全く知らない。その点を常盤さんは話さなかった。だからこう答えた。

「それは……ありませんが、本人から聞いて貰えませんか？」

矛盾した発言に全員の視線が集中する。何か言われる前に俺は通信機を取り出して卓袱台に置いた。

「あっ、通信機」

スチュアートは通信機を見て反応したが、三人は初めて見る。

「これは？」

「今スチュアートが言った通信機というもので、常盤さんと繋がっています。これで本人と会話出来ます」

「おい、ちょっと待て」

反論が来るのは承知したが、言い出したのは意外にも魔理沙だった。

「さつき稟はその楓って奴は意識が無いんだって言ったよな？　なのに会話が出来るなんて矛盾してないか？」

「俺にだって分からない。だが話せるのは事実だ」

「本当か？　にとりからそれについて聞いた事があるが、電話の一種だったら相手は起きてる相手のはずだぜ？」

さすがに俺も弁解の予知が無い。幻想郷は非常識が常識と言うが、幻想郷に住む人間の生命倫理は少なからず同じだろう。こればかりは本当に説明のしようが無いし、全員を納得させるうまい考えなど思い付かない。

その時、通信機からブツという音が聞こえ、数秒後に声が聞こえた。

『ゆ、幽々子さん…』

「い、今のは楓さんの！？」

妖夢が通信機を自分達のもとに引き寄せる。

「楓ちゃん？　楓ちゃんなの？」

『幽々子さん、申し訳ありません。怪我は私の不注意です』

全員が通信機に釘付けとなった。たった今意識が無い程の重傷と言われたのに声は確かに常盤さんなのが信じられないようだ。

「り、稟、本当に楓って奴は意識が無いんだよな？」

魔理沙が確認するように聞いてくる。俺は当然のように答えた。

「言ったら。俺にだって分からないって」

『あれ？ 近くに魔理沙さんがいませんか？』

魔理沙の声に反応した常盤さん。どうやらこちらの会話も聞こえていたようだ。

「えっ？ 私か？」

自分の名前を言われて通信機に目を向ける魔理沙。魔理沙とも面識があるようだ。

『今妖夢が通信機を持っていますよね？ 魔理沙さんに渡せますか？』

「あ、分かりました」

妖夢は魔理沙に通信機を手渡す。一方の魔理沙は何故自分を知っているのかという表情をしている。通信機を渡されるとすぐに話しかける。

「楓とか言ったよな？ いつ私を知ったんだ？」

『覚えてませんか？ 私はあなたに神社で会いましたよ』

「神社…？ あ、ああ！ もしかして話…というか警告？ それをしに階段を登ってきたあの外来人か？」

『そうです。あれが私です。常盤楓と言います』

納得した魔理沙と裏腹に俺は今魔理沙の言った警告という単語が頭に残った。が、今聞く気にならない。後で荷物の確認をするだろうからその時に聞くことにする。

『まあ、このくらいにして、本題に入りますので卓袱台に置いて貰えますか?』

そう言って魔理沙に置いてもらう。

『まず通信機で話ができる事ですけど、今の私は意識だけが起きてる状態です。その信号を通信機を介して話が出て来ます』

そう説明はするが、やはり改めて聞かされると俺もよく分からない。い。

「あの楓さん、私達にはよく分からないのですが…」

「妖夢に同じく」

「あたしも」

「実を言えば俺も……」

『…うつ……で、ですよ…。でもこればかりは無理矢理納得して貰わないと……』

「要するにこの通信機があれば普通に会話ができるって事か?」

『魔理沙さんのその解釈で納得して下さい、はい』

常盤さん自身もよく分かってなかったようだ。じゃあ永遠に分からないのか？

それから常盤さんは怪我をした日について話しはじめた。

かくかくしかじか少女説明中：

話を終えてからもほんのわずかの間、全員が一言も喋れなかった。

話の要点はやはり例の外来人。初めてその外来人がテロリストと知って常盤さんの目的が理解できたと同時にどれほど危険な相手かも知った。

妖夢が「お茶の補充をします」と言って部屋を去るまで何とも言えない暗く重い空気が支配していた。

次に沈黙を破ったのは魔理沙だった。

「しかし、そんな恐ろしい外来人が幻想郷にいるとは……私も注意しないとな…」

本心から言ったのか空気を和らげる為に言ったのかは分からないが、魔理沙の言う通りである。幻想郷にいるのならいつしかばった

り出会う可能性もある。

『すいません。事が大きくなる前にケリをつけるつもりでしたんですけど……。私って先輩みたいに効率良く事を運べませんし、観察力とかそういうのもあまり……。それに……。』

自虐的に自分の行動を謝る常盤さん。

「いや、そんな事は無い。少なくとも常盤さんは皆の安全を守る為にやった行動だ。俺はむしろ敬意を評する」

『えっ？』

「常盤さんがいなければ奴の存在、危険度が分からなかった。そして前にも言いましたけど、あなたは一人じゃない」

永遠亭で言った言葉を思い出して自分の気持ちを言葉に乗せて通信機に語り続ける。

「霊夢だって動いてる。今いるメンバーもきつと同じだ。この美しい幻想郷を守る気持ちは。俺もそうだ。だから、一人で戦うのではなく皆で戦うんだ」

『稟君……ごめんなさい。余計な心配をかけてしまったみたいね…』

今度は冷静に言葉を受け止めてくれたようだ。

「そうね。私も楓ちゃんの為なら協力を惜しまないわ」

「私もだぜ。霊夢が動いてるなら私も動かないとな」

「あたしもちゃんとやるよ。ここは良い場所だからね」

「私も楓さんを全力で支援します」

いつの間にか部屋にいた妖夢も含めて皆が賛同してくれた。

『幽々子さん、皆さん……ありがとうございます！』

きっと常盤さんも嬉しかっただろう。お礼を言う時の明るさがその感謝の度合いを語っていた。

俺は通信機を持ってかつて常盤さんが利用していた部屋に来了。

荷物の中に外来人に関する情報があるという事で確認しに来了。

部屋は当然和室だが、荷物はスーツケースとアタッシュケース。資料はアタッシュケースにある。常盤さんから番号を聞いてケースを開ける。ファイルがあり、『任務概要』と書かれていた。ファイルは中にシートがあり、その間にプリントを入れるタイプだ。

「ありましたよ」

『ファイルの中に付箋を付けたページがあるわ。確かN O. 1941』

俺は言われた通りN O. 1941の付箋を見つけてめくる。確かに例の外来人について書かれてある。

「名前は…KYOJI…キョウジ？」

『そう、テロリスト、キョウジ』

「日本名ですか？ 苗字が無いようですが？」

『……私にも分からない…』

一瞬躊躇いがあったように思える口調だったが、外人の素性を調べるべく内容を吟味した。

資料によると、キョウジは常盤さんがいる世界から来たようで、反政府反乱軍RRFの副司令官だが実質彼が指導者らしい。

RRFは政府の無謀な政策に対して蜂起した市民で構成された武装グループ。政府とおよそ4年におよぶ争いを続ける。何故一市民でまともな訓練すらしていない反政府軍がここまで戦線を引きづっている背景には、パトロンに金持ちの富豪に兵器産業も混じっているからだ。訓練せずとも武器があれば最低ゲリラ戦で戦える。

性格は至って冷静沈着でRRFにおいて重要なポストも担っているが、キレると感情が暴走する。彼はRRFに加わっている富豪の中での名門家出身であり、その知恵と権力を駆使して副司令官まで上り詰めたようだ。

「これを見る限りだと常盤さんと対立しているようですが、常盤さんは確か軍に所属していますから政府側という事ですか？」

『合ってるけど、私は正規の軍じゃないわ』

「えっ！？ 初耳ですけど」

最初会ったときは何やら長い名前の軍に所属していると聞いていたが、どういうことなのか？

『説明してなかったかな？ 私はPMCっていう傭兵集団にいる傭兵で、直接政府に依頼されてるから政府側なの』

「あれ？ 待って下さい。PMCは民間軍事会社の意味ですよ？ 正規でも無いのにどうして政府から直接依頼されるんですか？ 正規の軍隊がいますよね？」

親父が自衛隊だったので軍事に関しては知識があるので疑問になった。

『稟君、結構詳しいね』

「親父が自衛隊に入っていましたから」

『ああー、なるほど。私達のPMCは政府軍よりも最新兵器を開発したり戦績も優秀だから信頼があるの。政府軍の総司令官と先輩はやり取りするぐらい面識があるから、よく共同訓練とか行うの』

軍の総司令官と面識があるとは驚いた。常盤さんの先輩がどういう人か興味が出てきた。が、今は関係ないので例の外来人に集中し直す。

その男の姿は一見して旧ドイツ軍の軍服に似ているが、よく見てみるとボタンの数や袖の長さが違う。金髪でいかにも好青年な印象を受ける。だが、その瞳は飢えた狼の如く鋭く恐怖を覚えそうだ。

まともに見るときつと怖じけつきそうなくらいに。

ひと通り読み終わるとファイルをケースに戻した。かなり情報を収穫できたが、分からないのはその潜んでいる場所と能力。幻想郷にいるなら何かしら能力がありそうな気がする。できれば危険な能力でないのを祈る。

「とりあえず知りたいことは知れたから、一旦神社に帰るか」

『あ、待って。さっきの資料持って行ってくれない？ どうせ動けないから』

「そ、そうか。分かった」

と、ケースを再び開いてその資料を取った時だ。

「おや？」

端にキラッと光る何かがあった。取り出して見ると銀の懐中時計だった。

「懐中時計？　なんでここに？」

常盤さんに聞こうとした時だった。

『懐中時計があるの！？　しまった！　そっちに入れてたか！』

急に声を上げる常盤さん。

「常盤さん、これは…」

『すっかり忘れてた！ それ、先輩が貸してくれた大切な懐中時計なの！ でも今の私には使えないから稟君が持っていてくれない？』

「えっ？ いやっ、大切ならむしろ入れておくべきでしょ！ しかも俺に預けたらなくしてしまうかもしれないし！」

当然である。人の大切な物ならなくさないようにするのが普通のはずだ。ましてや他の人に預けるなんてできるもんじゃない。

『いいから！ それはお守りの役目もあるの。先輩は戦場にもそれを持ってきたけど一度足りとも壊されてない時計だからお守りの代わりって貸してくれたの。きっと稟君にも加護はあるから持つといてくれない？ お願いだから、ね？』

「うっ……そこまで言うなら……」

結局懐中時計も持つ事になった。俺は押しに弱い自分を中心にけなした。

「とりあえず資料と時計を持って神社に帰るか……」

俺は部屋を出て、一旦幽々子達がいた部屋に向かう。スチュアートを連れて帰らねばならないからだ。

「おい、スチュアート。神社に戻るぞ」

「ん、もういいの？」

「ああ、用事は済んだからな」

「じゃあ私も帰るか。スチュアート、私の箒に乗りな」

「お、サンキュー」

スチュアートは随分魔理沙と仲良くなったようだ。

「あつ、稟さんちょっと待ってただけのかしら？」

外に出て門に向かおうとする直前で幽々子に呼び止められた。

「はい、幽々子さん何でしょうか？」

幽々子は俺に近づいて扇子を開き、口元に当てる。

「私も協力しかできないけど、通信機はあなたが持つときなさい。
楓ちゃんを宜しくね」

遣わしてる身から心配している幽々子だが、安心させるように
俺は言った。

「分かりました。常盤さんは必ず守りますので、ご心配なく」

「フフッ、頼もしいわ」

扇子越しに微笑む幽々子。その妖艶な微笑みに一瞬心が引かれそ
うになった。

「それで、ひとついいですか？」

自分の気を紛らわすためあるお願いをしようと思った。

「何かしら？」

「次からはさんづけでなく、呼び捨てでもいいですからそう呼んで貰えませんか？ 年下ですし俺も慣れてないので」

「そう、分かったわ、稟」

そう言って幽々子は扇子を閉じて踵を返し、屋敷に戻った。

「終わったな？ よし、行くぜ！」

魔理沙の号令で箒が宙に浮いて門を出る。

「というか箒に三人も乗って大丈夫か？」

「おいおい、私の箒を信じろって」

三人乗っているがかなりの速度で階段を下るので俺はその心配ばかりしていた。

時は少し遡り、稟達が冥界にいる頃、青年は香霖堂の前にいた。

（人里を離れてこんな場所に店を構えるとは…一体どういう人物なのか…）

単にその好奇心で香霖堂に入ることにした青年、キョウジ。

「いらっしゃい。おや、見ない顔だね」

キョウジを待ち受けていたのはカウンターに座り、落ち着いた雰
囲気で優しそうな感じの青年……というと語弊があるかもしれない
が、そのように感じてしまった。

「あなたがここの店主で？」

「そうです。僕は香霖堂の店主、森近霖之助。他の人からは『こー
りん』とも呼ばれているよ。君は？ 見た目からして外来人のよう
だけど……」

「私はキョウジという者です。以後お見知りおきを、霖之助さん」

「そうですか、宜しくキョウジさん」

キョウジは自分の想像以上に優しい人だと印象づけた。

「で、ここに何の用かい？」

キョウジは初めてこの地に来たように装い、情報をできる限り聞
き出す事にした。

「実を言うと気づいたら森の前についてですね、しばらく歩いていた
ら偶然見つけたんですよ」

「ああ、そうですか。なら良かったですね。この辺りは妖怪が出る

からね」

「妖怪、ですか？」

「まあ、よく分からないと思うから順を追って説明するよ」

「いいのですか？ 見ず知らずの相手に？」

「構わないよ。外人のたいていは元の場所に帰りたいたいと言うし、僕自身客が来ないからちようど暇だったんだ」

霖之助はキョウジの思い通り幻想郷近辺の地理、帰る方法など必要な情報を得ることに成功した。

「——というわけだよ。長かったけど大丈夫だったかい？」

「いいえ、おかげで助かりました」

（あの紅白の少女、やはりただ者では無かったようですね。だが、私の姿を知っているのは彼女だけ。始末しておけば追っ手はいなくなる。が、彼女がいないと帰れない。どうしたものか……）

キョウジにとって脅威なのは自分を知られる事。RRF副司令官の立場でありながらその素性を内部の仲間にすら話してないことで行方をくらましなから政府とゲリラ戦法で戦い続けた。

だからこそ生き延びれた。

キョウジにとって政府軍などお茶の子さいさいなくらい貧相な部隊だ。厄介視しているのはむしろ政府が依頼しているあるPMC。

楓の所属するPMCだけだ。

だからこの地にいる事を知ったキョウジは彼女の性格から正確に行動心理を読み取り、罠を施し始末しようとした。

「ところで、君は人里に行くのかい？」

霖之助から呼び掛けられてハッと我に帰る。

「い、いいえ。私がここに来た際に身を守る乗り物があります。その中なら安全に過ごせるので」

実際は人里で暴力事件を起こした為に行けないのだが。

「そうかい。なら気をつけて行くといいよ」

「お気遣い感謝します。私もあなたみたいな親切な方と出会えて喜ばしい限りです」

「困ったら僕のところに来るといいよ。雑貨屋だけど君にとってそれなりに役立つ品もあるかもしれないからね」

それを聞いてある事を思い出した。

「ああ、そうだ。霖之助さん、一つ聞きたい事があるのですが」

「どうしたんだい？」

「確か外の世界の品もあると言っていましたよね？　その中に『軽油』という名前の液体燃料はありますか？」

「軽油…？ ちょっと待ってくれないか？」

霖之助はカウンターを立ち上がり店の奥へ行く。

（この地ではナグマホンの燃料すら手に入らないと思いましたが、もしここで手に入ればナグマホンを森に移動させて身を潜められる。人里の事件でそろそろ誰か動きそうだから早めに対応策を施さねば……）

しばらくして霖之助は容器に入っている液体を持ってきた。

「臭いがきついから霊夢に頼んで封をして貰ったんだ。この札を外せば中身を取り出せるよ」

「分かりました。で、お代はいくらで？」

「うーん、そうだな…。初めて会った縁で特別サービスだ。無料でいいよ」

「なっ!？」

さすがにキョウジも驚いた。いくらなんでも気前が良すぎる。何か裏があるのではと疑うくらいに。それにここは雑貨屋、店だから商売で成り立つ。初対面の客に無料など言えるはずない。

「あっはっはっは！ 御冗談の上手い方だ。あれだけ教えて貰っておきながら、軽油も無料と言われましてもねえ」

「いいさ。僕は商売は趣味でやってるようなもんだし、払わないで持っただけ行ったり（本人曰く）借りるという客もいるくらいだし」

「……」

キョウジは余りの懐の広さに言葉が出なかった。商売を趣味でやる人なんかキョウジの世界では少なくともいない。

「……では仕方ありません。あなたのご好意に甘えて有り難く貰うことにしましょう」

「次から払ってくればいいから。ではお氣をつけて」

香霖堂を出て、ナグマホンの元に戻ったキョウジはナグマホンに軽油を注ぐ。

（しかし、幻想郷。私の常識を覆すばかりで恐ろしい。この地に慣れるのに私にはあと何年かかるやら…）

そう思いながらも思考は今後に切り替え、全体把握と霊夢を始末する為のプランを思考することにした。

第19話 跳梁妖々跋扈く錯綜せし外来人（後書き）

おまけ

楓「第8回、幻想郷ラジオの時間ですよー！」

稟「毎回思うのだがテンション高いよね」

楓「ここでは気にしたら負けよ」

稟「それじゃあゲストなんですけど、前回俺を死に誘おうとした張本人の西行寺幽々子さんです」

幽々子「どうも、今回は楽しませてもらったわ」

稟「出来たら人に迷惑をかけないで貰いたいのですが……」

幽々子「えー、でも紫だってやってたじゃない。私だけ制限されたらえこ贔屓じゃない？」

楓「そうですよ。稟君はゲストの攻撃を全て受け止める大事な大事な役割があるんですから！」

稟「今さらっと酷いこと言いましたよね！？ 俺ってその為だけに

来てたの!？」

楓「まさか……」

稟「あなたは目を反らすのが常習パターンなんですか……」

幽々子「ちょっと、あまり楓ちゃんをイジメないでよ。大丈夫？」

楓「稟君酷いです……グスッ」

稟「俺が悪者扱いされてる!？」

幽々子様のご出演なさると聞いて素早く書きました。幽々子様、あまり人様に迷惑を掛けないようにして下さいよ。傍に仕えないので凄く不安なんですけど。

では質問ですけど、あのピンク髪の少女は何処から来たのですか

？　しつかり答えて下さい。私に斬れぬ物はあるかもしれませんがね！

贈り主…半霊側

稟「やっぱり妖夢は俺の味方だ……」

幽々子「妖夢ったら心配すぎよ。私だって分別してるんだから」
楓「でもちゃんと脅してるのが妖夢らしいね。さすが辻斬りみよん♪」

稟「（何処で聞いたんだ…？）確かに…。しかし、スチュアートがそんなに気になるのか？」

幽々子「真面目だからね、あのダボダボな服を綺麗にしたいと思ってるのかも」

稟「そんなものなのかな？　じゃあ質問の解答なんだけど…：…難しいな」

楓「どうして難しいの？」

稟「言ってみりゃ、過去から来た奴なんだ。19XX年」

楓「20世紀兵器アンドロイド少女」

稟「いろいろ混じってるぞ」

楓「でも凄くないですか？　20世紀にアンドロイドって近未来じゃないですか」

稟「まあ、確かに…」

楓「でもアンドロイドって人それぞれ解釈があるよね。世界間でも男女で呼び名が違ったり」

稟「聞いた事ある。アンドロイドと言うと機械みたいな人間だったりまるっきりロボットだったり。スチュアートの場合兵器をもとに一から造られた…と思う」

楓「でさ、スチュアートって何軍所属？」

凜「え？ た、確か旧アメリカ陸軍所属だったはず」

楓「そっか」

凜「……解答はこのくらいか。……ってあれ？ 幽々子さんは？」

楓「幽々子さんはお腹空いたって休憩室に行ったけど。多分差し入れでも食べてるんじゃない？」

凜「さっきハガキにも書いてあったのに……」

楓「ま、幽々子さんだからそこは妥協♪」

凜「……ああ、もうすぐ時間じゃないですか」

楓「あれ？ もう？ じゃあ最後に妖夢に一言言いたい」

凜「変な事言わないで下さいよ。場がシラけますから」

楓「大丈夫大丈夫。まあ……、言うのも恥ずかしいけど／＼／＼」

凜「じゃ、やめなさい！」

楓「いや、言います！」

凜「じゃあ止めませんが、途中で切ります」

楓「うわっ、ひどっ」

凜「少なくとも楓さんより酷くないと自負していますが」

楓「じゃあ……」

凜「溜めないで下さい」

楓「……」

凜「……」

楓「私の事をお姉様って呼」

凜「えー、ご試聴ありがとうございます。ではまた次回……」

楓「ちょ、まだ五分の一しか」

第20話 射命丸文、決死の写真撮影（前書き）

今回はオリキャラが新たに三人出ます。後半に守矢神社組も。

第20話 射命丸文、決死の写真撮影

現在、幻想郷では危険な外来人テロリスト、キョウジに対する防衛隊を作り上げた。

外来人の桜之宮稟、常盤楓を中心に霊夢も入れた白玉楼のチーム。スチュアート中心に魔理沙も含む迷いの竹林創立のTrick Company（あの一件以来因幡てゐるが「これからはスチュアート大先生と呼ばして貰うウサ」とか言って永遠亭のバックアップを約束した。証人に鈴仙も連れていたので多分大丈夫と思われる）

それと別に個人でキョウジについて調べている者がいる。

それが射命丸文。

人里の暴力事件以来、何かと外来人について情報を集め回っている。

文々。新聞にも端っこに「不審な外来人の情報を求めています。何かありましたら射命丸文にお知らせ下さい」と丁寧に掲載している。

文は霊夢から情報を聞いて毎日人里を上空から観察している。だが成果は上がりず日にちだけが過ぎて行く。

「ハァー、見落とさないようにしっかり見てるはずなんですけどね……」

文が溜め息混じりに呟くのも無理は無い。記者の本業である新聞

作りも削って毎日二時間、自分の愛用するカメラを持って人里を上空から徘徊する。

その間ネタになるものがあればまだいいものの、平和な人里ではちよつとした出来事くらいで新聞に載せる程でないが多い。

そして今日も二時間を回ったところだ。

「もう時間ですか……。あんまり長くすると新聞作りに影響しますからね……」

今日の徘徊を終了し、妖怪の山へと戻る。今日もネタらしいネタが無かった。

「うむむ、外来人に関するネタなら人気間違い無しですが、地道に幻想郷全体での出来事を搜した方がまだネタを仕入れられますか……」

道中、吐き捨てるように言い、自分の家に帰る文。

すると文の家である人物が待っていた。

「ふふふ、待ってたわよ、文！」

「おや、これはこれは私の家にまで来るとは珍しい。ついに私のネタ探しの素晴らしさに感動し、私に弟子入りする為に待っていたのですね」

「はあ！？ 何勝手な事言ってるの！ なんで私があんたみたいな

妄想新聞を書く奴の弟子になるのよ!」

文の家にいた者こそ同じ鴉天狗の新聞記者にしてライバル『花菓
子念報』の発行者、姫海棠はたて。

「じゃあ何の用で? まあ、ヒッキーのあなたがここに来る事自体
私にとって大事件ですが」

「そうやって威張れるのも今のうちよ!」

文が軽蔑的にはたてを唆すが、対称的に強気に出るはたて。

「あんた、最近自分の新聞の端っこに外来人の情報を求めてるじゃない? これはどういう心境なのかしら?」

はたては手に持っていた文々。新聞を広げ、広告欄を指差して追
及してきた。が、文は一蹴するように言い放つ。

「別にネタとなる情報を集めるのに人から聞いた方が早いでしょ?
外来人情報だったら募集した方がもっと集まるじゃない」

「ちょっと、あんたそれ本気で言ってるの? この前の新聞でウケ
が良かったから調子に乗り始めてない?」

一蹴しても強気で接するはたて。それどころか文に対して不満が
あるようにも見える。

「まどろっこしいわね。はっきり言いなさいよ」

「文、最近あなたは妖怪より外来人をネタにして記事にしてるわ。」

でもそんな博打に近いやり方で人気が取れると勘違いしてない？
そもそも自分からネタ探ししないで人から聞くだけなんて妄想新聞
に拍車を掛けるだけじゃない。つまり、今のあんたの新聞は私の新
聞より劣ってる、退化しているのよ！」

言いたいことをビシッとやってやったと思わんばかりに勝ち誇つ
た表情をし、口元が少しにやけるはたて。

ところが、

「そうですか。わざわざ指摘してくれる為に来たんですか」

と、文は反論どころか素直に認めてしまった。

はたても一瞬言葉を失い、文を疑った。

（い、いつもなら反論して私の新聞こそ時代遅れだの言うと思った
んだけど…）

「あ、文！ あんたなんで素直に認めてるのよ！ あんたらしくな
いわね。悔しいなら何か言いなさいよ！」

さっきの発言の真意を確かめる為、もう一度尋ねる。

だが、

「いや、はたての言う通りです。というより敵に塩を送る発言です
よ」

「そ、そんなつもりで言ったんじゃないくて」

「さて、そろそろ新聞書きますから家から出なさい！」

「ちょ、文！ 文！」

はたてを無理矢理玄関に押し込み、外に出す。扉を閉め、嚴重にロックを掛けると文は扉に背中を当ててまた溜め息をつく。

「ふう、はたてらしくないけど私らしくもない。でも今のはたてに言えないわね」

文ははたてがこの前みたいに被写体泥棒（対抗新聞作成に文についてきた）をしたらはたてにまで危険が及ぶのを危惧した。

（霊夢さん達も動き始めてますけど、私は新聞記者として必ずや外来人の正体を暴いてやります！）

一人で意気込み、椅子に座ると新聞作りを再開する。

文をここまで動かす原動力はスクープに対するプロの新聞記者の精神と安全な幻想郷にしたいという清く正しい心である。

二日過ぎ、キョウジは今、ナグマホンを魔法の森に動かし終わったところだ。

「これでいいでしょう」

香霖堂で手に入れた軽油はナグマホンに馴染み、今までウンともスンともいわないナグマホンは普通に走るようになった。

「後は工具を回収して身を潜めるだけ……」

キョウジはもといた場所に置いていた工具を回収しに森を出る。すると、キョウジの背後から誰かが近づいていた。

「ハッ！」

何者かの気配を感じ取り、後ろに振り返った時には遅かった。

「キョウジさくん、会いたかったよぉ〜！」

キョウジよりも身長の高い女性がいきなり抱き着いてきたのだ。

「なっ!?!? あなたまでこの世界に!?!?」

「キョウジさくん、貴方がいきなり消えた時はビックリしましたよ〜、すーっごく心配したんですよぉ〜」

キョウジがうろたえながらも女性から離れようと試みるがしつかり抱き着いてきて身動きが取れない。それどころか制服のボタン沿いに指を這わせる。

「ねえ〜、キョウジさん。せっかく出会えたんだし、このままデートしようよ〜。デ・エ・ト♪」

「……少し離れなさい」

「もお、そんな嫌がらなくてもいいじゃない、こんな機会滅多にないんだから」

キョウジを積極的に誘い込もうとする女性。キョウジにとって災難でしか無かった。が、運よく助け舟が来た。

「リカ、その程度にしろ。キョウジが困ってるだろ」

女性が来た方向からキョウジよりも若い青年が注意してきた。

「何より！　せつかくの感動の再会に水を差す気い？」

「いいから離れろ」

「ちえ」

不満を垂れながらも青年の注意で渋々キョウジから離れる女性。

「助かりましたよ、ホルトさん」

「いや、それよりここは何処だ？」

ホルトと呼ばれた青年は周りを見渡してキョウジに尋ねる。

青年はキョウジと同じR R Fの服装で金髪のボブカットでブルーの瞳、生真面目な顔立ちをしている。

軍帽をつけており、最年少で将校クラスに入った天才指揮官でもある。

「別にいいじゃん。自然豊かで素敵じゃない、ね、キョウジさん」

「いちいち首を突っ込むな。現状把握が最優先だ。もっと分別を弁えろ」

「やーだよーだ」

リカと呼ばれた女性は同じR R Fの制服にミニスカートを着ている。髪はセミショート黒髪で幼い顔立ち。やや黄色の瞳と薄いブルーの瞳のオッドアイである。

ホルトやキョウジをそっちのけに自然を満喫する。

これでも一応はキョウジの親衛隊であるからキョウジにとって厄介なのだ。

「まあ、彼女には後で言います。しかし、実は私もここ数日前に来たもので、僅かな情報しか把握出来ていませんが」

「構わない」

キョウジが説明に入ろうとした時、再び森から女性が現れた。

「おや、チカさんまで」

「ああ、あれで全員だ」

チカと呼ばれた女性は長身でR R Fの制服を着こなしている。リカと違いスカートではなく女性用の長ズボンである。髪はロングでややピンクがかった白い髪である。大人の美人を彷彿させる顔立ちで、リカ同様薄赤い瞳と薄いブルーの瞳のオッドアイ。

彼女はホルトの親衛隊であるが、リカと違い落ち着いており大人

しい、というより無口である。

ちなみにチカとリカは対称的だが姉妹であり、チカが姉、リカが妹だ。

チカはホルトの傍に寄り、キョウジに会釈するとそこで待機した。

「リカ、あなたも聞きなさい。大事な話ですから」

「はい」

キョウジが呼び掛けて漸く話を聞くようになり、キョウジは三人に幻想郷の説明を始めた。

本当に偶然であった。少しばかり人里から範囲を広げて上空徘徊したところ、香霖堂よりさらに人里に離れた場所に男女四人がいるのを文は見つけたのだ。

「霊夢さんの証言通り奇妙な服装をしています。もしかして例の外来人かしら？」

早速カメラを構えるにとりが取り付けた最大20倍ズームで顔を捉える。

「でも外来人は一人では？ 同じ服装してますし、もしかしたら仲間かも」

カメラのシャッターをきりながら呟く文。もしかしたら予想以上

のスクープではないかと思った。

「そうです、スクープですよ！ 遂に問題の外来人を捉え、さらにはその仲間さえも独占撮影したのですから、これで私の新聞の独占勝ちですね！ フッフッフッ、私を劣ってる新聞と言ったはたてにギャフンと言わせますよ」

と、撮影していると男女の近くに獣の妖怪が近づいていた。どうやら人間を見つけ、一直線にその男女に向かって行った。外来人達も気づいたようだ。

「幻想郷に来た外来人は何か能力がある者もいると聞きます。もしかしたら何か見れるかも」

期待を乗せてシャッターチャンス逃さず構える文。

獣が飛び掛かって来た時だった。

女性二人が懷から奇妙な形の物体を取り出し、獣に向けるとトリガーを引いた。すると物体から出た弾丸は獣のあらゆる部位に撃ち込まれそのまま地面に落下し、息絶えた。

もちろん文はその瞬間をバッチリ捉えた。

「よし！ これで十分でしょう。とにかく危険な奴らと判断出来る材料となりましたし、奇妙な物体は桜之宮稟さんから聞けば問題無い。善は急げです！」

文はこの場を後にしてまずは新聞作りに家に戻ろうとした。

「待ちたまえ」

突然文の背後から声が聞こえ、振り返ってみると驚いた。

さっきの帽子を被っていた外来人が何かを文に向けていたのだ。

「あややつ!？ 空を飛べる能力の外来人がいましたか!」

「外来人？ 我々の事か。まあいい、今から我々の言う質問に答えろ。勝手な行動をしたら、撃つ」

「はっ、あなたみたいな空を飛べる程度の人間が妖怪である私に勝てるっても?」

あくまで文は強気に出る。相手が空を飛べるなら能力はそれだけである。そして幻想郷最速の称号を持つ文なら先程見た飛び道具なら避けられると自負している。

「そうか。だが例え妖怪とはいえ、今我々の存在を誰かに伝えられては困る」

青年も文に怖じけづくことなく冷静に話しつづける。

「もう遅いわ。今、幻想郷ではあなた達を追っている人間が何人かいますからね、私を押さえても無駄な事よ!」

「が、それはキョウジだけだろう？ 我々三人の知っているのは現

時点で貴様だけだ。質問は無しだ。悪いが口封じさせて貰う」

青年は間髪入れずに物体から弾丸を発射する。

「遅い遅い！ そんな直線弾幕じゃあ誰にも勝てないわよ！」

疾風「風神少女」

スperlカードを発動し、弾幕を展開する文。初めて見る攻撃に外来人もうろたえだした。

「な、なんだこの攻撃は！？」

「これが弾幕よ！ 喰らいなさい！」

弾幕が一斉に外来人に襲い掛かる。空を飛べるだけあって避けるのは上手いが、それだけだ。

それでも外来人は反撃に文に撃ち込むが、簡単に避けられる。

「チッ、ここは降りるか」

外来人は弾幕を避けて地面に降下した。が、至る所に弾幕が掠り服が破けていた。

文は追い掛ける事なくその場を去った。

ホルトはもといた場所に戻った。ホルトの姿を見て三人は驚愕した。

「ホルトさん、ボロボロじゃないですか」

「ちょ、ホルト大丈夫なの？」

「ホルト指揮官、怪我は？」

「心配するな。攻撃は掠っただけで怪我はない」

息は上がっているが、無事であることを示すように身体を動かすホルト。

「だが逃げられた。済まない」

「いいえ、この世界ではあれが普通なようです。私も初めて見ました。で、ホルトさん」

キョウジは先程ホルトが持っていた小銃を拾い、弾倉を取り出す。

「さっきの方に、何発撃ちましたか？」

「……五発だ」

それを聞くと薄ら笑い、カートリッジを小銃に戻すキョウジ。リカとチカはどちらも無言でホルトとキョウジのやり取りを見守った。

文は速度を落とし、少し遠回りをして家を目指した。妖怪の山の山頂を経由するルートだ。

その理由は、さっきの外来人が追い掛けて、妖怪の山に入ってくれば直ぐさま仲間の天狗が駆け付けてくれるからだ。だが、それも杞憂に終わった。

「追い掛けてはこない……。ちょっと心配しましたね」

文はホッとしてゆっくり飛行する。カメラを取り出して、写真を手帖に挟む。

「まずは霊夢さん達に連絡しないと。あいつに仲間がいたという事実を伝えなくては。柩に写真を渡して焼き増しして貰ってから新聞を……ゴホッゴホッ」

言いかけていきなり咳込んだ文。咄嗟に手を口に当てて、その手を見た。

血が付いていた。口から血を吐いたのだろうか？ 文はすぐ自分の身体を見てみた。右脇腹から服が徐々に赤く染まっていた。

「えっ！？ こ、これは何！？」

突然現れた傷に動揺する。その時右腕に鋭い痛みが走り、何か突き抜けた。

腕を見ると小さい穴が空き、出血していた。

「ま、まさかさっきのはわざと外して撃って…！」

文は素早くこの場を移動しようとした時、右翼にまた何か突き抜けた。

「うああっ！！！」

翼から伝わる痛み顔をしめる文。一瞬突き抜けた物を見たが、まさしく先程外来人が撃った弾丸だった。

「まずい、翼を撃たれて高度が…」

上手く飛べなくなった文は徐々に降下し始めた。その間にも弾丸は容赦なく文の左足を撃ち抜いた。

「痛ったああっ！！！」

新たに鮮血が吹き出る。もはや逃げるにも難しくなった。

（やばい、ここから家まで遠い。守矢神社なら近いはず）

文は直ぐさま守矢神社に方向転換して一気に加速した。やはり翼を負傷したので速度は出なかったが目前にまで見えてきた。

（あともう少し、もう少しで…）

降下し続ける身体を無理矢理起こして加速する。

だが、速度が遅くなった文に最後の凶弾が貫いた。

「うっ、あ……」

背中から身体を貫き、胸から弾丸は飛び出した。心臓には当たらず、致命傷では無かったが、文を力尽きさせるのに十分な着弾位置だった。薄らいでく視界には守矢神社が見えていた。

「あ……と……」

文は羽ばたくのを止めて降下していった。

ちょうど神社の裏側を箒で掃除していた東風谷早苗が神社の正面でドサツという音を聞いたのはその後だった。

「あら？ 今の音って新聞じゃないわね？」

守矢神社にはこの夕方の時間帯に文から新聞が届く。霊夢達には不人気だが、山の上の守矢神社にとっては幻想郷の状態を知る大事な情報源となっている。

早苗は正面に回りこみ、神社の陰からヒョコッと顔を覗かして境

内を見回した。そして信じられない光景を目にした。

「あれは……文さん!? 文さん!」

早苗は文のもとに駆け出した。血を流してぐったりした文の姿を見て言葉を失いそうになるが、必死に呼び掛ける。

「文さん、しっかりして下さい! 誰がこんな酷い事を……」

「うう……」

低い唸り声を上げて文が目覚めます。

「あ、文さん! 待って下さい! 神奈子様と諏訪子様を呼んで来ますから!」

早苗が神奈子と諏訪子と呼ぶために立ち上がろうとすると文の左手が早苗を掴む。

「ちょ、文さん!?!」

「待って……これを…枕に…」

そう言って怪我した右腕を動かして写真を挟んだ手帖を出す。そして微かに口を動かして早苗に伝える。

「霊夢にも……伝えて…」

そして文はそこで意識を失った。

「文さん！ 文さん！」

早苗はまた必死に呼び掛けるが文は目を覚まさなかった。早苗の目から涙がぼろぼろ落ちていた。

「うーん、早苗、大声出してどうしたの……ってあれは！？」

早苗の声を聞いて出てきたのは洩矢諏訪子だった。そして泣いている早苗と血まみれの文を見て直ぐさま神社に向かって大声で叫んだ。

「か、神奈子おー！ 大変だ！ 鴉天狗が大怪我して血を流しているよー！！！」

「本当か！？ 今行く！」

直ぐに八坂神奈子が神社から飛び出して諏訪子も文に近づく。

「さ、早苗、一体これは？」

「わ、私にも分からないんです…うつ、うつ…」

「まだ意識はかすかにある。とにかく天狗達のもとに運ぶぞ、諏訪子は早苗を見てくれ！」

神奈子は文を背負い、天狗達のもとに行った。

日が沈みかけた守矢神社の境内にて、文がいた場所には血糊と血に染まる手帖だけ。

「仲間の天狗達によれば一命は取り留めましたが、意識は戻ってません」

その日の夜、守矢神社に連絡してきたのは同僚の犬走椋。

「本当に良かった……」

早苗は心底ホッとした。本当に死ぬのではないかと心配していた。

「傷は小さい穴が五箇所。どれも突き抜けていますが、危険でしたね」

「だが、文だって妖怪だ。あんな派手にやられるなんてありえない。弾幕勝負ではないはずだ」

神奈子が疑問を楯に打ち明ける。弾幕勝負なら怪我はするかもしれないが、あそこまで重傷を負わないはずだ。ましてや文は幻想郷最速。それが疑問を増幅させる。

「実はそれなんですけど……」

柩はある物を神奈子達に見せた。

「これって、外の世界の弾丸じゃない！」

諏訪子が弾丸を見て驚く。

「はい。しかもかなり妖力が強くて、だから文様もあそこまで追い詰められたんですよ」

それから幾つか疑問をぶつけて柩に答えさせた。だいたい質問し終わると神奈子は柩を下がらせた。

「大体分かった。天狗達の所に帰っていいぞ」

「では、文様の容態に何かあったらまた連絡しに来ます」

そう言い残して柩は神社から出た。

「しかし、一体誰がこんな事を……」

神奈子が独り言のように呟くが、当然傍にいる早苗と諏訪子にも聞こえている。

「んー、一応古参の妖怪がやられたんだし、私達も動いた方がいいのかなー」

諏訪子が神奈子に今後どうするかも含めて尋ねる。

「うむ、しかし、今の時点で打つ手がない。が、放っとく訳にもいかない」

「あの……神奈子様、諏訪子様……」

普段の早苗にしては珍しい程消え入りそうな声で呼ぶ。早苗は血の付いた手帖を持っていた。

「そういえば、それって天狗の手帖だよね？」

「はい。それなんですけど……全部書いてあります。文さんがしていた事全部が……」

「「えっ？」」

早苗は手帖を差し出すと神奈子と諏訪子はその手帖を見た。

「……凄い。こんなに細かく……」

「やはり外来人が関わっているか」

手帖を一通り見て早苗に渡す。

「明日、早苗は博麗神社に行ってこのことを伝えなさい。博麗の巫女なら必ず動くわ」

「分かりました、神奈子様……」

そう言って早苗は自分の部屋に戻った。

暫くして諏訪子が神奈子に話し掛ける。

「随分ショック受けてるようだけど、早苗大丈夫かなあ？」

「文の死に際を目の当たりにしたんだ。早苗にはキツすぎたのかもしれない。現人神ではあるが、まだ年端の少女だからな」

「……」

いろいろと不安な思いが残る中、守矢神社は夜が更けていく。

第20話 射命丸文、決死の写真撮影（後書き）

おまけ

楓「第9回、幻想郷ラジオです！」

稟「今回かなり無理したな。東方、オリキャラ合わせて七人も出すって」

楓「そのくせ私達の出番は最初だけ。名前のみ……。なんでですか！ えこ贔屓は大反対です〜！」

稟「どう考えても無理な回ですって」

楓「稟君は気楽でいいよね〜。どうせ名前すら出てこない回が立て続けに十回あっても気にしないんでしょ」

稟「それは困るが、一応主人公だからそうはならないと思うが？」

??「そうかしら？ 私は一話ごとに出演してない時があったのよ？」

稟「そうか。でもそれは単に……って霊夢!？」

霊夢「単に、何かしら？」

稟「スペカ構えながら聞かないで！ い、今のは言葉のあやだ！」

霊夢「そう、ならいいわ」

楓「というわけで今回のゲストは楽園の素敵な巫女さん、博麗霊夢です」

霊夢「どうぞ宜しく。博麗神社では随時素敵なお賽銭を求めているわ。御利益もボム一個分はあるから気が変わる前に素敵な賽銭箱にお賽銭を入れなさい」

稟（下手な商売宣伝かよ……）

霊夢「ちよつと稟！ 今下手な商売宣伝するなとか思ってたでしょ！」

稟「ギクッ、い、いやそんな事考えてない。ホントだよ？」

霊夢「今ギクッて言ったじゃない」

凧「いや、ホントに違うって!」

楓「……………ハッ、し、失礼しました、美味しそうな痴話ゲンカは後で見るとしてハガキを読みましょう」

凧「何が美味しそうな痴話ゲンカだ」

霊夢出演を記念して送ってみたぜ。相変わらず支離滅裂な会話だけれどウケはいいぜ。全くうらやましい限りだ。

で、質問なんだが、私のあげたスペカは使ったか？ 実はあのスペカは威力が1.5倍なんだ。それと、機会があったら弾幕勝負しようぜ!

霧雨魔法店…10/24より二日間限定開店セール実施予定!

凧「魔理沙、お前の店はそんな場所じゃないだろ。しかも予定って…」

楓「行ってみようかな。私行けないけど」

霊夢「やめときなさい。どうせ集めたがらくたでも纏めて売り付ける気だわ」

楓「そーなのか」

凧「あえてツツコミませんが、質問の解答ですが、いつの間にか霊夢に盗られて俺に対して使われました」

霊夢「そりゃあ凧が悪いからよ」

楓「そうですよ。約束を破ったんですからそれ相応の罰は当然ですよね」

凧「1.5倍威力増しのマスパはないだろ……」

霊夢「えっ? じゃあ私のスペカが良かったの?」

稟「あ、いやそういう意味じゃなくて」

霊夢「でも私のスペカだったら二重結界で稟を閉じ込めるつもりだったけど？」

稟「何する気だったの!？」

霊夢「動けなくなった所を襲おうかと」

稟「危ねえ! やっぱマスパで良かったわ!」

霊夢「やっぱりマスパがいいのか。後で魔理沙に借りようかしら。
2. 5倍威力増しマスパでも」

稟「それ確実に死ぬから止めなさい!」

霊夢「じゃあ二重結界かマスパかどっちか決めなさい!」

稟「決めなさいっておかしいだろ!」

霊夢「煩い! 今まで私に構ってくれなかった分を今ここで晴らすわ!」

稟「無理矢理なこじつけをするなよ!」

霊夢「問答無用! 『夢想封印 集』っ!」

稟「よりによって『集』って……ぎょうえあああー!!!」

楓「フフフ♪ 稟君と霊夢さんの痴話ゲンカ、美味しくいただきました♪ では時間が来ましたので、まだまだ見足りないですがここでお別れです。ご試聴ありがとうございました!」

稟（このラジオもう辞めたい……）

第21話 天狗と血の文花帖（前書き）

お待たせしました。

早苗が何故か悲劇のヒロイン役に。

第21話 天狗と血の文花帖

資料と懷中時計を神社に持ち帰ってから三日が経った。

俺とスチュアートは魔理沙と別れ、神社に帰った。この三日間、ずっと神社で外来人テロリストの対策案を四人で相談しあっていた。

が、三日経った今でもまともな案は生まれなかった。

それもそのはず、情報が足りないのだ。実際に会った事もなければどんな能力を持っているか検討もつかない。もし……もし八雲紫がいたなら、今の幻想郷を見て何を思うだろうか……。

そして、次の朝を迎えた。幻想郷では秋に向けて木々が紅葉している。秋の大好きな神様や霊夢が大好きな季節が巡ってきた。

俺はどちらかというと冬が好きだが、どこぞの妖怪や妖精ほどではなく、何となく好きなのだ。

今は秋ではあるが、四季を通して見る幻想郷の風景はまた格別な趣を連想させた。

たまの手伝いで俺が境内周りを掃除していた時の事だ。

博麗神社に珍しい客がやって来た。

その客は、緑髪で霊夢と同じ腋を出した独特の巫女服を着た少女

だった。

直感的に俺は東風谷早苗と分かった。

が、どこか様子がおかしい。全体的に雰囲気が暗いのだ。そしてよく見えないが、手に手帖らしき物を持っていた。

境内を箒ではわいている俺に気づくと、

「あの…、すいません、霊夢さんは……いらっしゃいますか？」

と、やはり暗く小さい声で聞いてきた。

「ああ、霊夢か？ 霊夢なら……」

と神社に振り返ると、ちょうど霊夢がいた。

「稟、大体終わったなら上がりなさい……って早苗じゃない」

霊夢も早苗に気づくと早苗に近づいた。

「……!?」

一瞬霊夢の表情が崩れた。多分早苗の暗い雰囲気を感知取ったのだろう。

「霊夢さん……、話がありますから……神社に入れてくれますか？」

「早苗？ 早苗よね？」

「ですから話がありますから……」

はいはい、分かりましたと言って早苗を神社の部屋に招き入れる。俺も同伴する。しかし、あの手帖、どこかで見たような気もしたのだが。

部屋に入っても依然暗い表情の早苗。霊夢がお茶を三つ出して、一つを早苗の近くに出しても頭を下げるだけだった。

「早苗、あんた様子がおかしいわよ？ 具合が悪いの？」

霊夢も暗い表情の早苗を心配して尋ねる。

「いえ。具合は悪くないです。ただ……」

と言い、そのまま押し黙ってしまった。暫く待っても顔を下げたままである。これでは話が進まないと思い、俺は出来るだけ言葉を選んで話し掛ける。

「あの、推測ですけど、何か怖いことが起きたりしましたか？」

「怖いこと？ 稟、何を言って……」

霊夢が何を言うんだという感じで言って早苗を見る。

僅かに早苗は震えていた。身体中が。近くに置いてあるお茶の水面も微かに波立っていた。

「早苗さん…ですよね？ 博麗神社に来たって事は何かがあって伝えに来たですね？」

早苗は答えはしなかったが、首を縦に振った。

「怖い目に合って話したくない気持ちも分かりますが、あなたは何かを伝えようと怖さを乗り越えてここまで来た。後一步です。勇気を出して言ってみて下さい。俺達はいつまでも待ちますから」

相手を慰めるにしてはぶっきらぼうな言い方だがそれしか思い付かなかった。

やがて顔を上げて、ぽつりぽつり語り始めた。

「……文さんが……」

「文さん？ 射命丸文の事？」

漸く話し始めた早苗に霊夢が応える。

「はい……昨日の夕方です」

「昨日の夕方……」

早苗は一つ一つ思い出すように言葉を紡いでいく。

「私は…ちょうど神社の裏手を掃除してて……神社の正面で何かが落ちてきた音が聞こえて……何だろうと境内を見たんです……それら……」

ここまで言って再び顔を俯ける。相当な出来事があったようだ。俺は霊夢に自分から話させるように指示を出して、霊夢も一言も話さなかった。

再び早苗が顔を上げる。決心したようだ。しかし、出てきた言葉は俺と霊夢の予想を斜め上に越えた。

「…境内で……血まみれの文さんが倒れてました……」

「「ええっ!？」」

つい霊夢とハモってしまい、一瞬早苗がビクツとした。

「あ、ああ、済まない。続けられる?」

早苗は無言のまま頷く。

「それで……私は直ぐに駆け寄って名前を叫びました。その時……ほんの僅か文さんが目を覚めて、私にこれを……」

早苗は先程見た手帖を俺達に見せた。もう間違い無かった。文の手帖だ。しかも血に濡れた手帖。

「渡した直後に……霊夢さんに伝えるよう言って……そのまま意識を失って……うつ、うつ」

遂に堪えきれなくなり、涙腺が崩壊し、大粒の涙が頬を伝い落ちる。

「うぐっ…、わた、私、あの時、文さんが…し、死んじゃったんじゃないかって思ってた…ぐすっ…それが怖くて怖くて…ううっ」

早苗にとってどれだけ恐怖となったのだろうか？ かつて常盤さんが死に際の時に居合わせた妖夢と同じ状況だったのだろう。

一応通信機を卓袱台に置いてあるが、常盤さんはまだ一言も声を発していない。

「そ、それで…ズズッ…神奈子様が…直ぐに文さんを天狗達のもとに運んで…一命は取り留めましたけど…」

溢れ出てくる涙を拭いながら話し続ける早苗。見ているだけで心が痛む。

「文さんは…外の世界の弾丸に五発撃たれました…妖力がとても強くて…致命傷でなくても重傷を負いました」

驚愕の事実が判明してしまった。幻想郷最速の射命丸文を追い込んだのはまさしく外来人テロリストだ。

「で…、その文さんの手帖に全てが書いてあります…見てください…。私からは…以上です…」

辛い思い出を語った早苗はまだ震えていた。早苗に落ち着かせるように俺は言う。

「話は分かりました。文さんを追い込んだのは多分外来人の危険な奴です。実は今俺達もそいつを追っています。早苗さん、あなたは

一旦帰った方が宜しいです。後は俺達に任せて下さい」

安心させることは出来ないが、早苗の持つ恐怖を取り除いてくれるのは二柱の神様しかないと思い、帰ることを勧めた。

ところが、早苗は霊夢に向き直ってこう言った。

「霊夢さん……図々しいと思いますけど……一泊だけ泊めてくれませんか？」

早苗は博麗神社で宿泊希望を伝えた。

「な、なんで早苗が泊まるのよ？ あんたの神社に神様がいるんだから、そいつらに慰めて貰いなさいよ」

言葉の選び方を考えて貰いたかったが、意見としては霊夢と同じだ。わざわざ一泊する必要は無いはずだが？

「昨日、床に付いたんですけど、文さんの姿が浮かんで寝れなかったんです。だから博麗神社に泊まりたいんです。お願いします！」

つまり早苗は文の姿がトラウマとなっている。親しい仲である分、相当ショックを受けたのだろう。

「…分かりました。何もありませんが一泊して結構ですよ」

「ちょ、ちょっと稟！」

霊夢をそっちのけて承諾した俺は当然霊夢から反対を受ける。

「勝手に決めないでよ！ 決定権は私だからね」

「霊夢、今の早苗さんはトラウマがある。トラウマの現場に近い守矢神社では二柱がいても無理だ。だからこそここに泊まらせるべきだ」

俺は早苗のトラウマを和らげるために提案するが、

「トラウマってあんた治るのにどれほど時間が必要か分かってるの？ もし治したいと考えてるなら年単位で覚悟しないといけないし、むしろ永遠亭がいいじゃない！」

霊夢は正論で反対する。確かにこれは早苗自身の心の問題であるから間違っていない。

「霊夢さん、お願いします。ここがいいんです！ お願いします。お願い……」

早苗は必死に霊夢に嘆願する。俺も霊夢を見つめる。やはり早苗をこのまま帰してあげるのには抵抗がある。

「俺からも頼む」

「~~~~~！ わ、分かったわよ！ 泊まりたければ泊まりなさい！ 稟に免じて許してあげるわ」

遂に霊夢が折れると、再び涙を流して霊夢に抱き着いた。

「あ、ありがとうございます！」

「代わりに神社の清掃とか手伝ってもらうからね」

「はい、お任せ下さい！」

こうして暫く早苗は博麗神社で過ごすことになった。

その後、早苗は泣き疲れた赤子のようにいつの間にか寝てしまった。昨夜から一睡もしていないからだろう。仕方ないという表情の霊夢は早苗を隣の部屋に移動させて寝かした。

霊夢が部屋に戻り、「お茶を淹れてくる」と台所に行ったのと同じ時に通信機から声が聞こえた。

『早苗さん…ですよね。文さんの死に際を目の当たりにしたんですね』

「言っておきますが、常盤さんも妖夢に同じ目に遭わせたのを忘れてないでしょうね？」

『忘れられるはずないわよ……。妖夢には謝りきれないくらい心に傷を付けたのだから……。妖夢はまだ強いからいいけど。だから私も早苗さんが心配なのよ』

やはり一度自分のせいで妖夢にそのような印象を与えてしまって

いるので、死に際を目の当たりにした人の気持ちは分かるようだ。

「しかし、問題は『文が銃で撃たれた』こととこの手帖の中身だ」

霊夢はお茶を入れ直して部屋に戻ってくる。

「で、文は全てをそれに書いたのよね？」

「早苗さんの話だな。とりあえず中身を見よう」

俺は手帖の紐を解いてそっと開けた。と同時に挟んであったのか四枚の写真が滑り落ちた。それを霊夢が拾い、卓袱台に広げる。

「おい、嘘だろ……」

写真に写っていたのは男女四人。そして一枚の男性は紛うことなく資料で見たテロリスト、キョウジだった。

「なんて事だ……。文は俺達と別に個人で奴らを調べていたのか。そして突き止めたんだ！ 文は奴らに見つかり口封じされたんだ！」

だから守矢神社に行ったのかもしれない。きっと命からがら逃げる事に成功し、最後の力を振り絞って伝えようとしたんだ。

「文……、なんであんた……。私達にも言わないで勝手な……」

霊夢もショックを受けている。俺だって信じられない。

正直うざったいだのしつこいだの迷惑千万だので避けていた射命丸文が危険を顧みずここまで調べていたなんて誰が気づけるだろうか。

俺は手帖を見た。写真を挟んでいたページで文章は途切れていたが、一行だけ文の想いと思われる筆跡が殴り書きで書いてあった。

後は任せます。願わくは幻想郷の平和の再来を祈る。

「あの馬鹿……」

霊夢の目から一筋涙が流れ落ちた。

文も幻想郷で古参の妖怪。幻想郷を見守ってきた存在の一つが天狗である。文もその一人。文にも俺達と同じ、いや、俺達以上に幻想郷を守る気持ちがあったのだ。

「もっと文を信じていれば、文を頼っていれば、きっと文も分かってくれたはずなのに、私達は……」

「霊夢……」

慰めようにも何と言えは分からない。だから、

「っ！　り、稟……／＼」

そっと抱きしめた。

「文は俺達にも伝えようとしたんだ。文も孤独に戦ったとはいえ仲間だった。文が命を懸けて届けた想いを無駄にはしない」

「稟……泣いてるわよ……」

俺は冷静でいたつもりだったが、目尻を触ると涙が出ていたようだ。やはり俺も文を心配して悲しかったのだろうか。はたまた後悔の涙なのか。俺には分からない。

『……私がいるの忘れてるわね……』

小声で呟く楓であった。

気持ちが落ち着いた所で気を取り直して手帖と写真を見比べて確認する。

「キョウジ以外の写真は服装からして仲間だろう。ますます厄介だな」

しかし文もよくこんなはつきりと撮れたものだ。おかげで特徴がはつきり分かる。

「もう一人の男はキョウジより若いし身長も低い割には帽子を被っ

てるわ」

「そして二人の女性は一人が幼い顔立ちでもう一人は大人の女性のような長髪長身。そしてどちらもオッドアイか」

「オッドアイって？」

「簡単に言えば目の色が違う奴だ。多々良小傘とか」

「覚えてない」

とりあえず特徴がはっきりすれば一目で分かる。他の特徴も通信機に聞こえるように言ってから聞いてみた。

『そうね……名前なら心当たりがある』

「本当ですかっ!？」

『まず軍帽を被っているのはホルト。R R Fの将校で天才指揮官と呼ばれているわ。彼は十七歳、最年少で将校クラスに入った』

そう聞けば確かに天才という言葉が似合う。

彼の経歴は、十歳で名門高校へ飛び級する。十二歳に帝王学を習い、十四歳に軍に入隊。しかし、周りの人間関係に慣れず上官に暴力を振るい強制徐隊。十五歳でR R Fに入り、僅か一年で将校クラスへ。

正真正銘天才の言葉に相応しいのだが、何故人間関係に慣れなかったのだろうか？

『環境が人を作ると言うじゃない？ 政府軍の環境に彼は慣れなかったみたい。酷い話よ。私より四歳年下の餓鬼のくせに生意気な』

今さらっと自分の年齢をばらした気がしたが、でも若いのは分かった。あえて黙ったが。

『女性二人なんだけど、長身がチカ、もう一方がリカ。彼女達は姉妹だけどチカはホルト、リカはキョウジの親衛隊だからかなり手強いわ』

親衛隊。自分が本当に信頼出来る部下という訳か。

こう考えてると外来人テロリストはどれも強者ではないか？ 向こうは四人だけで十分な戦力となってる。はたして自分みたいな一学生が勝てるだろうか？

「まあ、敵は大体分かったわ。それよりもうお昼よ」

「あ、もうこんな時間か。むしろまだまだ知りたい事は沢山あるのだがな……」

しかし、俺の腹の虫がぐーっとならした。身体は正直だ。霊夢がクスッと微笑してスウツと立ち上がる。

「ほら、続きは食べてからよ」

「はいはい、そうしますか」

一旦話し合いを中断して昼食を食べる事にした。
一言言い忘れたが、スチュアートは昨日から永遠亭に行っている。
一応Trick Companyの創立者だからな。外来人テロリストに対する罠を作るとか。

昼食を食べ終わったが、一皿だけ霊夢も俺も手を付けていないのがある。これは先程寝てしまった早苗の分だ。起きた時にご飯と鯖の味噌煮を勧めるつもりだ。いつの間にか俺のリュックに入っていたラップをかけて再び話し合いを始めた。

と、その矢先に誰か来た。

「霊夢、ちょっと失礼するよ」

「博麗の巫女よ、失礼する」

何の断りもなく山の神の二柱、神奈子と諏訪子がやって来た。

「ちょ、あんたら何勝手に入ってきててるのよ！」

当然霊夢が立ち上がって追ひ払おうとする。

「まあ、そんな氣を立てるな。ちょっと聞きたい事があるだけだ」

「聞きたい事？」

霊夢は瞬間的に動きを止める。

「ああ、早苗の事なんだが…」

と神奈子が言おうとした時、

「神奈子神奈子、この人外来人だよ」

諏訪子は俺を見て神奈子に報告した。すると神奈子は表情が一変し、睨みつけるように俺を見た。瞬間、俺は金縛りに遭ったかのように身動きが取れなくなった。

「そうか、お前が外来人か」

神奈子が俺に一步一步近づいてきた。圧倒的な威圧感、やはり神の名は伊達ではない。

「お前が……」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！」

俺と神奈子の間に霊夢が入り、俺を背に神奈子と向き合う。

「神奈子、早苗から話は聞いたわ。文の事も。でもコイツ……稟は違うわ。稟は確かに外来人だけど彼では無いわ！」

「だが、外来人である事に変わりは無い！ そうだろ、霊夢ッ！」

邪魔をする霊夢に威圧する神奈子。だが霊夢は退かない。

「確かにそう。でも彼はむしろ幻想郷を守るために私達に協力してくれているわ！ あんた達も文の手帖を見たでしょう？ 文の手帖に稟の姿のある写真はあったかしら？」

「…！！」

確かに俺も手帖を見たがああ四枚以外に写真は無かった。

「だが、しかしだな…」

「…か、神奈子様…？」

いつの間にか起きていた早苗がこちらの部屋に入ってきた。

「あつ、早苗！ 良かった。すぐ帰って来なかったから心配したよ」

諏訪子が直ぐさま早苗に飛び付く。受け止めた時、起きたばかりかフラッと体勢が一瞬崩れたが大丈夫だった。

「早苗、ここにいたのか…」

神奈子が威圧を弱め、早苗に向き直る。

「神奈子様、諏訪子様、心配をかけてすいません。でも神奈子様、私から言わせて貰いますが、彼は違います」

早苗はさっきと違い、はっきりとした口調で言った。

「……早苗がそう言うならそうかもな。だが、何故すぐ帰らず博麗神社に留まった？」

「！、そ、それは……」

神奈子と諏訪子にとっては問題だったのだろう。予想だが、早苗さんは文の手帖を届けたら帰る予定だったのだろう。でなければわざわざ二柱の神様が博麗神社に来るはずがない。

しかし、早苗も留まった理由をすぐ言えるはずがない。この二人は早苗の身を案じて来ている。理由を言えば何と言われるか分からない。

「あの、神様の御前にて失礼を承知の上ですが、俺が早苗さんの代わりに話します」

四人の視線が一気に俺に注目する。早苗は驚いた表情で俺を見ていた。

「貴様がか？　貴様のような奴に早苗の何が分かるというのだ？」

再び差し向けられる威圧感。身体は動かなくなるが、必死に口を動かす。

「た…、確かに、俺には早苗さんの事はよく分からない。けど、早苗さんが怖がっている事は分かったんです」

「そのような嘘が通用するとも思うのか？」

「あなたたちにとって…、俺の言葉なんぞ空虚に聞こえるでしょう。ですが…、早苗さんは自分から打ち明けてくれました。天狗の…射命丸文の死に際を目撃し、本当に文が死んでしまわないかと…それが怖いと言ってくれました！」

文の死に際を目撃した早苗さんの心にトラウマを植え付けてしまい、一晩中眠れなかったと…、だからトラウマの現場から離れたいという思いで博麗神社に来たのです！」

今朝早苗が話してくれた事をそのまま言った。しばしの間の沈黙。

「早苗、この男が言った事は、本当か？」

振り向きはしないものの、早苗に問う神奈子。

「…はい…。ごめん…なさい…。」

涙を流しながら素直に答えた。

「さ、早苗！　なんで私達に言わなかったのさ！　私達だって早苗の力になりたいのにさ！」

諏訪子は早苗から離れて早苗の目を見つめながら尋ねた。

「これは…私の心、私自身の問題だから、神奈子様と諏訪子様には迷惑をかけたくなかったから…。」

「違うよお。逆だよ。むしろ相談しないと一人じゃ解決出来ないよ。現場を離れたいのは分かるけど、相談相手がいないと良くならないと思うよ?」

諏訪子の発言は的確に的を得ている。心的障害は確かに一人ではなかなか治せない。だからこそ人の協力が不可欠だ。傷はすぐ収まらずとも共有することで負担を減らせる。所謂思いを共有すれば喜びは二倍、悲しみは半分というやつだ。こんな単純な解決方法を見逃すとは……。

「うう……っ! ごめ……んなさ……い、神奈子様、諏訪子様……」

再び泣き崩れた早苗に諏訪子と神奈子が抱きしめる。

「ホント、稟もやるときは頼りになるわね」

「いや、早苗さんの立場を考えて助けたただけだ。特別何かしたわけでないし」

「そっか。……そういう所が好きなんだけどな……」

「ん? 後半何か言ったか? よく聞こえなかったが」

「なんにも♪」

まあ、解決したからそれでいい。終わりよければ全てよしとは言
うが、ならばその終わりを最高な形で終わらせられれば上々だと思
った。

とりあえず誤解も解けたのは良かった。

「済まない。私もあまり冷静で無かった……。実は私も早苗の事は
薄々は感じていたんだが」

「いえ、俺達もこのような悲劇を食い止めて幻想郷を守るために一
刻も早くそいつらを捕まえます」

この場は一旦収まり、漸く静けさが戻ってきた。

「あの……」

再び卓袱台の手帖を取ろうとした時に、早苗がこちらに来了。

「先程はありがとうございました。……ええと……」

「あ、名前か。俺は桜之宮稟。稟と呼ばばいいから」

「あ、はい、稟さん。後、私は早苗でいいです」

「じゃあ早苗も呼び捨てでいいよ」

「え、あ、その……ありがとう、稟」

名前くらいなら大丈夫だろうと思っていたが、案の定霊夢が入る。

「はいはい、いい雰囲気はそこでストロップ。早苗、一言忠告するけど稟は私のだからね！」

「えっ？　そ、そうなんですか！？」

急に言うなよと言いたい。普通に驚いてこちらを見る早苗。

「で、神奈子と諏訪子は帰るの？」

霊夢がまだ神社の縁側で何か話している二人に振る。

「……帰りたいが早苗が気になるし」

「やっぱり私達がいないと」

先程の一件で無理矢理帰すのも後味が悪い。

「んー、早苗はどうするの？」

霊夢は解決案を探るため早苗に聞く。

「そうですねー、でも残ります。まだ不安を拭えたとは思えないので」

「だってさ、神奈子」

「むう、早苗不在のままというのも寂しいな…。いつそ神社だけを移動させればいいのだがな……」

と、霊夢が移動という単語にピクツと反応した。

「ちよい待て。神社をここに移動させる気！？ 冗談じゃないわ！この辺りに土地なんて無いのよ！」

「やはりか…。なら一旦早苗をここに置いて帰るしかないな……」

「じゃ、ちよくちよく会いに来るからね。元気にするんだよ」

結局潔くこの場を辞退し帰った二柱の神様。

「……であいつら何しに来たんだろう……」

「早苗さんを捜しに來ただけじゃないかい」

霊夢の呟きにさりげなくツツコミを入れる俺。

「あの、なんか迷惑をかけてしまったようで……」

「気にしないでいいわよ」

「じゃ、じゃあお詫びにおいしい夕食作ってあげますね」

そう聞いた霊夢は当然の如く、

「早苗、あんたよく分かってるじゃない！ 何日でも泊まっていからね！」

相変わらず食に弱い。まあ霊夢らしいしもう慣れたから別に気にしないが。

「夕食を作ってくれるのはありがたいのですが、まずはその昼食を食べて貰えると嬉しいのですが……」

ちらっと卓袱台を見て早苗に言う。

「あ、そ、そうですね……って今お昼ですか!？」

どうやら時間感覚が一時的に麻痺していたようだ。早苗がそう言うのとお腹がぐーっとな鳴るのは数秒差だった。

「あ………、じゃ、いただきます…」

ちょっぴりだけ顔を赤らめて卓袱台に向かい座る。

幻想郷に住み慣れるにはまだまだまだ年月が必要なようだ。

第21話 天狗と血の文花帖（後書き）

記念すべきおまけ

楓「中途半端な後書きから始まり、遂に、幻想郷ラジオ、祝、第10回目を迎えました!!」

村人A「いやっほー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

[illegible]

稟「ちよい待てい！ 誰だ、この前者二人は！」

楓「むやみやたらにテンションが高い人って募集したら来た」

稟「何故記念すべき回で一般募集したんですか!？」

楓「たまの事だから。ではお二方、ありがとうございました」

稟「もう退場かよ……」

楓「記念すべき回だから後書き長いんじゃないかと思った読者の皆さん、多分正解ですよ」

稟「とことんやる気ですね。分かります」

楓「うん、でも一つ問題が……」

稟「問題ですか？」

楓「実は……今回一通もハガキ来てません！」

稟「……だからなんで記念すべき回に限って誰も出さなかったの！？」

ラジオそんなに面白くないか！？ 本編が早く読みたいと思う

人なら確かに迷惑な後書きですけど、幻想郷の住民はどうしちゃったわけさ！？」

楓「まあ、無い物は無いで別の事をしましょうか」

稟「別の事？何かあるんですか？」

楓「ほら、本編でいろいろオリキャラとか増えて関係がごっちゃになってると思うの」

稟「……つまりこの回で纏めようと」

楓「そうなるね。現時点での設定とかを纏めようって事で」

稟「オリキャラのみ？」

楓「一人違うけど、そうなるかな。名前、来た世界、能力、簡単な人物説明の順になります。では早速」

桜之宮 稟

外来人

↓2036年の現実世界から幻想入り

能力…ツルハシとスキルを操る程度の能力

今だ続く戦争と家族関係から世界に絶望し、決別希望をしていた学生。帝釈天と名乗る神と駄神により強制的に幻想入り。

気ままな性格だが根はしっかりして物事を最後までやり通す。現実世界とは決別して幻想郷に生きる事を決意。現在博麗神社に居住。

霊夢は彼に好意を寄せ、楓の仲介を経て霊夢から告白を受ける。

実質的に霊夢が彼女だが他にも彼に好意を寄せている人がちらほら。知識はあるが疎いので気づかなかったり勘違いしたりする。

現在外来人テロリスト集団を追って奔走中。

能力は十本あるツルハシそれぞれに特殊スキルがあり、それらを使える。戦闘向けではないが、弾幕戦では幾つか役立つものも。共通してどのツルハシも地面を掘れる。もう一段階上の能力があるとかないとか。

常盤 楓

外来人

↓平行世界から任意で幻想入り

能力…？

一つの大陸に東西南北の四か国のみの世界から来た外来人。出身は西国。民間軍事会社（PMC）の傭兵の一人。

大人しめでおしとやかな性格だが戦闘では鬼気迫る迫力があるらしい。少女マンガを読んでいて恋愛話は好きな方。

白玉楼在住だが大怪我で現在は永遠亭にて療養中。本体の意識は無いが、内部意識だけは目覚めており、体内にある装置が信号を送り通信機が受信する事で会話が出来るとのこと（よく分からないが）。決して能力ではないらしい。

外来人テロリスト討伐任務を受けていて、稟達と協力している。

能力は現時点で不明。

スチュアート

外来人

↓19XX年のビルマ戦線にて不可抗力で幻想入り

能力…無し

オリキャラではない。が、キャラ崩壊している。正式名はあるが、ここでは兵器から作られたアンドロイドの一種と解釈する。

太平洋戦争真っ只中のビルマ戦線で日本軍相手に戦っていたアメリカ陸軍所属の少女。

めんどくさがり屋で頭も悪いが、ここぞの時の悪知恵はよく働く。大型の特注チェンソーを好み、弾丸も防げる優れ物。背中に補助カバンみたいに戦車の砲塔を付けている。

左腕に血の付いた包帯を巻いており、人には見えないがジャッキーGUNが封印されており、それを解き放つとダークフォースが現れ、世界を暗黒に包む……と本人は言っていた。

迷いの竹林で因幡てると意気投合、魔理沙まで巻き込んだTrick Company（悪戯中隊）を設立。稟達と協力関係を築いている。

能力は無いが、普通の人間ならまず勝てない。

キョウジ（恭治）

外人テロリスト

↓平行世界から幻想入り

能力…？

楓と同じ世界から来た敵。反政府反乱軍RRFの副司令官。楓の所属するPMCと対立関係にある。

性格は冷静沈着だが、キレると感情爆発し、自分を抑えられなくなる。

R R Fのパトロンである名家出身。

自分の正体を知られたく無いが故に楓を重傷に追い込み、霊夢の殺害をも計画している。

愛車は偵察車ナグマホンと自走砲P Z H 2 0 0 0。

現在人里の外れで魔法の森付近に潜伏中。仲間に親衛隊のリカ、天才指揮官のホルト、その親衛隊のチカがいる。射命丸文はホルトにやられた。

能力は現時点で不明。

楓「……とりあえず四人です。ではでは時間ですのでここでお別れです。ではまた次回。ご視聴ありがとうございました！」

第22話 博麗神社月夜の晩の半刻／History of the Moon

最新話です。半刻とか言いながら朝までめり込んでいます。

第22話 博麗神社月夜の晩の半刻 History of the Moon

それから時間が経ち、夕食の時間。早苗の手料理が並んだ。食材に缶詰があつたのが幸いし、品数は豊富であつた。

「最近の缶詰っていろいろ豊富ですね」

早苗はリュックから取り出した缶詰の種類の多さに驚いていた。数は少ないものの、魚類、野菜・果物類、加工・レトルト食品類など、そして一番関心を引いたのがプルトップのついた、所謂イージーオープン缶であることだ。

「缶詰しかないって聞いて缶切りが必要かなって思いましたけど、やっぱり進んでますね」

と、随分気に入ってくれたようだ。正直ここまで感激するとは思わなかったが……。

しかし、本当に料理は美味しかった。女性から料理を作ってもらったのは何年振りだろうか。親が亡くなって引き取られてからまともな食べてなかったからな……。

夕食が済み、食器を洗う俺。前に朝飯当番というのをしていたが、永遠亭の一件以来一日当番にグレードアップして、一日の食事の準備と片付けをする事になった。で、今日は俺である。

そんな事を知らない早苗は自分の食器を台所に持ってきた時、

「あ、自分の分の食器洗ってるんですか？ 置いとけば私が洗ってたんですけど」

と、自分が作ったのだから自分で片付けをしようとして、俺を部屋に戻るよう促すが、そんな事が出来るはずが無い。霊夢との約束を破る訳にはいかない。

「いや、いいですよ。あ、霊夢と早苗さんの分も洗いますよ」

逆に早苗の両手に抱えていた二人分の食器を掴み、そのまま流しに置く。

「えっ!？ い、いいですよ！ 自分のはやりますから!」

慌てて流しの前に立とうとする。

「いいですって。約束破ると霊夢から何されるか分からないですし」

「えっ？ 約束って?」

おとなしくなるや否や俺の顔を直視して尋ねて来る。ちゃんと説明すべきだなと思い、説明をする。

「その、霊夢と交代で食事係をしていてですね、で、今日は俺だから食器を洗ってるわけで……」

「……………あぁー！ そういう事ですか」

「分かってもらえたようなので、早苗さんは部屋に戻ってくr」

早苗を部屋に戻るように促したが、早苗は俺の台詞を遮って言った。

「じゃあ二人でしましょう。それならすぐ終わりますし」

「……いやだから」

「大丈夫ですよ、私だって毎日家事してますから」

「そういう問題では………むう、仕方ない」

結局早苗と二人で食器を洗う嵌めとなった。俺は本当に押しに弱い。こんな性格なら悪質セールスマンを追い出す事など夢のまた夢だ。しかも流しの面積は大きくない。故に身体が密着してしまう。

「♪」

鼻歌混じりにテキパキ食器を洗う早苗とは対照的にぎこちない動きで食器を洗う俺。身体が密着し、感覚が皮膚を通して身体に伝わる。見た感じでは全く気にしない様子の早苗だが、俺にとっては心臓がドキドキしまくっている。こういう表現は女性がよく使うだろうが、まさに今の俺はそれに等しいのだ。

食器は三人分しかないので洗い終われば軽くふきんで吹く。時間にすれば本当に普段の半分で済み、流しに長く立たずに済んだ。

漸く早苗が離れて、部屋に戻ると一人流しの前で溜め息をつく。

「もし霊夢に見られたらどうなっていた事やら……」

と、前回の思い出を思い出しながら呟く。約束を破ったおかげで永遠亭に二日世話になったあの時を。

しかし、時間が経つに連れ冷静に考えれば仕事はちゃんとやったし、早苗はただ手伝ってくれたとでも言えば済むのでは？

その程度でわざわざ怒る霊夢では無いはずだ。そう思って台所を出る。

食事した部屋に戻り、腰を下ろす。卓袱台には通信機のみだ。手帖は資料と一緒に保管した。

今日は満月とはいかないが、十分な明るさがある。

博麗神社、いや、幻想郷には電気は通っていない。だが、いつの間にもリュックに入っていたのか電池式の電気スタンドが神社にある。最近思うのだが、このリュック、何か能力があるんじゃないかと疑ってる。最初はツルハシ十本と缶詰しかなかったのに、俺が住んでいた時代の品物が時々入っている。

俺の時代の品物が入ってる。それは単に俺の周りにある物だけではない。俺の時代は戦争真っ只中。

お分かりだろうか？ 誰にも言ってないが、実は拳銃が一丁だけあった。

何故誰にもばれないのか？ その拳銃、実は第二次世界大戦に使

われた暗殺銃『ウエルロッド』。

最近では旧式の銃が暗殺用や護身用として改造され、戦場で使用されている。主にコストの低さと比較的組み立てやすい点を注目された。

分かりやすい例えで言うなら、第二次世界大戦初期の主力、戦艦もその一つである。最強の迎撃システムを誇るイージス艦を破ったのは戦艦の主砲、つまり大砲だ。ミサイルなら絶対的な迎撃が可能でも大砲の球は感知出来ない。所謂幽霊艦隊による攻撃で各国のイージス艦、原子力空母が沈められたと聞いた。

さて、俺が手に入れたウエルロッドはどの拳銃より比較的パーツが少ない為、素早く分解して隠せる優れ物だ。もともと本体に発射音を抑えるサイレンサーも備わっていることから暗殺銃と呼ばれていた。

俺は既に三つに分解して隠している。幻想郷では銃は知らないの
で例え見つかっても分からないだろうし、向こうの外来人テロリス
トも知らないはずだ。

実はこの銃と凄く相性の良いツルハシスキルがあったが、今は話
さないでおこう。

「あら、稟も月見するの？」

霊夢が縁側から現れ、手にはきび団子を載せた皿を持っていた。

「ん、まあ、そうだな……。満月ではないがいい月だ」

とりあえずリュックの考えを排除して霊夢に合わせる。

「稟も食べる？」

卓袱台を縁側近くに移動させ、そこに皿を置いて尋ねる霊夢。

「じゃあ遠慮なく」

俺は皿から団子を一つ摘んで口に運ぶ。

「あ、おいしい」

「そりゃあ、私が作ったんだから当然よ」

フフンツと鼻を伸ばしたかのように自慢する。でもうまいのは確かだから好きにさせておこう。

「そういえば月見って凄く久しぶりだなあ」

思わず呟いた。記憶は曖昧だが、小さい頃一度だけ生きていた両親と月見をした事がある。

そして、ある言葉を思い出した。親父の言葉だ。

『いいか、稟。人の命ってのはあの月のように輝かしく尊いんだ。俺は国を敵さんから守っているが、その敵さんにも俺達みたいに家族がいて綺麗な月を見上げているんだ。生きるってのは素晴らしい事なんだ。もし俺が何処か遠い所に行っても絶対生きて帰って来る

からな。稟も何処かに行っても必ず生きるんだ。これは俺との男の約束だからな』

あの時は小さいから素直にうんと言ったけど、改めて思い出したら凄く感動する。俺は世界に絶望していたけど、親父みたいな尊い存在が亡くなったと思うと涙が出て来る。本当に素晴らしい人だったと今更気づいてしまった。

「えっ!？　ちょ、稟!？　な、なんで泣いてるの!？」

いきなり涙を流した俺を見て慌てる霊夢。

「ああ、済まない。昔の死んだ親父を思い出して…」

「……………」

霊夢は聞いた後、何も言わずスツと縁側に座り、団子を食べる。

俺も涙を拭い団子を食べる。そこから一切言葉は出なかった。ただ時の流れに身を任せただけだった。

暫くしてから霊夢が立ち上がる。ちょうど皿にあった団子は全てなくなっていた。皿を取ってから、

「これ片付けたら寝るわ。稟も早く寝なさい。明日行く場所があるから」

そう言い残して縁側から去っていった。

霊夢が去ってから不意に後ろからブツという音を聞いた。

『あっ、稟君、今近くにいます?』

通信機から常盤さんの声が聞こえた。卓袱台から通信機を手にとつて話しかける。

「どうかしましたか?」

『一つ聞きたい事があるんだけど…』

まさかこの時間帯で何か情報を掴んだのだろうか? 自然と身体が引き締まり、通信機から出て来る声を待った。

『稟君と霊夢が言ってた月って何?』

九回裏ツーアウトフルカウント、ランナー二塁三塁の中、常盤さ

んの打った打球は俺の飛球予想を斜め四十五度通り越し、見事ライ
トにタイムリーヒットを果たし、5―6と試合は逆転、常盤チーム
は見事勝利しました。ワー、ワー。

失礼しました。一瞬頭が混乱し、脳内野球スタジアムと中継が繋
がってしまいました。では中継をお返しします。

「月が分からない……?」

一体何と言えがいいのだろうか。思考は完全にパーフェクトフリ
ーズした。

『え!?! あ、ごめんなさい! そんなショック受けるとは思わな
かったの!』

突然の声の変化に常盤さんも謝罪の言葉を述べるも耳には届いて
いない。俺はよく分からないまま、上辺のように語っていた。

「フフッ、フフフッ」

『!?!』

「月が分からない。ダメですよ。月はロマンチックですからね、
ではではお兄さんが分かりやすく説明してあげよう」

『り、稟君？ 大丈夫？』

「月と言うのはですね、地球の周りをぐるぐる回っていて、難しく言うとは衛星っていう星の一つでね、ぐるぐる回るのには地球との重力、つまり地球が引っ張る力と関係してましてですね、そして――」

『あわわわっ、なんか小学生に説明してるみたいになってる！ 稟君聞こえる？ だ、誰か、霊夢！ 早苗さん！』

「そして月の起源なんですが――」

『わぁー！ ご、ごめんなさいごめんなさい！ お願いですから正氣に戻って下さい！ お願いしますうー！』

こんなドタバタな会話は霊夢が再び戻ってくるまで続いた。深夜の暗闇が覆う博麗神社に七色の綺麗な球体が飛んでいたとか。

「もう寝ます」

霊夢と常盤さんに伝え、足取りが覚束ないまま縁側を歩き自分の部屋を目指す俺。今日はやけに疲れた。身体的に精神的にも。

歩きながら考えていたが、常盤さんが月を知らないのは当然では

ないか？ いや、月という名前を知らなかったのでは？ なぜなら常盤さんは異世界から来たのだから、その世界に月が無いという可能性は十分有り得る。

そこまで頭が回らず変な状態になってしまい、羞恥と申し訳なさが合わさってのしかかってきた。

「でもそれで夢想封印するかよ…」

おかげで正気に戻れたが戻った瞬間に余った球が襲い掛かるのだから堪ったもんじゃない。

「身体が持たん…」

一人ブツブツ呟きながら部屋へ向かう。

だがまだ問題はもう一つあった。

不意に隣からゴトツという音が聞こえた。一瞬身構えたが、音はすぐ横の部屋から聞こえたようだ。もしかして侵入者かと思った俺は常に携帯させていた地震を起こせるツルハシを構えて様子を伺う。

しかし、一向に変化がない。俺の存在に気づいて身を隠したのか、音を出さずに作業しているのか。ここなら後者を取るだろう。

俺は意を決心して、まずは障子を少しずつらして中を見た。真ん中に布団があるが誰もいない。注意深く見ていると、端の辺りで何かが動いてるのが見えた。暗くて見えないが人間だ。

いよいよ確信に変わった俺は気づかれずにそっと障子を開けて中に入る。携行していた懐中電灯を手にして影の側に近づいた。

後五十センチまで近づき、懐中電灯とツルハシを構える。相手は気づいていない。

そして懐中電灯を点けて、

「そこまでだ！」

と叫び、相手を照らす。そこにいたのは……

「り、稟……さん……？」

小さく座って震えていた早苗だった。それを見てホッと安堵の息を漏らした俺。

「はーっ、良かった。てっきり誰か神社に忍び込んだのかなって思ってた……って早苗、何をしてたんですか？」

確かに勘違いで済んだからいいが、何故布団に寝ずにここで震えていたのだろうか？

「すいません。迷惑をかけてしまってます……」

搾り出すように声を出す早苗。

「いえ、早苗と分かったからまだいいですけど、本当に何を？」

「……………」

早苗は何も言わずに顔を俯けてしまう。体操座りなので顔が膝の内側に埋まる。そういえば朝の時にもこうして顔を俯けていたような……。

やがて一つの解答が浮かんだ。

「まさか文の姿が」

文と聞いてビクッと反応した早苗。間違いない。思い出してしまったのだ。

「すいません、博麗神社に泊まればと思っていたのに結局思い出しちゃって……、でもやっぱり……怖いです……」

さっきと同じ口調で話す早苗。やはり寝ているとどうしても負傷した文を思い出して眠れないそうだ。

「目を閉じると暗闇からあの景色が現れて……。しかも文さんが銃弾で撃たれて落ちて来る瞬間が……まるで目の前で文さんが撃たれてるのを見てるように……。やっぱり駄目……。怖い。怖い、怖い、怖い！」

頭をブンブン振って落ち着こうとする早苗だが、全く落ち着けていない。むしろ恐怖が増幅しているように見える。

だがどうすれば良いだろうか？ 心の問題。決して並大抵の努力

では癒せない傷。俺に出来ることはないか？ 何度も頭の中で考えるが思い付かない。だけど放ってはおけない。どうしても助けたい。

ただそう思っただけを考えを張り巡らす。

一つ思い付いた。今はこれしかない。しかしリスクが高い。もし霊夢にバレたら容赦無いスペカラッシュが叩き込まれそうだ。だが行動しなければならぬ。覚悟を決めて早苗に言った。

「早苗、もう一度寝て下さい。俺が……俺が側にずっといます」

目を見開いて俺を見る早苗。信じられないのは当然だ。

「で、でも霊夢さんに見つかったら……」

早苗自身も理解していた。やはり懸念する。

「でも早苗が安心して眠れるには誰かが側にいてやれば。大丈夫、俺は何度ものめされているから」

自分から霊夢との状況をさらけ出して早苗を説得する。

「……………」

返事をしない。直ぐには無理か。早苗が返事をするまでずっと待ち続けた。

漸く早苗の重い口が開き、言葉となって飛び出た。

「お……、お願い……します……」

早苗はゆっくり立ち上がり、布団に入る。俺は直ぐ横で座り、早苗の手を取った。

「大丈夫です。信じて下さい。早苗は一人じゃない。諏訪子様が言ってくたように、一人で解決しないで皆で解決しましょう」

「あ……、ありがとう……稟……」

俺は手を包み込むように握り、ただひたすら願った。早苗が安心して眠れるように。ただそれだけを。

早苗の瞼から一筋涙が尾を引いて流れ落ちた。

翌日、日の光が淡く障子の隙間から部屋に差し込む。ぐっすり眠る早苗の隣には本当に座ったまま寝ている稟。

「……」

そんな様子を障子の隙間から見る霊夢。

「起こしに来たらこれか……。でも今日は特別に許すわ。昨日の早苗の事だから」

霊夢も大方こうなると予想していた。稟は性格からして困ってる人を助けたいと思う。昨日の早苗の話できっとどうにかしたいと思ったのだろう。

ゆっくり障子を閉めて音を立てずにゆっくり去る。その手には通信機。

『いいの、霊夢？』

不安そうに尋ねる楓。霊夢の独り言が聞こえていたようだ。

「いいのよ。今日は特別だって」

わざとらしく明るく話すが、その表情はどこか寂寥感があった。表情だけは楓には分からない。

今日霊夢が行く場所は巨大落とし穴に落ちて早苗と戦った場所。

霊夢が行ってから暫くして、早苗が起きた。

「う、うん……」

軽く上半身だけを起こし、背伸びする。そしてチラッと横を見ると、

「……………稟さん!!?」

つい声を上げて驚いてしまった。慌てて口を塞ぐが、稟は気づかずそのまま眠っている。座った体勢でだ。

「あっ…」

早苗は片手が稟の両手に包まれていたのに気づいた。そして昨日の深夜の出来事を思い出すと急に顔が赤くなった。

（そ、そうだ、昨日の夜ずっと側にいるって言って……………本当にずっといたんだ）

状況が状況だけに落ち着けないが、とりあえず稟の手を少し退けて自分の手を取り出す。

（……………あったかい…）

解放した手をもう片方の手で触ると微かな温もりを感じた。

（私の為にここまでしてくれるなんて…………）

早苗は感謝しきれなかった。稟が側にいてから本当に怖い夢を見ずに眠れた。側にいただけでそうだったのかは分からないが、今は稟のおかげだと思った。

（…………）

改めて稟を見る。座ったまま熟睡する様子はどこか滑稽で思わず笑ってしまいそうだ。早苗は起き上がり、膝立ちで稟に近づく。その際周りをキョロキョロ見る。

（霊夢さんは、い、いないですよね……。霊夢さんには申し訳無いけど……。少しだけなら……。いいですよね……。？）

周りには誰もいない。稟もこれだけ近づいても起きる様子が無い。

（……）

ゆっくり顔を稟に近づける。ただちよっぴりお礼の意味を込めて。

稟の頬にキスをした。

再び顔が赤くなり、直ぐ離れる。が、起きる様子は無い。

（……しちゃったけど……。いいかな？）

とりあえず障子を開けて縁側に出てそれから食事をした部屋に向かった。

それから五分も経たない内に目を覚ました俺。最初に感じた事と言えば、罪悪感だろう。

（さ、ささ、早苗から、き、き、キスを……、落ち着け、落ち着け俺）

実を言うと霊夢が覗いていた時に起きていたが、そのまま寝たふりをしていた。起こしに来るかと思ったが、霊夢は去ってしまい、そのまま眠る。

それから早苗が手を退かした事で再び起きるがずっと寝たふりをしていた。できれば早苗が部屋を離れるまでこうしとこうとしていたのだが、逆にキスをされるとは思わなかった。

「だ、だが俺は寝ていたと言いつ事は出来るが、頬に当たる早苗の唇の感触を………ダァーッ！」

頭は混乱し、障子を突き破り地面に頭を抱えながら転がる。

「言いつはいくらでも出来るが、記憶にはこの事実、この事実がある………！」

「おい」

「もし早苗の前で平静を装なければ早苗に感づかれてしまう！ したら言いつは出来ない！ 果たして今の俺にそれは出来るのだろうかぁー！」

「おい」

「それが原因で霊夢にも感づかれたらもう終わったも同然だああー
ー！……………ん？」

「ハア、お前は朝っぱらから騒がしいぜ」

地面をずっと転がって気づかなかったが、今日の前に魔理沙がいた。

「……………全部聞いた？」

「あん？」

「全部聞いた？」

「稟が神社から飛び出して来た後は全部。一体何してんだぜ。言い訳言い訳ってよお」

肩を竦めてやれやれと動作する魔理沙を見上げる俺。

あの後、夢を見ていたと魔理沙に言い訳してから朝食を食べに向かった。

ちょうど早苗は食事中だった。

「あ、おはようございます」

「おはようだぜ、早苗」

「お、おはよう……」

早苗の挨拶に魔理沙が先に応えてから俺も応えるがどこか上擦っ
てた。

「魔理沙さん、どうしてここに？」

「私はむしろ博麗神社になんで早苗がいることを聞きたいのだが」
お互い状況把握の為に上擦った声に気づかなかったようだ。二人
の脇をスッと抜けて卓袱台に座り、

「いただきます」

黙々と朝食を食べる。

で、結局三人で朝食を食べた訳だ。食べ終わった後で、

「そーいや霊夢は何処だ？」

魔理沙が尋ねる。

「確か昨日の夜に行く場所があるって言ってたけど」

そーいえば霊夢はそう言っていたが、場所まで言わなかった。

「あ、霊夢さんなら多分間欠泉地下センターに行ったと思いますよ」

と言って紙切れを一枚取り出して渡す。

「『早苗と戦った落とし穴に行く』って何の話だぜ？」

「一度そこで戦ったことがあって……じゃなくてそれ、書き置きですよ」

書き置きを残すとは珍しい。ついでにもう一つ気づいた。

「多分外人関係じゃないか？ 通信機が無い。持って行ったんだ」

「な、何だって！？ 本当か！？」

驚く魔理沙に対して小首を傾げる早苗。

「え？ 通信機って？」

「簡単に言いますと外人テロリストを捜してる俺達の味方に繋がる通信機です！」

「そうです…：か」

何だか納得していないような顔だが今は一刻を争う。

「魔理沙、連れてってくれ」

「おし、任せろ！」

「わ、私も行きます！ 私の方が詳しいですから」

こうして博麗神社から三人、間欠泉地下センターへ向かった。

第22話 博麗神社月夜の晩の半刻 History of the Moon

おまけ

稟「第11回幻想郷ラジオの時間です」

楓「声が小さい！ やり直し！」

稟「だ、第11回！ 幻想郷ラジオの時間です！」

楓「……………よし！」

稟「毎回毎回何なんですか」

楓「ただ単に稟君に言って貰いたいな〜って思ったんだけど？」

稟「真面目にお願いしますよ。毎回痛手喰らってますから」

？？「でもいますぐ辞めたいと」

稟「いや、別に辞めたいなんて思ったりは……………ってまたいつの間に！？」

楓「ゲストは地霊殿の主、古明地さとりさんです」

さとり「どうも。何々…また俺をスルーしますか…と。随分な扱われようですね」

稟「も、もしかして分かってくれますか」

さとり「理解しましたが私では無理ですので……」

楓「じゃ、ハガキいくね」

おはようございます！ 挨拶は心のオアシス。知っても知らなくても人に挨拶する時は大声でしっかりと！

質問ですが、時々魔法の森から奇妙な声が聞こえるのですが、何の儀式してるんですか？ 朝のお勤めの時に近くまで聞こえてきます。

山彦 幽谷響子

さとり「あら、あの子から」

凧「さとりさん知ってるんですか？」

さとり「いや全然」

凧「きっぱり言った！？ 何で言ったの！？」

楓「そっちは後でいいから質問に答えて！」

凧「なんでですか！ ……わ、分かりました。刀を構えないで…」

さとり（押しに弱いのかしら…）

凧「魔法の森での奇声は十中八九アリスだ」

楓「え？ アリスさんが？ 嘘……」

凧「魔理沙に対してまたなんか良からぬ事を企んでるだけだ。巻き

込まれなくなったら離れて観察しろ。以上だ」

さとり「……あなたは何故恐れている？」

凧「急に何ですか……」

さとり「『想起 テリブルスーヴニール』」

凧「ちよ、いきなり何を！？」

さとり「……そういう事ですか」

凧「何がそういう事なのか聞きたいのですけど！」

さとり「あなたが人の押しに弱い理由です。過去の記憶を表面に押し上げて心を読みました」

凧「問答無用！？」

さとり「ですがここでは言えません。本編で後ほど話しましょう」

楓「じゃあ私だけに教えてくれませんか？」

さとり「構いませんよ」

凧「全く……二人が何かしてる間に次いきます」

このラジオにハガキを出して早三十二枚、遂に突き返されなかった！ これで魔理沙に愛を告白するわ！

そこで、魔理沙の情報を教えて貰いたいわ！

魔理沙を愛する倶楽部責任者…アリス（一名）

稟「日に日に症状が悪化してんな、アリス……」

楓「いつの間にかハガキ読まれてた」

稟「遅いからですよ。というかアリス、残りの三十一枚は送り返されたのか」

楓「私が送り返したけど？」

稟「そうですか……。質問ですがどう答えろというのか……」

さとり「魔理沙さんとは月一で会いに行きますよ」

稟「いや、それ関係無いし」

楓「魔理沙さんって以外と下着持ってますよね」

さとり「私も知ってますよ。しかもきちんと整理して仕舞ってるのか」

稟「これ以上言うな！ アリスが暴走する」

さとり「……やっぱりラジオ誰かと代わりたいたい……ですか」

楓「いいえ、認めません。私は稟君以外の人をゲスト以外には認めません！」

稟「だから理由言ってよ！」

楓「あつ、もう時間だ。ではお別れの時間です。ご視聴ありがとうございます
ございました！」

稟「だからスルーして終わらせ」

第23話 間欠泉地下センターから地霊殿まで掘れ！（前書き）

間欠泉地下センターと地霊殿の場所はそれぞれ違いますが、灼熱地獄を通って繋がっていると解釈しています。

第23話 間欠泉地下センターから地霊殿まで掘れ！

魔法の森外れに潜む外来人テロリスト集団、RRFはというと……

「外来人の反応あり、地下に出現」

突然ホルトの親衛隊の女性、チカが呟いた。

「そうか。もしかしたら我々の仲間がまた来たのかもしれないな」

普通の人なら頭おかしいじゃねえかと思う発言に誰も驚く様子もなく淡々と応えるホルト。

「地下ですか。で、誰が様子見をしますか？」

キョウジがそう聞くと、

「はいはい、アタシとキョウジさんで行きまーす！」

リカが真っ先に手を挙げて言う。が、

「いや、私とチカで行く」

あっさり拒否される。

「ちょ、何でよーっ!？」

「リカ、お前は地下に行ける場所でも知ってるのか？」

「うっ……」

今のところ四人は誰一人地下に行く場所を知らない。指摘されるや否や一歩退く。

「私が空を飛んで捜せたらいいが、チカも連れていけば発見率は高くなる」

「決まりですね。ホルトさんに任せます。私達は情報収集を行いますので」

「ああ。分かった」

ホルトが宙に浮き、チカの手を取ると上昇した。姿が見えなくなったところで、

「ま、結局キョウジさんと二人きりになれたし、結果オーライって事で」

トリカはキョウジに振り向いた。が、またしても、

「あ、あれ？ あ、ちょっと待ってよ！」

キョウジはリカを無視して既に香霖堂へ向かっていた。リカは直ぐに追いついてキョウジの進路を塞ぐ。

「ちょっと、無視しないでよ！」

不機嫌なまま無視するキョウジに突っ掛かる。キョウジは漸くリカを見た。

「全く、早く情報収集に向かいなさい。あなたは人里、私は香霖堂に行きます」

ただ一言命令する。

「ええー！？　どうしてバラバラに行くの！？　嫌だよ、キョウジさんで行きたい！」

「一緒にバラバラなら効率良く情報収集できます。さ、写真を持ってあのPMCの小娘の情報を集めなさい」

駄々をこねるリカを宥めながらキョウジは歩を速める。

「ちえ、キョウジさんがそこまで言うなら行きますよ」

やっとキョウジから離れて渋々人里へ一人向かうリカ。

（全く、親衛隊としての能力はトップクラスですが、あんな性格だと本当疲れる……。所詮自分の地位ばかり気にする上層部は全く使えない。まともな人事すら出来ない）

心の中でリカとRRF上層部への不満をぼやきながらキョウジは香霖堂へ向かう。

間欠泉地下センターにある大穴。穴の深さは相当あり、最下層は霊鳥路空が管理する核融合炉である。

ちょうど地上には三人が穴の淵に立っていた。一人は霊夢。通信機も持っている。一人は妖夢。幽々子から許可を得て一旦出かけていた所霊夢と偶然出会い同伴する。あと一人は……省略する。

「つて紹介くらいちゃんとしなさいよっ！」

失礼、A・Mさんがいた。

「イニシャルにしないでよ！　もういいわ、私が自分で言うわ。私は「ねえ、さっきから何ぶつくさ言ってるの？」　ちよつと霊夢！　邪魔しないでよ！」

「まあまあ、霊夢さんにアリスさん、早く行きましょう」

「ちよーっ！　名前言わないでよ！　せっかくエレガントに言おうとしたのにー！」

大穴の前には霊夢と妖夢と変人がいた。

「……まあ、それならいいわ♪」

（霊夢さん、アリスさんってこうでしたっけ？）

（さあ？　最近おかしいと稟から聞いたんだけど……）

アリスが別の方向を向いてる間にこっそり話す霊夢と妖夢。

「でも私負けない。霊夢がいるなら近い内に魔理沙が来るわ。ウフフ〜♪」

完全無視して通信機に話しかける霊夢。

「楓、本当に地下に外来人が来たの？」

『はい、間違いありません。何処かまでは分かりませんが、地下は確実です』

「確かここは間欠泉地下センターですね。地霊殿と繋がってますかね？」

「行きや分かるわよ」

実際早苗と戦った際途中で引き返したからよく分かってない。しかもあの後温泉に浸かってゆっくり過ごして半分頭から消えていた。

「あら？　もしかしてその声って楓ちゃんかしら？　久しぶりね」

急に会話に割り込むアリス。

「な、何よ？　楓を知ってるの？」

「そうよ。一緒に魔理沙捕縛案を出してくれたわ」

「…楓は知ってる？」

「……ごめんなさい。その日の出来事あんまり覚えてない」

ちなみにアリス邸に行った日と地雷を踏んで永遠亭送りされた日は同じ。地雷のショックでその日の事をあまり覚えていない。

故にこの一言はアリスの奥深くに突き刺さった。

「ハアウ!? お、覚えてない? え、それマジ?」

「変人は放っておいて妖夢、行くわよ」

「あ、はい」

ここにいてはあれだと思い、アリスを無視して穴に入ろうとした。

「ちよーっとな待ったあーっ!!」

突然の大声に三人が空に振り向くと、三人の影が。

「魔理沙に早苗に……稟!？」

全力で魔理沙に飛んで貰い、何とか間欠泉地下センターに到着。ちょうど霊夢達が穴に入る寸前で呼び止められた。

「ふーっ、間に合ったな」

「良かった。私がいらないとお空さんが攻撃しますからね」

「それはいいが、何故霊夢以外にアリスと妖夢が？」

そう、何故かアリスと妖夢が霊夢といたのだ。妖夢は別に仲間だからいいが、アリスはどうだろうか……。

とりあえず穴の手前で降りる俺達。するとやっぱり、

「魔あー理いー沙あー！！」

変態が地面と平行に飛んできた。魔理沙は平然と箒を構えて叩き落とす。

「来るな、変態！」

バシッ！

「アアンッ！ 叩き落とされたけど来てくれた……ハア、ハア……」

完全に駄目だ、コイツ。もう手の施しようがねえ。

「稟、よく分かったわね」

後ろから霊夢が声を掛けてきた。

「書き置き見て分からない奴がいるか」

「そ、そうよね……アハハ……」

少し顔を俯けて右の頬を指で掻く仕草をする霊夢。

「それより霊夢、通信機持って行っただって事は外来人か何かか？」

そう言う目を見開いて俺を見つめる。

「すごい。よく分かったわね」

「当然だろ。霊夢の行動から察しは付く」

「ふーん、何か見通されてるみたい、ね」

何故かニヤニヤしながら言う。何故そうするのか分からない。だからつい顔を背けてしまった。

「あれ、どうしたの？」

「な、何でもないから！」

必死に反らすも声が上擦ってしまい、余計に怪しまれる。

「本当に？」

「ほ、本当だ！」

「はいはい、お二人さんのいちやいちやムードはここまでだ」

魔理沙が助け舟を出して何とかその場は収まった。最近の霊夢の行動に心臓の鼓動が早くなってしまいう時があるが、何故俺はあれほ

ど動揺してしまうのだろうか……。

その後、霊夢が持っていた通信機を借りて常盤さんから再び説明を聞いた。地下に外来人が現れたとの事だ。

「だからって六人でなくても……」

確かに多過ぎる。今まで二、三人で各地に行ったりしていたからだろうか。

「まあ、仲間は多いに越した事は無いですし、お空さんが私の話聞くか分からないし」

「いや、説得しなさいよ」

自信なさ気な早苗だ。間欠泉地下センターは守矢神社が管理している。なので早苗に説得してもらおうしかない。まあ、前に一回失敗してたけど。

「じゃあ行くわよ、せーのっ！」

霊夢の号令で一斉に飛び降りる。ちなみに俺は飛べないので霊夢と早苗に手を繋いで貰った。別に一人に掴まればいいんだけどなあ……。

そんな様子を見ていた影が二人いた。R R Fのホルトとチカだ。

「降りたな…」

霊夢達が降りたのを確認すると用心して穴に近づく。

「現在、穴に入った六人以外に半径一キロ以内に生体反応は無し」

「ああ、だが六人の位置がここから移動次第我々も降りる。しっかりと見ておけ」

「了解しました」

リカは直立不動のまま目を閉じた。ホルトは一旦自分の銃を軽く点検し始める。

（先程見た紅白衣装の少女がキョウジの言ったレイムという奴か。後の五人は仲間だろうか？　しかし今の最優先事項は外来人の確認。それはしっかりせねばな。が、仮に見つかった場合は何人たりとも始末する）

心の中で呟き、再び銃を隠す。

地下に降りて行く内に体感温度が上がっていく。核融合炉まではまだある。本当に地獄に向かっていているように思えて仕方ない。

「暑いな……」

下から伝わる熱気が身体中に突き刺さる。他は平然と下へ下へ降りていく。生身の身体だから暑さくらいは感じると思っていたのだが、内部温度は予想以上だ。『暑い』というか『熱い』だ。

と、気づいたら妖夢が何だか辛そうな表情をしていた。霊は周りの温度が低く感じると言われている。半霊の彼女もこの暑さに影響を受けているのかもしれない。心配なので一言掛けてみる。

「妖夢、大丈夫か？」

「……………」

妖夢は見向きもせずひたすら降りるだけだった。聞こえているはずだが……。

「妖夢！ 呼んでるわよ」

霊夢が代わりに妖夢を呼び、漸く妖夢も振り向いた。

「え？ あの、何か？」

「たいしたことじゃないが、大丈夫か？」

「ああ、それなら心配いりませんよ」

普通に言葉を返す妖夢。あまり変わった様子は無い。心配し過ぎたのだろうか？

しかし、暫く降りて再び妖夢を見る。やはり辛そうにしている。いや、むしろ虚ろな表情である。暑さで意識が遠のいてるのか分からない。俺はもう一度聞こえるように言った。

「妖夢、大丈夫か？」

「……………」

「妖夢！」

叫ぶと一瞬妖夢の身体がピクンツと反応し、ハツとしたような表情を見せた。

「へ！？ あっ、今度は何ですか？」

「妖夢、もしかして暑いのが苦手じゃないのか？」

「い、いえ！ そんな事ありませんよ！」

即座に首を横に振る。だが俺にはそれが空元気なのが分かる。表情は依然辛そうだからだ。

「半霊側が暑さに影響して本体もさっきまで意識が遠くに行っただんじゃないか？」

「うっ…」

やはり凶星であったようだ。言い訳をしない。

「妖夢、無理を強いらなくていい。本当に辛いなら地上に引き返してくれ。妖夢自身が危なくなる」

俺は妖夢の身を案じて注意を促すが、妖夢は譲らなかった。

「大丈夫です。心配しなくても私の限界は私自身が知ってますから」
平然とした口調に笑顔で返す。

「本当か？」

「本当です」

「：分かった、信じよう。だが無理はするな」

念を押して妖夢に言った。妖夢は頷くと視線を戻す。

どうやら妖夢とのやり取りでいつの間にか最下層が近かった。

最下層というのに炉の中は業火があるように明るい。秘密基地っぽい印象を受けた。確かにこれだけの深さ、上を上げば暗闇に光る小さな青い点。核融合炉の実験機としては安全に行える場所なのは間違いないわけだ。

「で、着いたは着いたでいいけど、ここにはいなさそうね」

霊夢が周りを見てボソツと呟く。円柱の内部の構造状であるここに隠れられそうな部分はない。ゆっくりしてられないのも事実だが。

「大量の異物発見！ 核融合炉の異物混入は一旦反応を停止し、即座に異物を排除せよ！ 融合炉の温度低下に要注意。即座に異物を排除せよ！」

何処からか声が。どうやら見つかったようだ。ま、攻撃されるなら抵抗してみる。

泉符「ハイドロライド」

水を吹き出させて壁のように固定させる。すると、核融合炉の一つが開き、太陽弾が放たれた。

太陽弾は水の壁と衝突すると両方とも一瞬で消滅した。危険な太陽弾とはいえ弾幕の一つなら押さえられる。

開いた穴から核融合炉の管理者、霊鳥路空が現れた。

「異物は六つ。即座に排除する」

「お空さん、待って下さい！」

早苗が一步前に出て空と向き合う。

「私です！ 東風谷早苗です！」

空に向かって本名だけを言った。すると制御棒を構えようとした空の動きがピタッと止まった。

「うにゅ？ 東風谷……早苗……？ どうかで聞いたような……？
でも異物排除が先だし……」

やはり鴉だけに鳥頭。無理なのではないか？

「なら、これを！」

間髪入れずに早苗はポケットから何かを出して空に見せた。多分
写真か何かだった。

「……これ………あ……」

手にとって暫く写真を眺める空。その間全員が俺より後ろで固ま
っていた。俺が瞬時に水の壁を出せるからだろう。

だが、杞憂に終わった。

「！、思い出した！ 早苗、久しぶり！」

「ああ、良かった！」

空が早苗を認識するとお互い抱き着いた。まさに奇跡、と思った。
後ろの四人も緊張が解けて安心したようだ。

「あ、この人達早苗の友達？」

「そうです。実はあなたの主人の場所に行きたいのですけど」

早苗はそのまま空に道案内を頼む。

「さとり様の所？ いいけど、ここからじゃ遠いよ？ 灼熱地獄通らないと」

灼熱地獄と聞いて顔をしかめる方約二名。

「今でも暑いのにあの無駄に暑い通路通るの？ 面倒ねえ」

「別にたいしたことないが、今回は霊夢に同意」

お前らなあ……。もう少し頑張れよ。

「じゃ、さとり様のとこまで人間が通れる穴でも掘れば？」

……………今この鴉は何と言いましたか？

空の台詞を聞いた者はただいま視線が徐々に俺に向き始めています。

「あー、俺は別に灼熱地獄通ろうが大丈夫だ。気合いでなんとかする。さあ、皆もう一踏ん張りで行こうではないか。ハッハッハッハッ！」

とか言ってみると後ろから誰かに肩を掴まれた。恐る恐る後ろを見てみた。

「よろしく☆」

ものすごく笑顔が眩しい霊夢が親指立てて見えました。

「常識的に無理だわ！　アホーッ！」

それから十五分が経過した。今、横穴の中にいます。ツルハシ片手にせまりくる土を掘っていく。空が覚えている地霊殿の方向に。トンネル作業をする人の気持ちがよく分かる。ハードな肉体労働、悪条件での作業、地殻に潜む有害物質。今だから思う。トンネルを作った人達は真の勇者なんだなって。

「ほら、手を動かして！」

霊夢から叱責を受けたので作業再開。現在、間欠泉地下センターから地下の入口に向かって掘り進んでいます。間欠泉地下センターは妖怪の山の麓。博麗神社の近くから地下に行ける穴があるらしいので、そこを目指します。

思いの外作業はガンガン進んでいる。そりゃ、六人全員ツルハシで掘ってりゃ早いわな。

ボゴッ

「おっ？」

ばんばん掘る内に突然壁が崩れ、広い空間が現れた。

「あれ？　もしかして着いた？」

広い空間だけしか分からないが、とりあえず繋がったのを伝え穴から全員出てみる。ただ広いだけで何もない。どうやら違うようで、

「あ、あっちだわ」

突然霊夢が方向転換し、付いていく俺達。やがて地下なのに町並みが、いや、建物の集合体みたいな場所に到達した。

「意外と早く着いたわね」

霊夢が呟くと急に疲労感が出てきた。

最初俺は違うじゃないかと思ったのには理由がある。作業に使っていたあるツルハシのスキルをこっそり使っていた。だがそれはあんまり信用できなかった。名称はDPS－MODEL。

搜索「ナビィタイマー」

このスキルは目的地、或いは目的物の方角が100%分かるスキル。ただし生物には使えない。旧地獄街道をおおよそで思い浮かべてスキルを発動させると直ぐに方向が分かった。後は掘るだけ。

と、まあ結局は着いたから深く考えるのはやめる。頼れるスキルだと分かっただけで十分か。

「って稟、何座り込んでるの？」

「さすがに疲れて…」

方向は分かるが距離は分からない。間欠泉地下センターから掘れば無理もないだろ、普通は。

六人で掘ったとはいえツルハシを使い慣れている俺が作業の大半を担当した。

「……仕方ないわね。もう皆行って私達しかいないから」

霊夢はすつと近づくと俺に背を向けてしゃがむ。

「ほら、おんぶしてあげるから」

俺を思いやっでの行動とは思うが、先に皆がいるのを思うと恥ずかしくなった。一応男だし、女性におんぶされるのはどうか。

「いや、大丈夫。気持ちだけは受け取るよ」

「稟が疲れてるって言うからおんぶしてあげようって言うてるのに無下にするき？」

だがやはり抵抗がある。

「あのさ、別におんぶじゃなくても、さっきみたいに手を引いて飛んでいけばいいんじゃないかな？」

霊夢は不機嫌そうに俺の顔を覗き込む。

「ちえ、分かったわよ」

霊夢には申し訳ないが許してもらいたい。霊夢は立ち上がり、手

を差し延べる。それを手に取ると同時に浮遊感を感じ、身体が宙に
浮く。

目指すは地霊殿。

果たして外来人は誰が来たのか。

第23話 間欠泉地下センターから地霊殿まで掘れ！（後書き）

o m a k e

稟「第12回、幻想郷ラジオ！」

楓「今回も張り切って行くぜえ！」

稟「ていうか小説投稿して大丈夫か？ 浪人になるぞ？ いいのか？」

楓「あの、関係無い話題は言わないで下さい」

稟「だが断る」

楓「……………」

稟「お？ 刀を構えて脅すか？ 脅すのか？ 出来るのか？」

楓「……」

稟「分かった。単なる悪ふざけだから気にすんな」

楓「……」

稟「ねえ？ 聞いてた？ 悪かったとは思ってる」

楓「……………か……」

稟「はい？」

楓「稟君の……馬鹿ッ！」

稟「いや、そのくらいで…………って常盤さん何処行くんですか！？」

常盤さん！ 仕事してから……………行ってしまった」

？「女の子を泣かせるたあ感心しねーぜ」

稟「わざとじゃないんですよ？ いつも押されてるからたまには抵抗してみよーかなって気持ちがあった……」

？「だからだよ。ま、メインの司会がいないが止める訳にいかない
だろ？ とりあえず席に座れ。私が読んでやるぜ」

この前はゲストとして来ましたけど今回は投稿側です。新聞読みましたけど霊夢さんって意外と大胆ですねー。でも受け入れている稟さんもすごいですね。羨ましいなあ…。

あ、質問ですけど、2036年の携帯とか気になるんです！私 のって機種古いですから持っていたらぜひ一度お目にかかりたいです！

はふって妖怪退治した巫女

稟「早苗さんか。わざわざご丁寧に」

？「新聞か。最近めったにお目にかかれないな。古すぎるし」

稟「だが待てよ。新聞で霊夢が大胆に？ で俺が受け入れたって…

…まさか!？」

？「その霊夢って奴から告白されて受け入れたって事か。なるほどな、恋愛事情も昔と変わらないか」

稟「待って下さい！ この時新聞記者は姿を見せていないし連絡もしていない！」

？「これは私も分からないな。もしかしたら近くにいたやつが写真を撮って売り付けたとか」

稟「有り得る……。仮に売り付けていなくても入手出来る方法は奴にはある」

？「やっぱ幻想郷って所は楽しいなあ。で、質問は答えられるのか？」

稟「あつ、そうですね。えーと、2036年の携帯か。あ、持ってた。確かりュックに入ってたはずだ」

？「そうか。ま、私達からすれば古すぎるけどな」

稟「まあ、人間は少しずつ進歩していきますから」

？「ま、頑張るんだな」

凜「で、締めはどうしよう。もうハガキ無いし」

？「なんだ、もう終わりなのか？」

凜「締める前に聞きますけど、ゲストですか？」

？「ああ、そうだぜ。尤も道に迷っていた所を連れて来られたのが正しいがな」

凜「幻想郷に何の用で？」

？「実は河童を捜しに来たんだ。けど到着して五分後には逸れてこの有様だぜ」

凜「じゃあ後一人は野外！？ 妖怪がいるのに！？」

？「生きてると思うぜ……多分」

凜「でも小型の銃みたいなのがここにあるし」

？「おいおい、こいつは小さいが威力はあるんだぜ？」

凜「そうですか……。さて、そろそろ時間が来たそうなのでここで」

楓「ちよーっと待ったあ！」

凜&？「！！？」

楓「ゼエ……、ゼエ……、な、なんで追って来なかったんですか！

？ 私、霧の湖でずくずくっと待ってたんですよ！」

凜「いや、ラジオサボるわけにいなかったし行き過ぎですよ」

楓「普通だったら出ていった女の子を必死に追いかけて、途中で見失っても諦めないで捜し続けて、やっこの思いで捜せたらそつと後ろから抱き締めて謝るのがセオリーですよ！ そしてお互いの非を謝り合ってからお互いの愛を深め合いそれから——」

凜（行かなくて良かった……ベタ過ぎる……）

楓「せっかく漫画にあった恋愛を再現しようとしたのに来てくれたのは河童を捕まえていた変な人だけだったし！」

凜「河童捕まえていた！？ ちゃんと目的果たしてた！」

？「無事捕まえたのか。じゃ私はこれで」

凜「お疲れ様です。あ、もう時間ですね」

楓「私、絶対絶対ぜえーったいに諦めませんからね！」

稟「なんか長くなりましたが、ご視聴ありがとうございました。ではまた次回…」

第24話 勇者の意志を継ぐ弱く小さな存在（前書き）

新たな外来人登場。ちよつと回想シーンがあります。

第24話 勇者の意志を継ぐ弱く小さな存在

私は古明地さとおり。地霊殿の主です。初めて地上の者が現れてからどれほど経ったでしょうか。

しかし、旧地獄街道は変わらない騒がしさ。勿論好き好んで地霊殿に近づく輩はいない。

私のペット達も最近は働き盛り。お隣は相変わらず死体運び。お空は灼熱地獄跡の管理に間欠泉地下センターにある核融合炉を兼業。二人とも仕事が楽しくなってきたとか。

妹のこいしは依然帰って来ない。最近よく地上に行く。昨日出かけたから帰ってくるのは三日後。最悪一ヶ月はいなかった時も。

そして私は……ただ地霊殿に構えるだけ。一体私はどれだけ無駄な時間を過ごしているか。

唯一地霊殿を月一に離れる。その日は魔理沙の家を訪れる。別に魔理沙とどうのこうのではなく、単に盗品を返してもらう交渉だ。初めて地霊殿を訪れてからたまに被害に遭う。しかも私一人の時に来るからどうしようもない。

と言ったが、それはただの口実に過ぎない。だいたいあの性格からして魔理沙が返すわけが無い。だから本当は地上の生き物達と話をしようと勇気を持って行く機会としている。魔理沙と交渉して三回目の時に魔理沙が提案した。

とはいえ、地上に詳しいこいしがいないと何処か不安となる。

そんな私にも地霊殿内での楽しみが二つある。

一つはペットに対して愛情表現をする事だ。私はこれをNCMと

呼んでいる。NCMとはペットをこよなく可愛がる行為を指す。それが私にとって至上の幸福なのだ。

NCMは何の略か……ですか。正直言うのもあれですので想像してください。

……ですが特別にNを教えましょう。

Nは撫で撫で。ペットを可愛がる基本という訳です。何か卑猥な事でも考えましたか？ これでもペットの主ですから、主らしい振る舞いをするだけです。

そして、もう一つの楽しみは最近できたものだ。発端は旧地獄街道に住んでいる鬼の星熊勇儀が小さい人間の子供を連れて地霊殿を訪れた時、

「この女の子、いつの間にか現れたんだ。一応声を掛けても震えるばかりで何も答えないから、何とかしてもらえないかな？」

と、子供を押し付けた事から始まった。この日だけこいしも帰っていた。

確かに震えたままでも何も答えないので、私は心を読んだ。その第一文は、

「あたしは子供じゃなくて学生です。そして男です」

だ。外見からして私と同じくらいの身長に髪がセミショートの黒髪。あまり見ない服装。瞳が青っぽい黒。女の子に劣らないかわい

らしい顔。弱そうな振る舞いに思わず母性反応のような、守りたいという感情が沸き上がった。

しかし、私は人間としてあまり受け入れる気はなく、ペットとして受け入れた。

すると「じゃあペットの印にこれ付けてみて？」と、こいしが黒いネコミミの飾りを持ってきて装着させた。

すると……私は本当にNCMしたい衝動に駆られてしまい、危うく理性が吹き飛びそうになった。それくらい反則的な可愛さなのだ。それでいて男。いや、男の子だ。

いろいろ話をしてやると相槌は打つので一通り場所や自分達の説明をした。最初は何故か私よりこいしに懐いた。こいしが言うに「男の娘」だそうだ。

しばらく置いている内に私にも心を開いてくれて、地霊殿の中を一人で行動できるまでに至った。

お隣とお空も最初は怖かったが、今では仲良しだ。わずか三日で人間が妖怪に対してここまで順応できるのは珍しい。

さて、そんな至福な時間もそろそろ無くなりそうな気がする。今、地霊殿に四人向かっている。地上の者達なのはすぐ分かった。もし彼を怖がらせるなら私は奴らに今まで以上の恐怖のトラウマを植え付けるつもりだ。彼は私達が護る。

旧地獄街道を抜けて地霊殿の前に着いた四人。後二人は稟と霊夢。置いていったがすぐ追い付くだろう、と思っている。

「ここが地霊殿だ」

何度も来た魔理沙が初めて見る三人に説明する。

「地底の中では最大ですね」

「私の神社より広しい」

「えっ？ 何この大きさ？ 喧嘩売ってるの？」

三者三様に地霊殿の印象を言う。一人おかしいが。

「喧嘩は売ってないと思うが、とりあえず入るぜ」

魔理沙は扉に手を掛け、平然と開ける。扉は内側へと開く。

「よお、また来た」「『想起 テリブルスーヴニール』」：うおっ！
？」

開けたと同時にさとの弾幕が魔理沙を襲う。

「っと、いきなりなご挨拶だな」

「また私が一人の時ですか……心を読まずとも目的は分かりますから……」

さとりはビシッと魔理沙を指差して言う。

「な！？　ちょ、ちょっと待て！　確かに前まではそうだが今日は違う目的だぜ？」

しかしさとりは依然魔理沙に指を差したまま。

「あなたのトラウマ弾幕は分かりました。再現します」

「待て待て！　せめて心を読め！」

「……」

魔理沙の言葉が届いたのか、さとりは動きを止める。しばらくすると指を降ろした。

「そう……外来人ですか」

「ふーっ、やっと通じたか」

と魔理沙が安堵していると、

「『想起　カタディオプトリック』」

不意打ちの形で再び大量の弾幕を展開する。一瞬遅れた魔理沙は大弾に掠った。

「おい！　なんで弾幕を！？」

「知れた事。あの子を護るのは当然」

「別にさらおうだなんて思っていねーぜ！」

「何を言っても無駄です。『想……』」

魔理沙の言い分を無視して新たな弾幕を出そうとした時。

「魔理沙に何してくれとるんじゃないー！！『犠牲　スーサイドパクト』っ！」

アリスが割って入り大量の人形をばらまく。数秒後に点滅し、人形が一斉に爆発。

「くっ…！」

人形の数が多いのでさとりは一旦距離を置いた。魔理沙も三人のもとに引き返す。

「助かった。ほぼ無差別だから巻き込まれかけたがな」

「ちっ、そのまま魔理沙の服だけ破れてれば……」

相変わらず空気の読めない発言をするアリス。

「アリスはほっとくが、今日は強気だな」

「ええ。あの子はなにもかも怖がっている。自分の身に起きた事さ

え把握出来ていない。最近ようやく落ち着きを取り戻してきたのに、その平穩を崩すならあなたたちに恐怖のトラウマを植え付けるだけ。その子を護るためなら本気を出すわ!」

さとりは本心で言った。四人は一瞬地靈殿の主の威厳を感じた。魔理沙も強気のさとりに内心焦りが生じてきた。

(まずいな、奴のトラウマ弾幕がパワーアップしてやがる。さっきのはフ란の弾幕だったし)

魔理沙自身もここまで強気に出るとは思わなかった。このままではさらに厳しい弾幕が来るかもしれない。

だが運は魔理沙に傾き、奇跡は起きた。いや起こされた。

「ただいま!」

こいしが帰ってきたのだ。さとりはこいしに気が付くと直ぐに弾幕を消した。四人はちょうどこいしの後ろに同じ背丈の誰かがいたのを確認した。

さとりにとって妹の帰宅は想定外だった。出かけたのは昨日であり、たいてい三日以上は帰って来ないはずだったが。

「あっ、魔理沙に山の神社にいた人と……後は知らない人だ」

こいしが四人に気がつくともまず魔理沙に近づいてきた。

「今日は何の用なの？ 何か盗もうならお姉ちゃんの約束だから手加減しないよ？」

「いや違うぜ。あんたの後ろにいる外来人に用があるんだ」

すると後ろの誰かはビクツと身体を震わしてこいしにしがみつく。

「駄目だよ！ いきなり来て怖がってる！」

こいしは後ろの人物を守るように魔理沙の前に立ちはだかる。が、魔理沙は後ろの人物の性格を分析した。

「そうか、恐がりなのか。安心しろ、私は正真正銘の人間だぜ」

魔理沙は外来人が人間ならば妖怪の巣窟である環境からして必ず何かしら反応すると思った。

それは見事に的中した。

「に、人間？ ほ、本当？」

「そうだぜ。妖怪退治も（頼まれた時）してる人間だ」

的を得た魔理沙はできるだけ安心させるように言葉を選ぶ。

「大丈夫だから、姿を見せてくれないか？」

魔理沙が後ろの外来人を催促する。

「だ、駄目だよ！」

こいしは抱え込むようにその外来人を守る。だがその外来人はこいしに言った。

「ゴメン、こいしちゃん。あたしは大丈夫だから」

「えっ？」

こいしは信じられないような言葉を聞いたように驚愕していた。よほどショックを受けたのか抱え込んでいた腕を解いてしまい、固まったように動かなくなった。

外来人はゆっくりと魔理沙に振り返って、魔理沙の顔を見た。三人もその外来人を見た。

「!?!?!?」

一同が驚いた。そして二言目は、

「か、可愛い……」

地霊殿前によく着いた俺と霊夢。はいそこ、今更主人公登場とか言わない。

「相変わらずねえ。じゃ入るわよ」

到着早々地霊殿の扉に手を掛けて勢いよく開け放った。そして俺達が見たのは……。

「可愛い、可愛い、可愛い、可愛い！ やばい、可愛い過ぎるぜえ！」

「凄く……可愛い……ハア……」

「わ、私の方にも振り向いて下さい！ カメラ撮りますからこちらに視線お願いします！」

「……」

「でしょー、すごく可愛いでしょ♪」

「ふみゅーう……／／／」

このカオスな状況を説明するが、魔理沙が誰かの頭を撫でながら可愛いを連発。

妖夢は遠くから見ているが、凄くうっとりしている。

早苗はどこから持ってきたか携帯を取り出して某会場で写真家が言いそうな台詞を言っている。

古明地姉妹は妹が自慢して姉はその誰かの頭を撫でていた。

撫でられてる誰かは頭から蒸気が出そうと言わんばかりに顔を真っ赤にしてかつ和んだような表情をしていて……可愛い。

アリスは……お察し下さい。倒れているからなんと云えばいいか……。ただ顔の辺りから血が見えた。鼻血か？

で、誰も俺達に気づいていないようだ。

「見た感じあの可愛い子が外人なのかな？」

冷静に判断して霊夢に振り向いた。霊夢も視線が釘付けになっている。可愛いのは事実だし釘付けになるのは仕方ないが、一体どうやって話を切り出せばいいのだろうか？

切り出し方を考えてふと視線を向けた時、偶然その誰かと目が合った。

その刹那、俺は誰かに似ていると思った。

いや、違う。俺はあの子を知っている。

俺は知っている。俺のいた2036年から来た外人だ。さらに服装は制服。確か俺が通っていた学校の制服に間違いない。

「――！！」

突如脳裏に現れた現実世界の映像。学校。教室の中。LHRの時。新しい机。転校生。新しいクラスメート。

「あ……ああ……」

俺も気づかない内に声が漏れ出していた。有り得ないの言葉が脳内

を駆け回る。

目が合った外来人は魔理沙とさとの手から抜けて俺のもとに寄ってきた。

「あ…、あの！ え、えと…も、もしかしてですよ？ もしかしたら、あたしと同じクラスの人…でしたよね…？」

「……ああ」

頭の纏まってない俺はその子の質問にただ素っ気ない返事をした。

この場を一旦後にして古明地姉妹の誘導で地霊殿の一室に集められた俺達。

長テーブルに隣接する椅子に全員腰掛けている。

「あなたの心、随分落ち着かないわね。あの子と何か関係があるって見て？」

さとりが始めに俺の事を言うと、全員の視線が集中する。

「対した訳ではないが……。じゃあまずは——」

俺は当時の事を思い出しながら話しはじめた。

現実世界で学生をしていた時。時刻は午後。俺にとって最後のLHRとなった日に転校生の事を担任から知らされた。クラスは一時騒然とし、どんな人が来たのか、容姿はどんなだろうかなどと様々な憶測が飛び交う。

その時の俺は転校生にはあまり興味は無かった。クラスメートと積極的に接する訳でないので、一人静かに学習していた。

担任が戻り、転校生の説明を簡単に済ます。保護者同伴で一緒に挨拶をするだそうだと。

保護者同伴なのは最近この地域に越してきたばかりな家庭であるから子供が不安だ、という事だ。

担任が教卓から離れ、廊下にいる転校生を招いた。

転校生はドアをゆっくりと開けて、注意深く観察してるように見えた。身長は150弱。クラス内では小さい方だ。緊張しているのか、足元の段に引っ掛かりそうになった。担任の話じゃ男子と聞いたが、どうみても男子とは程遠い顔立ち。しかも男にしては珍しいセミショート。むしろ女子に見えた。

転校生はようやく教壇の前にたどり着き、自己紹介を始めた。

「え……えっと……あたしは……梨音・F・東郷リオンと言います……。へ、変な名前ですけど……り、梨音と呼んで下さい……」

緊張からか、たどたどしく自己紹介をする。自信は無く、気が弱いように見える。名前からして外国人とハーフなようだ。

「それで……その…日本の学校とかは…まだよく分からない…です。だから……不安なんですけど…、これから…宜しくお願いします…」

自己紹介を終えてペコリと頭を下げた。何故か赤面して俯けたままである。一つ一つの動作がわざとではないと思うが、可愛い。

「「うおおーっ!!!」」

「「可愛いーっ!!!」」

遂にクラス全員の思いが限界突破し、一気に転校生の梨音に駆け寄る。勿論俺と他の真面目なクラスメート以外。

「ッ!!!!?」

突然のクラスの行動に驚く転校生。まあ当然だろう。直ぐに担任が生徒達を席に座るよう指示する。梨音は担任にしがみついていた。

しかし、騒ぎはここから本格的に始まった。

「でええーい! 梨音、大丈夫かぁー!」

突然ドアを開けて入ってきた背広姿の男性が教室に入ってきたのだ。転校生の名前を言った事から多分父親なのだろう。が、父親はどうみても外国人だ。金髪に青い瞳、見た目190はある身長。筋骨隆々な身体。それでいて爽やかな顔つき。

その父親は担任から離れた梨音に近づいて肩に手を置いた。

「大丈夫か、梨音！」

「ち、ちよつと……怖かったけど、大丈夫だよ……」

「うむ、それならばよし」

梨音と話し終わると、父親は教壇に立った。そして演説ともとれる自分の紹介を始めた。

「この教室にいる諸君らに告ぐ！ 我はロシア連邦シベリア自治区臨時首都の外交副官にしてこの可愛い息子、梨音の父親でもあるワイズマン・トーレスである！」

一瞬で静まり返る教室に響く父親ワイズマンの声。その大きさは多分三クラス先にまで届いている。

「そして、我が愛息子の梨音は気が弱く、恐がりであり恥ずかしがり屋であるが故に人との接触が少ない。だが、それを補う可愛さがある！」

息子の性格を言うのはいいがなんか違うんじゃないか？ だが一つ分かったのは、先程の自己紹介の赤面は恥ずかしさ故だということだ。

「それで、我が愛息子の梨音を愛でる事は許可するが、万が一梨音を怖がらせたり泣かせたりした輩には我が闘争心と権力を持って地獄の果てまで追い詰めてやる事を肝に命じておくがよい！」

果てしない脅しをサラツと言う父親。こいつ絶対ぶっ飛んでる。しかも愛でる事は許可するって父親が公共の場で平然と言う言葉か、それ？

「では担任殿、我は仕事に戻る。梨音を任せたぞ」

言いたい事だけ言って教室から退出した父親ワイズマン。その間、教室は嵐が過ぎ去った後の静けさしか残らなかった。

これが原因かどうかは知らないが次の日から梨音は一躍人気者となった。教室内ではむしろ名物みたいな扱いではあったが、優しく接してくれるクラスメートに梨音も安心してクラスに溶け込んだ。

ちなみに余談だが、俺のいた世界ではシベリア側の半分がロシア連邦であり、残りはA A E Uの支配下となっている。だからシベリア自治区のある都市を臨時首都と言っているのだ。

その日から六日後に俺は幻想入りした。

思い返せばたった六日の付き合いだ。なのに俺の事を覚えているとは……。

いや違う。学生ならば俺の失踪は当然学校に伝わる。クラスメートは担任から知らされれば……。

俺は自分の立場をよく理解していなかった事に気づいて、取り返しのつかない事態となったと思った。

「そうとも言えませんよ？」

誰かの声が聞こえた。さとりだった。そういえば心を読めたんだっけ？ となればさっきまでの考えを考慮して言ったのか？

「考慮と言うほどではありませんが、彼を知ってる人がいると知って私達は安心したのです」

それはどういう意味だろうか？

「今は慣れてるとはいえ私達は妖怪。やはりこのまま留めておくにも気が進みませんでした」

という事は、つまり……？

「私達もこんなに可愛い子と離れるのは惜しいですが、連れて行って欲しいのです」

「ちょ、ちょっと待ってお姉ちゃん！　なんでなの！？」

こいしが姉の発言に異議を申し立てる。

「こいし、彼も外来人。知ってる人の傍なら安心して生活できるし、地霊殿だけでは幻想郷を知ることとは出来ないわ」

「で、でも私達のペットでもあり家族同然でしょ！！　それなのに……」

「こいし……」

今にも膝から崩れて泣きそうなこいし。確かにこのまま引きはがしてしまうには可哀相だ。

「私にいい案があるぜ」

二人に提案を持ち掛けた魔理沙。あまり良さそうな提案じゃなさそうな気が……。

「私達は地上暮らしだからさとり達が地上に住めば何時でも会いに行けるだろ？ だから地上の間欠泉地下センター付近に河童達に頼んで家を建てて貰えばどうかな？」

「その必要はありません」

即座に却下された。

「な、なんでだよ？」

「地霊殿の主が地霊殿を棄てる訳には行きませんし、私達から会いに行きます。こいしもそうやって地上に行くなら問題無いでしょ？」

「うーん……。分かったよ」

渋々さとのやり方に賛成するこいし。うなだれそうなこいしに梨音が寄る。

「ゴメンね、こいしちゃん。何時でも会いに来ていいよ？ 毎日でもいいよ」

「……じゃあ頭撫でさせて」

こいしは梨音の頭を撫でる。梨音はこいしに身を寄せてあるがま
まに任せた。まるで小動物だ。

とりあえずさとのり提案なのだが、誰が梨音を連れ帰るかで揉め
た。

これだけの可愛さだ。癒しにもなるから五人全員が自分の家にと
衝突。

「私の場所が一番安全なのよ！ 絶対私の神社に」

「霊夢は稟がいるし定員オーバーだろ！ 私の家が最適だぜ」

「魔理沙さんの家って乱雑じゃないですか！ 安全なら白玉楼の方
が」

「何言ってるんですか！ 幽霊とか怖がるじゃないですか！ ここ
は守屋神社に」

「いいえ、彼は私の家が一番だわ！ 人形達もいて退屈もしないし、
可愛い人形達も気に入ってくれるから」

「いや、お前の性格上に問題があるぜ！」

「私の主張の時だけ酷いわね！」

とまあこんな感じ。決まりそうに無い。俺は通信機片手に椅子に座って待つ。するとこいしから離れた梨音が近づいて話し掛けてきた。

「あ、あの…えっと……名前、聞いても…」

「ああ、そうだな。桜之宮稟だ。宜しくな、梨音・F・東郷さん」

「フルネーム覚えてたんですか!? で、でも……梨音って呼んで貰った方が……」

「分かってる。梨音も俺の事を稟と呼んでくれ」

「はい、分かりました!」

元気良く返事する梨音。改めて見るとやはり女子に見える。ちよつとだけ梨音の頭を撫でてみた。

「ふえ!? ……ふみゅー……」

一瞬驚いたが、赤面しながらそのまま身体ごと寄せて来た。

「稟さんの手って優しい感じがして凄く暖かくて気持ちいいですぅ」

「そ、そうかな?」

そう言われても自覚は無い。が、やはり可愛い。俺のいた世界にいたことが信じられないほどの可愛さだ。彼女達が夢中になるのも

分かる。

と、ある事を思い出した。何故ここに来たのか？

「梨音、君は何時からこの世界に来たんだ？」

「え？ えーっとおー……五日前かなあ？」

「そうか。ちなみに俺はもう二ヶ月近くになる。で、もう一つあるんだが……」

流石にまだ何も把握してないと思うが、どうしても聞きたかった。

「何か能力とか…魔法的な何かとかできる？」

「能力…ですか？ えっと、出来ないことは無いけど……」

と言うことは自分の能力を知ってるのか！？

「うー、でも危ないって言われて……それで一回お空ちゃんを凍らしちゃって……」

ちょっと待て。空は自身も高熱のはずだ。それを凍らしたとなれば相当な力がある。というか完璧に俺以上はある。

「で、でも！ 炎も出せたから直ぐに解凍しました！ ……確かどちらとも扇状に広がっていった……」

ああ、分かった。俺の能力と対極だ。俺のツルハシはもともと破壊神が宿っている。俺のはただ単にツルハシとそのスキルだけだが、

その設定だと魔王軍に入る。その対極。つまり勇者。そしてそれは勇者のスキル。

「つまり、『勇者スキルを扱える程度の能力』！」

つい口に出してしまい、全員がこちらを向いた。というか先程までの衝突は既に終わっている。皆の注意を反らす為に聞いてみた。

「そういや、梨音は誰の家に？」

すると四人は視線をずらした。

「いや、あの稟、落ち着いて聞いてね……？」

霊夢が神妙な顔つきで言う。

「いつまでも決まらないからこいしが持って来たクジを引いたのよ。そこまではいいのよ。ただ……それで……当たったのは……」

ここまで言ってチラッと誰かを見た。嫌な予感しかしなかった。もしかしてと思うが……。

視線の先にいた当選者は……、

「まあ、当然よね♪」

上機嫌の……アリス・マーガトロイド！？

「いや、本当にゴメン…」

「……」

こればかりは俺も言葉を失った。が、梨音はまっすぐに新しい家主のもとに駆け寄った。

「あ、あの！ 新しく家にお世話になります梨音・F・東郷って言います。梨音と呼んで下さい」

ああ、気が弱いとか恥ずかしがり屋でありながら新しい家主に挨拶するとはなんと健気なのだろう。

「梨音ね、私はアリス・マーガトロイドよ。私こそ宜しくね、梨音ちゃん。ウフフフ♪」

「はい、こちらこそ宜しくお願いします、アリスさん！」

笑顔でアリスに返事をした。すると、

「ブハッ！」

「きゃああああ！？ アリスさん！！！」

綺麗な放物線を描いた鼻血を出して再びぶっ倒れたアリス。

この組み合わせ、一体どんな混沌を生むのか誰にも分からない。

第24話 勇者の意志を継ぐ弱く小さな存在（後書き）

おま……

楓「第13回、幻想郷ラジオ！」

稟「今夜も宜しく願います」

楓「その台詞は違うな」

稟「だいたいテーマが無いですからなんと伝えればいいか」

楓「そこは雰囲気ですよ」

稟「無茶な注文を……」

楓「それより稟君の世界から可愛い子が来たんだっけ？ 私も一目見たい！」

稟「それも無茶な注文だ……」

楓「稟君って態度変わる人だっけ？」

稟「いえ、ただ勇気を出して言うただけですが何か？」

楓「ま、前回ゲストも稟君に高評価でしたよ」

稟「何故『？』のままにしたのか分からないが……」

楓「ではハガキを……」

稟（久々のスルー！？）

そういえばこんなのしてたのね。珍しいから出して見たのも事実だけど。先日の葉の配達は感謝するわ。実はあの後紅魔館でちょっとした諍いがあって、仲裁したのよ。全くお嬢様を狙おうだなんて妖精メイドの分際で銀の銃だなんて……。

失礼、では質問ですけど、この前妹様から逃げ切ったわよね？
どうやって逃げ切ったのか興味があるから答えて貰います。

紅魔館メイド長

稟「レミリアさん、どれだけ妖精メイドの恨み買ってるんですか？」

楓「レミリアさんって吸血鬼なの？ 銀の銃ってあったから」

稟「そうです。で、妖精メイドが持ってたって、それ反乱起こす気だな」

楓「そういや私門番としか話してないや」

稟「最初の頃ですね。で、質問ですが、単純に死ぬ気で走りました。途中ツルハシスキルで数秒足止めしたり、絶対あの鬼ごっこはしたくない」

楓「鬼ごっこですか？」

稟「忠告しますが、吸血鬼と鬼ごっこは命懸けですから。それに妹は狂気がやばい」

楓「ま、私の速さなら捕まらないし、大丈夫」

稟「でも止めてください」

どうも、お久しぶりです。幻想郷縁起の外来人部類が少しずつ増えて来てます。私の知らない間にたくさん外来人達が来てたなんて全然知りませんでした。また神社に伺いますから、その時は宜しくお願いします。

さて、質問ですがあなたがた二人の関係を聞いてみたいです。

ひそかにもこけーねを愛する会 会員NO. 1

稟「質問以前にその怪しい集会から辞退しなさい」

楓「NO・1だから真っ先に入ったのかな？」

稟「必ず辞退しなさい。普通の生活を送りなさい。というか妹紅まだ本編出てないな」

楓「慧音さんは知ってますよ。人里で挨拶もしたし」

稟「質問だが、悪夢再び襲来か？ 前もあつたな、恋愛話を聞かせたの。ま、とにかくにも特別な関係ではないが」

楓「ええっ！？ そ、そんな……」

稟「なんでそんなショック受けるんですか！？」

楓「だ、だってそんな風にしか思ってくれなかったんだって思ったら……」

稟「別に嫌いって訳でないし、むしろ仲間意識の方が強いから。というかあの通信機状態からどう発展すりゃいいんだよ」

楓「！、そうだよ。早く動けるようになれば……」

稟「手出したら霊夢が来そうな気がするが……」

楓「チツチツ、甘いですよ。稟君の為なら私は強くなれる！」

稟「どっかで聞いた台詞を言わないで下さい」

稟「っと時間ですね。今回はゲスト無しだったけど」

？「いや、いたよ！」

楓「あ、光学迷彩スーツの実験してたんだっけ？」

稟「なんでここでするんですか？」

にとり「それは……いろいろ改造するためさ！ 稟の話しているこのマイクはラジオだけでなく妖怪の山のスピーカーにも伝わった！

これで中の情報もバッチリだ！ 河童の技術力は幻想郷一イイイイイ！」

楓「次回も来るそうですよ。ではまた次の回に。ご視聴ありがとうございます
ございました！」

稟「何故ネタに走ったし……」

第25話 絶対不可視の暗殺者〜Infallible Assassin(前)

今回は場面の区切りに

――

を付けました。無駄に場面分け多いですから減らしていかないとな
…。

ちなみに題名は適当です。

第25話 絶対不可視の暗殺者〜Infallible Assassin

地霊殿前、軍服を着た男女がいた。RRFのホルトとチカだ。

間欠泉地下センターの穴から移動したのを感知したチカはホルトに報告、二人は直ぐさま穴に入った。最下層到着前に横穴を発見、六人が通ったと分かりそのまま横穴を進む。チカが旧地獄街道の生物反応を探知し、ホルトは気づかれぬように追跡し、今に至る。

「この屋敷の中には先程の六人に三人」

「三人はこの屋敷の主か従者なのだろう。で、外来人は特定できたか？」

チカは壁に手を翳して目をつむる。しばらくすると手を離れた。

「身長150前後の男子。仲間じゃない」

「分かった。目的は果たした。が、何かしら能力があると後々厄介かもしれない。威嚇程度に数発撃つか」

と、ホルトは銃を取り出すと地霊殿と反対の、何も無い空間に三発撃った。

無意味な発砲だが、無意味ではない。銃から飛び出した弾は軌道を変え始めて、ホルト達の場所に180度曲がり、地霊殿へ突き抜けた。

「標的は新しく来た外人」

弾丸は意志を持ったように地霊殿へ突っ込んだ。

――

『!、ま、まずい』

「どうしたんですか？」

地霊殿のある一室にて、アリスが鼻血を出して倒れてから数十秒後、突然通信機のスイッチが入った。

『今さっき硝煙を確認した。狙われてるわ! 多分文さんを追い詰めた弾丸と同系統』

おい、それはいくらなんでもシャレにならない。この混乱状態の中一体どうすればいいというのか!

『稟君のツルハシスキルに方向を知るのがあったじゃない? それならどう?』

いつ俺がそれを話したのか、だが今は考えてる暇は無い。

「だが、あくまで方向だけが分かる。何の意味が」

『いいからやれ!』

「分かりましたよ!」

さっきのツルハシを取り出してスキルを発動させた。

搜索「ナビィタイマー」

弾丸は三発。方向は2時の方向。正面玄関を通って……って壁を貫通している!? なにこのチート銃弾!?

だがよく見たらさらにあることに気づいた。見える。空間に矢印が見える。矢印に従って弾丸が近づいている。すぐ直感した。矢印は弾丸の軌跡! 俺は矢印の終着点を見てみた。

「……おい、なんでだ…なんでだ!?!」

見たくない軌跡だった。着弾位置にいたのは……倒れたアリスを起こそうとしている梨音だ。

「なんで梨音が狙われてる!?!」

『理由は後。防がないと!』

だが、俺のスキルでどうやって壁を貫通する追跡弾を止めると言うのだ?

『弾速は遅いし、うまく当てれば相殺は可能なはずよ?』

平然と対策を言う常盤さん。限られた能力からどう相殺できるのか。ツルハシを振り上げて防ぐか? だが弾丸はすり抜けている。

だから叫んだ。

「梨音ッ！　そこから離れろ！」

「ッ！！！！？」

しかし逆効果だった。俺の突然大きな声に驚き、動いていない。まずい、もう距離が無い。

咄嗟に駆け出して梨音に体当たりした。優しく、ちょっと移動させるくらい弱く、だが梨音はバランスを崩して倒れる。刹那、梨音が先程いたところの足元から銃弾が地面から垂直に飛び出した。

「ちょ、稟！　あんたいきなり何を！」

俺のいきなりの行動を非難する一同。だがそうも言ってられない。スキルに寄れば天井を突き破ると再び天井を突き破って襲って来る。

「済まない梨音。だが今は事情があるんだ、許してくれ」

当の本人もよく分かっていなかったようだ。

「な、なんであたしをいきなり突き飛ばして？？」

「理由は後だ！　まずは走って逃げるんだ、いいな！」

無理矢理手を掴んで立たせて屋敷の部屋を訳も分からず走り出す。すると天井を突き破った弾丸は再び天井を突き破り、梨音に接近してきた。

「な！？　だ、弾丸！？　助けてえー！！」

ようやく状況を理解し、同時に自分が危機に陥っていることが分かった。

「稟！　梨音！　私のところに！」

俺は手を離して梨音を魔理沙のもとに向かわす。魔理沙が梨音と弾丸の間に入り、

「『恋符　マスタースパーク　ッ！！』」

極太レーザーで弾丸もろとも消し炭に…って俺も射程内に入っていない

ズンッ！

――

「！？　なんだこの破壊力のあるエネルギーは？」

リカが魔理沙のマスタースパークに反応した。感知したそのエネルギーは今まで感じたことの無い威力を秘めていた。

「どうかしたか？」

「たった今強力なエネルギーを感知、銃弾はなくなりました」

そう聞くと軽く舌打ちをしたホルト。

「チッ、やはり一筋縄ではいかないか。銃弾を消したのは一体誰だ？」

「魔女のような服装の女子」

「分かった。知りたい情報は得た。地下から撤退してキョウジ達と合流するぞ」

「了解しました」

リカはホルトの手を取ると宙に浮き、二人はこの場を後にした。

――

さて、どう説明すればいいか。梨音はさっきのが怖くて今だ倒れているアリスに泣きついていた。少し時間が経って少しは落ち着いたようだが今だアリスの傍を離れない。残る一同は俺を責め立てる。

「いきなり梨音を突き飛ばしたりなんて、もし怪我でもしたらどうする気よ！」

「仕方なかったんだ……」

「私も今のは感心しませんよ。別のやり方もあったでしょう？」

「それも一理だが……」

「あぁー、ごほん！」

魔理沙が突然咳ばらいをして皆の前に立った。

「まあ、そんな責めるな。稟だって梨音を助ける為にやったことだし、梨音も怪我してないから問題なんて無いはずだぜ？」

「た、確かにそうですけど……」

「それに少なくともあの時点では稟にしか出来なかった事だ。稟が気づかなかつたら梨音がやられていたんだぜ？　だから私は稟は正しいと信じるぜ」

まさかとは思ったが、また魔理沙に救われるなんて思いもしなかった。

魔理沙の主張は正しい。通信機を持っていたのは俺だけ。気づかなければ梨音に被弾したかもしれない。

「……分かったわ。私も信じる」

霊夢が言い出したのを皮切りに他のメンバーも許してくれた。魔理沙は俺に振り向いた際にウインクをした。こういう場合の魔理沙は本当に頼りになるのを実感した瞬間でもあった。

俺は梨音にも謝る為傍に行く。梨音はまだアリスの傍でうずくまるようにしゃがんでいる。

「梨音……本当に済まなかった…」

「……」

声を出さないが、多分聞こえている。そつと背中を触ると震えが腕から伝わった。

「梨音……」

掛ける言葉が思い付かない。慰めの言葉でいいのか？　そもそも言葉を掛けるべきなのか？　それすら分からなかった。すると、微かに梨音の声が聞こえた。

「……ぶ……。大……丈……夫……」

謔言のように聞こえる言葉を聞いて、本心は困った。いきなり自分の命が危険に曝されたのだ。梨音の性格からしてそう簡単に慰められそうにない。

だが、梨音に掛ける言葉への心配は別の誰かによって打ち砕かれた。

「笑って」

突如誰かの声が聞こえた。霊夢達ではない。方向は梨音の方からだ。

アリスだった。アリスは目をくわっと開けて、いきなり梨音に手

を絡ませた。掴まれてビクツとした梨音。

「あ、アリスさん!？」

「笑いなさいって言ったのよ!」

アリスは梨音を掴んだままいきなり立ち上がると問答無用で梨音をくすぐり始めた。

「な、何!? あはっ、あはははっ! あ、アリスさ、くすぐ、あはははははっ!」

「そう! それよ! もっと笑いなさい」

「あははっ! あ、アリスさ、苦し、あはははははっ!」

緊急事態です。アリスが暴走しました。これよりチームは梨音救出の為にアリスの排除を執行します。

「待って」

今にも俺達が駆け出さんとした時、さとりが止めた。

「さとり、止めないでよ! 緊急事態なのよ! アリスの異常はあんなもんじゃないわよ!」

霊夢が声を荒げてさとりに文句を言う。が、さとりは冷静に言った。

「アリスという魔法使いの心を読みました。見ていれば分かります」

はたしてアリスの心の何を読んだというのか。全く見当が付かなかった。

「はあ…、はあ…、はあ…」

ようやく解放されて呼吸を整える梨音。アリスは目線を揃える為にしゃがむ。ちなみにアリスは身長結構あるんだぜ？

「いい？ 梨音が恐がりなのも分かるけど、あなたは可愛いだよ」

「それとくすぐられた意味が…」

「皆、あなたが恐がると心配するのよ。あなたが思ってる以上にね。あの桜之宮稟もあなたを慰める為に謝ったのよ」

「あっ……」

「だからあなたは心配を掛けないように笑顔でいる事。それが私の家に泊まる条件」

「条件！？ ……でも、あたしは皆に迷惑を掛けてしまったのだから……」

「さっきの事はもういいわ。これから心配を掛けないようにする事。いいわね？」

「は、はい！ アリスさんありがとうございます！」

アリスに慰められた梨音はアリスに抱き着き、アリスもしっかり抱きしめた。

勿論、俺を含む五人は……もうどうしようもねえ。頭が混乱している。アリスが人にあそこまで尽くすなんて思わなかった。すまない、アリス、俺、お前の性格誤解してた。

でも、アリスにもちゃんとした心があったと分かって安心した。多分ほかも同意見だと思う。

だが、地霊殿の悲劇はほんの序章だった事に気づいたのは、アリスが正気になって俺がテーブルに振り返って、テーブルに置いてある通信機の呼び出しランプが点滅しているのを発見した時だった。

――

旧地獄街道をこっそり移動していた二人を誰かが追っていた。

「範囲内に生体確認！ 人間でない、地獄鴉がこちらに接近中！」

街道外れにある、稟達が掘ってきた横穴に向かう途中にチカが感知した。

「地獄鴉？ 少なくともあの屋敷にいた者ではないな」

二人は一旦地面に降り立ち、接近する者を待った。

そして接近してきた者と二人が気付いたのは同時だった。

「あ、いた！ 許可無く融合炉から地霊殿に行こうとした異物！」

「あれは見た事が無いな。『許可無く』という事は護衛か何かか？」

接近してきた者は霊鳥路空だ。空は稟達が去ってから間欠泉地下センターに誰かが降りて来ていたのを知ったのだ。さらに稟達の掘った横穴を通り、さとりには危害を加えるのではと思い追ってきたのだ。

「でも地霊殿に近づいてないし……、どうなのかなあ？」

追いつくや否や空は二人は地霊殿と反対、通ってきた横穴を目指しているのに気づいて疑問が浮かんた。

「えっと……私も二人を追ってきて……で、見つけたけど穴に向かっ
ていて……うにゅ？」

空の頭に大きなクエスチョンマークが浮く。空の思考には地霊殿から穴に向かっていたという考えは無かった。その場の状況で判断しただけだった。

しかし、逆に二人は空の頭の悪さは知らない。二人の判断は、追っ手なら排除。

ホルトはチカを片手で掴みながら移動し、もう片手で銃を撃つ。
だがこれが空の判断を確固足る行為となった。

「弾を撃ってきたから、私達の敵だね！」

すぐに飛び立ち、太陽弾で銃弾を蒸発させた。

「チッ、こいつも高エネルギー弾か！」

そうと分かると逆に空を狙わずに銃を撃つ。数発撃つとちょうど弾切れになったが、空のカートリッジを外すとチカがキャッチし、入れ代わりに弾の入ったカートリッジを銃に差し込む。

空中での銃の使用時はチカがサポートになり、補充のタイムラグをなくせる。

銃をセットし、再び空を狙わずに撃つ。だが全部でない。三発に一発は空を狙う。だが狙った弾丸は太陽弾で消され、避けた弾丸も着弾前に空自身の高熱で蒸発する。

「銃は通用しないのはこいつが攻撃体勢だからか？ ……試す価値はある。十分弾は撃ち込んだから、後は逃げるか」

ホルトは銃をしまうとスピードを上げて横穴を目指す。

「あ、待て！」

空もすぐにスピードを上げる。空自身気づいてないが、外した弾丸は既に空の背後について来ている。が、どれ一つ着弾しなかった。

「……追いかけるのも疲れてきたなー」

ボソツと呟いた空の身体は熱と光に包まれていた。

「!?!? 追っ手の体温が急激に上昇!? これはまるで…」

チカは空の異変を感じ取り、後ろを見た。背後から巨大な火の玉が迫っていた。

「まさか…これが追っ手か!?!?」

核熱「核反応制御不能ダイブ」

空は一気にカタを付ける為に突撃した。

「くっ、もう穴は目と鼻の先! 間に合うか!?!?」

ホルトの速度を優に越えた空は徐々に距離を縮める。

後五メートル、四メートル、三メートル……。背後から徐々に熱される空気を感じる。身体から汗が出て来る。チカとホルトの掴む手からツウーと汗が流れる。

（汗で滑ればチカの命は無い! 保ってくれ:!!）

祈るような思いで限界速度で飛行する二人。背後の火の玉は後一メートル。

ボツゴオオオオン!!!!!!

地下の空洞に何かが激突した音と衝撃が伝わった。

通信機の呼び出しランプに気づいて咄嗟に通信機を取る。

「どうしましたか？」

『今、屋敷の中よね？ 外に硝煙反応：しかも三発とかじゃない：
…数十発ぐらい…。多分一度補充してまた撃ってた…。』

それを聞いた瞬間、顔の血が引いた。数十発？ 幻聴かと思った。

「じょ、冗談は『冗談じゃない。通信機に内蔵されてるレーダーが
感知した。このレーダーは正常だから……。きっと……。』……………」

もう頭は真っ白になった。どうすればいい？ 弾丸は壁をすり抜ける。もしかしたらあらゆる方向から現れるかもしれない。もしそうなら魔理沙でもカバーできない。

搜索「ナビイタイマー」

無意識にスキルを発動した。周囲を見回す。せめて誰を狙ったのかが分かれば……！

ところが、

「……ん？」

空間に矢印は現れない。誰にも矢印は向いてない。それどころか弾丸すら認識出来ない。これは一体どういう事なのか？ 何が起きたのか？

「常盤さん……弾丸は…見当たりません」

『えっ？ そんな馬鹿な、硝煙反応は確實、数十発も撃たれたのに見当たらないはずは』

「ないものはないです！ 少なくとも地霊殿の周りに弾丸は存在しない！」

『そ、そんな…。レーダーは…正常なはず……』

通信機からは震えた声が聞こえた。

「稟、どうしたの！？ また弾丸が来るの！？」

通信機に叫んだ声を聞いたのか霊夢が飛んできた。他の皆にも聞こえていたらしく、全員迎撃の体勢をとっていた。先程襲撃されたのだから当然だ。

「いや、弾丸はない」

「？、でも楓の通信機持ってるし」

「スキルで確認した。弾丸はない」

「本当？」

「本当だ。仮に来たとしても弾丸の軌跡が分かる」

些か納得できない様子だったが、

「分かった」

と言って他に弾丸は来ないのを伝えた。

正直常盤さんのミスとは思えない。常盤さんの持つ技術力は確かなものには間違いない。竹林でのTrick Companyの罠に對して発揮されていた。通信機無しだったら今頃生きていない、いや、生きていたとしても重症は確実だった。だから誤作動とは考えられない。

いくら考えても分からない。しかし、弾丸はないのは事実。通信機から声は聞こえない。多分だがショックを受けているからと思う。どうする事も出来ず、ただ時間だけが過ぎて行く。

――

空は崩れ落ちた岩を掻き分けて立ち上がった。場所を確認する為に辺りを見回すと、壁に大きなクレーターと小さな横穴。

「うにゅ、逃げられたー！」

空は壁に突撃寸前に横穴に入った二人を思い出した。

「あゝもゝ、これじゃあ叱られるう！」

地団駄を踏む空。その度に崩れた岩にヒビが入り、崩れた。

「うゝん、どうしy：っつ！」

突然空の左肩に痛みが走る。左肩を見るとじわじわ白いブラウスが紅に染まっていく。

「！、まだ近くにいる！」

空は再び飛び立ち、攻撃体勢をとる。すると地上からさっき見た弾丸が飛び出した。

「そこか！ だったら…」

爆符「メガフレア」

大量の太陽弾と小弾で満遍なく攻撃した。岩は高温で溶け、もはや原型を留めなくなった。迫り来る弾丸も同様に消え失せ、何も無くなった。

「あれっ、やり過ぎて死体も灰になっちゃったかな？」

跡形もない様子を見て、

「ま、いっか。悪い奴は退治したし。それよりさとり様から傷口を

治して貰わないと…」

地霊殿に向き直ると一直線に目指した。

「ただいまー！」

わずか四十秒後に地霊殿の扉は開かれた。

――

「あっ、お空だわ」

さとりは玄関から聞こえた声に気づいた。一つ不安だが、俺達を見てまた敵視しないだろうか？ 核融合炉で会ったけどもう忘れてたりして……。

「お空！？ その怪我どうしたの！？」

玄関に迎えに行ったさとりが大声で言った。

「怪我？ あの鳥頭が怪我するなんて」

霊夢が独り言のように呟くが、俺は既に玄関へ駆け出していた。

一抹の不安が頭を過ぎった。弾丸は数十発撃たれたが一発も確認していない。なら、その数十発が地霊殿にいた人物以外を狙ったなら？

そうすれば辻褃は合う。それを確認する為に空を見てみた。空を見ると、左肩から紅に染まるブラウスが目に入った。が、本人は別に痛がる様子はなく普通に動かしてる。

「お空！ 腕を動かさないで！」

「え？ でもあまり痛くないけど？ それでさとり様、この人誰だっけ？」

案の定俺を忘れているというのは合ってた。でも怪我也どうやら致命傷ではないし、本人も元気だから多分大丈夫だろう。

一旦さとりから怪我の部分に包帯を巻いて貰い、皆のいる部屋に来了。

「あ、お空怪我してる！」

空を見てこいしが空に近づく。さとりと同じペットの主としてはショックを受けるのは当然だろう。

「あー、こいし様、さとり様が包帯巻いてくれましたから大丈夫ですよ」

「心配かけたわね。で、お空、その怪我は外傷よね？ 何があったの？」

さとりが怪我の原因を聞く。空が怪我するなら外傷以外考えられないのも同意見なようだ。

「えーっとお……確か重要な事だった気が……」

空は指を頭に当てて悩む表情で必死に思い出そうとする。

「……確か横穴で……」

「横穴？」

さとりが頭を傾げる。

「あ、それ俺達がつった穴の事だ」

咄嗟に掘ってきた穴を思い出した。

「そうそう、融合炉から繋がってた」

「……あなた達どこから来たのよ……」

半分呆れて頭を振るさとり。

「確か……二人追ってたけど……逃げられた……じゃなくて灰になったかな？」

「二人？ 二人って誰？」

「えーっとお……あんま覚えてないけど……片方は帽子被ってて飛んでた。そいつが攻撃してきたから敵と思って攻撃したの」

「成る程。その敵とやらに肩をやられた訳ね。いいわ、少し休みなさい」

「はい」

空はそのまま部屋を出て行った。それからさとりは俺を見た。突然振り向かれたから一瞬驚いた。

「……そういえばあなた、先程空の怪我を見て連想したのがありますね」

「えっ？」

いきなり振られても分からない。が、次の言葉でようやく分かった。

「外来人テロリスト…ですか」

「っ！」

「あなたたちはお空の怪我について何か知ってるようね……詳しく教えて下さる？」

こちらとしてはこの話を振られたので楽になった。

学生説明中…

「分かりました。大事なペットを怪我させられたとなれば私達も動かないわけにはいかないですし」

とりあえず一連の話をしてさとり達は協力を申し出た。こちらとしては味方が増えて嬉しい限りだ。

「そろそろ戻らないとな……」

ここに来て随分時が経ってしまった。伝えたい事は十分伝えた。ここは一旦地霊殿を出る。というか俺が説明している間に既に準備を済ましていた六人。まあ、空いた時間にするのはいい心がけです。

「では、後ほど」

と、全員が部屋から出ていき、最後に俺が出ようとした時だ。

「待つて。最後に一つ」

さとりに呼び止められた。

「何か？」

「あなたにも様々なトラウマがあるようだけど、一つだけ段違いなトラウマがあるわね」

それを聞いて俺はアレを直感した。

「……ここでは言わないで貰いたいのだが」

「まあ、一応配慮はします。ですが、それが押しに弱い最大の一因ですね」

「……なんで分かりましたか？」

「通信機……といったかしら？ そのやり取りの最中に心を読みました。内心で押しに弱い自分を自虐してましたね？」

どうやら全てお見通しなようだ。さすが地霊殿の主。

「……話は後日にして貰えませんか？」

そう言うと足早に部屋を出て六人に追い掛ける。ただ真実を聞きたくないが故に逃げただけかもしれない。だがアレだけは嫌でも思い出したくない。

押しに弱いのもトラウマのせいで無意識に心が服従してしまう事なのは自分が一番分かっていた。

不意に通信機から声が聞こえた。

『あー、あー、稟君聞こえる？』

「常盤さん、どうしたんですか？ 数十発の弾丸感知から一向に連絡なかったし」

すぐに通信機を顔に近づけてそう言った。

『ごめんなさい。今資料が出揃ったの』

「へっ？ な、何のですか？」

『さっきの追跡弾の所持者よ』

そう聞くとすぐに梨音を一度見てから通信機に叫んだ。

「ほ、本当ですかっ！」

「もー、また大声出して…」

うんざりしたように振り返る霊夢。他も足を止めてこちらを見る。

「！、済まない！ だけど霊夢、常盤さんが敵を特定した。さっきの弾丸を撃った奴のな」

「！？、本当！？」

言うや否や全員が一気に駆け寄った。

「本当ですか！？」

「あのテロリストの誰ですか！？」

一斉に聞いてくるので通信機の声が聞こえない。

「皆さん、静かにしてください！」

意外にも騒がしいこの場を梨音が制した。梨音の声は透き通るように全員の耳に入った。しーんとなってから常盤さんは話しはじめた。

『敵は帽子を被った奴からホルト。もう一人は長髪のチカ。そして

使用した武器は弾丸自動追尾銃、通称「百発百中の暗殺銃」」

「どこまで沈黙だが、多分幻想郷勢は良く分かってない。俺も半分は分かった。」

「つまり、弾丸は対象者に当たるまで追尾する弾丸って事？」

『そう。つまり、わざと外しても地面を貫通しながら対象者に向かい、油断した所をタイムラグで命中させる。距離も関係無い。一部でも当たらない限り追尾し続ける。私達の世界でも数十丁しか生産されてないわ』

つまり某漫画のナイスガイが使う銃の強化仕様ですね。弾丸も操れるあいつね。

「だから文もやられたのか……」

距離が関係ないなら、逃げ切った文が安心した所に気づかれずに弾丸が貫いたことになる。チート過ぎるだろ。

「待て。狙われたとしても弾丸は私のマスパで消し飛んだ。なんでだ？」

魔理沙が質問する。確かになぜ地面も壁も貫通する弾丸に効いたのか？

『弾丸と言っても実在するし、弾丸よりエネルギーが高ければ多分相殺ができるからだと思う』

「弾幕で処理できるなら怖くないわね」

サラっと言う霊夢に常盤さんは言い返した。

『霊夢、この銃は硝煙反応を確認しない限り撃たれていることにさえ気づけない。死角から飛び出した弾丸に霊夢は対処できるの?』

「うっ、そう言われると反論出来ない…」

全員同意見だ。死角からほんの数メートル先に現れた弾丸を対処できる方法などない。必ず被弾する。

『だから…皆気をつけて』

そう言う全員揃って返事をした。

ホルト。一番厄介な敵と知れたのは幸いだった。これから接触する可能性はある。情報は時に命すら分ける大切な資源だ。大切にしよう。

それと同時に俺は自身のトラウマをどうかしたいと思ってる。押しに弱いのではこの先不安だらけだ。そう簡単に克服出来ないのも承知の上だ。

脳科学者は人間は楽しい記憶より辛く、悲しい記憶をより長く記憶してしまうと言うが、まさにその通りだ。俺の場合は命の危険まです感じたのだから尚更だ。

自分の妹から銃を突き付けられた記憶なんて。

唐突過ぎた。

楓「第14回！ 幻想郷ラジオFinal！」

稟「えー、面倒ですが今回も張り切って……って常盤さん？ あなた今なんて言った？」

楓「第14回」

稟「その後！」

楓「幻想郷ラジオ」

稟「もう一声！」

楓「Final」

稟「……何ですかFinalって？ 場合によってはあなたの枕元に出ますよ」

楓「え、ストーカー？ 何それ怖い」

稟「まずはつきり説明して下さい」

楓「実は……最近になって『これじゃ駄目だ！ まだまだ改良の予知がある！』ってにとりさんが」

稟「またにとり！？」

楓「後……『おまけつまらないからやめるか五回に一回とかしろ。毎回とかウゼ』という意見が……」

稟「え？ それ何の意見？ 読者から？ 嘘でしょ？」

楓「肯定もしませんが否定もしません。これを読んだ読者に判断してもらいます。どちらにしても今回はFinalなのは確実」

稟「ここまで来て打ち切り！？」

楓「まあ……五回に一回とかならカウントは続けられるけど……それに第10回でやった解説とかは一応やるつもりです、はい」

稟「結局中途半端な……」

にとり「まあ頃合いだし良かったんじゃないの？」

凜「つてうおい!!? どっから湧いてきた!?!」

にとり「うるさい黙れ」

凜「え? なんで俺が?」

楓「まあ、そう感じる方がいたし、貴重な意見ですから。直接来たのは驚いたけど……」

凜「……分かりました。五回に一回の割合でやるのですね?」

楓「とりあえず最後らしくこの一枚のハガキを読みましようか」

またスルーか……
凜

聞いたぜ! ラジオ止めるのか!?! 私これでも毎日チェックしてたんだけどなあ……。と書いてみたが、そちらさんの都合なら仕方ないな、うん。潔く諦めるとするよ。

じゃ、最後の質問になるかもしれないと思って考えたんだ。常盤楓が慕ってるという先輩について教えて貰いたい。私も魅魔様が師匠だったし、そういう人の話は面白いからぜひ聞かせてくれよな!

霧雨魔梨沙

凜「厳密に言うともまだ続くから最後じゃないんだが……いつ情報仕入れた?」

にとり「私が教えました」

楓「私も教えました♪」

凜「えっ? じゃ今回Finalって聞いてないの俺だけ? 俺だけ仲間外れなの?」

にとり「大丈夫! 壊れても、僕がちゃんと改造^{なお}してあげる!」

凜「台詞パクった上に○書きして文字を変えるな」

楓「じゃあ質問なんですけど……答えなくていいですか？」

凵「ううおい！？ 答えようよ！ 魔理沙の期待を裏切らないでくれ！」

楓「だって『魔理沙』じゃなくて『魔梨沙』じゃん」

凵「あ、本当だ。霧雨まで書いてあったから見落としてた……。って関係ねえ！ 質問ならしっかり答えると言ったのはあなたでしよう！」

楓「いいじゃん。どうせ本編後半辺りに出てきそうだし」

凵「そういう事は言わないの！」

楓「うー、分かったわよ……。私の先輩は一つ上で、中学校の部活で知り合ったの。で、私はそのまま高校、先輩は警察と軍隊の融合した士官学校に行った訳です」

凵「あ、結構まともだ」

楓「それから、四、五年くらい経った時に政府軍とR R Fとの戦闘が都市内部で勃発して、避難している時に爆弾が飛んで来て、死んだと思った。でも庇ってくれた人がいたの。それが偶然にも先輩で、政府の依頼で非戦闘員の住民の避難誘導をしたの」

凵「時間が飛んだのは目をつぶるが、まさに奇跡の再開……」

楓「終わり」

凵「えっ！？ もう！？」

楓「後は本編で少し語るかも」

凵「中途半端な最後だった……」

楓「最後だから言うておく。あの意見は嘘です」

凵「あの、あなたの言葉がもう理解できないです」

楓「あれは一例で出したんです。駄目出しであれくらい書いてもいいっていう」

凵「……じゃあラジオは？」

楓「でもラジオはやっぱ五回に一回のペースでやります……」

凵「……もういいんだ。なんだか眠くなって来たんだ……」

にとり「ポチッとな」

CAUTION!! CAUTION!!

爆発まで残り一分。

稟「何押してんのおー!!!?」

にとり「眠気覚ましボタン兼スタジオ改装装置」

稟「絶対違うわぁー!!!」

楓「ではまた次にお会いしましょう。五回に一回とか言ったけど三回に一回になる時も……まあいいや。気まぐれってことで。それではご視聴ありがとうございました!」

稟「悠長に構える前に爆弾解除しろやあ! あ、待って、縄なんか取り出して何? 何するの? うごっ!? ……ねえ、なんで俺に巻いたの? 動けない。動けないんですけどおおおー!」

この後スタジオは音信不通。彼がどうなったのか知る人は知っていない……。

第26話 時は進む／紅魔館編（前書き）

いつもよりページ数が少ないです。まあ、小話ですから。

第26話 時は進む〜紅魔館編

霧の湖付近に立地した屋敷全体が紅く吸血鬼の象徴を全面に出す紅魔館。

稟達七人が地上に帰ってきてから数日後、今日は限らない晴天。秋なのに過ごしやすい日であり、ついうとうと眠気に誘われる。そして妖怪が一人、紅魔館の門前で直立不動で寝ていた。

「……zzz」

直立不動なのに深く寝入っているのは足腰に相当な忍耐力がある証拠だ。しかし、そんな忍耐力を持っても防げない物がある。

「……zzz……痛ッ！」

頭に痛みが走った事で美鈴は突然目を覚まし、頭に手をやる。頭の帽子に銀のナイフが一本見事に立っていた。

「わ、私は眠ってなんかいません！　ハッ！　ハッ！」

誰もいないのに寝ていないアピールで太極拳を始める。勿論無駄ではあるが。

「美鈴、そんな事しなくてもあなたの癖は分かってるから」

門の内側から突如現れた紅魔館のメイド長が門を隔てて美鈴に話しかける。それに気づくとすぐに姿勢を正す美鈴。

「さ、咲夜さん！ 私は眠ってなんか……あう！」

と言いかけたところで再びナイフが頭に刺さる。

「言わなくていいわ。でもどうしてそんなに眠くなるのかしら？」

「いや、別にしっかりとってたんですけど……こう……今日いつもより暖かくて……つい……」

言い訳を述べようとしたが徐々に声を小さくして真実を言った。

「ふうん……、まあ確かに秋にしては過ごしやすい日ね」

「そうなんです！ だから私じゃなくて今日の天気が……あう！」

再びナイフが頭に刺さる。三本目は見事に一本目と二本目の中間に刺さった。

「ならむしろ起きようと努力するんじゃないかしら？ 仮にもあなたは門番なんだから」

「仮、じゃなくて正式な門番です！」

仮にと言われて少しムツとして言い返す美鈴。ついでに頭に刺さったナイフを抜く。

「クスッ、そうね。で、結局眠るって事は疲れてるのかしら？」

少し微笑して再び原因を探る。原因と言うほどでもないのは承知ではあるが。

「いや、疲れるなんて霊夢達と弾幕しない限り有り得ませんよ」

「でも美鈴はずっと立ちっぱなしだし」

と、美鈴はいつもの咲夜と違うように思えてきた。一応紅魔館の一員であるからそれなりに話はするが、今日はなんか美鈴を心配してるような発言をしていると取れそうになる。

「そうね……ずっと立ち続けてるし……実際どうなの？」

「大丈夫ですって！　ずっとしてても疲れませんよ！」

あくまで大丈夫の一点張りで美鈴は答える。咲夜は左手で右肘を支え、右手を顎に沿えるようにして考える。

「でも寝てたわよね」

「う……そ、それは今日は」

「そういえば一昨日の朝から昼の冷え込む時間でも寝てたし」

「う、うう……」

結局同じやり取りを続ける二人。いつもと変わらぬやり取り。そののち、咲夜は美鈴にある提案をする。

「やっぱり疲れてるんじゃない？　少し仕事を振り分け直しましょうか？　適度な休憩時間とかも入れたりして」

美鈴は一瞬咲夜の提案に惹かれそうになった。だが、素直に受けるにはどうかと思った。普通なら滅多にないが、経験上何か裏がありそうな気がする。

「あの咲夜さん、今日何かあったんですか？ 私に気にかけるなんて珍しいですし」

「今日？ いや別に。ただ美鈴もたまに中で休みたいだろうなーって思っただけよ？」

なぜか美鈴が聞くとわざとらしく聞こえる。普通咲夜が美鈴にそんな事を思うなどネジ一本までバラバラに分解した懐中時計をプールに投げて一週間後にもとの懐中時計に戻るくらい有り得ない。

「あの……本当なんですか？」

「本当よ」

「すみません。俄かに信じられません」

美鈴は正直に言って様子見をした。それを聞いた咲夜は門の柱に寄り掛かり、残念そうな表情をした。

「そう……せっかく休みを与えようとしたのに残念ね……」

やはり信じられないが、咲夜を見る限り本当に残念そうに見てる。

「まあ、美鈴がそこまで仕事熱心なら邪魔したわね」

と、咲夜は柱から離れて紅魔館に向かおうとすると、

「あ、あの咲夜さん！ 実は私もほんのちょっとだけ休みたいなって思ってたんですけど、駄目ですかね！」

苦し紛れに駄目元で言ってみた。相手の去り際に言うのも無駄だと思ったが、咲夜はすんなりと振り返ってまた美鈴に近寄った。

「素直に言えばいいのに」

「あ、いや、ほんのちょっとですよ！ 一時間くらいで別に一日って訳じゃ——」

あれやこれやと言い換える美鈴を見て、またクスッと微笑した咲夜。

「ホント、美鈴って面白いわね」

「ちよ、からかわないで下さいよ！」

「冗談よ。それより一時間か。満足するかしら？」

不意にその発言が引っ掛かった。今のは美鈴が一時間で満足するのかと言ったと思えない。だから思い切って言ってみた。

「あの、もしかして休むって条件付きなんですか？ た、例えば妹様の相手をする……だとか」

すると咲夜は驚いた表情で美鈴を見た。

「あら。よく分かったわね」

「そりやずつと紅魔館の門番してますし、長年の勘が磨かr……ってええっ！！！？」

言ってるうちに気づいた。さっきのは冗談で言っただけがドンピシャだった。

「やつ、やつ、やっぱり休みはいいです！ 一生門番します！」

いくら美鈴でもフランの相手だと正直命が足りない。前相手した時はいきなり分身したりレーヴァテイン振り回したり散々な目に会った。

だが咲夜はキョトンとした表情で美鈴を見た。やがて笑い始めた。

「ぷっ、アハハッ！ そうじゃないわ。私はただ美鈴に審判をして貰いたかっただけよ」

「妹様には申し訳ありませんけど私では……え？」

半ば夢中になって聞いてなかった美鈴だが、もう一度聞いてもよく分からなかった。「地下の部屋で弾幕ごっこをしてるからその審判をする」とのこと。

「前までパチュリー様がしてたけど体力の限界なのよ。私はいつもの雑務に後片付けを任せられてるからあなたが適任なのよ」

「ま、待って下さいよ？ その、弾幕ごっこをしてるのは誰なんですか？ 妹様は分かりますけど相手は？」

今二人は地下に向かう為に図書館を横断している。歩きながら話をしている傍ら、小悪魔がせっせと本を運んで整理している。ほんの僅かだが、歩く度に埃が舞ってる。

美鈴はフランの弾幕ごっこの相手を聞いたのだが咲夜は答えず、そのうち図書館を抜けて地下へ降りる階段にまで到着した。

地下に入ると自然と重苦しい空気が身体に伝わり、話しかけるのを躊躇ってしまう。

どちらも終始無言のままついにフランの部屋に到着した。

ドゴン……バゴン…

中では既に弾幕ごっこが始まっているのか、弾幕による破壊音が聞こえ、衝撃が扉に伝わりガタガタと音を立てて揺れていた。

（一体誰が妹様と……）

審判とはよく分からないが、細心の注意を払うように心掛けて扉をゆっくり開けて中に入った。

「えっ？」

美鈴が部屋に入って見たフランの対戦相手は美鈴も知ってる人物。それはまごうことなく紅魔館の主だった。

「『禁忌 フォーオブアカインド』!」

フランがスペカで四人に分身し、それぞれが弾幕を発射する。レミアは卓越した身体能力のスピードで弾幕の間を抜けてフランに近づく。

「『紅符 不夜城レッド』!」

レミアは射程距離にまで近づきスペカを発動。巨大な紅い十字に分身が巻き込まれる。

「さすがお姉様ね!」

素早くレミアから離れ弾幕を避けたフランが動けない隙に弾幕を出す。

「それはお互い様よ!」

攻撃を終えたレミアは直ぐさま回避に出て身体を無理矢理曲げるなどでフランの弾幕を避けた。

「『禁弾 カタディオプトリック』!」

「『紅符 スカーレットマイスタ』!」

お互い力業の弾幕を同時に展開した。互いの大弾、中弾、小弾が交差し、外見ではどちらの弾幕か分からないくらいだ。それでも二人は吸血鬼特有の脅威的な身体能力を駆使して弾幕を避けてはさら

に展開する。

全方位に展開するレミリアの弾幕に壁で反射するフランの弾幕。お互い一步も譲らず時間が来てしまう。

「まだまだよ、お姉様！」

「私もよ、フラン！」

『禁忌 フォービドゥンフルーツ』

『スカーレットディステイニー』

再び同時にスペカを発動する。超高密度の弾幕が展開されるフランに対し、力業を合わせた大量かつ高速の弾幕を展開したレミリア。ほぼ僅差で弾幕を避け続ける二人。周りなどお構いなしな程手加減無しの本気の弾幕。部屋は既に弾幕の破壊跡があちこちに残る。再び時間切れとなった。いまだに二人とも有効打を一度も決めてない。

吸血鬼とはいえども二人もさすがに息を切らしている。それほど激しい弾幕を展開してきたのが容易に想像できよう。互いに距離を取り、見つめ合うような状態で止まる。

「ハア、ハア、次で最後ね、お姉様」

「ハア、ハア、そうね。トドメを刺してみせるわ」

お互い肩が上がり下がりするほど呼吸が乱れながら最後のスペカを発動させる。

「『禁忌 レーヴァテイン』！」

「『神槍 スピア・ザ・グングニル』！」

お互い近接弾幕を出してしばらく構える。そして、

「ハアアアアアーッ！！！！！」

「ウリヤアアアアーッ！！！！！」

叫びながら一気に間合いを詰めて互いの弾幕が交差し、爆発した。

――

「今回は僅差でしたが、フラン様によるレーヴァテインが決定打となりましたので、弾幕ごっこはフラン様の勝ちでございます」

「やったぁー♪」

「うー、また負けたぁー……」

咲夜が判定を下し、フランに軍配が上がるとボロボロながらもその場でジャンプして喜ぶ。一方のレミリアは手と膝を地面に付けて落ち込む。

「これで弾幕ごっここの成績は十対三でフラン様の五連勝となります」

「お姉様もまだまだね」

「つ、次こそ必ず勝ってみせるわ！」

こんなやり取りを見ている美鈴は何も言えなかった。ガチの弾幕勝負の審判。見ているだけでも圧倒されてしまう。むしろ失敗は許されない。そんな気持ちが美鈴の心にプレッシャーとしてのしかかる。

「……む、無理だ…」

誰しもそう思う。美鈴も決着の時はギリギリでフランのレーヴァテインがレミリアのスピア・ザ・グングニルを抜けて掠ったのが見えたからいい。いや、もしかしたら今回はまだましかもしれない。入り混じる高密度の弾幕での判定となれば自信は無い。

徐々に思考のどつぼにはまり込む美鈴だったが、不意に肩を叩かれた。

振り返るとパチュリーが立っていた。

「ぱ、パチュリー様」

「弾幕ごっこが終わったから様子を見に来たの」

パチュリーはそう言うと言っていた魔導書を開き、呪文を唱えると弾幕で壊された部屋が徐々に直っていく。様子を見に来たと言ったが、役割は与えられていたようだ。

「美鈴、あなたにはきついかもしれないけど、滅多にないチャンスよ？」

美鈴に振り向いた際に意味深なことを言うパチュリー。

「チャンス……って何のですか？」

「さあ、ね。でもきつと良い影響のチャンスね」

そう言う足早に部屋を出た。美鈴はしばらく考えてみたが、やはり分からなかった。

「あ、美鈴だ！」

フランが美鈴に気づくと飛び付いて来た。いきなりではあったが美鈴は優しく受け止めた。

「ねえねえ、さっきの弾幕ごっこどうだった？」

フランは美鈴が部屋に来ているのには気づいていたらしい。美鈴は一瞬戸惑ったが、見たものをありのまま話した。

「え、あ、はい、妹様もお嬢様も……その、かっこよかったですよ」

「本当！？ エヘヘ♪」

かっこよかったと言われてすっかり上機嫌なフラン。

（そういえば紅魔館も変わってきたような気がする）

不意にそう思った。ただの思い過ごしかもしれないが。

最近レミリアはフランと弾幕ごっこをして、自分の妹と積極的に遊んでいる。フランも内側に眠る狂気も薄れ、無邪気な様子を見る

ようになった。咲夜も美鈴を気遣うなど（からかっただけかもしれないが）変わっている。パチュリーと小悪魔は分からないが、変化するこの紅魔館に違和感無くちょうど良く思ってる自分がいた。

そう考えたら自然と笑みを浮かべて微笑した。

「？、美鈴なんで笑ったの？」

微笑した美鈴を見て首を傾げて聞いてきたフラン。

「いえ、紅魔館がより一層好きになったというか……まあよく分からないですけど……そんな感じがしたんです」

「ふーん、私も紅魔館を好きになればそうなるかな？」

「はい、妹様もきっとそうなります」

「そっか」

満足いくような答えにはなっていないが、フランがそう思ったのならそれで良かった。

「めーいーりーん……」

突然レミリアが低い声で美鈴を呼ぶ。

「うわっ、はい！ お嬢様何でしょうか！？」

背後から聞こえて一瞬驚いた。フランを下ろすと姿勢を正してレミリアに振り返る。

「レミリアは既に怪我は治っているが超不機嫌だ。そのプレッシャーが嫌でも伝わる。」

「あ…あの…、お嬢様…:…?」

「美鈴！ 今すぐ弾幕勝負をしなさいっ！ これは命令よ！」

負けた腹いせかは分からないが、レミリアはもう殺る気だ。咲夜はすでにフランを連れて部屋を出ていた。

「ええーっ!!?!? ちょ、いきなりそんな理不尽な！」

「うるさいわね！ 私は自分の弾幕技術を鍛えると同時にあんたの精根を鍛え直すのだから感謝しなさい！」

「そ、そんな目茶苦茶なあー（泣）」

「問答無用っ！」

頼れるのは己のみ。しかし、妖怪と吸血鬼との格差は雲泥の差である。

「ヒイイイー！！！」

「『神槍 スピア・ザ・グングニル』！」

結局この日の門番業はレミリアとの弾幕勝負で休みとなった。勿論いつも通り図書館に忍び込んだ魔理沙がその様子を見ていたのは言うまでもない。

第27話 時は進む／アリス邸編（前書き）

今回からアリスのキャラが少しずつ戻ります。

ちなみに今回は梨音視点です。少し梨音の近辺の話もあります。

新たに二人出るけど大丈夫だよね？ね？

第27話 時は進む／アリス邸編

あたしは梨音・F・東郷。Fはフランススっていうあたしのセカンドネームの頭文字。あたしって言うけど正真正銘の男です。間違いないで下さいね。

ちなみに父はワイズマン・トールス。ロシアの外交副官で凄い親バカ。転校先の教室で演説したものだからホント恥ずかしかった……。でも人一倍正義感が強くて、世界戦争を全力で止める為に東西奔放。そこは尊敬するかな。

母は東郷美咲。日本人で外国語の講師をしていて時々海外旅行に行く。父とはその時に出会ったらしい。あ、勿論安全な場所に。ヨーロッパは全域がAAEUの支配下だからロシアのシベリア臨時首都までが限界だからね。

後は……姉が一人かな。メイド服をよく着てる。理由はわからない。

で、あたしはどういう訳かこの幻想郷という場所に来てしまったんだけど……。

確か……あたしは次の日の授業の準備を終えてベッドで眠ったんだけど、目を覚ましたら洞窟にいて、誰もいなくてつい泣き出しちゃったんだ。成長しても精神だけは成長遅いんだよなあ。

そしたら一人の女性が来たんだけど、その女性の額から角みtainのが生えていて、それを見たらもう訳が分からなくなって、これは夢だ、これは夢だ、って心の中で呟いてうずくまっていた。

それからその女性は私を担ぐとそのまま移動して、地霊殿に連れて行かれたんだ。

これがあたしに起きた出来事なんだけど……あうう、後から考えたらかスッゴク情けなくて恥ずかしくなってきた……。

それから数日後に、同級生の桜之宮稟君と再会して、本当に嬉しかった。あたしの性格は纏めれば人一倍顔見知りだから、その……：……安心したというか……うう、上手く紹介できなくてすみません……。で、でもあたしの幻想入りが伝わったかなあ？

この世界には能力があるらしく、あたしのは『勇者スキルを操る程度の能力』と言ったけどよく分からない。でもあたしは小さい頃やったファンタジー系のRPGを思い出してひよっとしてその事かになって思った。実際炎とか出せたから多分合ってると思うけど……。

お父さん、今スッゴク心配してるだろうなあ。でもここでいろんな人達と出会ってからちよつと気持ちが落ち着いた……：……というか決心が着いた……：……というか……。ええーと、と、とにかく自分の顔見知りな部分を治して帰りたいって思い始めました！

それで……今のあたしなんですけど……：……地霊殿で新しくあたしの住居を捜すことになって、魔法使いのアリス・マーガトロイドさんと今家に向かってる途中。

地下を出て別れる時に、「もし変なことされたりしたら容赦無く凍らしていいぞ」って稟君に言われたんだけど……。あたしにはアリスさんがそんな事をしそうな人に見えないんだけど、長く幻想郷に住んでるから信じるべきかな？

「……」でも気になるのは別れてから無言なんだ。何かされるどころか淡々と自分の家に歩いていくようで、ますます変な事をしそうな人にしか見えない。むしろ地霊殿にいた時のさとりさんの方がよっぽど変人でした。だって事あるごとにNCMって叫ぶんですから……。

で、あたしはアリスさんの片手にしがみつくように歩いている。だって魔法の森って聞いてなんかファンタジーだなあ……って思ってたら一日中薄暗いし、ジメジメしてるし、でかい茸が生えてるし、もう怖くて怖くて……。アリスさんの息が荒い気がするけど気にしてる場合じゃないんだよなあ……。

「着いたわ」

どうやら着いた。ああ、怖かったあ……。で、アリスさんの家は二階建て。ここはそれなりに日が当たるから良かった。

「どう、私の家は？」

「え？ ええ」と……日当たりとか良いし、立地はあれですけど悪くないですよ？」

「そっかそっか」

アリスさん？　なんで家の感想を言わせただろう？　……まあいいかな。

早速中に入れて貰ったら……、

「シャンハーイー！」

「っ！！！？」

いきなり人形が飛び出して来たからついアリスさんにしがみついた。

「ああ、梨音、大丈夫よ。この子は私の人形で、上海って言うの。こんな感じで迎えてくれるから怖がらなくていいわ」

「そ、そうですか？」

「ほら、挨拶しなさい」

アリスさんがそう言うのと上海がぺこりと頭を下げて挨拶をした。あたしもとりあえず挨拶を返した。

「……上海…でしたっけ？ 凄くかわいいですね」

「うふふつ、そうでしょ。上海は私のお気に入りの人形の一つよ」

上海と言う人形はニコツと微笑むと宙に浮いたまま部屋の中に入っていた。アリスさんが言うに魔法の糸で操っている。アリスさんの夢は完全自立人形を作る事だそうだ。

「お、おじゃまします」

とりあえず人の家だから一言言ってから中に入った。一階のリビング兼応接間は整然としていて埃一つも無い。

「掃除とかたいていは人形達に任せてあるのよ」

アリスさんが言うに、人形に命令を与えれば忠実に実行するまでは成功しているからその証拠なのらしい。

次に二階を案内された。二階は二部屋で、片方は本棚がある。中には魔導書と言った魔法使いにしか読めない本があり、盗難対策に防御魔法陣が張られてるとのこと。

「でも盗難対策って事は誰か来るんですか？」

「ええ、しょっちゅう来るわ。約一名」

「だったらあたしも手伝いましょうか？ お世話になりますからこのくらいは」

さすがに何も無しにお世話になるのは気が引ける。世話になる人には必ず恩返しをしろってお父さんから散々言われてたからなあ。でもアリスさんは即刻拒否した。

「それは駄目よ。もしかしたら梨音のかわいい顔に怪我でもしたら……」

本気で心配してる……。まあ、約束だから仕方ないか。

「で、隣の部屋が人形部屋だけどベッドがあるからそこを使いなさい」

と言って部屋に入ると凄く驚いた。

「うわぁー……」

物置の上に壁に机の上に所狭しと並ぶ人形の数。これが全部手作りだからなお一層凄い。

「しかも服もかわいいなぁ……」

どの人形も服とマッチしてかわいさを引き出している。でもあたしはあの上海という人形が一番かわいかったと思った。

「あ、なんなら何か着てみる？ 梨音身長が低いから結構入るかも」

「ほ、本当ですか!？」

男なのにかわいい服を着たがるってどうなのと思うかもしれないけど、かわいいのは大好きなんだ。ただ身長低いと言われて少し傷付いた……。ちょっと気にしてたんだけど……。

「ど、どう……ですか……?」

十分後に上海人形と同じ青い服を持ってきたアリスさんを部屋から出してから着替えてみた。ご丁寧にリボンまであるがちょっと抵抗感が……。だからリボンをつけずに服だけ着替えた。そういえば現実世界も女装とかされてそれが好評でダンスの半分が女の子用の服で埋まっていたなぁ。

で、着替え終わってお披露目という訳だけど……。何故かわかなわな震えてるアリスさん。

「ど、どうしたんですか？」

尋ねるといつも持っている魔導書を落とし、

「り……………りいいーおおおーんっ！！」

いきなり迫ってきた！？　もしかしてこれが暴走なの！？

「私の目に間違いは無かった！　凄く可愛いわよおー！」

そんな廊下ダッシュしながら言わなくてもいいじゃないですか！
身の危険を感じたから直ぐさま部屋に戻った。だけど、一足遅く
ドアは開かれた。

「まじヤバッ！　魔理沙以上の可愛さじゃない！」

目が完全にやばい。息が物凄く荒い。完全にアリスさんが暴走し
ちゃったんだけど……………どうすれば…。

「うおおー抱きしめさせてk……………」

「あ…………、やっちゃった…………」

どうやらスキルが発動したらしく凍らせちゃった。お空ちゃんの
ときと同じ完璧に、だ。

そのまま自然解凍されるまで一階にいたんだけど、上海人形がお茶を出してくれた。

一回全身鏡に立って見てみたら、自分に見とれてた。上海人形が傍に寄って、同じ服で鏡に映った。人形だから分らないと思うけど、何か上海人形は嬉しそうに見えた。

「ご、ごめんなさい。自分で言っときながら自分が抑えられなかった……」

解凍されてから一階に戻ったアリスさんは土下座。悪気は無かったからそこは許した。

「もし次したらあたし出て行くからね！」

と念押ししておいた。「もうしませんから出て行かないで、お願いします」と懇願するアリスさん。なんか楽しくなってきた。

で、夕食はアリスさんが作った。洋食中心だったけど美味しくいただいた。

「私は下で研究をするからなんかあったら一階に来てね」

とアリスさんが伝えて来た後、あたしは二階の自分が使う部屋に入る。やっぱり人形の数に驚くし皆かわいい。

「やっぱりお人形さんっていいよなあ……」

独り言のように呟いて、やることも無いので寝ることにした。その時だった。

「……………!？」

不意に背後に視線を感じて振り向いたけど誰もいない。人形しかない。気のせいかなって思っただけでベッドに入った。

でもまさかここで不思議な体験をするなんて思ってもいなかった。

――

コンコン。

時間が分からないけど、既に暗いのが分かる。月明かりだけが部屋を照らしていた。

わたしは気づかないフリをしていた。すると音は聞こえなくなった。気のせいかと思ってまた寝はじめる。

その時に聞こえたんだ。会話が。

「――ら、あの子。――が――」

「――だが――」

誰かが部屋に居て喋ってる。急に怖くなった。アリスさんは一階だし一人だから話す人はいない。ましてやこの暗い時間に誰がいるだろうか。あたしは怖いけれど、寝たフリを続けて会話を聞いた。

「もっと――ね？」

「もう――窓に――」

「ねえ、――」

「なっ!? これ以上「シッ!」――」 あ、――」

どうやら傍にいるらしい。あたしはわざと寝返りしてみた。すると会話がはつきり聞こえた。

「あ、寝返りして顔が見えたわ。ほら見て、可愛いでしょ? 私と同じ服で」

「う、た、確かにアリスと同じくらい可愛いな。まるで私達みたいだな」

やっぱりアリスさんじゃない。でも私達って? よく分からない。それに何処からこの部屋に入ったんだろう? 見たいけどやっぱり怖い。うう……どうしよう……?」

「それより窓にあの魔法使いがいるぞ。追いつ返すか？」

「追いつ返さなくても……いや、私はアリスは好きだがあいつは嫌いだからな」もう……」

魔法使い？　もしかして地霊殿で私を助けたあの人かな？　アリスさんと（一方的に）仲がいいって言ってたし。

でもこのままじゃ埒が開かないから勇気を出して身体を上げた。目を閉じたまま。

すると、ゴトツと何かが落ちた音がした。ベッドから出て目を擦りながら見ると……、

「えっ……？」

また怖くなった。だって人形が二体落ちてたんだ。しかも一体は上海人形だった。もう訳が分からなくなった。だからベッドから毛布を引っ張り、包まった。

これは夢だ、これは夢だと祈り続けて……。

コンコン。

また聞こえた。もう毛布から出ないと誓って動かなかった。

コンコン、コンコン。

さっきはすぐに止んだのに音が止まらない。なんで？　何が起きているの？

コンコン。

窓から聞こえるけど、何なんだろうか。さっき魔法使いがいるって聞いたんだけど……。

コンコン。

鳴り止まない音は怖いけど、もう一度勇気を出して毛布に隙間を作って窓を見ていた。

コンコン。

人間の手。箒。魔法使いみたいな服装。間違いなく地霊殿に助けくれたあの人だった。

「いやゝ、やっと気づいてくれたか。このまま気づかなかったら帰ろうかなって思ってたからな」

どうやら本物だったので窓の鍵を開けた。すると勝手に入ってきた。

「あの……こんな夜に何か用でも？」

若干不満そうに言った。そりゃ途中で起こされたんだから。

「悪い悪い。梨音がアリスと仲良くしてるか気になってな。っとそういうえば自己紹介がまだだったな。私は霧雨魔理沙だ。普通の魔法

使いをしてる。よろしくな、梨音」

半分作り笑いでもとりあえず手を差し出したので握手した。

「で、アリスとはどうだ？」

「あのー、まだ何もされてないですよ？ 一度凍らせちゃったけど……」

「なら大丈夫かな」

で、後で魔理沙さんから聞いたが、別の何かの様子を見に来たらしい。

「あの……ずっと窓叩いてましたよね？ それって部屋の中も見ただすよね？」

「おう。それがどうした？」

正直聞くのは怖いけど聞かないと分からない。魔理沙さんは腕を組んでじっと見つめている。意を決して言った。

「あの……その……言いにくいんですけど……ベッドの近くに……何か……いましたか？」

「なぬ？ ベッドの近く？」

すると魔理沙さんは思い出すようにうーんと上体を曲げる。

「おう、見たぜ」

「本当っ!？」

「ああ、今でも梨音の背後に…」

「ヒイイーーーーッ!!!?」

毛布をとって覆いかぶさるまで僅か一秒。そんなあたしを見て笑う魔理沙さん。

「アハハッ、冗談だ。でも見たぜ。梨音も知ってるぞ」

からかわれたと知って赤面で出て来るあたし。魔理沙さん見かけによらず酷いです……。でも見たのは確かで……。私も知ってる？

「だって現に掴んでるじゃないか」

掴んでる？ 掴んでるってこれはアリスさんの人形……。まさか？

手に持っていた片方の人形が突然宙に浮いたかと思うとランスを構えて魔理沙さんに突撃した。

「うお!？ 蓬莱待て!」

魔理沙さんも咄嗟に防御したが人形に押されて窓から落ちた。

「……って魔理沙さん!？」

今頭から落ちたよ!? 大丈夫なの!?

「魔理沙さん!」

窓から顔を出して確認したら、箒を掴んで落ちずに済んでいた。

「危ねえ……不意打ちとは油断し……ってだから待てえ!」

あたしの頭を越えてさっきの人形が再びランスを構えて魔理沙さんに再び突撃してる! これじゃ魔理沙さんが落とされる!

ビュウウウウ!

突然強い風が吹き、魔理沙さんを押し出した。

「「ッ!」?」

なんか二人とも驚いたみたい。魔理沙さんは体勢を立て直して人形に近づく。というか完全な自立人形はまだ完成してないんじゃない?

「チッ、風に邪魔されたか」

「おいおい、まじ勘弁だぜ。それにお客様もいるのに荒い事するな、蓬萊」

さっき聞いた声と一致した。本当にあの人形が動いて喋ってたんだ。

「驚かしてごめんなさいね」

「ひゃあ!!?」

突然耳元で囁かれたからびっくりした……。

「あ…、え…、君は…上海?」

囁いたのはあの上海人形だった。

「はい。アリスさんの一番の使い魔人形の上海です」

「で、でもアリスさんは今下で寝てるし……」

もしかして呪いとかで夜だけ動けるとか? 流石にないか。

「そうだ。上海も蓬莱も完全自立人形だがアリスはこの事実を知らない」

あ、魔理沙さんがいつの間にか部屋にいた。蓬莱という人形をロ
ープで縛って……。

「ええい! 解け!」

「うるさいぞ。アリスが起きたらどうする」

じたばた暴れる蓬莱人形に溜め息混じりで言う魔理沙さん。なん
かこの二人似てる気がする。気が強い所とか。

「それと梨音、さっきはありがとな。お前の能力で助かった」

えっ！？ さっきのがあたしのって分かったの！？

「魔法の風っぽいのか魔力を感じたぜ。これでも魔法使いだから私には分かるんだ」

「フン！ ただの人間のくせに」

「お前は何時でも口悪いなあ」

いつまで喧嘩するんだろう……。あたし疲れてるからもう寝たいんだけど。

「梨音さん」

魔理沙さんと蓬莱人形のやり取りを欠伸混じりで見ていると上海人形が話し掛けてきた。

「うん、何？」

「私達が自立して動くのはアリスには内緒にして下さいね。これから数日間お世話になるからね」

「なんで？ アリスさんの夢なんだし」

「アリスは一から自立人形を作りたいけど、私達はもともと魂があるらしいから、それだとアリスの努力が無駄になっちゃうわ」

「うーん……よく分からないけど…秘密にしておくよ。追い出され

たらここ怖いしね」

すると満面の笑みで飛び込んで来た。

「梨音、ありがとう！」

あたしはそのまま何も言わずにそっと可愛い人形を抱きしめた。

ちなみにあの後蓬莱人形は自力でロープを破って魔理沙さんを家から撃退し、あたしは二人におやすみと言って再びベッドで眠りについた。

次の日、夜の騒ぎで部屋が散らかっていたから掃除するはめになったけど。

第28話 時は進む〜人里編（前書き）

また一人増えます。オリキャラです。後半おもいつきり神社にな
つてるけど気にしたら負けです。

第28話 時は進む〜人里編

地霊殿での出来事から一週間が経った。ようやく外来人テロリスト達の正体が明らかになりつつあるが、今だ接触はしていない。

幻想郷各地で仲間を増やしてはいるが、やはり一筋縄でいかないようだ。だが、あれ以来外来人テロリストによる襲撃や負傷の情報はない。

また、早苗を通して神奈子達から文の容態を聞いた。意識が戻り、一週間ないし二週間以内に復帰できるそうだ。とりあえず妖怪の山にまで見舞いに行く予定を三人で立てている。近い内に行くつもりだが勿論向こうの都合もあるから慎重にしくはない。

そんな訳で進展のない現在、俺は人里に買い出しに来ている。「やっぱり缶詰だけでは栄養に偏りますからお願いします」と早苗に言われて来たわけだが。しかもわざわざリストまで。早苗は家事に關しては徹底的な人だと思う。だから二柱の神様からも信頼が厚いわけだが。

ある程度買い物を終えて帰る所に寺子屋の先生である上白沢慧音に会った。

「おや、君は桜之宮稟じゃないか。久しぶりだな」

「あ、慧音さん、どうもお久しぶりです」

そういえばどのくらい会ってなかっただろうか？ 俺の記憶が正

しければ……白玉楼に行く日の前日。どっかに行った馬鹿を捜していた時だったはず。……って結構経ってるじゃん。

「買い出しか？」

「はい、早苗さんに言われまして」

すると当然頭を傾げる慧音。

「ん？ 早苗とは東風谷早苗だよな？ 彼女は確か妖怪の山の守矢神社の巫女では？ なぜ博麗神社に？」

慧音は俺が博麗神社に住まして貰ってるのは知っている（文々。新聞の霊夢から告白を受けたという記事も）。俺は一応早苗が博麗神社にいる経緯を一通り説明した。外来人テロリストによる襲撃も包み隠さず。

「そうか。そんな大変な事態になっているとは知らなかった。……いやはや我ながら恥ずべき行為だ」

やはり慧音も幻想郷の守護を司る者の一人。少し表情が暗くなった。

「いいえ、慧音さんが知らないのも当然です。俺達も有力な情報はあまり得られてないし、口外してしまうと幻想郷全体を危険に曝してしまいますから」

仲間を集めてるとはいえ実際には小数で動いてるのは事実。目立

った行動をして感づかれたら直ぐに殺されるだろう。相手は軍人。人はおろか低俗の妖怪すら敵わない。

「そうだな……なら私も手伝おう。人里からはあまり出られんが、情報なら集められるかもしれないし」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

ちょっと暗くなったんで話を变えてから切り出そうと考えていたが、慧音から協力を申し出てくれた。本当にありがたい。

「手伝うついでに一つ聞きたい事があるのだが」

話を一旦区切った後で慧音が話し出す。

「はい、答えられる範囲なら」

「白玉楼に外来人がいたというのは知っているか？」

白玉楼の外来人？　そう言われたら常盤さんしかいない。

「はい、常盤楓さんですね」

「そう。実は彼女と連絡を取り合ってたのだが途絶えてしまった。彼女、今何処にいるか知らないか？」

え？　連絡を取り合ってる？　初耳ですけど、それ。常盤さん一言も言っていないけど。それはさておき難しい質問が来た。身体は永

遠亭だが話すとなればポッケの通信機で出来る。どちらを話したらいいだろうか……。

ピッ、ピッ、ピッ。

突如俺のポッケから通信機の呼び出し音が聞こえた。慧音も不思議そうにこちらを見る。というか毎回毎回タイミング良くない？
実はどっから見てんじゃないか？

とりあえず素早くポッケから通信機を取り出す。

「音はそれから鳴ったのか。それは何だ？」

慧音は通信機を見た事が無い。慧音から見れば音を出す四角い物体なんだろう。

「これは通信機と言って、遠くにいる人と話が出来る道具です」

と簡潔に説明してから通信機に応答した。

「はい、何でしょう？」

『慧音さんが近くにいと聞いて』

……真面目な話だが、本当にどこからか見てないか？ 実は永遠亭にいたのはフェイクで既に意識が戻ってこっそり俺を追跡してるんじゃないか？ じゃなきゃ慧音と話してるなんて分かるはずが……。

『通信機内蔵レーダーを解析して分かりました』

その心を読みましたよ的な発言は一体何なんですか？ そのレーダーってエスパー機能とか付いてるのか？

大体、常盤さんが持ってきた道具ってどれも一癖ある気がする。前持っていくように言われた懷中時計なんか開けたらローマ数字の3の部分が腕時計にあるネジで調整する日付になってるし、しかも1のまま日付が変わる事が無い。

「む？ その声、聞き覚えがあるぞ」

いつの間にか慧音は傍に来て声を聞いていました。いつ近づいた？ で、常盤さんも気づいたらしく、

『あ、もしかして慧音さん？』

とりあえず持つとくのもあれなので慧音に渡す。

「ああ、やはり君の声か。久しぶりだ」

『こちらこそお久しぶりです。長らくご心配をおかけして申し訳ありません』

「いや、いいんだ。こうやって話せてるからな」

結構仲よさ気な感じで会話する慧音。どうやら連絡を取り合っているというのは本当なようだ。何の為に連絡を取り合っていたのかは分からないが、推測は出来る。

常盤さんは俺が幻想郷に来る以前から白玉楼で住み着いていた。人里から幻想郷の様子を知る為の何かしら接点を作ると仮定するな

ら人里に詳しい慧音と連絡を取り合うなら辻褄は合うだろう。

問題はその方法だ。実際幻想郷に降り立ったのは俺達が白玉楼を訪れてからだ。彼女は八雲紫と藍以外の情報は皆無だから間違いない。妖夢が仲介するとなればできない事は無いが、話からして直接取り合っているから違うだろう。

そればかりはいくら考えても近い仮説は浮かばなかった。

「ああ、済まない。つい長くなってしまった」

あれから十五分が経過。その間ずっと連絡を取り合う方法を考えていた俺は十一分辺りから眠りかけていた。身体がグラツと揺れる度に目を覚ましては瞼が少しずつ閉じていく。何やってんだ俺……。

「では一応荷物を置きに神社に帰りますので」

「うむ、ではまた」

慧音はそのまま俺を通り越して真っ直ぐ歩いていった。

やはり女性同士の話って長いなあ、と思う。現実世界でも病気になる前のお袋は近所とよく喋ってたし。

それより早く荷物置いて休もうと歩み始めた矢先だった。

「桜之宮稟さんですね」

状況を説明するに、目の前に咲夜さんがいたんですね。音も無く

突然に。

「慧音さんの次は咲夜さんですか。何か用でも」

半分ぶっきらぼうに言う俺に対して表情一つも崩さずに淡々と話しはじめた。

「実は明後日に紅魔館主催のパーティーを行うつもりですので、他の方々もお誘いするよう伝えに参りました」

「それって霊夢達を誘って来いと」

「左様でございます」

パーティーか。そういえば現実世界で行ったのはいつの頃だろうか。まあパーティーとはいうが神社での宴会と大差無いのが紅魔館のパーティーだ。

「分かりました。なるべく声をかけておきます」

「助かります。それと、パチュリー様からお礼を頂いてますので、代わりに私から申し上げます。ありがとうございます」

深く一礼して感謝の意を伝える。そういえば頼まれてたな。結局薬は霊夢が持って行ってくれたけど。

「じゃあ、俺は神社に帰りますので」

「時間を取らせて申し訳ありません。それでは失礼します」

その次には姿は消えた。まだテロリストがいるなかでパーティーというのは気が進まないが仕方ない。気分転換も兼ねて明後日のパーティーに行くでしょう。いくら焦っても状況は変わらない。

――

ところが、俺は再び足止めされてしまった。

人里を出て道無き道を通ってようやく神社の階段が見えた傍ら、階段手前で誰か倒れてます。

服装からして幻想郷の者でない。外来人です。ありがとうございます。そして一言言うならば、今の幻想郷、外来人多過ぎだ。幻想郷はいつたいどれだけの外来人を受け入れる気なのでしょう？

俯せに倒れているからどうしようもない。しかし放っておくのも後味が悪い。

「あの、大丈夫ですか？」

一応声をかけてみる。そういやこの工場服みたいなのどっかで見た事あるような……。

「さてここで問題です。どうして俯せになっているのでしょうか。一、いきなり変な場所に來て精神が遠くに行った。二、腹が減り過ぎて動けない。三、怪我をして動けない。四、どれにも該当しない」

俯せなのに問題出しやがった。ていうか生きてるなら別にどうってこと無いが。

「答え、二。というわけで何か恵んでくれ」

何も言っていないのにもう答え言いやがった。

「さて、さっさと荷物置いて休むか」

無視して階段を登り始めると、

「いやマジで待って。本当なんだ。何も食っていないんだ。頼む」

流石に懇願されては仕方ない。ちょうど缶詰があるからこれを傍に置いた。

「あの、これ置いとくから食べていいぞ。それと用があるなら階段登ってこいよ」

そう言い残してさっさと階段を登る。

「稟、お帰り。遅かったわね」

「お帰りなさい。何かありましたか？」

階段を登り終わると霊夢と早苗が境内を掃除していた。普通霊夢と早苗と一緒に掃除しているなど滅多に見れないだろうな。

「ちょっとな。慧音さんと咲夜さんに会って少し話をしただけだ」

そのついでに明後日紅魔館でパーティーをする事も伝えた。

「パーティーねえ。そういえば久しぶりね」

「神奈子様達にも伝えていいでしょうか？」

「明後日だから明日でも間に合う。気を緩められない状況だが気分転換に俺も行く」

会話からして二人とも行くらしい。多分霊夢の事だから無理矢理俺を連れていく気だろう。だから事前に俺も行くと言ったのだ。その時霊夢が一瞬舌打ちしたように見えたけど気のせいだな。それより魔理沙がいればアリスに伝えられて梨音にも話が届くのだが。

「なぬっ！？　こんな美少女達とパーティーだどっ！？　ヘイツ！羨ましいぜ、桜之宮！」

泉符「ハイドロライド」

「の、ノオオオオー！！」

瞬間的に俺の背後に間欠泉を出現させて何者かを巻き込んだ。間欠泉が止まると何者かは地面に頭から突っ込み、犬神家風になった。ついでに傍にスケートボードも落ちてきた。

「だ、誰？　いきなり攻撃したけど」

二人ともそろそろと何者かに近づく。

「……さあ？」

おもいつきり知らんぷりする俺。

「ゴポポツ、テメエ……、何気にひどいじゃねえか」

なんか溺れてるような話し方してるなあ。水でも飲んだか？ 別に心配しないが。

「少なくともまだマシな方だ、工場長」

「ヘイツ！ 俺は工場長じゃない！ 川内肇だ！^{せんだいはじめ}」

さて、また俺のいた2036年の世界からまた一人来た訳だが。

こいつは川内肇。同じクラスの変人第一号。あだ名は工場長。別にこいつの両親が工場経営者だからという訳では無く、機械弄りが好きだからだ。所謂腐れ縁で仲が続いている。そして俺から言わせればとにかくウザイ。取材する射命丸文よりウザイ。この話し口調から分かる通り。なんでこいつが幻想入りしたのか不明だ。いや聞きたくない。

とりあえず俺は二人に説明した。神社手前の階段で寝転がってたのも。

「とりあえず掃除は終わっただろ？ もう日が暮れ始めてるからそろそろ飯にするぞ」

「え？ この人いいんですか？」

早苗が埋まつてる肇にビツと指を差して言う。

「おお、何という優しい言葉！ 俺を心配してくれてる君はきっと最高に優しい心の持ち主に」

「スマン。二人とも中に入ってくれ。俺が何とかする。ついでに飯も……いや、なんでもないです。すぐ終わらせますから」

ツルハシを近くに立てて話を妨害した。その間二人は中に入る。ついでに飯を作るよう頼もうとしたが霊夢から厳しい視線を感じたのであえなく断念。

対等に話をする為にまず埋まった身体の周りをツルハシで掘る。すると隙間から手を出して自分の身体を上げていく。肇の身体は徐々に地面から抜けだし、ようやく全身が出てきた。

「ブハッ、お、俺は生きてるぞ」

「見れば分かる」

しかし、こいつと話するのは気が引ける。いろいろ面倒だからだ。

「桜之宮、それにしてもあの洗礼は友達にひどいだろう？」

「話は多少するが友達ほどでは無いな」

「おまつ！？ い、何時からそんな冷たくなった？ ああ、あの頃の優しい面影があった桜之宮はいずこへ……」

この独特な口調が俺的に本気でウザイのだ。だから話したくない。

「俺は今から飯を作らないといけないからな、お前に構う暇が無いんだ」

「飯を作るだど!? 貴様、ここに住んでるなっ!」

「ならばどちらか選べ。ここで飯を食って一泊するか階段を降りるか」

今日はシンプルに買ってきた野菜を野菜炒めにし、缶詰の具をトッピングしてみた。後は麦ご飯。神社はこのくらいで足りるそうです。

卓袱台には霊夢と早苗、そして工場長。卓袱台に作った料理を並べ、俺が座ると、

「いただきます」

と霊夢が言うと同時に箸が動き出す。(俺にとって) まともな料理は久しぶりだから口に合うかどうか不安だ。

「……まあ大丈夫ね」

「そうですけど、味付けが少し下手かな」

霊夢は普通に食べるが、やはり早苗はしっかり指摘する。食べられなくはないのが唯一の救いか。俺もそれなりに料理ができるようにならなくては。

「ゴチ」

「「早っ!!!?!」」

一つ言い忘れてた。というか俺も忘れてたが、工場長の食事スピードは尋常でない。いただきます発言から僅か六分で野菜炒め三分の一とご飯を平らげた。二人ともまだゆっくり味わっているというのに。かくいう俺もその五分後に食べ終わったが。

「稟達食べるの早いわね……」

「習慣だからかな」

学生時代に身に染みた習慣。こればかりはそう簡単に治らない。早く食べないと食べた気がしなくなる。だが、二人は決して急がず自分のペースで夕食を食べた。本当はそれが健康にいいと言われているのは分かってはいるんだがなあ……。

「所で工場長。この後どうするんだ?」

夕食が済んで霊夢と食器を洗ってから、俺は別の部屋の畳にごろ

ごろ寝転がる工場長に言った。

「あん？　泊まっていいいんじゃないのか？」

工場長は胸ポケットから出した小型のスパナでお手玉する。機械弄りが好きなだけに手先の器用さは拔群。キャッチしたスパナは指の間を滑るように通り抜けてもう片方の手に送られる。

「俺が決めることじゃない。俺も居候だからな。霊夢って言う紅白の巫女服を着てる人がここの管理をしてるからな、彼女から許可を貰わないと無理だ」

すると工場長はスパナをそのまま全部キャッチすると立ち上がり、縁側に出た。

「ならしょうがない。ま、俺はアウトドア派だからな、あの鳥居に寄って寝るわ」

そのまま鳥居に向かって歩いて行った。俺はそれを止めなかった。彼は現実世界では家が焼失して一時期野外暮らしをしていたらしい。大体三年ぐらいと聞いている。一応神社の敷地内だから妖怪に襲われる心配は無いと思い、止めなかった。

後日早朝、工場長は階段下で気絶していたのを発見した。

第29話 時は進む／永遠亭編（前書き）

今回はかなり短い上に分からない部分が多分あるかもしれない。

第29話 時は進む〜永遠亭編

永遠亭は稟達が訪れて以来、変わらず日々を過ごしていた。これといったいざこざに巻き込まれる事無くひっそりと。

変化があるというなら、兵器アンドロイドのスチュアートが永遠亭に住みついた事だろう。わざわざ神社から活動拠点に行くのが面倒臭いので永遠亭に泊まることになった。

初日（時期から言えば早苗が博麗神社に来た日）ではてゐ以外の永遠亭の鈴仙と永琳と始めて顔合わせすることとなったが……。

「あたし、Trick Companyのスチュアート！ 訳ありでここに来た外来人だよ。宜しくう！」

「……」

「……」

元氣良すぎるくらいに挨拶をかますスチュアートに対して当然ながら沈黙が流れる。それもそのはず、鈴仙と永琳から見たスチュアートは異常だからだ。

ピンクの長髪だとか、だぼだぼのセーラー服だとか、巨大チェンソーだとか、左腕の血の付いた包帯はまだいい。

問題は、背中から腰にかけて装着されている戦車の砲塔、両足の脛に付いた小型キャタピラ。

二人の基準からして人間でないのは分かった。

（師匠、この方って人間……じゃないですよね？）

（ええ。私もこればかりは分からないわ。後ろのは戦車の砲塔かしら？）

お互いアイコンタクトによるテレパシーで会話をする。てゐはスチュアートより一步後ろに引いている。悪戯をするような素振りはない。

「えっと、スチュアートさんですね。私は鈴仙・優曇華院・イナバです。鈴仙と呼んで下さい」

「私は八意永琳。この永遠亭で医者をしているわ」

とりあえず挨拶を返してからてゐに説明を求めた。

「スチュアートさんとは竹林で知り合いましたね、神社に住んでる桜之宮稟の仲間だそうです。ちよっと意気投合したという訳ウサ」

「桜之宮稟ってこの前の……」

確か外来人テロリストを追ってるとかどうのこうの……。鈴仙と永琳にとっては一応信頼できる人なのでスチュアートを泊める事にした。

一旦部屋に戻った二人は同じ考えなのか、スチュアートについて話し出した。

「あのスチュアートって人、ただ者じゃなさそうですね」

「そうね。少しあの子を研究してみようかしらね」

しかし、これが全くといいほど叶わなかった。まず泊まる
とは言うが直接永遠亭に泊まらず、竹林によく向かう。彼女から言
わせれば永遠亭は拠点であるという事だ。寄るのはせいぜいご飯の
時ぐらいだ。

一度鈴仙が麻酔薬入り注射器を隠してスチュアートを捜した際に、
旧式の試験地雷に引っ掛かって注射器を破損した事がある。旧式で
試験型なので軽傷で済んだが、スチュアートに対して畏怖の気持ち
を持ちはじめた鈴仙。

それでも研究者としての永琳の想いは変わらず、鈴仙に捕獲を頼
むが成功事例はいまだゼロ。

スチュアートの強みは竹林にいる事、兵器を扱える事、そしてな
により因幡てゐを味方につけている事。これによって全く捕まえら
れない。

そんな鼬ごっこを続けてある日の事。

「……スー……」

珍しくスチュアートが永遠亭の一室で昼寝をしていた。その周りには写真を挟んであるファイルがある。

外来人テロリストの焼き増し写真を竹林で渡されたのを永遠亭に持ってきて、そのまま寝たという何とも面倒くさがりな一面が出てしまった訳だが。

勿論こんなチャンスが無下にしない二人はそっと部屋に入る。

（寝てるわね……そっと運ぶのよ）

（えっ！？ 私一人で！？）

渋々鈴仙は大の字で寝ているスチュアートにそろそろと近づき、そつと腕を首にかけて起こそうとする。

（……重ッ！）

頭は上がるがそれから下は上がらない。スチュアート自身の身長や体重は小学校高学年の平均以上くらいだが、付属している戦車の砲塔は鈴仙の想像を遥かに越えていたのだ。

（師匠オー！ 手伝って下さいよぉー！）

テレパシーで懇願するも、永琳はあくまでスチュアートが起きないかを観察していた。

ようやく上半身を上げさせ、次に背中に背負って運ぼうとするも、

（ウッ……足が…上がらない）

重さで鈴仙の足が上がない。背中に身体を載せるまではいいが、無理に立てばスチュアートがずり落ちるかもしれないし、自分の身体負担も相当なはずだ。こればかりは永琳も手伝ったが、単に後ろから支えて鈴仙が立ち上がるのを補助しただけだった。

それでも何とか背負えた鈴仙はゆっくり研究室のベッドに向かった。足がぐくぐくして今にも滑ってしまいそうで、かなりゆっくり歩いて行った。一方の永琳は逆に部屋に残ったファイルを拾い、その中身を見た。

(……あら?)

ファイルは写真四枚と紙切れ二枚。一枚は写真の説明だが、もう一枚は永琳宛ての手紙だった。

四角に折り畳まれた紙を広げると、こう書いてある。

現在外来人テロリストの調査をしております。推測ではありませんが、彼等はまだ常盤さんを狙う恐れがありますので、可能な限り匿って欲しいです。不躰ではありますが、宜しく願います。

桜之宮稟

(……あの子ってそんな躍起になってまで…何故ここまで?)

不意にそう思った。今回の外来人テロリストによる異変とも言うべき事態に、ましてや同じ外来人がここまで異変解決に取り組むのに違和感を感じている。異変解決なら博麗神社の巫女という認識が

強いからだ。そして現在入院中の常盤楓に対して慈しむ態度。何故彼はそこまで他人に真剣になれるのだろうか。

(……………)

彼は何かしら体験をしたというのが一番当て嵌まる。だが永琳といえども人の人生を推測できる程の頭脳は持ち合わせていない。いくらここで考えても無駄なのは目に見えてる。

永琳は頭を切り替えるとファイルを持ったまま研究室へと向かった。

「師匠おゝ、腰が痛みますゝ」

「情けないわね……」

「本当に重かったんですからね！」

研究室ではベッドに横たわるスチュアートに文句を言う鈴仙が待っていた。鈴仙に休むように言ってから、永琳はスチュアートに歩み寄る。スチュアートははまだ寝息を立てている。起きる気配が無い。

永琳は慎重にスチュアートを分析し始めた。

休むよう言われた鈴仙はというと、永遠亭の庭に倒れていた。

「いたたっ……」

「どうやらてゐの仕掛けた罠に引っ掛かったらしい。今回は前にスチュアートに仕掛けた事がある丸太が飛んでくるもので、ちょうど鈴仙の脇腹に当たりその衝撃で庭に吹き飛ばされた。

「もうっ！　こんな時にい！」

先程の腰痛について脇腹の痛みで立とうにも立てなかった。すると後ろからてゐが近づいて、

「鈴仙、大丈夫かうサ？」

と手を差し延べてきた。鈴仙は俄かに信じられず、その手を払った。

「自分から仕掛けといて、どういう風の吹き回しよ！　大体あんたは加減ってのを知らないわけ！？」

今までの悪戯の鬱憤が溜まりに溜まって、てゐに怒鳴るようにぶちまけた。するとてゐは信じられない一言を言った。

「え？ あれ、私が仕掛けたやつじゃないよ？」

単なる聞き間違いかと思った。だが次にこう言った。

「多分姫様じゃないかな？ 私はあんな古典的な罠に飽きてきたし」

鈴仙はてゐの言ったことが全く信じられなかった。まあ、前者は可能性としてはある。かなり前だが、姫様がてゐから悪戯を教えて貰ったのは見ていた。結局はだるいの一言でやめたが、たまに罠を仕掛けるらしい。だが後者。後者が問題なのだ。

「てゐ？ あんた本物？」

うっかり口走った。でも自分は正しい。てゐとはそれなりに一緒だったのだから、今の発言が本当とは限らない。

「何言ってるの。私は私に決まってるじゃん」

てゐは大丈夫かこいつ？ みたいな冷ややかな目で言った。

「……まあ、いいわ。……痛ッ……」

多分自分の勘違いだ。そう思って立ち上がろうとするとさっきの痛みが伝わってきた。

「鈴仙、大丈夫か？」

また鈴仙に手を差し延べるてゐ。少し戸惑いがあったが、今度は手を払わずにてゐの手を掴んだ。

するとてゐが一瞬ニヤツとした。
瞬間、鈴仙はやられたと思った。

「かかったな、マヌケめ！」

高らかに宣言するとてゐの身体は風船が割れるが如く破裂し、巻き起こった驚異的な風が鈴仙を永遠亭に押しした。

「キャア!？」

為す術が無く宙に浮き、永遠亭の障子に突っ込んだ。おかげで腰痛が悪化し、二日間はまともに立てなくなったとか。

「てゝゐゝ、あんた、覚えておきなさいよゝ」

次てゐに出会ったら容赦しない事を固く誓った鈴仙だった。

一方のてゐはというと、鈴仙が吹き飛ばされた様子を隠れて伺って、成功した事に手を打ち鳴らして喜んだ。

「よっしゃあ！ 変わり身風船人形は鈴仙のおかげで実用段階として完成したウサ♪ さっすがスチュアート大先生ウサ」

どうやらスチュアートの差し金だったが、さも自分がやったかのように自慢げになっていた。

第30話 博麗霊夢異変／六角形の鏡（前書き）

今回は少し解釈が難しいかと。

第30話 博麗靈夢異変〜六角形の鏡

二日経ち、今日は紅魔館でパーティーがあるそうだ。

昨日魔理沙が神社にやって来てその旨を伝えると「知ってるやつ全員に言ってくる」と高速で幻想郷を駆け回ったそうだ。

「白玉楼に永遠亭、地霊殿、アリスの家、その他もろもろに伝えただぜ」

後日、そう伝えにまた神社に来た魔理沙。

「助かった。正直俺じゃ無理だったよ」

「いいって。パーティーとかは好きだし、そういうのは大勢いた方が楽しいだろ」

本当に魔理沙は頼りになる。まあ、魔理沙の言い分も一理あるし、これ以上は何も言わなかった。

一方、階段を転げて気絶していた工場長だが、昨日理由を聞いたですと「風が吹いてバランスが崩れた」との事。何やってんだこの人……。

しかし、工場長はめげずに昨日から境内で何かを作り始めた。……って勝手にされても困るのだが。昨日それについて聞いてみた。

「おい、何してんだ？ しかもその金属の塊は何だ？」

工場長はどこから出したのか金属の塊を溶接し始めていた。

「よくぞ聞いてくれた、桜之宮！ この金属はジュラルミンという合金だ！ こいつでお前の為に乗り物を作ろうとしているのだ！ どうだ、俺の親友っぷりに感動しただろう？」

何故に乗り物を俺の為に作るのか分からないが、ジュラルミンという合金はどっから持って来たんだろうか？ それについて聞くと、

「なるほど！ 確かに俺みたいな普通の人間が五百キロの合金を持ち出すなど不可能だ。だがな、俺はとんでもない能力が手に入った！ズバリ、『金属を生成する程度の能力』だあ！！ 俺自身が持つ高度な工業スキルによってただの金属の塊は三輪車から装甲車まであらゆる物に姿形を変え、さらには（ry」

なんかヒートアップしてきたので途中で省略するが、『金属を生成する程度の能力』。まさに工場長と相性ピッタリな能力が身についていた訳だ。

ちなみに工場長が持ってきたスケートボードみたいなのは車輪が無く、少し浮いている。工場長曰く、リニアモーターカーの原理である超電導を工場長自身のアレンジで見事に再現できた最高傑作の一つらしい。まあ、過去に行つて未来を弄る某映画のとある青年が使つてたのとどこか似てる気がするが……。

んで、今日見事に完成したと言つてきたので見てみると予想を超えていた。乗り物というのでそれなりの物だと思つていたが……。

「どうよ、桜之宮！ 超電導技術を搭載した見事な乗り物が完成した！ もはや俺に作れない車輛なぞ一つも無いのだあ！！」

乗り物はタイヤが無く底は平らである。

外見は……どうみても陸上自衛隊の高機動車です。ありがとうございました。八人乗りの大型。おまけに後部席にM134ミニガンが置かれてた。ちなみにミニガンとは見た目がガトリングガンに似た銃の事だ。

「確か霊夢と言ったよな。彼女から幻想郷のことを教えて貰ったが、妖怪が出ると聞いて後部席に設置してみたんだ。いや、彼女みたいな優しい女性と一緒だとは羨ましいぜ、このリア充がっ！」

後半あたり皮肉を込めているようだが、お返しに俺はある重要な事を言った。

「工場長。スッゴク言いにくい事なんだが、多分俺の予想だと、行く時は工場長以外誰も乗らないと思う」

車内を細かく説明し始めようとした工場長の動きが止まった。そして硬直したままの表情で俺を見た。

「……ば、か、な、そんなはずは！」

「実はな、幻想郷の住人は空を飛べるんだ。人里の人間と低俗妖怪を除けばほぼ全員な」

しばしの沈黙が境内に降り懸かる。今のを聞いて何を思っただろうか。俺は工場長の言葉を待った。

そしてようやく口にしたのは、

「アーハッハッハッ！面白いじゃないか！　だがな、俺はこいつに乗って行く！　後で後悔しても知らんからな！」

へこむどころが奮い立った。何故こうなったのか俺には全く分らなかった。

「桜之宮、お前には先を予想する先見を持ってないようだな。聞けば幻想郷では酒を飲んでも大丈夫だそうだな」

「まあ、皆がつつり飲むな。で、それが？」

いまだ理解しきれてない俺に向かってビシッと指差す工場長。

「つまり！　仮にその場所で酔い潰れたら誰がどうやって家まで送れるだろうか、否、無理だ！　だからこそこの高機動車の出番だっ！　これで俺が親切に送ってやるというわけよ！　どうよこの紳士っぷりを！」

ここまで言われたら納得するしかない。確かに合理的ではある。

「工場長ってそんなに気が利いたっけ？」

「お前なあ、美しくてかわいらしい女性がいるなら気を利かすなんて当然だろ」

どや顔で親指立ててビシッと言ってくれました。

境内でこんな感じで話しているとそろそろ時間が迫ってきた。日は既に山間に沈みかけている。

「ああ、つい話し込んだ。後十分しかない」

「何!？ 遅刻は紳士たるもの絶対にしてはならない!」

「工場長は早く行った方がいいぞ。俺達は空飛んでいくから早いけど陸路は距離が意外とあるからな」

「じゃあ先に行ってくぜ。紅魔館だったかな? アバヨ、親友!」

最後までつかの捨て台詞に聞こえたが、まあ気にしない。

工場長が高機動車のエンジンを掛けると車体は僅か数センチ浮いて動きはじめた。徐々にスピードが増してそのまま階段を滑るように降りて行った。技術は本物だったようだ。

「さて、俺も霊夢を呼んで早く行くか」

霊夢を捜すため踵を返して神社に向かう俺。

だが、その時既に一つの異変が誰にも気付かれずに終わっていたとは俺ですら知る事もなかった。

霊夢はちょうど準備を終えて最後に各部屋を見回っていた。対した理由ではないが、一応外来人テロリストを警戒しての行動らしい。稟と肇が境内で高機動車について話していた頃だった。霊夢は稟が寝泊まりする部屋であるものを見た。

「あら? なんで稟の部屋に鏡が?」

ちょうど襖に寄り掛かるように置いてある全身鏡が立ててあった。形は縦に長い六角形で淵は紫色だった。

（この鏡も稟のかしら？ でもおかしいわ）

霊夢がこう考えるのも当然だ。

稟は今まで身嗜みを極力気にする方ではないし、もしこの前リュックにいつの間にか入っていた電気スタンドのように入っていたとしても大ききからして入らないし、わざわざ襖に立て掛ける必要は無いはずだ。

不審に思っても霊夢はその鏡に近づいて見てみた。

「……………」

鏡に映ってるのは紛れも無く自分の全身。そして背景に部屋が見え、縁側も見える。

（やっぱりただの鏡ね。稟もこうやって身嗜みとかチェックするのかしら？）

と考えるも頭を振って考えるのを止めた。鏡に映った自分も同じ動作をした。

「お、霊夢、ここにいたのか。何してんだ？」

不意に鏡の端、映っている縁側から稟の姿が見えた。

「あっ！ り、稟！ な、何でもないわよ！」

一瞬稟の部屋だと思い出して何もしてないように作り笑いで稟に

振り返った。

「……えっ？」

作り笑いが一瞬に崩れた。何故なら鏡に映ったあるべき人物の姿が無いからだ。

「霊夢？ 俺を見て固まってどうしたんだ？」

稟の声がはっきり聞こえる。霊夢は身体ごと振り返ってすぐに立て掛けてある鏡を見た。同じように鏡を見る自分が映り、鏡の縁側には稟が映ってる。

霊夢は再び振り返った。やはり稟の姿は縁側になかった。

「な、何！？ 何なの！？」

霊夢ですら体験した事がない事で戸惑うも、霊夢は縁側に駆け出した。

「稟！ いるの！？」

しかし、縁側に出ても稟の姿は無く、いつも通りの神社と庭があるだけ。

いよいよ頭が混乱しそうになって、もう一度部屋に戻り鏡を見た。そうしたら信じられない光景が映っていた。

「ちょっと稟の部屋に鏡があつたから気になって」

「ん？ あれ？ 部屋にあんな鏡あつたかなあ……？」

鏡に映っていたのは縁側に立っている稟と、

稟と向かい合つて話している自分の姿。

今、鏡を見ている霊夢と同じ姿をした霊夢はいなかった。

（つまり、鏡に映った私が鏡の中で動いている！！？）

「多分早苗じゃないかな？ 缶詰とか取る時にリュック取るからさ」

「あゝ、有り得るわね」

鏡に映っている霊夢と稟は何も無かつたように平然と話をしていた。

「それよりもう時間だ。早く行かないと」

「そうね。じゃ、手を繋いで」

二人は縁側を降りて庭に出ると稟は霊夢の手を取る。

霊夢は咄嗟に叫んだ。

「稟ッ！ それは私じゃない！ 偽物よ！ いますぐそいつから離れなさい！ 聞こえてるでしょ！ 稟！」

しかし、霊夢の叫び声も虚しく、鏡に映っている二人は徐々に宙に浮き、やがて鏡の外に出て見えなくなった。

「稟……」

霊夢の言葉はただ空間に響いただけだった。

「……クッ！」

霊夢は部屋を飛び出すと、鏡の中の自分と稟が飛んで行った方向に飛んだ。

（全速力で紅魔館につけば……！）

ガンッ！

「うあっ！？」

それは叶わなかった。霊夢は神社の敷地を出ようとした時に何かにぶつかった。突然だったので体勢を崩して地面に落ち行くが、地面に激突する前に体勢を整えて着地した。

「痛っ……、い、今のは？」

真正面からぶつかったのか、身体のあちこちが痛む。霊夢はそっと手を伸ばした。

すると、神社の敷地が途切れる境界に壁のような感触があった。

「まさか結界!？」

霊夢はすぐに鳥居に向かい、ゆっくりと向こう側に行こうとしたが、やはり結界のような見えない壁に阻まれた。

（これはまさか能力とか!？ 私はここに閉じ込められたのか!）

少し冷静になってそう考えた。

ならば一体誰が何の目的で閉じ込めたのか。真っ先に霊夢が思い付いたのは外来人テロリスト。

能力が判明してるのは二人。後二人、キョウジとリカの能力は知らない。能力がないという可能性もあるが、そう考える事はまずない。

（じゃあ今何処かに敵がいるって事?）

霊夢は神社の方に振り向いた。結界は予想からして博麗神社の敷地内だけ。つまり敵は神社に潜んでると考えられる。

（……いや待てよ? 仮に結界だとしても私より強い結界をましてや外来人が張れるはずは……）

思い立ったら即実行。鳥居に身体を向けてスペカを取り出した。

「『神霊 夢想封印』!」

スペカが発動、七色の玉は結界に一直線し、霊夢の予想通り結界は崩れ、開いた穴から霊夢は脱出した。

はずだった。

スペカを出して宣言をした。だが、スペカは発動しなかった。それどころか通常弾幕さえ出せない事に気がついた。

（…完全に敵の術中に嵌まった訳ね。まずいわ）

弾幕が出せないのは幻想郷において致命的である。ましてや外人テロリスト相手ならなお一層。もし敵が二人いて片方がホルトだったら、暗殺銃で確実にやられる。弾幕で相殺もできず、神社の敷地内という狭すぎる範囲。

（となればやはり元凶はあの鏡！）

そう思い、霊夢は宙に浮いたまま稟の部屋に入った。足音で気付かれるのを防ぐためだ。

鏡はさっきと変わらず襖に寄り掛かるように立て掛けてある。もう一度だけ鏡を見てみた。

部屋は映っていたが、霊夢は映らなかった。

（やっぱり鏡の中の偽物が稟というんだ……）

改めてその現実を認識すると不安になって堪らなくなった。もし

かしたら自分の知らない場所で偽物が暴れるかもしれない。稟を傷つけるかもしれない。

（稟……！）

苦虫を噛み潰した表情に不安な心情で鏡を睨む霊夢。霊夢はその鏡に映ってないのでそんな表情をしてるなど知る由もない。

そして霊夢は強行手段に出た。

（なら、この鏡を割る！）

弾幕が出せないので霊夢は庭で小石を幾つか拾い、部屋に戻ると拾った小石を鏡に向けて、

（行けっ！）

渾身の力で投げた。数個の小石は一斉に鏡に当たった。そして鏡が割れ、すると世界が歪み、気がついたら元の世界に戻って来た。

はずだった。

小石は鏡を割るところか光を反射したかのように跳ね返り、霊夢目掛けて小石が襲ってきた。

「なっ！？ キャアッ！」

霊夢が投げた速度そのままで跳ね返り、咄嗟に腕で塞ぐも、小石が霊夢の肌掠って切り傷のように切れ、血が滲み出る。

外れた残りの小石は背後の壁に当たり、そのまま減り込んだ。

「痛……もう！ 何なのよこれは！」

半分自暴自棄になって部屋を飛び出した。そして振り返って叫んだ。

「何処かにこそ隠れてないで出てきなさい！ 私はここにいるわ！」

今の霊夢はただ空を飛べるだけ。近接でしか攻撃出来ないのだから外人テロリストなら圧倒的に不利だ。それでもこの変な世界から出たいが為に叫んだ。後は運だ。

「やれやれ、そんな大声言わなくても、私はずっとここにいたのに」

上空から声が聞こえた。いや、正しくは神社の屋根から聞こえた。屋根を見たら、一人の女性が傾斜部分に腰掛けていた。

「あんたが犯人ね！」

霊夢は犯人らしき女性を見つけ、屋根に飛んだ。女性は片膝に肘を立てて、その手で頭を支えながら霊夢を見ていた。

女性は黄土色の軍服に帽子、胸の辺りに「PMC」の文字。霊夢の予想通り外人人だが、写真で見たテロリストとは違う。

「あんた何者？ 外人テロリストの仲間？」

「外人テロリスト……？ 幻想郷にテロリストがいるのか？ それはお初耳だ」

女性はテロリストと聞くと目を丸くして驚いた。だが霊夢は気にせずいきなり女性に殴り掛かる。

しかし、女性はただ上半身を傾けて避けると同時に霊夢の右腕を掴む。

「！、離さない！」

霊夢はすぐに蹴りを入れようとすると、女性は腕を掴んだまま身体ごと浮かせて避けた。霊夢の腕を掴んでる為、霊夢も女性の浮いた軌道の後を追いつけた。

「ちょっと地面に降りようか」

女性は地面に降りて、後から落ちてきた霊夢をキャッチして、お姫様抱っこ状態となった。

「なっ！？ ちょ、ちょっと！」

直ぐさま離れようとするがしっかり抱かれて身動きが取れない。

「暴れるな。まず私は霊夢達の味方だ」

「私を閉じ込めておきながら味方って言って信じられるか！」

必死に抵抗するも女性の力が上なようで動けない。そんな様子を見てハア、と溜め息を付いて、

「頼むから暴れないで。じゃないと霊夢の事を好きになっちゃうじゃない」

「!?!?／／／」

優しく、平然と急に变な事を言い出し、霊夢は赤面して動きを止めた。と同時に女性は手を離れた。お姫様抱っこ状態だったので、受け身がうまく取れず地面に落ちる霊夢。

「痛ッ！」

さつき結界にぶつかった時の痛みと共に痺れるように身体に伝わる。

「アハハッ、ま、冗談だけどね」

と言って笑いながら神社に向かって歩き、縁側に腰掛ける。

「つつ……な、何なのよあんた！ 変な事言ったりして」

霊夢は立ち上がると直ぐに女性に掴み掛かろうとする。

「待った。霊夢はここから出たいのか？」

瞬間、霊夢の動きは止まった。

「あ、あんた一体？」

「まあいろいろ言いたい事はあるだろうが、まず話を聞いて欲しい」
そう言うと女性は鏡のあった部屋から更に奥、卓袱台のある部屋
に行って霊夢を手招きした。

「ここで話すもなんだし、中で話しましょう。あなたの神社だけど」
女性は霊夢に笑顔で言った。腑に落ちないが、仕方なく霊夢は部
屋に入った。

「そうね、単刀直入に言えばここは鏡の中。外にいるのはあなたの
分身」

部屋に入ると既に卓袱台にお茶があり、二人がお茶の傍に座ると
女性がそう言った。

「そんな感じだと思ったわ。それよりあんたは何者なの？ それを
教えなさいよ」

不満そうに言う霊夢。今のところ霊夢は直ぐにここから出たいの
が本心。それには相手を知る必要がある。

「ん、残念だけど名前は教えられないわ」

「じゃあ敵ね」

間髪入れずに立ち上がろうとすると、

「常盤楓は知ってるかしら？ 彼女を幻想郷に送ったのは私なんだから」

「えっ……、楓を送った？」

何の事がか分からず聞き返す霊夢。

「そ、私がね。つまり私は楓の上司に当たる者。そうね……、楓は私を『先輩』と呼んでくれるわ」

「!?!?」

今の言葉で霊夢の頭の中で繋がった。前に稟と一緒にいる時、楓とこんな会話をした事がある。

『本当はね、先輩が幻想郷に来る予定だったんだけど、あの人が忙しくて私を送ってくれたんだ。……でも来て早々重傷負って合えず顔が無いんだ……』

あの時霊夢は半分受け流すように聞いてたが、稟は熱心に聞いて楓を下手ながらに慰めていた。

（じゃあ目の前にいる人が……）

女性が自ら言った事。確証は無いが、そう判断するには十分だった。

「どうやら信じてくれたようね」

「別に信じた訳じゃないんだけど……」

「目を見れば分かるわ。さ、次の話題に移っても？」

まるで一対一で講話でも聞いてるように見える。霊夢はそんな事は気にしないが。

「次に、私の能力は『鏡を操る程度の能力』。ただしこれは劣化版であるから制約を受ける」

劣化版？ 制約？ 霊夢はよく分からなかった。だから少し考えた。普通能力は個人特有のものであり、その能力は普通完璧なものだ。ただ修業不足でまだ完全に使い切れてないと言うなら劣化版と言うのだろう、と考えた。

「おっと、ただ使いこなせてないから劣化版と言った訳じゃないぞ？ これでもう形となっている」

「ハア？ 分かりやすく言いなさいよ！」

考えと違う事に腹立たしくなる霊夢。女性は一旦霊夢を落ち着かせるようお茶を勧めた。

「まあまあ、お茶でも飲んで。………で、私の能力だが鏡があればなんでもという訳でなく、特定の鏡なら自由自在に操れる能力なんだ」

そう言って女性はポケットから何かを取り出した。それは二枚の小型の細長い六角形の鏡で……。

「それ、稟の部屋にあった鏡と同じ……よね？」

「今疑問形になった理由を当てよう。部屋にある鏡と今私が出した鏡は外見も同じだが、大きさが違うから疑問形になった。どう？」

女性は得意げな顔で霊夢を見た。確かにドンピシャであった。

（こいつ、一体何なのよ…）

早く帰りたい思いと女性の言動に内心苛立ち始める霊夢。女性はそんな霊夢の様子に気付かず話し続ける。

「実は部屋にあるのと今出したのは紛れも無く同じ私のだ。ちよいと念じれば……」

すると触れてもない鏡が勝手に宙を浮き、さらに大きさも変わり、二枚とも部屋にあったサイズと同じ大きさとなった。

「これが私の能力。この大きさなら私も中と外を行き来できる。ただし私だけ」

「今一瞬期待したけどあんたしか通れないって事じゃん。そんなのはどうでもいいから早く私を元の幻想郷に戻しなさいよ!」

苛立ちが募り女性にあたる。しかし、女性は眉一つ動かさずに霊夢を見つめる。

「……物事には順序があるように、話の展開にも順序がある。内容を聞かずに結果だけ言われれば面白みも無いしその衝撃は心の準備すら待たずにのしかかる。私の言ってる事が分かるかしら?」

不意に意味深な言葉を霊夢に問う。

「知らないわよ」

「なら試そう。霊夢はその衝撃に耐えられる程の精神を持ち合わせているか否か」

「いちいち言葉を濁さないで言いなさいよ!」

霊夢はそう言うと言性はお茶を啜り、一呼吸間をおいてから言った。

「結論から言えば、霊夢は私がもってしても決して元の幻想郷に帰れない」

「なっ……!?!」

結論は言われた。霊夢は帰れない。はっきり鮮明に嘘偽り無く正直に。つまり、霊夢は決して霧雨魔理沙や桜之宮稟、他の幻想郷の住人には会えない。その考えが霊夢の頭に浸透していった。

「う……そ……」

言葉を失い、膝が畳に付く。

「う……そ……よ、嘘よ、嘘よ、嘘よ嘘よ嘘よ、嘘だっ!!!」

抑え切れない感情が爆発し、卓袱台をひっくり返すと座っている女性の胸倉を掴み引っ張り上げる。

「嘘ばかり! あなたがもってしても帰れない? ふざけないでよ! あんたの能力で閉じ込めたんでしょ! それともあんたの能力が劣化版だから出来ないわけ!? それじゃただの馬鹿じゃない!」

声を荒げて女性を罵る霊夢。それでも女性は抵抗もせず霊夢にされるがまま、だがその瞳は霊夢を捉えていた。

「私の能力がどうこのレベルじゃない。だが現実だ」

霊夢はおもいつきり女性の頬を殴った。弾幕もスペカも出せない今の霊夢には近接攻撃しかない。それでも力はあった。

女性は殴られた方向にドサッと倒れた。

「くっ、あんたをボコボコにしないと気が済まないわ」

よろよると壁伝いに立ち上がる女性に飛び蹴りをお見舞いし、女性性は障子を巻き込んで吹っ飛ぶ。

「ガハッ…！」

口から吐血するも、女性は立ち上がる。すかさず真正面にもう一撃喰らわす。腹部を蹴られて庭に吹っ飛ばされた女性は倒れたままだ。

「っ、ゲホッ、ゲホッ」

腹部の一撃が重いのか腹部を抑える女性。だが霊夢は近づいて、

「あんたが悪いのよ」

そう言って右ストレートを喰らわした。

はずだった。

だが右ストレートは女性では無く、女性の能力である鏡にぶつかった。鏡は既に部屋にあった大きさと同じ。すると霊夢に衝撃が走り、神社方向に吹き飛んだ。そしてそのまま建物の壁にぶつかる。

「うぐっ?!」

霊夢は何が起きたのか分からなかった。鏡で防御されたのしか分からなかった。

「ゴホッ、か、鏡は…」

女性は腹部を押さえながら立ち上がり、鏡を支えにして霊夢に一歩一歩近づく。

「私の…鏡の場合は……あらゆる物を……映しだし…、反射させる。光も…人も…物も…エネルギーも全て……。今霊夢は鏡に攻撃した…だから鏡は……そのエネルギーをそのまま霊夢に返した……。分かるかしら？」

何となく、が正直ではあるが霊夢は頷いた。それを見ると女性はさっきの部屋に入る。霊夢も吹き飛ばされて少し落ち着いたのか、同様に入る。

部屋は派手に壊れていたが、卓袱台に置いてあった湯呑みは何故か無事で中のお茶も何とも無かった。

女性は両方の湯呑みを取り、片方を飲みながら片方を霊夢に差し出した。つられてそのまま霊夢も受けとって飲んだ。すると疲れや痛みを感じなくなった。急速に身体が回復したのだ。どうやらお茶に何かを入れたようだ。

「ごめんなさいね」

不意に女性は言った。

「……何が？」

何の事が分からず聞き返す。むしろ謝るのはいきなり殴った自分じゃないかとも思った。

「話の順序……やっぱり結果を言う前に聞いておけば良かった」

「だから何が？」

霊夢は分からないだろうが、女性にとってはこれが最重要事項であつたのに結果から言ったから謝つたのだ。

「霊夢は鏡を通して何を見た？」

「鏡を…通して？」

そう言われて少し考えた。何の事を言ってるのか。そしてすぐ答えが出た。

「私がここに来た時？」

「そう。正確にはあなたがこの鏡を始めて見た後の光景」

鏡を始めて見た時。つまり鏡に入つたのは縁側で稟を見かけた時。

「確か稟が縁側に見えて振り返った時に映ってるはずの稟がいなかった」

「そうか。その前は？」

「その前……、えっと、一回鏡の前に立って全身を見て」

「そこだ。その時点で霊夢は入った。いや、入れ代わった」

入れ代わった、で思い出した。

「そうだわ！　じゃあやっぱり外にいるのは私の偽物！」

「うんにゃ、違う」

霊夢の言葉を遮って言う女性。

「鏡は全てを映しだし反射する。映し出したのが人間ならその外見容姿、性格、能力、身体的情報、精神的情報、全てが映され投影される。つまり、霊夢が言う外にいる偽物とは偽物ではなく、真正銘の博麗霊夢。もう一人の博麗霊夢」

「あんたの説明が良く分からないんだけど……」

「つまり、元の幻想郷には既に博麗霊夢は存在する」

ますます分からない。女性は分かりやすいように言ってるだろうが、霊夢には理解できない。

「存在するって私はここにいるし…えっと、つまり？」

「……じゃあ……今、博麗霊夢は二人いる。で、一人はここ。もう一人は外の幻想郷にいる。これなら分かるでしょ？」

「何となく分かったわ。じゃ私はどうしたら出られる訳？」

結局は最初の疑問に戻った。すると女性は優しく言った。

「さっきは私をもってしてもとは言ったが、条件が揃えば帰れる」

ようやく答えが聞き出せた安堵感と、始めからそう言えばという
苛立ちが混ざり合ったが、出られる方法があるだけマシだと考えて
素直に喜んだ。

「はー、良かった。もし出られなかったらあんたをもう一度ボコボ
コにしてたわ」

「さりげなく脅してるし……」

「で、条件は？」

霊夢は以前変わらずここを出たいので急かすように女性に迫る。
すると女性は苦笑いして言う。

「じ、実はこの条件が厄介で……」

「厄介？」

「私じゃ達成出来ないからよ。だからさっき私がもってしてもって
言ったのよ」

本当に回りくどい。説明が長いしどこぞの閻魔様の説教に聞こえ
てしょうがない。だが聞かずにいられない。すぐ答えるように頼む
霊夢。

「とにかく条件を言いなさい」

「条件は……外の幻想郷にいる博麗霊夢の消滅。すなわち、死ぬ事」

「……………はい!？」

「そのままの意味。幻想郷の霊夢が消滅したら帰れる」

何故死ぬ事が条件なのか分からない。しかし、霊夢以外のある人物はこうなった体験がある。

「大切な事よ。霊夢が二人いるってのはかなりまずいのよ。エネルギーの不均衡が生じて霊夢の存在自体があやふやになり、最悪の場合時空間に歪みが生じて幻想郷全体を滅ぼす可能性がある。だから一人を鏡の中に隔離して均衡を保ってるわけ」

「聞けば聞くほど理不尽ね、その能力。で、私はここで何をすればいいわけ？」

結局帰るのを諦めてここでやることを聞いた。

「そうね……、修業かしら？」

「断る!」

「即決ね。でも博麗神社からは出られないし、暇でしょ？ だから私が霊夢を鍛えさせるわ。ちゃんと海兵隊仕様のブーツキャンプの要領に沿ってやるから安心して」

「いや、だから修業自体断る!」

「……ノルマ達成したら美味しい料理作ってあげたのに残念ねえ。」

それでも腕は結構あるんだけどなあ……」

「よし、どんと来なさい！」

（ホント分かりやすい。でもそこが可愛いのよね♪）

料理の誘惑に負けて修業を決意した霊夢。これが熾烈を極めたというのは後ほど。

「つとその前に今幻想郷で起きてる事全部話してくれない？ さっき言ってた外来人テロリストとか。楓は音信不通だから何が起きたのか分からなくて」

一瞬霊夢は躊躇った。楓の現状を話すべきかどうか。

「全部？」

「ええ。楓が今どうなってるのかも知ってたら教えて欲しい。別に重傷で意識不明とか言っても大丈夫だから」

「え？」

一瞬耳を疑った。先輩と言われている女性は楓が重傷でも聞く覚悟がある。霊夢はそう思った。すると胸のつかえが降りたようで気が楽になった。

「じゃあ……まずは…」

霊夢は途中女性の予測も交えて何とか思い出しながら幻想郷の現状を全て話した。

第30話 博麗霊夢異変／六角形の鏡（後書き）

再生しました

楓「第15回！ 幻想郷ラジオ！ お久しぶりです。パーソナリティの常盤楓です」

稟「本当に再開しやがった……」

楓「そんな嫌がらないで下さい。私と稟君とその他の皆さんでこのラジオは成り立ってるんですから」

稟「おおざっぱに斬ったな……」

楓「じゃあゲストなんだけど……少し遅れてますね」

稟「え？ まさかの遅刻？」

楓「まあ一枚読み終わる頃に来ると思います」

稟「じゃあ読みましょうか」

今回はハガキに書きました。どうせ本編で語るつもりでしたが特別に書いておきました。あなたのトラウマを想起します。後、梨音にNCMをしたい……。

NCMのし過ぎで最近ペットが離れてしまう主

稟「再開一発目から重いのか来たなあ、おい！」

楓「稟君ってトラウマあったっけ？」

稟「そりゃ人間誰しも一つはあるでしょ」

楓「何々…妹がトラウマ」

凜「ちょ、読まないで下さいよ！」

楓「ま、まさか妹と禁断の近s」

凜「ストオーツプ！！ それ以上はアウトだし断じて違う！」

楓「あ、もしかして監禁された？」

凜「うぐっ！？ そ、そうじゃなくて、って何でこの時だけ洞察力高い訳！？」

楓「あ、凶星でしょ？」

凜「これ以上は俺に甚大な精神的被害を受けてしまうからもう次、次読みましょう！」

ヤッホー、久しぶりい。麓の神社で会って以来かな？ まあとりあえず状況報告という事で書いとくけど、天狗はもうすぐで家に帰れるらしいよ。

そいじゃ質問だけど、早苗今大丈夫かな？ 神奈子が淋しそうに見えたからね。もし克服できたら一緒に守矢神社に遊びに来てね。その時は歓迎するからさ。

名実存亡の神

凜「神様までハガキ出してくれましたよ」

楓「天狗って文さん？」

凜「テロリストに襲われた方ですよ」

楓「私知ってるよ。天狗の中じゃアイドル的立場で人気だとか」

凜「どこ情報？」

楓「天魔さん」

凜「ちょい待てい！ 平然と天狗社会のトップの名が出ましたけど

！？ 面識あるの！？」

楓「ちよつとね……」

稟「……あえて問いません。質問ですがどうだろうなあ……最近結構明るくなってるけど。かといってトラウマが治ったと断定するには早計だし……」

楓「もしくは稟君に惚れて逆に帰りたくないとか」

稟「毎回毎回恋愛方向に持っていけないで下さい！ 俺はプレイボーイとかじゃありませんから！」

楓「ま、霊夢にばれたら大変だもんね」

稟「くつついてるのを前提とした発言は止めて下さいよ！ ホント空気読めないんだから！」

楓「私は空気より胸キュン話が好きなんです！」

稟「くそっ、駄目だ！ 俺に安息は存在しないのか！？」

黒猫「ニャ」

楓「おっ、ゲストが来ました」

稟「黒猫がゲスト！？ 動物来ちゃったよ！」

楓「ですけどハガキが……」

稟「え？ またなの！？ ネタ少ないな、おい！」

黒猫「ニャ」

楓「ごめんねー、もうハガキが無いんだ」

黒猫「ニャー……」

楓「でも大丈夫。きっと稟君が何とかしてくれるから」

黒猫「ニャニャー♪」

稟「いや、何か期待されても困るんだが」

楓「それくらい考える！」

稟「いや、しかし……」

楓「あるじゃない。国語辞典を読み聞かせて言葉を覚えさせるとか」

稟「何その超高度な課題！？」

楓「つべこべ言わずにやれ！」

稟「く、ならばやって見せようじゃないか！」

30分後…

稟「来た！ これでどうだ！」

黒猫「やりました！ やりましたよ！ 橙は人語をマスターしました！」

楓「んゝ、喜んでるところ申し訳ないけどもう時間だから締めるよ？」

稟「もう少し喋らせようよ！ せっかくできたのに！」

橙「『わ』は和田アキコの『わ』ですね！」

稟「グッド！」

楓「…：何か勝手に盛り上がってるけど時間ですのでまた次回…：…
といってもまた空白がありますが、楽しみにして下さい。ご視聴ありがとうございます！」

橙「『す』はB-2のスピリットの『す』ですね！」
稟「グレイト！」

第31話 上海紅茶館 紅魔館のパーティー（前書き）

今回の後半は自己解釈が混じってますので分からないかもしれません。

第31話 上海紅茶館 紅魔館のパーティー

「桜之宮、お前空を飛んでいるのか！」

「何この物体？」

「これは高機動車という乗り物だ。霊夢みたいに飛べない奴はこれで楽に移動できる」

霊夢と一緒に紅魔館に向かう途中、霧の湖を浮遊している高機動車と工場長を発見した。霊夢と共に来る十五分前に出発したから着いていると思ったが違ったようだ。

「ていうか、湖の上で超電導は発生しないはずじゃ？」

「違うな。超電導は内部で発生させてる！ だから例え海の上でも走行可能なのだ！」

見事なチートですね。常識を逸脱してるぞ。勿論心で呟いて口に出さない。

「おっ、見えたぞ」

ようやくあの紅に染まる紅魔館が見えた。既に周りは薄暗いので紅魔館の僅かな窓から光が漏れでてる。ランプか魔法で明るくしてるのだろう。

前に人里で咲夜さんに聞いたのだが、紅魔館でのパーティーは本当に久しぶりだそうだ。といってもつい二、三ヶ月前にやって来た俺にとっては幻想郷初ではあるが。

「あれが紅魔館。なるほど紅いな」

「見た目の感想をありがとう」

「おーい、稟ー」

と、その時魔理沙が合流してきた。箒にアリスと……少し大きい人形？ を連れていた。その人形の服装は前に見た上海人形と同じ青い服だ。

「いやー、間に合った間に合った」

「まったく、魔理沙が急かしたから手元が狂って時間かったじゃない！」

「おや？ アリスが何か普通に返してるぞ？ 一体アリスに何が起きたのだ？ それに後ろの大きい人形はアリスにがっしりしがみついているように見えるし…。」

「桜之宮、お前は一体何人の美少女と仲がいいんだ！？ くうく、羨ましいぜえ！」

「そーいや誰だ？」

工場長の一言で魔理沙が高機動車に乗る工場長に気づいた。

「こいつはだな…」

と紹介しようとするとう工場長に遮られた。

「いやいや、ここは自分で言うべきだ。俺は川内肇、あだ名は工場長、最高のエンジニアだ！ 宜しくな、美少女さん達！」

「ほう、エンジニアか。にとりと同じだな。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ。んで、後ろにいるのは同じ魔法使いのアリスと上海……じゃなくて外来人の梨音だ。宜しくな」

互いに自己紹介が済むと同時に、

「「え、ええっ！！？」」

今ハモって叫んだのは俺と霊夢だ。全然気がつかなかった。いつもの男子制服とのギャップが可愛い梨音が上海人形が着ていたかわいらしい青い服を着て、もはや人形もびっくりな可愛さが出ていた。

「ま、マジに梨音か？」

「ふふふ、どうよこの服。私が一日かけて梨音にピッタリな服を縫い上げたのよ」

アリスが縫い上げたとは……。まさかとは思うが梨音がアリスを改心させたのだろうか。当の本人は赤面して俯いてる。これはやばい、かなり可愛い。

「ヘイツ、桜之宮、時間は大丈夫か？」

「まあ大丈夫だ」

相変わらず時間にうるさい工場長だ。すると工場長はある提案をした。

「よし、今から紅魔館まで競争しないか？」

「おっ、面白そうだな。参加するぜ」

工場長の提案に魔理沙が乗った。当然ながら面倒臭い霊夢は拒否したが、

「ただじゃつまらん。一着には俺から直々に金一封をやろう」

と懷から封筒みたいなのをちらつかせると、

「乗った！」

毎回思うが単純過ぎるぞ霊夢……。

「ルールは簡単！ 紅魔館の門にたどり着いたら勝ち！ それではレディー……ゴーツ！」

ていうか自分で号令言うなよと心の中で呟いて競争が始まる。

普通なら魔理沙が有利と思われたが、金に関わった霊夢も同等だった。おかげで手を引っ張られる形で俺の身体は風圧で地面と平行状態。かなりきつい。腕がちぎれるんじゃないかとも思うのも仕方ないはずだ。工場長はエンジンにスーパーチャージャー、後部にロケットブースターを付けていたらしいが、僅かに遅れている。何故工場長が競争を提案したのかには多分勝てる見込みがあったからだろう。しかし、俺の予想通り時間が足りなく未完成な高機動車だっ

たようだ。

「おっしや、一番！」

「さすがだな、金が絡むと強い……」

ほぼ僅差で霊夢が一着、魔理沙が二着。工場長はまだ遠方に見えた。

「ぐ、グスッ、こ、怖かったあ……」

「大丈夫、もうやらないから、ね？」

梨音はあのスピードが怖かったらしくアリスに抱き着いていた。

「次からは梨音無しでしないとな……」

魔理沙も梨音を泣かせたことに若干の責任を感じたらしく、梨音に謝った後でそう呟いた。

そういえば誰か忘れているような気がしないでもない。

「いや、いますよ！　いきなり何してんですか?!」

文句を言ったのは紅美鈴。そういや美鈴のすぐ横を抜けたんだっけ……。まあ、本人寝てたから大丈夫だとは思ってたがやはり無理だったか。

「魔理沙と工場長と紅魔館まで競争しただけよ。文句ある？」

「ありませんけど、気をつけて下さいよ！ 危うく接触するところだったんですから！」

霊夢が説明してくれたが腑に落ちない美鈴。多分接触しそうになったのは俺だ。確か靴の先端が美鈴の服に掠ったんだっけ。

「まあまあ、それより今日パーティーなんだろう？」

「それですか……。ちょっと待って下さい」

魔理沙が聞くと美鈴はそう言って紅魔館の門を開けた。

「後は咲夜さんに任せてますから」

と霊夢達の中に入れる。その数秒後に、

「待てやゴルァ！」

工場長の高機動車が美鈴に突っ込もうとしていた。

「うわ！ な、何ですかあれは！？」

始めてみる乗り物に戸惑うも身体は既に迎撃体勢。え？ 素手で大丈夫なのという野暮な質問は無しだ。

「その格闘家さん、退かないと轢かれるぜ？」

「門番の私が退いたら誰が門を守れますか！ 止めてみせます！」

美鈴は迫り来る高機動車に臆すること無く突っ込んで行く。ただでさえスピードの出てる高機動車に自分から突っ込むとなると衝撃は相当なはずだ。はたして美鈴に止められるだろうか？

「はあああっ！」

気合いを入れて美鈴は正面衝突した。

「うおおおおお！」

何と言うことでしょう！ 美鈴は見事にボンネットを押さえて見事に止めたではありませんか！ やはり押されつつも高機動車のスピードが徐々に落ちて行く。美鈴は足で地面をえぐり、地面と接した抵抗も利用しているが、微弱な抵抗は通用せず地面を削りラインが引かれるだけであった。

「ぬおおおお！」

美鈴がさらに力を込め、遂に高機動車は停止した。さすが万能妖怪。君の頑張りには人知れず語られるだろう。多分誰も語らないだろうが。

一方の工場長は、

「お、俺の傑作が……。死にたい気分だ……。もし俺が死んだら遺

灰は地中海か紅海に撒いてくれ……」

戯言のようにぶつぶつ言いながらすっかり意気消沈。ご愁傷様でした。というか何気に死後の処置が高望み過ぎだ。今の日本在住の奴がわざわざ地中海や紅海にまで遺灰撒きに行くか。逆に迷惑だろ。

「桜之宮様、お待ちしておりました。会場はあちらのホールです」

玄関から入ると目の前に咲夜さんが現れて挨拶を兼ねて案内してくれた。

「先日はパーティー開催の知らせを広めていただき、真にありがとうございます」

「あー……その、それ九割魔理沙のおかげなんだが……」

と正直に言うとなんを思ったか魔理沙をちらっと見てクスッと微笑した。

「だろうと思いました。魔理沙が、稟から頼まれたから伝えに来たって自分から私に言いましたからね」

「あー、なんだ、昨日図書館で本を借りようとしたら咲夜に見つかって、その言い訳に使ったというか……」

俺が魔理沙に振り向くと魔理沙は視線を逸らしながら言った。俺

には何故それを言い訳に使ったのか分からない。紅魔館でのパーティーを紅魔館の人に伝えるとはこれはこれで滑稽だ。言い訳に使える要素など一つもないのだが……。

そう思うと咲夜さんの微笑も頷ける。

「……稟、今笑わなかった？」

「いや、全然」

魔理沙に指摘された時は真顔で言ったが、内心ほくそ笑んでる自分があった。

しばらく歩いて、ようやく会場手前の扉に着いた。既に中が騒がしい。

「こちらになります。今日は存分にお楽しみ下さい」

そう言って会釈すると目の前から消えた。

「じゃ入るか」

と魔理沙が扉に手を掛けて開けようとした時、

「ま、待ってくれ。俺を忘れないでk」

ボタン。

全員が中に入って扉を閉める直前まで誰かの声が聞こえたが無視しても大丈夫だろう。

紅魔館のパーティーとは言ったが、中はほとんど宴会状態だった。既にかんりの人数がいる。軽く見渡した限りでは一度会った人物にまだ会ったことのない者も。

「さて、来たはいいがどうすれば……」

いつもの癖だが、俺はこういう社交的な集まりの場ではあまり積極的でないし、戸惑ってしまう。

「なあ、霊夢。……霊夢？」

霊夢にどうするか聞こうとして振り返った時にはもう霊夢達は中に混じってた。あんな感じで自然と溶け込めるのは羨ましい。と、誰かが俺の手を引っ張っていた。梨音だった。そういえばかなりの人見知りだったっけ。

「あの、アリスさんとかもう行っちゃったから……。その……。少しだけいいですか？」

「そ、そうだな。まあ俺も同じだから」

だいたい同じような気持ちを持つと集まる。類は友を呼ぶ。

「何！？ 来て早々だと！？」

「ひう！！！？」

いきなり工場長が隣に現れた。勿論梨音は驚いて工場長から隠れ

るように俺に寄り添う。

「この子はさっきの子じゃないか！ お前、やるな！」

まったく勘違いにも程がある。だがこの容姿では仕方ないかもしれないが。

「あのなあ、工場長がいきなり現れたから怖がったんだよ」

「何？ 原因は俺？ そりゃすまんかった！」

即座に梨音に謝る工場長。もし霊夢達がいたらどれほど責められたことやら。

「梨音、こいつは大丈夫だ。俺の同級生だ」

「え…？ 同級生？」

「そう、でもこいつ学校サボってバイトしてたからな。学校じゃあまり会えなかったがな」

前に家が焼失した時は野外生活を送っていたと説明しただろう。バイトを始めたのもそれが原因だ。中学生からしてたらしい。当時は家財や財産も焼失して学費が払えなくなるから学校側が特例でバイトを認めたのだ。条件は週二での授業参加。授業参加といっても内容を纏めたプリントに沿って個別授業するだけだ。

高校入学時には家も落ち着いているし、学費も払えるようになったが、何かと理由をつけて授業をサボってはバイトしている。あるバイトにハマったとか。

梨音が転校した日もいなかったから多分面識はない。

「あ、もしかして五、六の空白席の事？」

すると工場長が反応した。

「おい、それ俺の座席場所じゃん。なんで知ってるんだ？」

やっぱり面識は無かった。俺は説明した。

「実はな、梨音は俺達と同じクラスの転校生だったんだ」

「……………」

しばしの沈黙。工場長もよく分からないのか、頭を整理すると言
って考えていた。やがて俺の言った事が脳に染み渡り、

「ちょ、マジで！？ この可愛い子が俺達と同じクラスだったのお
！？ うおーっ、あん時なんか良いことあるかもなって勘が言っ
たけど結局バイト行っちゃったからなあ！」

奇声を上げて崩れゆく工場長。よほどショックなようだ。すぐに
は立ち直れないな、こりゃ。

「あの……………」

落ち込んでいる工場長に梨音が話し掛けた。

「すまない。今とても悲しいんだ……しばらく一人でやらせてくれ……」

「いや、あの……そうじゃなくてですね、えっと……」

工場長の拒否にめげずに何かを伝えようとしている梨音。一体何をやる気なのだろうか？

「工場長……さん……でしたよね？　あの……、えっと……実は、とても助かりました」

「「えっ？」」

俺と工場長がハモる。助かりましたとは何だろうか？　工場長は梨音に何かしたのか？　それとも現実世界で何かあったのか？　どちらにしても分からない俺は梨音の次の言葉を待った。

「あたし、凄い人見知りで……その、幻想郷じゃ稟君以外に知らない人ばかりで怖かったんですけど……同じ同級生が来てくれて、その、凄く嬉しいです！　だから、その……」

梨音の言葉を聞いて納得した。梨音は始めて幻想郷に来た時是一人だった。地霊殿では仲良くしていたが、心の中じゃずっと一人ぼっちだった。だから同じ世界で同じクラス——梨音が知っている唯一の知人達に会えた事がなにより安心できて嬉しいのだ。

と考えていると、工場長は梨音の肩に軽く手を乗せる。

「そうか。君の言う事から察するにずいぶん怖かったのだな。だから君は同じクラスの俺と仲良くして安心したい。そうかな？」

「えっ？」

まるで梨音が伝えたかった事を読んだかのように発言し、梨音は目を丸くして驚いていた。

「あ、は、はい。そうなんですけど……別に利用したりとかじゃなくて……その…」

「つまり友達になって欲しい、そうだろう？」

再び先を見通されて言われた。でも梨音にとっては逆に安心できたかもしれない。上手く言葉で伝えられないから不安であったのだろう。

「あ、はい……だから、その……と、友達に」

「もう俺の中じゃ既に友達だぜ？俺もこんな可愛い子と友達になれるなら大歓迎さ」

梨音が言い終わる前に返答した工場長。梨音は聞いた途端に顔が綻び、

「あ、ありがとうございます！」

満面の笑みで返した。

さて、こちらはこちらで盛り上がってる間に向こうでは酒の飲み

比べが始まったりと依然ドンチャン騒ぎ。そろそろ交流すべきか、と考えていた。

「あの、肇さんはどうして幻想郷に来たんですか？」

「んー、気づいたらいた？ そんな感じ」

梨音と工場長はそのまま話し込んでいた。

「んー、でもあえて言うならば……」

と、工場長が少し思案してから言ったのはとんでもないものだった。

「稟に会いたいという愛だな」

「は？」

思わず工場長に振り向いた。というか何を言い出すんだこいつ！
なんでそこで愛が出てくる！？

「え、ええーっ！！？ あ、愛！？ そ、そんな男の人同士なんかで」

おもいつきり赤面しながら言う梨音。今何を思ったのだろうか？

「……まあ愛と言ってもいろんな形があるのだから……。梨音はストリートに考えたのか……。悪くないな」

「えっ！？ あ、いや違いま……じゃなくて何にも考えてないよ！
本当に何にも、って悪くないってどういう事なの！？」

自分の発言がまずい事に気づいてあわてふためく。さすがにこれ
以上は危険だと思い横槍を入れる。

「工場長！ 梨音をからかうな！ 変な思想が出たらどうする！」

「ハハハハッ、いやつい面白くて」

「笑い事じゃねえ！！」

なんでこいつが幻想入りしたのか本当に分からない。一体いつか
らその方面に行ってしまったのか。俺の周りの常識がことごとく覆
されていく……。

――

博麗神社は現在無人である。博麗神社の管理人の博麗霊夢は外来
人の桜之宮稟と共に紅魔館のパーティーに行ってるからだ。

諸事情で住んでいた東風谷早苗も一旦守矢神社に帰った後紅魔館
へ向かった。

いずれにしても女性にとっては都合が良かった。

博麗神社は月明かりに照らされ、明るすぎず暗すぎず、女性にと
っては最低行動できる明るさであった。

女性は稟の部屋に立て掛けてある鏡から音も無く現れた。

ここに現れた理由は、ある物を探す為。それはすぐ見つかった。

卓袱台の置かれてる部屋。その卓袱台にひっそりと置いてある黒い四角形の物体。

常盤楓に繋がる通信機である。

女性は卓袱台の通信機をすっと取ると、直ぐさま電源を入れた。電源は正常で、赤いランプが点く。それと同時に楓の声が聞こえた。

『はい、稟君どうしたの？』

女性は聞こえた声を確認すると周りを見て再度誰もいない事を確認した。

『……？ あの、稟君？ それとも霊夢？ 黙ってたら分からないんだけど……』

返答が来ない事を不思議がり、通信機を使うであろう二人の名前を呼んだ。

女性は通信機をゆっくりと口元に近づけてから呼んだ。

「楓、私だ」

『ッ！！？』

通信機から漏れでたような驚愕の反応は楓が話をしている相手が誰か分かったから。

『せ、先輩……？　なんで……？』

楓にとっては予想外であった。幻想郷に出発する以前の概要説明ではたった一人と言われていた。だが現に通信機越しに「先輩」がいる。いや、PMCという組織の関係からすれば「上官」が正しい。

「博麗霊夢を鏡の中に隔離して全てを聞いた」

『え？　霊夢を……』

楓にとって今最も知られたくない情報を持っていると分かるとその声に力が籠らなくなった。

「幻想郷に送って早々、意識不明の重態だなんて」

『っ……』

楓には反論の余地など何一つない。霊夢から聞いたとなればそれは全て真実。言い逃れるなど以っての外だ。

「楓は最も信頼できるから幻想郷においての任務を伝えたのだが、感情に囚われて地雷を踏むなんて、あなたらしくない」

『うう……』

「現時点でRRF幹部二人と親衛隊二人を確認しておきながらサポートにしか回れない。どう思うの？」

『……………』

何も言えない。冷酷に言い放つ女性の言葉が楓に突き刺さる。

『ごめんなさい……………』

一言謝った。決して許して貰うために言った訳じゃない。これしか言えなかった。

「謝ったところで状況は変わらない。いちいち謝るとキリがない」

ようやく言った謝罪の言葉もただ受け流すだけで聞き入れなかった。ただ楓の犯した過失だけを情けすら出さず冷酷に言う。

『……………でも！』

「言い訳は聞かない。動けない身体で何ができる？ 意識だけ目覚めない身体で」

『……………』

今の楓に味方は誰もいない。一対一の上下関係。楓はただ聞くしか出来ない。自分の意見は全く聞いてくれない。

女性は縁側に移動して腰を下ろす。その姿は月明かりで浮かび上がる。

「……………まあいい。これ以上言ったところでこの通信機で話している楓は意識は戻らないからな」

『え……それって……どういう事……ですか……?』

楓が聞いた中で、この通信機で話している、が引っ掛かった。

「……なら言おうか。楓はもう動けるはずだが、脳の命令が身体に伝わってないだけだ」

『……へっ……?』

楓は理解出来なかった。脳の命令が身体に伝わらないとはどういう事なのか。

「人間の脳は微弱な電気信号で伝わる。だからあなたの脳に電波発信機を埋め込んでいる。その受信機をこの通信機に内蔵させてる」

『え? いつの間に!?』

「つまり、意識だけが通信機にあるという表現は正しい。だが装置が外れれば電気信号は正常に伝わり、身体の意識も復活する」

『いや、だからいっぺんに説明されたら…』

一旦説明を止めるよう要求するも女性は無視して語り続けた。

「地雷を踏んだとならその衝撃で装置が作動したのかもしれない。ならもう一度強い衝撃を与える必要がある。確か銃弾でも大丈夫だったはず。身体に危険が迫った時用に解除は軽い衝撃で済むはずだからどの部位に当てても解除されるから――」

『す、少しは人の話を聞いて下さいよっ!』

ビリビリッと通信機から金切り声が響くとようやく話を止めた。

しばらく沈黙が続いたが、数秒後に女性は話し掛けた。

「……なら二つ聞きたい事がある」

『……何ですか？』

さっきおもしろいっきり大声で抵抗したが、女性が再び冷たく言い放つと、つい緊張してしまった。

「外来人の桜之宮稟だったかな？ そいつとは信頼に足る相手か？」

ここで楓は疑問に思った。霊夢から聞いたとなればどんな人物なのか聞いているはずである。しかも自分の協力で二人をくつつけさせたから稟を良く知るのは霊夢のはずだ。なのに何故聞いてきたのか。

だが楓も頭が悪い訳ではない。冷静に考えればすぐ答えが分かった。

他人がどうこうではなく、自分自身が感じた点ではどうか。ならば返事は簡単だ。

「はい」

はつきり肯定する。彼の意志は聞いたし、それは確固たる覚悟でもある。だからそう答えた。

女性は軽く頷くと次の質問を言った。

「では次、私の時計は使っているか？」

『……いいえ、一度も』

時計とはこの女性がお守りとして楓に貸してくれた懐中時計。しかし、戦場で一度も壊れなかったからとは言っていたが、何故お守りとして貸したのか楓には分からなかった。

「でしょうね。戸棚の上に置いてあったの見つけて今私の手にある」

女性が言った通り、通信機を持つ手の反対の手には既に月明かりを反射する銀の懐中時計があった。

「なら伝えろ。あんたが信賴できるという桜之宮稟という奴に持たせろ。どんな事を言ってもいいから必ず、な」

そして懐中時計を卓袱台の上にそっと置いた。

『あの、お守りは分かるんですけど、なんでそれなんですか？ 私に一言も説明してないじゃないですか』

楓がずっと思っていた疑問を吐き出した。失礼は承知だが、今しか聞けないから意を決して言った。

「持たせろ。必ず」

『それ理由になっ t』

女性は楓が言い切る前に電源を切った。後は自分の部下とその部下を信賴できる者達を信じる事にした。

「これは最後なんだ。幻想郷を巻き込んだ事は申し訳なく思ってる。この戦いを終わらせて幻想郷と私達の世界との関係を絶つ事が任務だから……」

無人の博麗神社に女性の声が響く。声を聞いた者は人間も妖怪もない。

女性の姿は卓袱台のある部屋から消えていた。残ったのは卓袱台に置かれてある通信機と月を映している銀の懷中時計だけ。

第31話 上海紅茶館 紅魔館のパーティー（後書き）

特別らしい

楓「第16回幻想郷ラジオ！ 今回は特別編です」

稟「ハガキ無かったんだな」

楓「言わないで下さいよ。私結構傷付いてるんですから」

稟「へーへー、悪うございました」

楓「うわ、誠意が籠ってない上に凄いムカつく」

稟「おっと銃で脅すのは良くない」

楓「もういいです！ 私とゲストだけで特別編を進めます！」

稟「別に構わないがまず何をするのか言わないと」

楓「今から言おうとしてただけど……えっと、特別編ではオリキヤラ達の背景の出来事を紹介しようという事です。この小説は稟君のいた現実世界や私の世界の背景事情が混ざり合ってますからね」

稟「なるほど」

楓「というわけで今回は2036年の現実世界の背景事情です。ゲストは同じ世界から来た梨音・F・東郷さんと川内肇さんです」

梨音「よ、よよ、宜しく願いしましゅ」

肇「訳も分からず連れて来られたが、そういう事なら協力しますか。美女の頼みとなら尚更だ！」

稟「梨音、緊張し過ぎで噛んでる。あと工場長少し自重しろ」

楓「まあ、第4回の時にちょっと説明しただけだから不十分かなって」

肇「では征くぞ！ 耳の穴がっぽじって目ん玉の中に焼き付けるがいい！」

稟「だから自重しろよ」

事の発端は2030年ドイツ革命。国家社会主義の復活。度重なる不況に財政不安がのしかかるヨーロッパ。諸国が力を失い低迷していた時、推進強硬派がドイツを台頭し、侵略戦争を域内で発生。

自国の経済問題の最中、突然の奇襲に対応が遅れ、瞬く間に東ヨーロッパはドイツの掌中に。

直ぐさまEU内で緊急会議をヨーロッパの首相、大統領を集めて執り行い対策を立てるもドイツは止まらなかった。

2032年、EUを統合、さらに中東、アフリカ北部へ戦線を伸ばす。

アメリカは早急に連合軍を形成、ヨーロッパ各地へ送る。しかし、圧倒的物量に加え非人道兵器（核以外の兵器。クラスター弾や濃ウラン弾など）の使用で両軍共に甚大な被害が出る。

2034年、アフリカ北部、中東一部（イスラエル、イラン、サウジアラビアなど）を統合。アジア・アフリカ・ヨーロッパ連合（AAEU）発足。反米のベネズエラも加盟し、アメリカの爆弾と称された。ロシアのモスクワ統合。シベリアにある都市を臨時首都としてロシアを続行。

アメリカ、ベネズエラを降伏させて南北国家を統一。アメリカ大陸合衆国建国。（ただし形だけであり南アメリカには独立国として存続してる国は多数。ブラジル、チリ、アルゼンチンなど）

ロシア、日本に協力を要請。義勇軍として自衛隊派遣が始まる。

2035年、AAEUとアメリカ大陸合衆国がアフリカ南部で正規軍同士が激突。核兵器による往来によりアフリカ南部諸国完全崩壊。この戦争以来両国共に核兵器の使用を躊躇う。

2036年、小康状態へと推移したが依然睨み合いが続く。ヒマラヤ山脈付近で中国が台頭。核兵器を使用し、雪は蒸発した。その後日本・ロシア連合軍とAAEUと中国が衝突。日本・ロシア軍により首都陥落したのを好機に戦力増強したAAEUはそのまま領土四分の一を占拠（主にチベット山脈辺り）。以来中国もAAEUを

敵視。以降膠着状態が続く。

稟「確かこんな感じだったな」

肇「簡単に纏めたらドイツの独りよがりや世界戦争に繋がった訳だ。多分自国内の反乱を恐れた推進強硬派が他国を攻撃して祖国万歳としたんだな」

梨音「これってフォークランド諸島紛争と同じ発端ですね。確か経済政策に失敗したアルゼンチンがフォークランド諸島を攻撃してイギリスと紛争を起こしたって聞きましたけど」

稟「結局戦争ってのは起こすのは簡単だ。でもこんな事態になるなんてドイツも考えて無かっただろうな」

梨音「あ、そういえばお父様から聞いたんだけど、ヨーロッパでA E Uの思想に反発してクロアチアやユーゴスラビアが反転したって」

肇「俺も知ってる。確かそれに目をつけたアメリカ大陸合衆国が援軍を送って全力で保護に入ったらしいな。日本の自衛隊も混じってたはずだ。アメリカからすればA A E Uに直接差し込めるカードができたんだからそりゃ当然だな」

稟「えっ？ それ初耳ですけど…」

肇「二ヶ月もいなくなりやそうなるだろ」

梨音「それと、ロシアの首都モスクワの奪回に成功したって言ってましたし、東南アジアとオセアニアの連合軍が中東を解放したとも聞きました」

稟「なんか劇的に終結に向かってない？」

肇「だがいい事だけじゃない」

梨音「はい、A A E Uの反撃かは不明ですけど、アメリカのニューヨークのど真ん中に核兵器が使用されて何千万人の命が消えました」

稟「また核を……悲劇は繰り返されるってか……」

肇「俺達は幻想郷という隔離された世界で生きている。でもやっぱ自分らの故郷だからな、あんな戦争は終結してほしい」

梨音「あたしもです。関係無い人達が理由もなく巻き込まれるなんて……本当に……グスッ……」

稟「そうだ。だが俺達が例え現実世界にいても変わらないだろう。俺は幻想郷に来て始めて平和の意義を知った。だからこそ祈ろう。故郷の世界に平和が戻るように、な」

楓「えー、なんか長くなっただけど分かったでしょうか？ 矛盾点とかもあるかもしれませんが、もし分からなかったら質問して下さい。ではまた次回。ご視聴ありがとうございました！」

第32話 工場長は置き去りでOK?

宴会状態の紅魔館パーティー。とりあえずずっと佇むだけじゃどうしようも無いので順番にぐるぐる回ることにした。

工場長は鬼に連れられて飲み比べに参加した。まずはその経緯を話そう。

五分钟前

突然霧のようなもやが集まり、形となって現れたのは鬼の伊吹萃香だ。

「いよおっ！ 始めてましてだな」

「な、何だこの幼」

瞬間的に萃香のパンチが工場長の顔面に命中してぶっ飛んだ。こんな小さくとも力は本物です。

「おっと、やり過ぎたかな？」

壁に減り込む工場長を見ればそう思うかもしれないが、多分大丈夫だ。

「ま、いいや。それよりあんたが霊夢と同棲してる桜之宮稟だな？」

「え？ 同…棲……？」

「ま、待って！ 同棲は誤解だ！ 居候だよ俺は！」

何処でその言葉覚えた！？ せめて梨音のいないところで言っ
て貰いたい。って自分で肯定してるし！

「ハハハハッ、成る程靈夢の言う通りからかいがある。私は鬼
の伊吹萃香だ。ングッ…」

俺の慌てようを大笑いしながら瓢箪の酒をグイッと飲む。
ちなみに萃香は角を除けば梨音と同等の身長である。梨音は鬼と
聞いて怖くなったのか俺の後ろに隠れて様子を見ている。

瓢箪から口を離すと再度こちらに振り向き直る。

「それよりちゃんと参加しないと、楽しむのが宴会だろ？ 飲み比
べしないか？」

「いや、分かってはいるんですが……」

ここにきた以上はパーティー（という名の宴会）に参加しないと
いけないが、飲み比べはどうか……。幻想郷は未成年でも酒は飲め
るが、やはり抵抗がある。梨音はどうだろうか？

「その鬼さん！ 飲み比べなら俺が参加してやるぜ！」

壁に減り込んでいた工場長が戻って来たと同時に宣言した。あれ
だけ派手に突っ込みながら顔から鼻血しか出てないってどういう事
なのか？

「おおっ、やる気満々だねえ、気に入ったよ！ こっちでしようじゃないか」

萃香は他の皆が飲み比べしてる所を指差す。

「上等！ 俺の飲みっぷりに平伏すがいい！」

「鬼の私に勝つ気かい？ 威勢がいいな！ そうこなくちゃ張り合
いがないからな！」

という訳で萃香は工場長を連れて飲み比べに参加した。

ちなみに工場長は現実世界のバイト先で酒を飲んだ事があるらしい。勿論未成年だが。ところがその飲みっぷりは異常でバイト先の飲ん兵衛達を負かしたという伝説を持つ。しかも健康診断では正常値をたたき出し警察を欺いたとか。

後半は嘘だろうがこいつの親が居酒屋だから前半はもしかしたら
と思ってしまう。しかもその居酒屋は別名情報屋とも言われている。
得意先に政府関係者がいるとか。まあ、関係無いのでここで打ち切
るが。

とりあえず適当に回ることにして、まずは二人に出会った。

「あら、稟じゃない。久しぶりい。あなたも参加してたんだ」

「お久しぶりです、幽々子さん」

白玉楼の主人の幽々子と従者の妖夢……がいない？

「今ちようど妖夢に料理運んで来てほしいって言ったの」

どうりでいない訳だ。それより幽々子の周りの皿の量はなんですか！？ 大皿は裕に二十枚を越えてるし、今も小皿の海老を殻ごとバリバリ食べてる。

「あら、その子あなたの子？」

梨音を見つけるとピタッと食事を止めて梨音を見つめた。

「いや違いますよ！ 同じ外来人です」

幽々子の言った事を即座に否定。というかなんで俺はこんなに誤解されやすいんだ？

と、幽々子がいつの間にか梨音の横に現れた。梨音は驚いて隠れようとした所をがちり捕まえられた。

「ヒィ！？」

「あらら、怖がらなくていいのよ」

幽々子はしゃがんで梨音と視線を合わせて、梨音の顔に向かってニコツと微笑んだ。その眼差しはまるで母親のように優しい眼差しだった。

「え……本当？」

梨音が恐る恐る聞き返すと幽々子は返事の代わりに梨音を抱き上げて頭を撫でた。

「え、ふえ！？ ……ふにゅ…」

頭を撫でられて落ち着いたのか幽々子に身体を預けた。まさに抱っこされた子供のようだった。

「うふふ、可愛いじゃない。稟、この子なんて名前？」

幽々子は一旦降ろして子供を宥めるように頭を撫で続けた。梨音も気持ちよさそうに受けている。

「梨音ですよ。梨音・F・東郷が彼の名前です」

「へえ、梨音ねえ。彼は梨音って名前……えっ？ 彼？」

ピタッと撫でている手を止めて俺と梨音を何度も見比べた。

「あつ、止めちゃ……いえ、何でもありません……」

今一瞬だけ惜しむかのような表情をしたのを見逃さなかった。しかし幽々子もそれなりの人物である。決して取り乱さず冷静に考えた。

が、幽々子はもう一度抱き上げて再び頭を撫でた。

「そうゆう事ね。でも可愛いし、さっきのキュンと来たわ。いくらでも撫でてあげる」

「ひゃあ!？ あ、あの、ちょっと激し…」

わしゃわしゃと髪がボサボサになりそうな程頭を撫でる幽々子。
上目つかいでやられたか？

「幽々子様、持って来ました……って稟さんに梨音君!？」

両手に大量の料理を載せた皿を持ってきた妖夢が気づいて、驚いて危うく料理を落としそうになった。

「あ、危ない……」と呟いてそっと側のテーブルに置いてから改めてこちらに振り向いた。

「さつき霊夢さんに会いましたが、まさか本当に来てたなんて…」

「おい、まるで居てほしくなかったように聞こえるが？」

「い、いいえ！ そんなつもりで言った訳じゃ！ その、すいません！」

妖夢は自分の言葉に非があると思うとすぐ謝る。よくからかわれるから俺が人をからかっても大丈夫だよな？ すぐに「冗談だ」と言って安心させる。妖夢も苦労人だ。あまりからかつては可哀相だからこのくらいにしよう。ってここなんか文がおかしくない？

「で、稟さん、あの後の進展は？」

挨拶してきた時の朗らかな表情から一変、真面目な表情に変わった。妖夢も外人テロリストを捕まえる為の仲間ではあるが、あまり白玉楼を離れてない為、どうなったのか聞きたかったようだ。

「そうだな。ここ最近は落ち着いてるらしく、騒ぎは起こってないがまだ見つけてもない」

小声でそう言うのと妖夢は頷き、真面目な表情を崩した。

「そうですか。それより何か食べませんか？」

と妖夢はいつ取ったのか小皿を手に持って、皿には小さい里芋の蒸した物があつた。腹も減っていてちょうど良かったと思い、何もかけてないから手で掴もうとした瞬間だった。

「「っ!!?」」

一言で言うなら、消えた。一瞬で。傍には梨音を抱えたまま口を動かしてる幽々子。

妖夢は呆れたようにため息をついた。

「すみません」

「いや、もういいさ」

妖夢が持っていた小皿をそっと取って積み上げられてある空の皿に重ねた。幽々子がいたら諦める。一種の方程式が出来た。残念ながら俺にはこの方程式を覆す力も能力もない。

それから幽々子に振り向き、

「あの、もう回りますから梨音を離してやってくれませんか？」

「だーめ♪」

笑顔で却下された。梨音はもはや小動物のように幽々子に身を預けていた。まあ幽々子なら安心するが、これを見てアリスは大丈夫だろうか？

「安全を考慮して言いますが、梨音はアリスの所に居候してますから離してやった方が」

だが逆効果であると言ってる途中で気がついたが後の祭り。

幽々子は梨音を降ろすと、

「じゃあちよつとね」

そのままアリスのもとに向かっていった。アリス、健闘を祈る！
原因は俺だからせめてアリスの勝利を祈ってやろう。

次に会ったのは永遠亭の永琳だった。鈴仙もいたのだが既に酔い潰れていた。

「永琳さん、どうも」

軽く挨拶すると永琳は声に気づいて振り向く。今手にあった物を素早くポケットに入れませんでしたか？

「あら、あなたは外来人の……。その子は？」

永琳は即座に背後に隠れて見ている梨音を指摘する。

「彼は同じ外来人の梨音です」

フルネームを言うのが億劫な気がしたので呼び名で言った。梨音も呼び名で呼んでもらってるからきつと大丈夫だろう。

「彼……つまり男の娘って表現が正しいかしら？」

「それでいいです。後俺の後ろにいるのは単に人見知りが激しいだけですから」

補足のように付け足して梨音を説明する。梨音も一応前に出て緊張のせいかしどろもどろながらも挨拶をした。

「そういえば聞きたい事があったわ」

挨拶も済んだので俺は常盤さんの容態を聞こうとしたが、その前に永琳から質問を受けた。

「あ、はい、どうぞ」

「あなたは何故そこまで他人に対して真剣になれるのかしら？」

この場においては全く相応しくない質問と言っても過言じゃない。質問が質問だけに一瞬戸惑ってしまい黙った。もしかしてスチュアート経由で送った手紙で何かを思ったのか？ その予想通り永琳は言葉を紡いだ。

「手紙、読まして貰ったけど、もともと常盤楓とあなたは違う世界から来た外人。なのに彼女にまで慈しむ態度——まるで命も惜しまないような覚悟——何故かしら？」

確かに永琳からすれば矛盾点であり疑問である。俺は人に尽くすなんて大それた事が平凡な学生に出来るのかを聞いていると考えた。

だがなんて答えればいいだろうか？ 嘘を言うにも難しいし、嘘が逆に真実として受けいられる可能性もあるし、その逆も然り。尤も嘘は永琳の場合では通用しないとは思うが。

永琳は真剣な眼差しで見ている。今この機会以外に聞けるチャンスがない故に正確な答えが返ってくるのを待ってるようにも見える。

しばらく——とはいえほんの十数秒だけ考えた。頭は平凡な学生のちよいとと自負するが永琳の頭脳に敵わないのは承知だ。

「……大切な人を亡くしました。俺の両親です」

嘘を言わず正直に言った。だがそれは出来事だけ。

「……」

「ほんの些細な出来事です。でも自分の想像を超えて重く心を蝕みました。幻想郷に来た時はもうその重圧から解放されると勘違いしていました。ですが、ここでも自分の親しい人が傷付きました。だからこそもう傷付く人を見るのはいやだと思ってそのように行動していると思います」

「……」

「すみません、永琳さん。俺はあまり自覚とかしてなかったから上手く説明出来ないんですけど、ただ、もう誰も失いたくないという思いは本物です」

「……分かったわ。こちらこそごめんなさいね。こんな場で空気を読まずに重い質問をして」

そう言うのと永琳は踵を返して鈴仙を抱えた。

「でも助かったわ。あなたの心情を聞けて。私達はもう帰るけど、楓さんなら任せて」

一言付け加えると永琳は鈴仙を肩に担ぐと扉に向かった。やはり何を考えて俺の言葉を聞いたのかは分からない。これで良かったのか？

頭の中は整理仕切れないまま次に回ることにした。

次はまさかとは思ったが、間違いなく八雲藍と橙がいた。今度は向こうから気がついてくれた。

「おや、あれは…桜之宮稟じゃないか」

「あつ、藍さんも来てたんですか」

「ああ、魔理沙が無理矢理結界乗り越えて伝えに来てくれたからな」

俺はハハッ…と苦笑しながら聞いた。魔理沙はいつ八雲家の場所を知ったのだろうか？ 前に常盤さんと霊夢と三人でしか行ったはずだし…。でも現にいるのだから深く考えなかった。

「ほら、橙も挨拶をしろ。あと稟の後ろにいる君も」

藍の隣で食事していた橙は口に入れた物を飲み込んでこちらに振り向いた。梨音も藍に気づかれた事でおどししながら前に出た。

「初めまして。私は藍様の式の橙です」

「初めまして。俺は桜之宮稟。稟と呼んでくれ」

「は、初めまして。り、梨音です」

お互い自己紹介をすると藍が橙と梨音を見比べた。

「ふむ。梨音と言ったな。君は確か男で合っているかな？」

「ええ！？ は、始めてだ…紹介無しに一発で当てられたの」

「ええ！？ 梨音は男の子なの！？ とっても可愛いからてっきり女の子かと」

梨音も橙も藍が言った事に驚いた。内容は違うが。俺はという后感心してた。

「よく分かりましたね」

「当然だ。私は紫様の式であるし、紫様不在から結界管理の代理をずつとしてきたのだから外来人の来訪時の情報は伝わる」

「あ、じゃああの四人も……」

俺の言った四人は外来人テロリスト。結界管理をしてるならば藍も知ってるはずだ。

「四人……？　ちょっと待て。確か君が家に来た後は一人来て後に三人入ってきてその後は一人が二回だから六人じゃないか？」

そう言われて気づいた。あくまで人数が分かるぐらいでどんな奴かという詳細は知らないのか。梨音を始めて見たような印象であったし。それにテロリストは確かに四人だが梨音と工場長も含めれば外来人は六人。盲点だった。

「君が聞きたいのは幻想郷に現れたテロリスト達の事かい？」

「え？」

頭を整理してる途中だったがすっかり聞こえた。だから聞き返した。今さっき考察したのになんで知ってるのか？　そんな疑問がよぎっていたのを読んだのか、

「魔理沙だよ。家に来たついでに今の幻想郷を聞いたんだ」

と説明してくれた。俺は相槌を打って納得した。

「だが私もよく分からないし、場所も分からないから協力は出来ない。すまない」

と、俺が聞き出そうとしている事を見据えて自分から協力出来ない事を伝えた。仕方ないだろう。今の藍は紫の代わりで忙しいし、自分の主人の封印場所を時間の合間を縫って探すわけなのだから。

「いえ、ご親切にどうも」

「まあ、君には霊夢達や頼もしい仲間がいるのだから、きっと解決出来るさ。応援しておくから頑張れよ」

藍から檄を貰い、その場を後にして次に回った。俺達が行った後に梨音を思い出して「梨音と橙……悪くないな……」と何かを想像していたとか。

ここからは簡略にしていくが、まず地霊殿の古明地姉妹と再開し、梨音が連れ去られる。

こいしは梨音と仲良くしていたが、さとりは……ちょっと表情が危険だった気がした。顔が紅潮していて息が荒そうで……。去り際に「NCMフォーエバー！」とか言ってた。酔いが回りすぎじゃないのか？ また梨音が怖がったし。いやはや酒の勢いは恐ろしい。

次に命蓮寺の人々に会った。馴染みがありませんでしたのでこちらとは幾分楽に会話をした程度であった。最後辺りに聖白蓮から「命蓮寺で仏門に入門しませんか？」と誘われたが丁寧にお断りした。心の平穏を求めるならば最適ではあるが、そんな余裕は自分にはな

いですから。

ちなみに工場長は霊夢、魔理沙、萃香と飲み比べしていて四人とも止まらぬ速さで酒を飲み干し、壮絶なデッドヒートを繰り広げていた。お前マジに急性アル中にならないかと心配した。

勿論回る途中で出されてある料理に手をつけながら。

最後は早苗達がいる守矢神社組だ。

「あ、稟！　こっちですよ」

と歩き回る俺達を見つけた早苗が手を振って誘導してくれた。梨音は俺が命蓮寺組と霊夢達を見ていた間は地霊殿組といたのだが、ちようどさとりが酔い潰れたので戻って来た。こいしといっても良かったのだが。

「やあ早苗。それと神奈子様に諏訪子様、お久しぶりです」

山の神の二柱を確認すると直ぐさま挨拶した。

「ああ、久しぶりだ」

「元気してた？」

神奈子は相変わらず威厳溢れるような出で立ちだが諏訪子はひよいと近づいて親友みたいに軽く交わした。

「こちらにも進展ありませんが普通に元気です」

「そうか。進展もないなら仕方ない」

どうやら妖夢同様今の現状を知りたかったようだが、そういえば何故同様に過ごしていた早苗から聞かなかったのだろうか？ 後から聞いたが、やっぱり文の事を思い出してつい遠慮がちになってしまったと。最近はあるだけ明るくなってくれたのだが、やっぱり心の隅にトラウマが残ってるようだ。

「この子が早苗の言ってた男の子？」

諏訪子がまじまじと後ろに隠れる梨音を見つめて尋ねる。

「はい！ どうです、すごい可愛いですよね！」

三人から視線を浴びて顔を赤くしながらも怖ず怖ずと前に出て挨拶した。

「あ、あの、初めまして、梨音です。その、人見知りだからこうしてるだけです、宜しくお願いします…」

「きゃーっ！」

早苗が梨音の可愛さに当てられたのかいきなり抱き上げた。

「ふえ！？ あ、あのちょっと」

「ほらほら神奈子様！ 可愛いですよね！」

「あ、ああそうだな」

少し勢いに押された感じで言う神奈子。早苗は何故ここまで梨音にアグレッシブなのだろう。気をまぎわらすは違うし。

「ちょっとちょっと私にも」

「待って下さい諏訪子様、今降ろしますから」

早苗は梨音を降ろすと今度は姫海棠はたて宜しく携帯らしき物で連写した。

「あ、あんまり撮らないで下さい。恥ずかしいですう…」

写真を撮られてる事でさらに顔を赤くして恥ずかしがる。早苗、キャラ変わってくない？

「あ、まだ名前言ってなかったね。私は洩矢諏訪子だよ。こっちは八坂神奈子。私達はこれでもれっきとした神様だからね」

「へえー、そうなんですか」

神様と聞いて驚いたように見えながらも感嘆したように言った。

紹介が終わるや否や早苗は梨音をまた抱き上げて頭を撫でた。

「あっ……………」

あっという間に小動物。もうこれは梨音の特技と認定していいだろうか？

「あ、早苗さんのはなんかお姉ちゃんと同じ感じがしますう」

「え？ 梨音君はお姉ちゃんがいるの？」

「はい。いつもこんな感じで頭を優しく撫でて……懐かしいなあ……」

そういえば梨音の家族について何も聞いてない。姉がいるとは初耳だ。というか俺はあの一直線な父親の方が印象濃かったからな。となればいきなり消えた梨音を当然心配してるのだろう。あの親バカからして知人を総動員して探してる姿が想像に難くないな。

「桜之宮稟、一つ言い忘れてた」

と考えにふけこんでいると神奈子に呼ばれた。一瞬ビクツとしたが呼ばれたと分かるとすぐ振り向き直した。

「何でしょうか？」

「天狗の件だが、もうすぐ復帰出来ると早苗から聞いたはずだ。復帰後に家に来てほしいと言伝があった」

文がか？ 多分療養中に起きた出来事を聞き出す為かもしれないが、こちらも好都合だ。文には一回謝らないといけなかったからな。

「分かりました。わざわざありがとうございました」

俺は快諾した。神奈子も頷くとお椀に注いだ酒をグイッと呑んだ。

その後だが再び簡略するが、まず早苗に無理矢理連れられて飲み比べの場に。

デッドヒートを繰り広げていた四人はというと、既に霊夢と魔理沙はギブアップし、萃香と工場長の一騎打ちとなった。両者ともに空瓶の山が背後に形成されていた。

早く諦めて欲しいと心から願った。もう人としてアウトな量を越えてるのだから。

俺は開始早々離脱した。濃度の低い酒にも関わらず五杯目から気分が悪くなり、六杯目で気持ち悪くなった。

どうやらアルコール類は体質に合わないと始めて知った。

そんなわけで一人会場を出て偶然空いていたテラスに突っ立って夜風を浴びて酔いを覚ましていた。

「うっぷ……。うう、やっぱ無理……」

テラスに出て幾分時間は流れたが気持ち悪さはなかなか収まらなかった。

「おやおや、一人会場を離れてここで何をしてるのかしら？」

もう少し時間が経つてようやく気分が落ち着いて来た頃に背後から聞こえた。

振り返れば紅魔館の主のレミリアとメイド長の咲夜さんがいた。レミリアは下がるように命令し、咲夜さんは一歩後ろに下がって待

機した。

「すいません。ちょっと酔い覚ましに夜風に当たってまして……」

ここに来た経緯を話すと「あっ、そう」の一言で片付けられた。

「それより、吸血鬼の館で皆のいる場所から離れたら、あなた殺されるかもしれないのに不用心ね」

ガツと右腕をいきなり掴んで脅しのように言い放つ。

「その吸血鬼が主催のパーティーで会場に何故主催者が現れないのかという謎と比べれば分かり切っていることです」

レミリアの食い込む爪に耐えながら自然と冷静に言い返した。

「ふうん。言うじゃないの。ただの人間が」

それと同時に右腕を解放した。レミリアの爪痕がくっきり右腕に現れている。

「命拾いしたわね」

と、テラスに置いてあるチェアに腰掛けると同時にテーブルに紅茶が置かれた。二つ。

「座りなさい」

吸血鬼であるという事。今は力が出せる夜。そしてその吸血鬼の住家にいる事。

誘いを拒まず素直にレミリアと反対のチェアに腰掛けた。

腰掛けたのを確認し、レミリアは一口紅茶を含んだ。カチャと音を立ててカップを置くと両肘をテーブルについて指を組む。一体何をしてくるのか全く検討がつかない。

「あなた、なかなか興味深い運命が見えるわ」

腰掛けてからの第一声は意味深な言葉だった。

「どういう事です？」

興味深い運命とは何か？　しかし全部を教えてくれる程の親切はなかった。

「近々大きく動くわ。あなたの心も。今言うのはこれだけよ」

これだけと言われてはいそうですかと納得できるはずがない。近々大きく動くとは？　そして俺の心もとは？

しかしレミリアはそう告げて紅茶を飲み干した。カップを置くとチェアから立ち、

「運命からは逃げられない」

そう言い残して去った。同時に咲夜さんがテーブルを片付け、その後を追った。俺に注いだ分のカップだけを残して。

近々大きく動くとは何だろうか。いくら考えても結局答えは出なかった。周りが暗くて湯気が見えている紅茶を手にとり、一気に飲

み干した。熱いはずの紅茶が今は熱さを感じなかった。

そしてパーティーという名の宴会は俺が会場に戻って来た頃には
ちようどお開きとなった。

第32話 工場長は置き去りでOK? (後書き)

楓「第17回幻想郷ラジオ! 特別編第二弾です!」

稟「意気込むのはいいですけど一言言わせて貰いたい」

楓「手短に」

稟「最近終わり方がいかにも伏線ですっという感が出てるんですけど」

楓「回収できればそれで良し。じゃ早速」

稟「いや簡単に纏めないで下さいよ」

楓「今回は私だけですから構ってられません」

稟「常盤さんの世界の背景事情の紹介ですよ」

楓「私しかいないから大量に資料持って来ました。これに沿って私の世界について解説します」

稟「いや待った。何処から説明する気ですか?」

楓「えっと……最初から?」

稟「時間かかるでしょう! あーもう、俺がこの小説に関係ある分だけ探しますから」

楓「あ、ありがとう……。で、では改めて」

世界は現実世界と同じ海と陸は七対三。ただし陸は一つのみである。例えるならば巨大な孤島である。ただし離島は数カ所存在する。大陸は四角形に似て、中心から対角線に国境が引かれ、東西南北四つの国のみで構成されている。

今回この小説と関連するのはその西国である。

楓が所属するPMC（民間軍事会社）は西国の所有する離島に本

社を置く。そのトップであり楓の先輩にあたる女性と西国政府の軍部司令官とは仲が良く、西国政府とは関係が深い。

国内の正規軍は疎か、各国の正規軍よりも圧倒的に軍事力が高い為、他国からも依頼が来る。

同時に平行世界への行き来を可能とする宇宙空母を所有している。平行世界での技術や能力はこの世界でも反映できる。

R R Fとは反政府反乱軍の略称である。西国政府の政策に反発して市民が蜂起、後に正規軍の一部寝返りや金持ちの投資家や兵器産業にも加わり瞬く間に巨大な組織となった。

事態を重く見た政府がP M Cに依頼し、各地で戦いが勃発。当初早期解体を予想していたが、思いの外抵抗が強く、三年経った現在もR R Fは健在。

楓「あ、結構短く終わった」

凜「全く、持ってきた資料の三パーセントですみましたよ」

楓「でも短すぎない？ 凜君達の方が長かったし」

凜「だってもともと架空の世界だし、長くしたら混乱するだろ？

常盤さんの所属するP M CとR R Fが分かれば十分でしょ」

楓「むう」

凜「頬を膨らまして抗議しても無駄ですよ」

楓「あのですね、架空の世界って言いましたけど結構細かく設定されてるんですよ。平行世界からの影響受けてコロコロ変わりますけど」

凜「駄目じゃないですか」

楓「で、でも本気を出したらオリジナル小説として一つ作品ができるくらい細かくて盛り沢山なんですよ！ やってないけど……」

稟「ほんの一部を出してるだけでも十分です」

楓「じゃ、特別に幻想郷に来たRRF四人のデータを出しましょうか？」

稟「それは楽しみにしてる読者を侮辱してるようなものです。いづれ本編で出るから止めなさい」

楓「うゝ」

稟「終わったならもう締めてもいいんじゃないですか？」

楓「……ではまた次回。ご視聴ありがとうございました」

稟「それでよし」

楓「……………なんか気に喰わない……………」

第33話 香霖堂とRRF（前書き）

前半後半が分かりやすいくらいに分かれた。

第33話 香霖堂とRRF

紅魔館でパーティーが開催されてから二週間後のある曇った日。

この期間も桜之宮稟達は外来人テロリストを搜索していたがいまだ発見事例はゼロ。ここまでして見つからないのは何故かという題名で博麗神社にて会議（参加者：稟、霊夢、早苗、梨音、アリス、etc）を開いていた頃。

「香霖さん、ありがとうございます」

「いやいいよ。君の話も面白かったよ。また面白い話があったら聞かせてくれ」

香霖堂では主人の森近霖之助がカウンター向かいの椅子に座ったままキョウジを見送った。

霖之助は彼をお得意さんのように認識している。

ちゃんとお金は払ってくれる上に外来人として話もなかなか興味深い話ばかりである。あまり客の来ない店であるが故に暇も潰せて一石二鳥。

いつも利用してくる巫女と魔法使いより愛想よく、メイドよりも頻繁に買い物に来る。霖之助にとってこれほどいい客はいなかった。

「全く、魔理沙もちゃんとしてくれれば僕としても助かるのだけど……」

独り言をポツリと呟いて文々。新聞に目を通し始める。ほんの一ヶ月前からぱたりと来なくなった新聞だったが昨日からまたいつも通り来るようになった。

勿論何故そうなったのかは霖之助は知らない。身体が少し弱いので外にあまり行かないから、あまり情報を持ってないのだ。

だから新聞の見だしの記事に霖之助は驚いた。

外来人テロリスト遂に姿を現す！

×日申の刻頃、人里から離れた魔法の森の端付近にて遂に外来人テロリストの姿を捉える事に成功。テロリストは四人だけであり、全員能力持ちと考えられる。人里での暴力事件とも関連している可能性があり、極めて危険です。もし見かけたら、私射命丸文か博麗霊夢に御一報を！

文々。新聞に掲載されている四人の写真。その一枚はまごうことなくお得意さんのキョウジであった。

「彼がテロリスト！？ まさか……」

俄かに信じられない内容だが、現場写真も掲載されて注意書きまでされていると現実味を帯びている。

博麗霊夢にもとあるという事は霊夢も動いてる。つまりは異変な

のだ。霖之助は始めて異変を知り、彼が異変の元凶であると知った。

「……………」

新聞を見つめたまま霖之助は考えた。霊夢も動いてるし、新聞も危険と書いてある。しかし実際は穏やかで優しいし、香霖堂の立派な客の一人である。はたしてどちらを優先すべきか。

カラン、カラン。

「ああ、いらっしやっ……なんだ、魔理沙か」

来客を告げるドアの鐘が鳴り響くと新聞を畳んでドアに振り向く。しかし、そこにいたのは客ではなくいつもの魔法使いだった。

「よ、香霖。久しぶり」

「そういえばそうだな。ここ一ヶ月君も霊夢も来店してなかった」

霖之助はズレた眼鏡を直して魔理沙を見た。いつもと変わらない白黒の魔女の服装。一ヶ月空いても魔理沙はやっぱり魔理沙である。

「ん？　なんだ？　私の顔に何か付いてるか？」

霖之助の視線に気づいてカウンターに寄る魔理沙。勿論長年の付き合いである魔理沙相手に騒がず冷静にゆっくりと言う。

「いや、変わらないな……そう思っただけさ」

「そりゃそうだ。私はいつまでも私だからな」

霖之助の言葉に気にする事なく彼女らしい返答をする。ふと、魔理沙の視界にカウンターにある文々。新聞が映った。

「あ、新聞。久しぶりに見たな。って事は文は復帰したんだな」

魔理沙は置いてある新聞を平然と手に取る。霖之助は復帰したという魔理沙の言葉が理解出来なかった。

一ヶ月ネタ探しの為に休刊していると思っていたのだが、復帰とは何故だろうか。新聞の内容を上咎められたのだろうか？

「射命丸文が復帰ってどういう事だい？ 彼女に何かあったのかい？」

ところが、魔理沙は霖之助を無視して新聞に読み耽っていた。魔理沙は新聞にあまり興味は無いし、このように無視されたのは始めてだった。

内心魔理沙に不安を覚えたが魔理沙は魔理沙。そう言い聞かせてもう一度言う。

「……君は新聞にあまり興味が無かったんじゃないかな？」

魔理沙はようやく顔を上げて新聞を閉じた。

霖之助の言葉で顔を上げたというより新聞を見終わって顔を上げたようだった。

一体彼女は何に夢中になったのか。例の外来人の記事か、それとも別の記事か、あるいは端にある小さな得情報か。魔理沙を良く知

る霖之助でも分らない。

新聞を置いてようやく口を開いた。

「あいつ、重傷にされたのにまだ懲りてないのか」

「重傷？ あいつって射命丸文の事かい？ ……ちょっと待ってくれ。一体全体どういう事か聞かしてくれないか？」

魔理沙の持つ情報に追いつけず説明を求めた霖之助。するとちよつと困った顔をした。

「うーん、とはいえ請け負いだからな…うまく説明出来るかどうか……」

「君が上手く説明出来なくても僕には情報が必要なんだ。曖昧な部分は推測するよ」

「さすが香霖だぜ」

魔法使い説明中…

「上手くどころかそのまんま説明できたじゃないか」

「請け負いだからな」

霖之助は魔理沙からここ一ヶ月の経緯を聞いた。やはり新聞記事は正しく、魔理沙も彼を追っていた。

さらに別に外来人が四人もいる事を知った。

最初に言った桜之宮稟。博麗神社に居候してると聞いて新聞で告白報道されていたのを思い出した。

二人目は常盤楓。現在永遠亭に入院との事。だが霖之助はむしろ永遠亭が患者を入院させている事に驚いた。人里の人間も時たま永遠亭には寄るが永琳の作る薬はどんな症状でも治せると聞く。手術を除けば直接患者を入院させるなど考えられない。これには少しばかり興味が湧いた。

三人目は梨音・F・東郷。名前がなんとも特殊であり、魔理沙曰く男だけど可愛いだろう。霖之助は男の娘を考えた。

四人目は工場長。どう考えてもあだ名だが魔理沙も名前はあまり覚えてなく桜之宮稟の知り合いしか知らないらしい。

一ヶ月で八人もの外来人が幻想郷に来たとは偶然だろうか。霖之助にもそれは分からなかった。

「新聞も君も来なかったから全然知らなかったなあ」

「駄目だなあ。たまには外に出て動かないと」

「ハハッ、君みたいにできたらそう苦労しないけどね」

魔理沙のダメ出しに苦笑しながら答える。

「まあ僕は僕で新しい常連客に商売していたからな」

つい勢い余って言ってしまった。ハッと気づいて口を噤むが遅かった。

「なぬ？　新しい常連客だと？　この香霖堂に、一体誰だ？」

魔理沙は聞き逃さなかった。魔理沙も香霖堂の商売傾向を知ってる。彼女も（代金を支払わず借りるだけと言うが）数少ない常連客だ。

香霖堂に好き好んで来る人里の者などせいぜい一人か二人である。

「い、いや、これは関係無い！」

なんとかしてはぐらかそうにも無駄なのは良く知っていたはずなのだが。

「おいおい、逆に気になるな。嘘をつかず私のように正直に話すんだな」

内心口走ったのを後悔したがやはり異変は異変としてしっかり解決されなければならない。

詰め寄る魔理沙に観念して霖之助は告白する代わりに文々。新聞を広げた。広げたのは例の外来人テロリストの記事。

「ん？　何してんだ？」

霖之助の行動に一瞬戸惑うも何か伝える気だろうと思い、霖之助に任せた。

霖之助は正直に新聞に掲載された写真の一枚を指差した。

「ああ、外人テロリストだろ？」

「ここまでしてピンと来ないのか」

「いや、来てるぜ。バッチリと」

霖之助が指差した写真は金髪の好青年な姿のキョウジ。それでもその飢えた狼のような目は新聞伝いでも分かる。

「僕はてっきり大声上げて驚くと思ったんだけどな」

「私を子供扱いかよ」

それでも魔理沙の目に決意の火が灯ったのを見て一安心する。

「言っておくが「ああ、言わなくても分かる。巻き込まんようにするよ」：ならいいさ」

やはり長年の付き合いからか霖之助の言わんとする事は魔理沙も分かっている。

「それじゃ場所を教えてくれ。霊夢達にも伝えなければな」

しかし、霖之助はキョウジからあまり情報を得てない事を思い出した。

「いや、実は僕も知らないんだ。彼らはまず人里ではなく外の世界の道具を使って野外に野宿してる」

こればかりは魔理沙も驚いた。幻想郷は妖怪が跋扈する故に安全な場所は人里以外無いはずだが……。同時に見つからない理由も分かった。だから魔理沙は霖之助に提案した。

「なあ香霖。だったらそいつにさりげなく聞いてみるよ」

「やっぱりそうなるか」

霖之助としては常連客をあまり詮索したくは無いが、魔理沙も本気であるのは分かるし、異変なら協力しなければならぬ。

「……しかしだな、彼は毎日ではないし来る時間も店に留まる時間も不規則だし、たいてい誰もいない時しか来ないからあまり期待は出来ないよ?」

霖之助の心配所はこの点。彼はまるで誰もいないのを見計らって来店してくる。店にいる時間も小一時間いればわずか五分で出る時もある。それでも魔理沙は、

「聞き出せば十分だぜ。そこは任せる」

とウインクして香霖堂を出た。

魔理沙が去り、鐘の音がしばらく鳴り響く。しばらくしてドアの鐘が鳴り止むと、

「全く、人の苦勞も知らないで……」

半分愚痴に近い独り言を漏らしながらも魔理沙との約束だからしつかり果たしてやろうと決意した。

――
魔理沙は香霖堂を出てひとつ飛びして博麗神社に向かった。

だが、魔理沙は人里に向かう一人の女性がいたことにまでは気づかなかったようだ。

「あれって魔女さんかな？」

魔法の森から人里に向かう途中ふと見上げてみたら、箒に乗って空を飛ぶいかにも魔女らしい少女を目撃した。

「やっぱりゲンソーキョーって不思議な場所」

こんなありふれた感想を言ったのはR R Fの親衛隊のリカ。キョウジの親衛隊だ。

彼女はキョウジから「あなたは人里に一人で聞き込みをしなさい」と言われて人里に向かっていた。

勿論R R Fの制服では不都合なので、制服の色に近い薄い黒のニット帽に黒を基調とし、白いラインが入ったゴスロリドレスを着ている。彼女のお気に入りの服であり、私服でもある。ニット帽には小さいながらもR R Fの刺繍が施されている。ついでに伊達眼鏡も装着済み。しかしただの伊達眼鏡ではなく、片方に色を入れて彼女のオッドアイを片方の色に統一できる優れ物。今の彼女は両方とも薄いブルーの瞳だ。

「でもー、ホルトもチカもいたのに何で私な訳ー？」

道中で今回の任務に文句を言うリカ。

実の所ホルトもチカもいたのだがよりによってリカを向かわせたのはキョウジの考えである。というのも、キョウジにぞっこんな彼女はキョウジからの任務となれば快諾するという押し付け的な意味合いもあるが、深く考えない彼女であるから都合が良かったからだ。そして天衣無縫な性格は人里であまり怪しまれないというのもあった。

そうこうしている内にリカは人里に着いた。

「人里に来たのはいいけど……何処から聞こうか？」

今回始めて人里に来たりカは、どの場所が情報を得やすいか考えた。

「んー、普通ならお店とかが手に入りやすいから……」

と、すぐ傍に和服を着た若い青年が歩いていたのを見つけ、

「あ、すいませーん。ちょっといいですか？」

と声をかけた。見慣れない服装の少女に青年は一瞬戸惑ったが、外来人と考えてすぐに返す。

「は、はい。何でしょうか！」

少し緊張して声の上擦ったがリカは気にせず続けた。

「この辺りに商業地みたいな場所ってありますか？」

「商業地ですか。それならここを真っ直ぐ行けば八百屋とかが並ぶ場所に着きます。人が沢山いますから多分分かると思います」

「そうですか。ありがとうございますーす」

青年の親切な説明に軽くお辞儀をして教えられた方向へ歩き始めたりリカ。

リカが去ってから青年は自分の頬が赤くなっていたのに後から気づいた。

「この辺かな？」

青年から教えて貰った通り、徐々に人通りが多くなり、ある一角で野菜や毛皮などを並べる店を見つけた。

リカは躊躇することなく八百屋に入った。店主はまだまだ肌の艶があるおばさんだった。

「はい、いらっしゃい！何をお求めで？」

「あ、あの、聞きたい事があるんですけど」

見た目に寄らず大きな声で少し圧倒されていたリカはポケットから一枚の写真を取り出した。

「この人を捜してるんですけど、知りませんか？」

店主は写真を手に取って写真の人物を見るも、

「いや、知らないね。こんな子がいたらいてい一発で分かるよ」

と言った。

「そうですか……。失礼しました」

写真を返して貰い、別の店に行こうとした時、

「あ、ちよいと待ちな。あんた外来人かい？」

店主に呼び止められて再び振り返った。

「あ、はい。そうですけど……」

「だったら慧音先生の所に行くといい。慧音先生なら分かるはずだよ。ここから右に曲がって真っ直ぐ行くと寺子屋と書かれた建物がある。そこに行ってみな」

「本当ですか！？ あ、ありがとうございます！」

八百屋の店主から思わぬ情報が入り、思わず顔を綻ばせた。すぐにお礼を言って、早速その場所に行ってみた。

「ここかな？　大きい家みたい」

しばらくして寺子屋の前に着いたりカ。授業は終わったらしく、途中寺子屋の方向から来た子供達と会った。

今は周りに誰もいない。寺子屋と書かれた看板を見つめ、リカは戸の前に立った。

「すいませーん！」

インターホンなど無いので必然的に大声で呼ぶ。しかし、しーんとして全く気配が無いように思えた。

「聞こえなかったかな？　じゃあ……すいませーん!!」

さっきよりちょっと声を大きくした。するとガラガラと音を立てて戸が開いた。

「あー、聞こえてるよ。一体誰だよ……」

姿を現したのは白髪のロングヘアーに白いカッターシャツに赤いもんぺの少女。

「あの一、もしかして慧音先生ですか？」

「いや、私じゃない」

リカが聞いた事はあっさり否定された。

「あり？　慧音先生は寺子屋にいるって聞いたんだけど」

「慧音なら今はいない。私が留守番してる。それよりお前は外来人か？」

少女はリカの質問に答えつつ何で慧音に用があるのかを疑問に思いつきながら尋ねる。

「そうだよ。私はリカ。実は人を捜していて」

と八百屋の店主同様ポケットから写真を取り出して少女に見せる。

「……いや、知らないな。見た事がない」

「そっかぁ。慧音先生もいないしなぁ」

明らかに残念そうな表情をするリカ。踵を返して寺子屋から離れようとする。

「いや待て。どうせすぐ戻って来るから中で待ったらどうだ？ お茶くらいなら出しても大丈夫だろうし」

と催促してきたので、リカはすぐに振り向き直して、

「じゃあ言葉に甘えまして……失礼しまーす」

少女と寺子屋に入った。

少女が案内したのは客人用の和室。少女はお茶を卓袱台に置いてからドサッと構えるように座った。

「そういや名前言ってなかった。私は藤原妹紅」

自己紹介をして一口お茶を啜る。

「リカといったっけ？ 写真の奴とは何の関係だ？」

一瞬背中がビクツとした。リカは写真について聞かれるとは思わなかったため、すぐに上手い言い訳を考えた。

「え、えーつとお……し、親友なんです！」

あまり個人を特定できる言い方だ何となく怪しまれそうなので、大きな囲いで覆うように親友と言った。だがあまりにも挙動不審であつたが、

「そうか。私はずっと独り身だからなあ……」

妹紅はリカの挙動不審な態度に気づかず遠くを見るように目を細めた。

内心ホッとしたリカはその後たわいのない会話を妹紅と続けた。

しばらくして、襖が開くとそこから独特な青い服を纏い、両手には食材を入れた袋を持っている慧音が入ってきた。

「今戻った。留守番ありがとうな、妹紅」

「おう、お前に外来人のお客さんだ」

「……この子が私にか？」

「まあ話でも聞いてやりな。荷物は私が持っていくよ」

妹紅は慧音の手から引ったくるように荷物を取って部屋の奥へ行った。慧音は再度リカに振り向いた。

「えっと、外来人だそうだが、名前は？」

「私はリカ。慧音先生ですね？　ちょっと人を捜してまして、人里に來た時に慧音先生から聞くといいい言われて」

「ああ成る程。それでか。見せて貰えるかな？」

慧音はリカの近くに座り、リカは素早くポケットから写真を取り出すと慧音に渡した。

「……写真の人物と何か関係があるのかい？」

「実は私の親友なんです」

「……」

しばらく写真を見続ける慧音だが、

「うむむ、写真だけじゃな……。何か情報は無いか？　名前とか」

それでリカはハッとした。勿論慧音はその一瞬を見逃さなかった。

「なんだ、名前とか言わなかったのか？」

「あ！ ごめんなさい！ うっかりしてました！ 写真じゃ分かるはずなのに！」

「分かった分かった。名前は知ってるんだな」

写真とはいえ外来人であるが故に慧音も分からなかった。

慧音は自分が来る前にいたという事から妹紅にも既に聞いている
と思い、もし自分が分からなかったらどうしようかと思っていた。
ホッと安心して妹紅がさっき飲んでいた湯呑みに手を伸ばす。別に
間接だとかじゃなく妹紅が飲んでいたとは知らないだけだ。

「で、名前は？」

「えーっと……常盤楓です」

「え……今なんて……？」

「だから、常盤楓です」

湯呑みが手から滑り落ちそうになった。ハッと気づいてギリギリ
指で挟んで落ちずには済んだ。

「あ、危ない」

「だ、大丈夫ですか!？」

いきなり湯呑みを落としそうになるもんだからリカも驚いた。

「済まない。えっと、常盤楓だな。それなら知ってる」

「ほ、本当ですか!? やった〜! もう会えないかと思いました」

リカは純粹に手放して喜んだ。万歳のポーズでしっかりと。こんな姿を見れば本当に親友であるのが分かると錯覚してしまう。

「で、場所はどこですか? 久しぶりなんで一刻も早く、すぐにも会いたいんですよー」

「あ、ああ。だがすぐはちょっと無理だ」

瞳を煌めかせてガンガン迫るリカを手で一旦遮るようにして言った。

「え? 为什么呢ですか?」

何故すぐに会えないのか。リカも幻想郷全てを知ってる訳でないので人里じゃないのかと思った。

「彼女なんだが、今入院しててな。人里じゃなく永遠亭っていう迷いの竹林という場所の奥にいるんだ」

すぐに、の理由が分かった。距離があるという事だ。

「そっか…。じゃあどの方向か教えてもらっつゝ「いや、大丈夫だ」え?」

リカの言葉を遮り、慧音は立ち上がってパツパツとスカートを掃う。

「案内役を妹紅に任せる。聞いてたんだろ？」

慧音はさっき妹紅が荷物を運びに行った方向に声を掛けると妹紅が出てきた。

「んだよ…気づいてたら言えよな」

「自分から出てくればいいのにそこで立ち聞きするからだ」

後で聞いたが、何となくリカの空気に馴染めず隣の部屋でずっと聞いていたらしい。

「とにかく、リカを永遠亭に連れていけばいいんだな？」

「お願いします、妹紅さん」

「分かったよ。送るだけだ」

それから慧音は寺子屋の前に出て迷いの竹林へ向かう二人を見送った。

（彼女は怪しくないし、新聞だと外人テロリストは魔法の森。迷いの竹林はちょうど人里の反対にあるから妹紅も大丈夫だろう）

というのが慧音の考えだった。まさか彼女がその外人テロリストとは知らずに…。

第34話 姫の籠に忍び寄る凶弾（前書き）

ネタが浮かばない。ある意味矛盾してる気が……。

第34話 姫の籠に忍び寄る凶弾

「我がTrick Companyのオオオーっ！！ 規定のオオオーっ！！ 復唱をオオオーっ！！ 始めえーっ！！」

「そのいちイイイ！ 全生物に対応する最強の罠を作りだすウウウー！！」

「そのにイイイ！ 報復を恐れるなあアアアー！」

「そのさあアアアン！ 追及されたら全力逃亡オオオー！」

「我が社訓はアアアー！」

『狡兔三窟！』

（大先生は一体何を始めたウサか……？）

迷いの竹林にて絶賛ハイテンションのスクアートがTrick Company所属の兎と規定と社訓の復唱しているのを近くに生えてた筈の陰で見守るてゐる。

しかし注目すべきはスクアートの後ろにある竹林には似合わない異様な機械。

「我が技術によりイイイ！ 落とし穴を狙撃する480mm高射式

迫撃砲が完成したアアア！」

『ウオオオオオオー！！！！』

「そして私は！ 最高に『ハイ！』 ってやつだアーツ！」

『ヒヤツホオオオオーツ！！！！』

「い、いつまでやるウサよ……」

設立者兼隊長スチュアートによればリーダー付き480m高射式迫撃砲のお披露目に際して皆で祝おうという企画をしていたらしい。なんでも上空に砲弾を放ち、そのまま落下させて命中させるというある意味運要素のある迫撃砲である。

一応Trick Companyの副隊長として参加せざるを得なかったてゐだが、かれこれ一時間が過ぎようとしていた。あまりの長さにはとほと呆れ、早く終わって欲しいと願った。

そんな時、伝令役の兎がヒョコッと顔を出してゐに報告した。

「おや、報告かい？ 何々……永遠亭に二人接近で一人は……藤原妹紅！？」

思わぬ人物の登場に動揺するも、

（いやいや、これはむしろ大先生の発明品を試すチャンスでは？）

と発想転換。というわけで早速スチュアートに報告した。

「先生！ 現在竹林を通る侵入者が現れました！ 人数は二人！」

「な、何だとおゝ！？ 偵察兎部隊！ 顔と特徴を確認しろ！」

スチュアートが指示を出すと周りにいた兎は忍者の如く素早くこの場を去った。

「よし、私も見てくる」

そして普通に戻ったスチュアートは双眼鏡を手に侵入者を確認しに行く。当然説明が必要なのでてゐもついて行った。

そんな慌ただしい行動が竹林で繰り広げられているなど露知らずに竹林を通るリカと妹紅。妹紅は歩きながらリカに迷いの竹林について説明していた。

「竹は成長が早いから目印にならない。だから迷いの竹林と呼ばれてる。尤も、慣れれば迷う事はなくなるが」

「へー、そうなんだ」

リカは説明を聞きつつ周りを見渡している。半分は竹林という珍しさと好奇心、半分は警戒心。

「それから、この辺りには妖怪や落とし穴があるから注意しろよ」

「妖怪は分かるけど、落とし穴って？」

「半分は兎の悪戯だ」

「兎……？」

リカはごく一般的に知られているあの兎を思い浮かべた。リカの知る限り巣穴は地面を掘るが落とし穴を任意で作れるとは思わない、と考えていたが。

「うおっ!？」

ズボツという効果音が似合う程に妹紅の身体半分が地面に埋まった。

必然的に顔を見下ろすりカと妹紅の見上げる目線が合うと、

「ま、まあこんな感じだから気をつけて…」

すぐに穴から出て顔を背けて歩み出した。自分から言った矢先に自分が嵌まってしまふとはどれほど恥ずかしい事だろうか。

そんな動作を見てクスリと微笑したりリカだった。

「あ、ありのまま「おっと、普通に言って貰わないと困るウサ」そうか。てゐもなかなかやるな」

双眼鏡を眺めて侵入者二人を観察していたスチュアートがネタに走ろうとしたのをてゐは全力で阻止した。

てゐに聞けばもんぺ姿の方が藤原妹紅で不死身らしい。確証は持

てないが落とし穴に嵌まる確率から迫撃砲を試すにはいいかなぐらいにしか思ってた。

そしてネタに走って説明しようとしたのはもう一人を見た時。

もう一人はゴスロリドレスで外人なのは分かるが関係無い人物かと思っていた。しかし、顔を見た時だ。眼鏡を掛けているから分かりづらいのは確かだ。

しかし、スチュアート達は彼女達を側面から観察している事になる。側面から見れば僅かな隙間から瞳が見える。

両目とも薄いブルーだった。だが、眼鏡の隙間から見えた時、片方だけは黄色だった。

送られてきた外来人テロリストのカラー写真。二人がオッドアイ。一人は薄赤いのと薄いブルー。もう一人は薄いブルーと黄色。

「てる副隊長！ 永遠亭に報告だあ！ 一人はズバリTerrorist！ 常盤楓が狙われてる！」

てるも同様に双眼鏡で確認した。てるも写真を永琳から見せて貰ったから覚えている。間違いなく黄色と薄いブルーの瞳。命令が下ると同時にてるは近道を通して永遠亭に向かっていた。

「お師匠様！ 大変です！」

永遠亭に先に着いたてるは縁側を通って廊下に入り、永琳の研究所へ向かった。

しかし、そこに永琳はいなかった。

てゐるは鈴仙を呼びたかったのだが、生憎鈴仙は置き薬の販売に行き、人里にいる。

てゐるは部屋を駆け回った。研究所から近い部屋を一つ一つ見て回ったが姿が見えない。

「あゝもう、てゝゐゝ、さっきから障子の開け閉めが煩いわー。何の騒ぎよう…」

ふと縁側の奥から欠伸をしながらてゐに近づく女性がいた。

彼女こそ永遠亭の家主であるお姫様の蓬萊山輝夜。……とは言うが現在怠惰な生活を送っている。現時刻は午後二時だが、今起きたのだ。

「あ、姫様。お師匠様が何処か知りませんか？」

「んゝ？ 永琳？ 患者の所じゃない？」

そこでてゐは思い出した。永琳は大体この時間帯に楓の身体状況を記録していた。

「そういえば……ありがとうございます」

一礼してすぐ楓のいる部屋に向かおうとすると輝夜に肩をガシツと掴まれた。

「あ、あの、姫…様？」

「あんたがそんな切羽詰まるなんて珍しいじゃない。何か暇つぶし的な事でもあったの？」

寝起きからか、力の籠らない声で言う輝夜。てゐとしては時間が無いので早く永琳に報告したいが、ここで発想転換。正直に話す事にした。

「実は外来人テロリストが来まして」

「テロリスト？ ああ、永琳が何か言ってた」

「後、藤原妹紅が喧嘩を売りに」

瞬間、輝夜のこめかみがピクツと動いた。

「喧嘩売ってるって？」

輝夜の声はさっきとは比べようにならない殺意に満ちた声に変わった。そして満面の笑みである。

「はい。今、竹林を通過して永遠亭に向かって来てます」

「よし、眠気覚ましに殺ってやるわ」

さっきのだらーとした姿から一変、目は殺る気に満ち溢れていた。そのままふわーっとゆっくり飛んで玄関に向かった。

（おし、妹紅に姫様をぶつけければテロリストは一人になる！ 後はお師匠様に任せれば完璧ウサ） 後は

輝夜が行ったのを確認して、てゐは楓のもとに向かった。

一方の永琳は正座で布団に包まれた楓の腕に注射器を撃ち込み、採血をしていた。

楓が入院中の間はずっと点滴による栄養補給を続けているが、これといった異常は見られない。右足の怪我也も治り、身体状況も内臓は正常に稼働、血液検査も健康値を示してる。ただ、意識だけが目覚めない。言うなれば健康体の植物人間だ。

原因は彼女の脳内にある装置だが、さすがの永琳も気づけないでいた。

一週間に一度の頻度で採血するが、異常は全くない。毎回毎回意識が戻らないことだけが永琳の頭を悩ませた。

「私にも分からないなんて……」

今まで永琳はあらゆる患者を診察し、調合された薬で全てを治して来た。だからこそ患者を永遠亭に入院させるのは今まで前例が無かった。

「……はあ……」

採血が終わると同時に解決出来ない問題を考えてため息を付いた。

「ああ、お師匠様！」

ちょうど器材を片付けて廊下に出た永琳はてると鉢合わせした。永琳はてゐるのただならぬ様子を察知して顔を陰しくした。

「てゐ。何かあったの？」

「テロリストです！ テロリストの一人が妹紅と一緒にこちらに来ています！」

テロリストと聞いた瞬間、遂に来たかと思う事コンマ三秒、

「分かった。妹紅は「妹紅に関しては今し方姫様が行きました」分かった。後はどうにかしてみるわ。てゐは患者を見張るときなさい」

永琳は器材を入れたバッグをてゐに預けると玄関に向かった。

（しかし、何故妹紅と共に？ もしかしてグル？ いや、妹紅に限ってそんなはずは……）

妹紅が同伴している事に疑問を感じたが、まずは相手に楓を悟られないように自然と帰す方法を考えた。

永遠亭が視界に見えた頃、妹紅は合計五回の落とし穴に引っ掛かった。しかも最後は身体が丸ごと入った。

「ブハッ、く、くそっ！ いつにも増して落とし穴に引っ掛かるのは何故だ！？ こんな私じゃねえ！」

遂に自分の嵌まりやすさを自虐するかのように独り言を吐き捨てた。

「あのー……大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。問題無い」

今さっき若干トリップ気味だったので不安になったが、いつもの足取りに戻ったので心底安心した。

ようやく竹林を抜けて庭から見える玄関に向かおうとした時。

パァン！

「ぐおっ!？」

破裂音みたいな音が鳴り響くと同時に妹紅が竹林の方にぶっ飛んだ。

一瞬何が起きたか分からず戸惑うリカの頭上に着物……ではなく、和風仕立ての洋装を着たいいつもの服装の輝夜が現れた。

「アッハハハハ！ 呆気無いわね！」

綺麗な黒髪をなびかせ、不意打ちの成功に高らかに笑う輝夜に対し、

「て、テメェ……人が案内してる途中で不意打ちしやがって……！」

立ち上がると内側から込み上げる怒りを露にするかのように妹紅の身体が炎に包まれる。

「あゝら、ボロ家住まいのあなたが案内なんてね。ま、貧乏焼鳥

「屋だからねえ、頑張って働きなさいな」

「……………覚悟は出来てンだろうーなあアア、輝夜アアアアーッ」

「！！！」

「上等ッ！ やれるもんならやってみろお！」

『蓬萊 凱風快晴—フジヤマヴォルケイノ—』

ただ一人残されたり力は二人の行った方向を見ながらポカーンと
していた。これが日常茶飯事だという事など知らないのだから。

不意にリカの背後で誰かが喋った。身体を振り向かせると、赤と青が帽子、服、スカートで交互したいかにも大人の雰囲気を出した女性――永琳が立っていた。

「あのー、さっきのは……?」

リカはチラリと後ろを見遣る。輝夜と妹紅は遠距離同士だと激しい弾幕、近づけば肉弾戦をしていてどちらも殺る気なのがリカでも分かった。

「あれはただじゃれあつてるだから心配しなくていいわ。それより、貴女外来人かしら? こんな場所まで何の用かしら?」

あれをじゃれあつてると表現したので頭大丈夫かなと心配したりカだが、それより目的を優先させた。

「あ、私はリカ。今、親友を捜してるんです。永遠亭にいと慧音先生からこちらにいと聞いたので」

(慧音が…? なら妹紅は案内役か何か。じゃあ慧音がグル?)

慧音から聞いたとなれば妹紅が連れてきたという辻褄が合う。ならなお一層謎だ。なぜ慧音は彼女に教えたのだろうか。

ふと、リカをしてみる。黒のゴスロリドレスに眼鏡、ニット帽。写真の

服装とは違う。もしかしたらこれで慧音を騙したのだろうか?

仮に慧音を変装で騙したのなら、てるとスチュアートはどうやって見破ったのか?

次々疑問が湧くが、現に目の前にいるのだから、どちらにしても自分で見極めるしかない。

「ええとですね、親友ですか。どんな方でしょうか？」

「あっ、写真あります！」

リカは手に持ってた写真を見せた。

永琳が見た写真の人物は間違いなく常盤楓だった。

「捜しに来た、と言いましたね。確かにここにいます」

まず正直に話して反応を見てみた。楓がいる事を悟られないようにと考えていたはずだが、どうしても判断材料が足りない。外来人テロリストなのか、本当に親友なのか。もしテロリストなら相手が有利になるリスクもある。危険な賭けだ。だが永琳はあえて賭けた。

「ほ、本当ですかッ！？ やっと見つけられた」

いると聞いて安堵の表情をするリカ。これだけなら本当に捜していたのが分かる。

「ですが、会わす事は出来ません」

「……えっ!？」

一瞬で驚愕した表情。

「実を言うところの方は危篤状態でして、会わせるわけにはいかないんですよ」

危篤ではないが、親友ならば必ず反応はあるはずだ。

「……………」

リカは無言だった。ショックから声が出ないのか、それとも……。長い沈黙。竹林から炎が燃えているかのようにゆらゆらとほのかに紅い。

「……そっか。じゃ、仕方ないね」

ようやく口を開いたが、おおそ親友を思う言葉というより会えない事を残念がる方に重点を置いた感じであった。

リカはくるっと振り返ってそのまま竹林に進んだ。

「え！？　ちょ、ちょっと！」

突然の行動に驚く永琳。なんとか会おうと交渉するかと思いきや、安否を確かめたら即帰る。まるで場所を単に確認したかのように。

「それじゃあまた来ます。では」

そう言い残して竹林へ去った。永琳も引き止めず、ただ帰っていくのを見守っただけだった。リカは永琳に背を向けていたから永琳も気づかなかっただろう。口の端が歪んだ事に。

結局、永琳は永遠亭に引き返し、てゐに知らせた。

「でも分からないわ。私は自分からここにいる事を教えた。だから

警戒を怠らないように。T r i c k C o m p a n y 全員にも伝えてなさい」

と、永遠亭及び迷いの竹林に警戒態勢の維持を命令した。

ちなみに輝夜と妹紅の弾幕勝負は引き分けに終わり、ボロボロになった竹林を結局三人で片付ける事になった。

あと一人は人里から帰ってきた鈴仙。輝夜に見つかり強制させられた。

リカは、竹林を出て溜め息をついた。

「はぁ……つまんない」

リカはただ偵察を行ったただけだが、十分な収穫を得た。その代償は、血に濡れた右腕。

「あーあ、つまんないなあ」

道の小石を蹴り上げて愚痴を言う。右腕に付いた血はまだ新しいのか、ポタッと落ちては地面に染み込む。

勿論彼女の血ではない。帰りに襲ってきた妖怪の返り血だ。

竹林を抜ける際に背後から襲ってきたのだ。反射的に横に飛び込み、受け身をとると同時に自動小銃 S t G 4 4 を弾が切れるまで妖怪に撃ち尽くした。蜂の巣状態となった妖怪は音もなく倒れた。

輝夜と妹紅は弾幕勝負（という名の殺し合い）中で音に気づかな

かった。

「妖怪って弱いなあ。これで三十二匹目かあ」

彼女の手には何もない。そのまま人里を外れて仲間のもとへ戻っていった。

第35話 **M y s t e r i o u s M o u n t a i n**（愉快な住人達（前書き））

今回から会話文同士の間の空白を埋めました。

見づらいなど意見がありましたら感想に書いて下さい。普通の感想も随時受け付けてます。

第35話 M y s t e r i o u s M o u n t a i n（愉快な住人達

外来人テロリストの永遠亭接近から少し時間を遡る。

俺達は博麗神社で外来人テロリストが見つからないのは何故かという議題を話し合っていた時に途中で魔理沙が加わった。

魔理沙は香霖堂で有力な情報を手に入れ、それを話してくれた。

「となると……、魔法の森にでも張ってればいいのかな？」

「早苗さん、常識的にそれ無理ですから……」

早苗の非常識な提案に梨音がツツこむ。しかし、外の世界の常識に囚われなくなった早苗に言っても無駄だ。それを知ってか全員あえて口を出さない。

「でもなあ、香霖が言うに来るかどうか分からないって。それに店内に香霖以外がいた日は決して来ないらしいからな」

「じゃあ香霖に任せれば？ はいお茶」

「お、サンキュー？」

「なんで疑問形なのよ？」

「いや、なんでもない……」

どちらにしても問題はそこなのだ。

外来人テロリストは確実に誰かの能力で魔法の森での存続を可能にしている。四人のうち誰かは必ず広範囲を感知できる能力を持つはずだ。

そう仮定すれば見つからない理由も当て嵌まるし、香霖堂に人がいるかどうか分かる。

だが、この仮定を裏を返せば、俺達の行動は全て把握されて決して拠点を見つけれない事になる。そうならば見つける事など夢のまた夢だ。

一向に解決策が浮かばず、時間だけが過ぎていく。

「仕方ない。今日はこのくらいにしよう。魔理沙の情報があっただけでも進展したんだ」

一旦会議を区切って俺は解散をさせた。

「じゃ、梨音帰るわよ」

「あ、はい。稟君またね」

会議が終わるとアリスは梨音を抱き抱えて魔法の森に飛んだ。

アリスも性格が治り、梨音も仲良くしているようだからもう心配しなくていいだろう。

と試してみたが、よくよく考えたら梨音の発言は先の一回のみで、それ以外は順番に頭を撫でられて皆に癒しを与えていただけだった。ちなみに発言した時は早苗が撫でていた。

「魔理沙が来たおかげでちよつと時間が余ったわね。稟、天狗のここに行かない？」

「終わって早々いきなりだな。……まあ、早いに越したこともないしな」

いきなりの提案だったが、時間的にも確かに余裕がある。少し休憩してから……。

「じゃ早速行きましょ。あ、早苗留守番頼むわね」

「問答無用!？」 俺は五分後とかを予想してたのに、君は少しは労ろうという気はn」

有無を言わず俺の手を掴んで飛ぶ霊夢。連れられて宙に浮く俺の身体。同時に俺の言葉も空を切った。

もう慣れたのだからいいが、一体どうやったら一人で飛べるようになるのだろうか、連れて貰う時いつも考える。

二人が去った後で、不意に魔理沙が早苗に聞いた。

「なあ早苗、お前さ、霊夢の持つてるあの棒みたいなもの持つよな？」

「え？ お払い棒の事ですか？」

「多分それ。それさ、どっちの手で持つ？」

何故魔理沙はこんな質問をするのか分からず少し戸惑うも早苗は答えた。

「ええと…右ですね。私右利きですし」

「だよなあ。私もマスタースパークとかで八卦炉構える時は右なんだ」

「はあ……」

「でな、霊夢は左利きなんだ。その棒をいつも左で持ってたからな」

早苗は魔理沙が言いたい事が何なのか分からず、ただ頭の上にクエスチョンマークが浮かぶだけだった。

「あの、魔理沙さん？ 何の話ですか？」

「今日霊夢が私にお茶を出した時、右で出したんだ。いつも左なのに右だったんだ」

「いやいや、お茶くらいなら私も左で出す時もありますし」

しかし、魔理沙はうーんと顔をしかめて考えている。

「なんで右なのかが気になるんですか？」

「霊夢とは結構長い付き合いだからな。何と言うか……、たまたま右になっただけなら私もあまり気にしないが、それがいつも使ってる、まるで右利きであるかのように自然と使うんだ」

正直早苗には魔理沙がここにこだわる事に対して理解出来なかった。

利き腕は訓練次第では両利きにも出来るし、事故で利き腕を使えなくなった人とかもリハビリで逆を利き腕に出来たりする。

「うーん、私には良く分かりませんねえ。絵の立ち位置によっては私もお払い棒を左で持つ時もありますし」

「いや、そうじゃなくてリアルな話！とにかく私は別の異変を感じるんだ」

ただ霊夢の利き腕が逆。たったそれだけなのに魔理沙は異変と言った。

魔理沙も霊夢と共に異変を解決した専門家であるのに、たったそれだけ、本当にたったそれだけで異変と言い切った。

「……じゃあ霊夢さんが異変の元凶と言うんですか？」

「……それは分からない。ただそう感じるんだ。今回の異変は二つな気がするんだ」

異変が二つ。もし魔理沙の推測が本当なら幻想郷史において前代未聞の出来事である。しかし、実際幻想郷に害を為す異変は外来人テロリストのみ。

魔理沙はただ利き腕の違和感だけでここまで考えられる人物だっただろうか？

そう考えたら逆に魔理沙が普通の魔理沙じゃない気がしてくる。

早苗は頭の整理も兼ねてあれこれ考えながら庭を歩いていると、

「おおっと！？ 早苗、大丈夫か？」

急に前のめりになった早苗の身体を魔理沙が咄嗟に支えた。どうやら考え過ぎて小石に躓いたらしい。

「は、私ったら…」

「庭を歩きながら考えるなよ」

魔理沙はホッと一息付くのに対し、早苗は手を口に当てて赤面し、恥ずかしくなった。

「…ご、ごめんなさい」

「全くだぜ。いつからそんな天然になったんだ？」

魔理沙から離れると縁側に腰掛けた。

今まで考え事をして小石に足を取られるなど一度も無かった早苗だったが、今日に限って躓いてしまうとは自分らしくないと思った。

（……自分らしくない？）

ふとその言葉が頭に残った。するとまるで自分が疑心暗鬼に陥ってみたい感じがした。

魔理沙の話を聞いてからだ。魔理沙が悪いわけではない。それなのに霊夢を疑う魔理沙を魔理沙らしくないと思った。

魔理沙も右利きになった霊夢を霊夢らしくないと思ってる。

何かおかしい。今ここにいる時間で何かおかしい。

よく分からないのに恐怖を感じた。自分の心の変化に？ 魔理沙の言ったもう一つの異変の存在に？ それとも何も分からない事に？

「――え、――なえ！ 早苗！」

「……………はっ！」

気がついたら早苗の目の前で魔理沙が何度も早苗を呼んでいた。いつの間にか思考のドツボに嵌まっていたようだ。

「一体どうしたんだよ！？ 腰掛けるや否や虚ろな目になって！」

「あ……………」

決して虚ろな目をしていた訳じゃない。でも魔理沙にはそう見えただのかもしれない。

「…………魔理沙さん。私、部屋で少し横になります。多分疲れてるんだと思います」

「…………本当に大丈夫か？」

「少し休めば大丈夫です」

「そ、そうか。じゃあ私は家に帰る。じゃあな」

本当は一人になりたい願望で休むと言った。考えを整理したいが為に。そこまでは気づかない魔理沙は念押しで調子を聞いて、その後箒に跨がり家に帰った。

早苗は見送った後で押し入れに仕舞ってある布団を敷いてその上にドサツと身体を投げ出すように倒れる。右腕を額に当て、溜め息を付く。

（どうしちゃったんだろ、私……）

魔理沙の推測したもう一つの異変。本当にあるのか？ あったらどんな異変なのか？

考えても頭の中でぐるぐる回転するだけで、何も浮かばない。

そのうち、考えが離れていき、ゆっくり静かに寢息のリズムに変わっていった。

もし、もし仮に早苗が後七分だけ起きて、解決しない課題を考えていたとしたなら、早苗はきつと全ての考えが吹き飛び、そしてもう一つの異変を確証出来ただろう。早苗は必ず気づいたはず。縁側を歩いていた鏡の中の女性に。

――

自分の頭では整理が付かない事は環境に適応出来ない人間にはよ

くあるが、俺の場合はそれが顕著な傾向にあるらしい。まだ幻想郷に慣れていないのが原因の一つと考えられる。

ただ一つの事実を述べるとするなら、妖怪の山中腹にある大蝦蟇の池。ここを水源として流れる川に落ちた。いや、引きずり込まれたと言う方が正しい。

引きずり込まれてすぐめったやたらに抵抗し、それが功を奏したのか二分後に何とか陸上に上がった。

「ゲホッ、ゲホッ、ハァー、ハァー」

当然身体は酸素を求め、呼吸は荒くなる。突然の出来事で、肺にまともな空気は入ってなかった。

人間は訓練次第で四、五分あるいはそれ以上の潜水を可能とするが、それは肺に十分な空気があればの話だ。

肺に空気が無いと意識とは無関係に身体は呼吸を求める。その拍子に肺に水が入れば即ブラックアウト。すなわち意識の消滅、そして溺死。

そうならなかっただけでも奇跡だった。

「俺がいなきや桜之宮は確実に溺死だったな」

「助けたことには感謝するが、何故ここに工場長がいる？」

陸に上がったら目の前に工場長がいた。今の今までの考えを吹き飛ばし、全力で工場長の存在を問い掛けた。

「おまつ！？ そりゃいくらなんでもなくないか！？」

「釣竿で釣られる魚の気持ちが理解できたただけ言っておこう」

そう。事もあるうか流された時に偶然釣針が刺さり、それで大物来たと勘違いした工場長が俺を釣り上げたのだ。

おかげで針が深く食い込んでしかも無理矢理抜いたせいで傷口が余計広がった。工場長が持っていた包帯で応急処置はしといたが。

「わざとじゃないしよ、それに助かったんだからここはビシッと礼を言うべきじゃないか？」

「お前に礼を言う俺の中で何か壊れそうな気がする」

「どうして俺を邪険にするかなあ？俺をそんな奴だと見ていたのか？本気でショックや」

一言言っただけなのにうなだれる。まあこのままほっというおいても進展しないから、話題を変える為周りを見た。

……岩の間に固定してある釣竿が糸を引いている。

「おい、何かk「二本目来たあ！」……」

知らせようとする前に工場長は既に竿を持って釣り上げようとしていた。こういう時の素早い行動は評価できるのだが。

「うお、お、お、おお！」

釣竿のしなり具合からしてかなりの大物が期待出来そうだ。でもここ川だしな、もしかしたら……。

「どりゃああああーっ！」

工場長の雄叫びと共に獲物が川から飛び出した。俺はそれを見た。

どうやら予想は当たったようだ。

「へぶっ!？」

何ともまあマヌケな声を上げて顔面を踏まれた工場長。おもいきり釣り上げたせいで高く飛び上がった獲物は見事に工場長をクッションにして降り立った。

そしてダッシュで川に向かって走りそのままダイブ。川の上流へ泳いでいった。

結論から言えば、河童だった。河城にとりと同じ河童であるが、河城にとり本人では無かった。ツインテールが肩に当たってたし眼鏡掛けてたから絶対違う。にとりは決して釣竿に釣られるはずが無い。

「大丈夫か？」

「もっと踏……。ハッ、い、一体何が!？」

たった今コイツ明らかに言いましたよね!？ 遂に目覚めたのか!？ これではもともと変人で済んでいたのにさらに変態がプラスされてしまう!

「ちよい、ちよい、ちよい! 俺はそんな事に目覚めねえ!」

「確かに目覚めたら工場長の立ち位置がギリギリから消滅に転落するかもな」

「……なあさ、桜之宮は俺を何だと思ってるんだ?」

早く帰って欲しい存在。勿論そんな事言えないので、

「変人」

と答えた。そしてうなだれる工場長。このパターンはもう固定ですね。

「もう帰る……」

そう言うのと釣竿を持ってとぼとぼ高機動車に戻る工場長。そういえば工場長はまだ宿泊場所決まってるやないよな。やっぱり博麗神社に戻るのか？

そんな事はさておき、俺は茂みに向かって一言。

「眺めてないで出て来てくれたら助かったんだけど」

「あら、分かったの」

茂みから霊夢が姿を現す。結構前からいたのは知っていたけど観察する理由が分からない。工場長と関わりたくないのなら分かるが……。

だが、それよりニヤニヤしてる顔の方が気になった。が、間髪入れずにまた空を飛んだので結局聞けなかった。

この後に起きた出来事をフロー形式で説明するところなる。

霊夢が犬走椀を発見↓夢想封印で奇襲↓全力で土下座する俺↓椀に事情を説明。

で、ようやく文の家に到着。

妖怪見たら即退治という考えを変えて貰いたいと心から願ったのは多分初めてだ。

土下座して謝るこちらの身になってほしい。こういう芸当が許されるのはこんな平凡な人間だけだろう。たいていは意味ないけどな。

「文、いる？ 入るわよ」

霊夢は相手の返事を待たずにドアを開け放つ。

パシヤ！

開けると同時にフラッシュが起こる。

「どうも、一枚ゲット」

家の奥から文の声。

今のは文が目の前で写真を撮った訳ではなく、どうやらドアと連動させた仕掛けを作っていたらしい。

三脚に固定されたカメラに天井に伸びる糸と端についたおもり。

「まだ試作でしたけど上手く出来ましたね」

文は固定したカメラを取ると作業机に置いた。

「では改めまして霊夢さんに稟さん、私の家にわざわざ来てくださってありがとうございます」

姿勢を真っ直ぐ伸ばし、丁寧にお辞儀した。いままでの印象から

して到底考えられない動作だった。

自分の家に招いたからしたのかは分からないし、聞く気もない。
俺にはまず文にやるべき事がある。

「では早速、私がいなかった間の出来事を「本当にすまなかった！」……えっ？」

作業机からメモ帳を手に取り、早速メモしようと筆を構えた文の動きが、瞬間、止まった。

「すまない。いや、ごめんなさいがいいか」

頭を下げて謝った俺。霊夢も文も訳が分からずキョトンとして俺を見る。

「な、何の話で？」

「あの時、文を信じていたらきつと、もしかしたらテロリストを捕まえられたかもしれないし、文だって大怪我せずに済んだかもしれない」

「あ……あの時の……」

「でも俺達は避けてしまった。文の手帖の最後の殴り書きを見て後悔した。文はたった一人で戦っていたと知って後悔した。俺達には落ち度はないし、文が自分で深入りした結果だったのは承知の上だ」

頭を下げながら謝罪の言葉を述べていく。文に会ったら必ず最初に謝ろうと決めていた。

決して許して貰おうと思ってない。そもそも謝る意味などなく、別の観点から見ればただの自己満足の為にしていると言える。

それでも言わずにいらなかった。言い訳に近い言葉を淡々と並べた空虚な言霊。

霊夢も文も何も言わず静かに俺の言葉を聞いてくれた。

「許して貰おうだなんて微塵も考えてないし、文に謝る意味自体ない、無意味だと分かってる。それでも謝りたい。だから――」

ポンツと肩を叩かれた。顔を下げたまま、それでも叩いたのは文だと分かった。

でも俺は顔を上げなかった。自分の気が済むまでずっと下げたまままでいい思っていた。

「私ともあろう者がたかが普通の人間なんかにここまでされるなんて」

人間に言われた事への皮肉か、辛辣に言い放つ文。文も天狗、大別すれば妖怪。人間より数百倍長生きする妖怪に人間が謝る。

「ちよっ……」

文の言葉が癪に障ったのか霊夢が前に出ようとしたのを右手で制した。

分かって貰いたいのは、自分の心の決着だ。際限なく心に留まるこの思いに決着を付けたい為に。

「……もういいですよ」

何分経ったかは分からない。文は優しく語った。

「過ぎた事をいつまでも心に留めるからいつまで経っても変われない。短命な人間ならよく分かってるはずなのに」

「……………」

「でも、そこからネタが出てくる」

文はそつと手を伸ばして下げている俺の頭を上げた。視線の先には笑顔の文。間近で見える機会は無かったが、美しいと感じた。

「ほら、いつまでも頭下げないで早く話して下さいよ。待ってたんですから」

「……本当にいいのか？」

いまだに頭を下げようと努力する俺に呆れ顔をして、

「全く……」

一言言っただけだった。

それから霊夢も一言謝り、文がそれに驚愕しながらも許した。

それからは文の質問攻めが始まるが、三時間これといって苦痛にならずむしろ楽しかった。

最後に俺は聞いた。

「文、君はまたテロリスト達を追い掛けるつもりかい？」

「新聞記者としてこれほどやり甲斐のあるネタを手放すなど出来ませんからね」

さも当然のように答えた。やはりとは思ってたが、ここははっきり止めて欲しいと言わねばならまい。

「心配無用です！ 相手の能力も分かりましたし、でも新聞は刷り続けます。人里、いや幻想郷の安全を守る為に」

言う前に言われた。俺はもう無駄だと悟った。新聞で情報を共有させて警戒させる。その役目を全うする覚悟を感じとれた。

「気をつけろよ」

「そちらこそ」

席を立ち、文の家に出ようとする寸前に思い出した。素早くポケットから取り出したのは文の手帖。血がついたままだったのでシミにはなっていたが中身は大丈夫だ。

「あ、これ返すよ」

「それ、私の！ 持ってきてくれたんですね」

「この手帖のおかげでテロリスト達を知れた」

文に手帖を渡した時、初めて文から一筋の涙が流れた。すぐに拭って代わりにさっき見せた笑顔で、

「ありがとう」

余談だが、工場長は博麗神社に戻らなかったそうだ。どっかで事故でも起こしてなければいいが。

第35話 M y s t e r i o u s M o u n t a i n (愉快な住人達 (後書き))

本当に最後

楓「第18回にして本当の最終回の幻想郷ラジオ!」

稟「またですか。どうせ特別編はするかもしれないとか言って続けるつもりなんですね。分かりますよ」

楓「ガチで終わりです」

稟「その言葉に嘘、偽りはないと誓えるか？」

楓「誓います」

稟「嘘だな。素直すぎる」

楓「じゃあ理由を述べようか？」

稟「ご自由に。どうせもうネタがないとかそんなんだろ？ だってら最初からするなって言いたい」

楓「一理ある。だけどそんなもんじゃない。

考えたんだけど、正直おまけを後書きで使おうだなんて考えが間違ってた。長ったらしい後書きなんて無駄な時間を作るだけ。わざわざそんな時間を使って読んで貰ってる読者に失礼だ。読者は何より本編の続きを知りたがる。こんなどうでもいいおまけなんか消えたって構わない。貴重な時間を削って読者はこの小説を見ている。なら無駄な時間は削減すべきだ」

稟「……」

楓「だからここで打ち切り。君の嫌そうな顔が後押ししてくれて決断できたよ」

稟「嫌そうになって……」

楓「私だって止めたくないけど仕様なら従うだけ。もういいかしら？」

稟「……」

楓「……了承すると見ました。では最後に、今までこのおまけを貴

重な時間を削ってわざわざ読んで下さってありがとうございます。
今回で最後。絶対です。もうしません。それでは……お別れです。
本編で会いましょう……」

第36話 Last Remote 一瞬のすれ違いが招いた終劇（前書き）

初の一万文字越え。でも人気があまりないのがこの小説。

何処が駄目なのかも指摘して貰えれば改善する努力はします。

第36話 Last Remote（一瞬のすれ違いが招いた終劇

『Please come again』

「頭打ちましたか常盤さん？」

通信機から聞こえた声に対して一言。英語が聞こえたので言ってみた。

『それ酷くない！？ 一応女の子なのに！？ とうか頭動きませんから何処にも打ちません！』

「一応…って何ですか？ そっちの方が気になりましたけど……」

ここは博麗神社の一室。霊夢が貸してくれた、所謂俺の部屋である。

時刻は昼過ぎ。昼食は食べた。文に会ってから三日後だ。

「しかし不思議な機械ですねえ。にとりなら喜んで飛びつきそうなの…」

今言ったのは何故か縁側に座りながら俺と通信機を見ている文。

新聞のネタを効率良く整理する為に聞きに來たらしい。

まあ文はほっとくが、まず昨日の出来事なんだが、早苗は遂に守矢神社に帰った。トラウマを克服したのだ。

文に久しぶりに会えたのが要因かと思いきや全然違ったのだ。少し回想しよう。

「靈夢さん、稟さん、今日守矢神社に帰ります。数週間お世話になりました」

「守矢神社って、早苗大丈夫なのか？ 文に会えたからトラウマが――」

ここまでは普通の流れだったのだが……。

「えっ？　トラウマって何の事ですか？」

「「はい!？」」

早苗はトラウマなど最初から無かったように振る舞ったのだ。早苗は博麗神社で数週間お世話になったことだけしか覚えておらず、あの日を全く知らないと言うのだ。

「こう…その日だけ何も無かったように思えるんですけど。空白というより存在しなかったというか……」

記憶障害が起きてしまったのかと焦ってしまい、今すぐ永遠亭に連れて行こうかと考えた時に参拝……ではないが客が来た。

「ま、間に合った」

人里の守護者、上白沢慧音だった。

聞けば早苗が人里への買い出しに行った時に慧音と偶然会い、慧音は早苗にトラウマがあって博麗神社にいらると知り、慧音の能力で『トラウマの原因となったあの日が無かった』事にしたと説明して

くれた。

戻した後で急に博麗神社に行ったのだから慌てて追い掛けたりしない。

それで納得がいった。能力の応用というか、人が体験した歴史にも効果ってあるんですねえ。

――

という訳で慧音によって早苗は無事守矢神社に帰れた。あの二人の神様のことだからきつと復帰パーティーとか開いてドンチャン騒ぎしてそうだ。

「あ、稟。私ちょっと永遠亭に寄っていくから留守番頼むわね」

ちょうど縁側の文が座る所と反対から部屋の前を通った霊夢がついでに俺に留守番を頼んできた。相変わらずだが、早苗はもういないから仕方ない。

空を飛べないし今のところ行きたい場所は……。

「霊夢、ちょっと待って。……いやちょっとでいいから待ってって。だからすぐ済むから降りて来て下さい!」

「すぐ済むなら早く言えばいいのに」

必死に止める俺に呆れたように首を振り、地面に降りる霊夢。

「で、何?」

「永遠亭寄るなら常盤さんに会ってくれないか?」

「はあ？ 何で私が？ 面倒臭い…」

「頼みます！」

「……はあ、仕方ないわね。そのかわりお賽銭入れなさいよ」

そして永遠亭へ飛んでいった。そういえば頼まなかったら永遠亭へ何しに寄るのだろうか？

「いやあ、相変わらずお二人ともいい感じじゃないですか」

「それ以上言ったら地面に埋めるぞ？」

「おお、怖い怖い」

おどけた調子でからかう文。あの三日前の真摯な態度は何だったんだろうか……。

と、ある事実を思い出した。

「そういえば文、霊夢が俺に……告白？ した時の記事を書いたそうだが、何故知ってる？」

瞬間、文は顔を背けた。ということはつまり。

「私を誰だと思ってるんですか？ 私は幻想郷最速を冠する者d」
「さあ、正面を向いて正直に話して貰おうか。今の俺なら地中深くまで生き埋めにもできるぞ？」

「はははは……」

作り笑いをしながらずりずりと足を引きずるように後ずさる文。
じりじりと迫る俺。

「逃げようとしてるんじゃないよな？ 今なら拳骨で済むかもな？」

「し、仕方ない……ですね…。じ、実は…」

すると突然強い風が俺に吹き付け、体勢が一瞬崩れた。文が葉団扇を使い風を巻き起こしたのだ。

「隙あり！」

その一瞬の差で、さすがは幻想郷最速。あっという間に上空に逃れた。

「あ、あれ？」

しかし、文は速度が落ちている事に気づいた。それだけじゃない。高度も下がっている。

「な、なんで！？　ちょ、ちょっと！」

文は空中でもがきだした。失速どころか地面に向かっていく。つまり落ちていくのだ。地面に引き寄せられていると言ってもいい。

「ぎゃっ！」

結局文は地面に落ちた。しかも博麗神社の庭。目の前に俺。

「ひい！？」

「気づかなかっただろう？　文、君はもう逃げられない」

「私に一体何を！？」

「君は俺の能力を忘れたか？」

鬼の首でも取ったかのように勝ち誇った表情で文を見る。

「あなたは確かツルハシとスキルを操る能力」
「そう。これもツルハシに宿るスキルだ！ ツルハシスキルでこの旗を召喚した！」

『集符 ワンダフルフェスタ』

「名前ダサッ！」

「仕方ないだろ！ スキル名と合わせないと」

ではでは説明するが、取り出したツルハシはワンダーツルハシ。旗を召喚し、対象者を旗に吸い寄せる。

本来は生き物全てだけでなく埃とかも集められ年末大掃除には家庭に一本は欲し――。

ゲホンッ、ゲホンッ、失礼。だが俺の場合対象者のみを旗に引き寄せられるなんとも都合よろしくなスキルな訳だ。ただし対象者は目に見える範囲でなければならない。

「さあ、全てを話して貰おう」

「そ、そんな怖い顔しないで下さいよ。逃げれないんですからね、ね？」

その後、因幡てると共謀しててゐから情報料を払ったと正直に白状してくれた。文を避けないようにはしたいが、こういうやり方にはしっかり叱らなくては。

だから小一時間旗に縛り付けながら説教しました。主にやっていい事悪い事を。ついでに後でても縛り上げようと思う。

「やっぱり霊夢さんと何処か似てる気が…」

「んー？ 何だって？ よく聞こえないなあ」

「い、いやあ、ただの独り言ですよ！ 私は反省してますよ」

手をブンブン振りながら否定する文。避けないようにとは思ったが、逆に避けられてしまった。やっぱりやり過ぎたかな？ 文は常に一定距離を保ちながら話すし。

「そういえば、さっきの通信機に霊夢さんが行った事を伝えなくていいのですか？」

「あ！」

迂闊だった。さっき来てほしいって言ってたのだから霊夢が行った事を伝えなくては。

部屋に入り、置いてある通信機の電源を入れた。

「あ、常盤さん？ 今霊夢が向かっていってますけど、大丈夫ですかね？」

『霊―が？ うー、―あい―な。―――ら聞―い―』

違和感。今飛び飛びでしか聞こえなかった。

「常盤さん？」

『―い。――間―合―――かも』

やはり飛び飛びだ。通信機が故障したのか？

「常盤さん？ 聞こえますか？」

『時―――ない。―――が来――』

聞こえる単語が減り、そして反比例して増えるノイズ音。俺は叫んだ。

「常盤さんッ！」

『し——————ザッ、ザザー——』

完全にノイズ音へと変わった。通信機が故障したのかもしれない。

「どうしましたか？」

相変わらず一定の距離を保って聞いてくる文。でも構わず俺は文に近づいて文の腕を掴んだ。

「えっ！？ あ、あの」

「文、お願いがある。にとりの場所に連れていってくれ！ 通信機が繋がらないんだ。どうしよう」

自分でも驚くぐらい取り乱していた。常盤さんと唯一繋がる通信機。もし壊れていたなら繋がりが絶たれてしまう。そう思い必死に文に頼んだ。

「わ、分かりましたから落ち着いて」

「で、でも早くしないと…」

「ハア、全く……」

落ち着けない俺を見て溜め息をついた文は少しでも浮くと襟首をガシッと掴んだ。

「にとりですね？ それ、しっかり持って下さいよ」

「あ、いや、襟首はちょ——」

ぶら下がる形での飛行のおかげで幻想郷最速のスピードを妖怪の山までしっかり身体に叩き込まれた。次からはちゃんとした姿勢でしようと思ったのはこの間で何回あっただろうか……。

――

妖怪の山の内部は実は外の世界の道具が出回って相当文明が進んでいると噂されているが、結局のところ真実は知らない。

妖怪の山の溪谷辺りににとりの工房があるという事で目の前に連れて来られたのだが……。

「うえっ…気持ち悪い…」

霊夢以上魔理沙以上の速度で飛ばされれば重力はより感じやすい。中の物が押し上げられるような感覚がして気持ち悪い。近くの叢でうずくまるように身体を屈める。

ガチャ。

まだ気分が優れないのにドアが開いた。頭だけ動かしてちらりと見てみた。開けたのはにとりではなく見知った顔。

「あん？ 桜之宮じゃないか。うずくまってどうした？」

「工・場・長！？」

出てきたのは若干変人な外来人、工場長こと……何だったわけ？

「親友の名前忘れるか普通!？」

「おっ?　もしかして稟さんの知り合いですか?」

俺と工場長のちょうど中間に控えていた文が工場長に寄る。

外来人テロリスト以外に二人いるとは教えたが直接会うのは初めてだ。

「貴女は?」

「私、文々。新聞を作る鴉天狗の新聞記者で清く正しいがモットーの射命丸文と申します。以後お見知りおきを」

「そうかい。新聞記者がいるとはいやはや驚いた」

新聞記者にそれほど驚くのも珍しいがそれより工場長がにとりの工房から出てきた方が珍しいし驚いたわ。

「では早速取材してもよろしいでしょうか?」

「ちょうど休憩だしな。いいぜ、引き受ける」

「こらあ!!　誰が休憩していいって言ったかあ!」

突然工房から怒号が響く。ビクツと身体を震わせた工場長。

「取材はまた今度でッ!」

工場長はにげだした!

しかしまわりこまれてしまった!

河童製のびくるアームに捕まった工場長は見事に工房へ逆戻り。

「NOOOOー!」

悲痛な叫び声だけが妖怪の山にこだました。

「……まあ、入りましょうか」

「……だな」

若干ポカーンとして事の成り行きを見ていたが、事態は一刻を争うと思ひ出し工房に入った。

ああ、なんという事でしょうか。工場長自慢の力作である高機動車はもはや原型を留めないほどに解体され、にとりはその構造や部品を熱心に観察してました。

「おお、こんなゴツイ機械を製作中だったとは。いやはやこれはいい新聞が書けそうです」

文は初めて見る物体に興奮しながらシャッターを切る。もともとは工場長が作った物だ、なんて事言える訳もなく、

「さすが河童の技術」

と合わせておいた。奥で工場長がうなだれているのは多分気のせいだ。

「まあ、私も初めて見る機械だから解体して観察してるのさ。それより文が人間を連れてくるなんて珍しいね。一体何の用だい？」

にとりの目は、新しい発見をした探検家の如くキラキラしていた。幻想郷じゃ古い機械しか入ってこないし、2036年ものは相当貴重なものだ。

それはさておき、俺は通信機を取り出した。

「おや？ それは確か通信機だっけ？」

「実はさっきからノイズ音しか聞こえなくて。にとりさんなら分かるかなって思ったんで」

「修理依頼って訳ね。いいわ、河童は人間の盟友。ちょっと借りるよ」

にとりは通信機を手にとると電源を入れた。

扱い方を熟知しているようで、説明無しに調整をしていった。振ってみたりして異常は無いか調べるが、にとりを見る限りそこは大丈夫なようだ。

「うーん、装置は正常だけどなあ。ちょっと軽くバラすか」

するとにとりの服の袖からニュツとドライバーが現れた。そういうえげにとりは服の内側に工具をびっしり付けてるんだたったけ。

通信機をバラす様子を見てると正直常盤さんに何か影響あるんじゃないかって不安になった。常盤さんの説明じゃ意識を通信機に繋いで話してるって言ってたし。

「ほう。珍しいなあ。リーダー機能の装置がある。しかも回線が受信機と繋がってる」

にとりはもの珍しそうに感嘆しながら解体を終えた。あくまで表

面を見て異常が無いか調べるだけだから主要部分までは解体してない。当然だが。

作業は五分で終わった。最初と変わらない形の通信機が戻って来た。不安になりながらも聞いてみた。

「どう：でしたか？」

「通信機自体は故障してない。正常だよ。むしろ相方の方に問題があるんじゃないかな？」

相方……つまり常盤さんの通信機に問題が……って待てよ？ 常盤さんは通信機は持ってないし、意識を直接繋げてるようなものじゃないのか？

もし常盤さん側に問題があるとしたらそれは……。

瞬間的に不安が増大した。もしかして最も恐れていた事が！？

「あ、桜之宮。そういえば二時間くらい前に花火みたいな音が上がったよな？ あれ何なのか知ってるか？」

いつの間にか工場長が傍にいて聞いてきた。

確かに神社にいた時そんな音を聞いた。発信源は推測するに迷いの竹林だから、T r i c k C o m p a n yが何かやらかしたんじゃないかって思ってた。

通信機の障害は三十分前。謎の花火の音は二時間前。霊夢が永遠亭に行ったのは確か一時間前。

即刻決断した。

「文！ 永遠亭までお願いできるか？！」

それまでにとりの様子やらを撮っていた文が驚いて俺を見る。

「うわっ！？ な、なんでいきなり？」

「頼む！ 時間が無いんだ！」

いつの間にか土下座でお願いしていた。なりふり構ってられないから。

「何！？ あの桜之宮が新聞記者に土下座！？ こやつ、何者！？」

「人使い……もとい妖怪使いが荒い方ですね。……いつまでする気ですか？ 早く外に出なさいよ」

工場長はほっというて、襟首を掴んで引きずる文の手を掴んで立ち上がり外に出た。

「今度はしっかり掴まって下さいよ？」

「分かってる！ と、にとりさん、ありがとうございました！」

去り際にお礼を言った瞬間に強烈な負荷がかかった。二回目からか自然と体勢を保てた。

正直何が起きたか分からないが、常盤さんに霊夢、永遠亭が無事な事を祈った。

――

遡る事二時間。

「さん、にい、いち、発射ア！」

元氣良くカウントダウンを読み上げ、480mm高射式迫撃砲の砲弾が空高く打ち上げられた。

「あまり大声でカウントダウンするな。ばれたらどうする」

「だって兎もないし、別にいいじゃん。こっちの砲撃音がもっと大きいし」

迫撃砲の発射装置に座るリカに注意するのはホルト。

「場を弁えろと言ってるんだ。任務中だぞ」

「分かってるよ。それにチカはこの辺には反応が無いって言ったんだから」

「とにかく座席から離れろ。キョウジ達と落ち合うぞ」

「ちえ、つまんないの」

R R Fは既に竹林へ用意周到に潜り込んでいた。ホルトは二人ずつに別れ、ホルトとリカが陽動役、キョウジとチカが侵入役に振り分けるのを提案した。

リカは前回帰りにこれを見つけて陽動にぴったしと考えていたからだ。

やがてガサガサと茂みを掻き分ける音が近づく。

「むやみな戦闘はしない。早く行くぞ」

「それじゃ、ほいっと」

去り際にリカは時限爆弾を作動させて竹林へ姿をくりました。

当然竹林に一番近い永遠亭は非常事態を想定し、スチュアート率いるTrick Companyは永遠亭を囲むように包囲、さらに

楓の部屋に永琳、鈴仙、てゐが待機した。輝夜は多分部屋で寝てる。

「鈴仙、あなた月にいた頃を思い出したんじゃない？」

落ち着かない様子の鈴仙を見て一言。鈴仙には月に居たところに戦争になると聞いて一目散に逃げ出した経験を持つ。

「大丈夫です。患者を見殺しにはしませんよ。相手は月人でもない人間ですから」

鈴仙も昔の自分じゃないと心の中で言い聞かせた。地上で千年以上隠れ住みながら自分を鍛えてきたのだから絶対に見捨てはしないと。

再び爆発音が竹林から響く。衝撃が強いのか永遠亭を揺らし、置いてある道具がかたかた揺れた。

「奴らがいたあ！ 総員攻撃！」

外でスチュアートの号令が聞こえると銃の発砲音が玄関先から響いてきた。

「……………」

三人は事の成り行きに任せるだけで決して動こうとしなかった。しかし、この方法はむしろ徒となった。

遠くから発砲音が聞こえる中、ふと襖の隙間から煙が流れてるのを永琳は見た。

「はっ、まさか！」

永琳は考えた。わざわざ守られてる場所に行く危険を冒すより永遠亭に火を放てば簡単ではないかと。

「うどんげ！　てゐ！　患者を運びなさい！」

「え！？　師匠、何を！？」

鈴仙の言葉を耳に入れずに永琳はすぐ襖を開けて確認した。隣の部屋は煙が充満していた。

「まさか火事！？」

煙を見て真意を掴んだ鈴仙とてゐは楓を持ち上げようとした。

「早く患者を安全な場所……うつ」

振り向いて命令した瞬間に目眩を感じた。煙は隙間から既にこの部屋を満たしていたのか？

（いや、目眩じゃない！　これは……催眠ガス！）

時既に遅し。既に部屋に充満した煙を多く吸い込んでいたのか、意識が遠のき永琳はその場で倒れた。

「し、師匠！？」

「鈴仙、駄目だ！　戻らな……いと……」

永琳が倒れてすぐ駆け寄ろうとした鈴仙にそれを止めようとしたてゐも既に煙を吸っていた。永琳同様二人も倒れた。

(Trick Companyが……包囲網を作っていたのに……どうやって……?)

意識が落ちる寸前に鈴仙は考えたが、ゆっくり意識は落ちた。

やがて障子を開けて中に入ってきたのはガスマスクを付け、拳銃を持ったキョウジ。

(チカの能力で包囲網の動きを把握して出来た穴から侵入し、上手く睡眠ガスを屋敷に充たせられた。絶対にばれるはずがない)

薄ら笑いを浮かべながら、キョウジはてゐの傍の楓を見つけた。

(あなたも悪運が強かったですが、ここまです。一発で仕留めてあげますよ。これで我がRRFは勝利を収め、あなたの所属するPMCもろとも滅ぼしてあげますよ)

キョウジは拳銃上部をスライドさせて楓の心臓に当たる部分と銃口を密着させる。

(ではさようなら、一族の裏切り者さん)

引き金を引き、乾いた銃声が鳴り響き、弾丸は楓の心臓を貫いた。

キョウジが振り返り、出ようとしたら後ろで誰かが立った気配を感じた。

（な、まさかまだ生きて！）

すぐ振り返り銃を向けると、それは楓ではなくてゐだった。

（待て。まだガスは充滿しているのにこいつは何故立てる？）

いずれにしろ見られたから始末する。キョウジはすぐに発砲し、てゐを貫いた。だがてゐは倒れなかった。

これにはキョウジも驚愕した。

（ば、馬鹿な！ 正確に心臓ではなくとも三発貫いたはずだ！ 何故立てる！？）

そしててゐはキョウジを嘲笑うように笑い声を出した後、こう言った。

「かかったな、マヌケめ！」

瞬間、楓とてゐの身体は破裂し強烈な風が巻き起こった。そう、前に鈴仙に使ったあの変わり身風船人形だ。

（うっ、人形か！ まずい、吹き飛ばされる！）

何か近くの物を掴んで凌ごうとしたが間に合わずキョウジは障子突き破り庭にほうり出された。ガスも障子も全て飛んでいき、庭に残骸が散乱した。永琳と鈴仙は本物だったが、運良く巻き込まれ

ずに済んだ。いや、てるは計算していたかもしれない。

キョウジはがらくたを押し退けて立ち上がるとすぐ竹林に身を隠した。

「よくも……よくもこの私を騙しましたね！ 絶対にこの竹林で仕留めて上げますからね！」

捨て台詞のように去ったが、計算して言ったなど誰も聞いてないから分らない。

てるは楓を背負いながらT r i c k C o m p a n yの包囲網に紛れ込み事なきを得ていた。

「今風船が爆発した。逃げるなら今のうちか」

追っ手を心配したてるは、周りを囲んでた兎にばらばらに逃げて貰い、敵を混乱させる作戦に出た。

「敵は四人なんだから当然陽動が必要ね。上手くごまかせればいいんだけど……」

スチュアートは玄関前の竹林で戦闘中。てるはできるだけ遠回りして竹林を出るルートを選び出し、ルートが決まると一目散に駆け出した。

「目標はこの先、距離にして後三百メートル」

チカは走りながらキョウジにてゐる位置を教えた。

「どうやら大きく遠回りする気だな。リカとホルトに連絡して挟み撃ちにしましょう。竹林はあなたたちしか熟知していないと思ったら大間違いだと教えてやりましょう」

先程同様薄ら笑いを浮かべて後を追い掛ける二人。

「！、目標が停止。前方に二人。リカとホルト指揮官」

「おや、決着を付けましたか。ふふふ……、あっはっはっは！ どうやら私達に運が回ったようですね！ これでチェックメイトといきましようか、常盤楓！」

全て計算通り。二人が妖怪兎ごときに負けるはずがない。事が上手く運ぶと笑いが込み上げる。そう考えながら徐々に距離を詰めていく。

てゐはいよいよ追い詰められている。

（まずい、まずいよ！ 何であいつらがここに！？）

スチュアートと戦闘をしていたはずの敵が目の前にいる。こちらには気づいてないが、このまま逃げ通すのは難しい。

（追っ手も気になるし、ここはルートを変えよう。確かこの辺に…）

そろそろと音を立てずに横に移動し、ポイントに着くと再び駆け出した。

二人は駆け出した音に気づいた。

「いたぞ！」

ホルトはすぐに例の暗殺銃を取り出し、てゐに向けて撃とうとした瞬間だった。

ヒュン！ バシッ！

「くっ！？」

竹がしなったかと思うや否や竹はホルトの手に強く打撃を与えて暗殺銃を落とさせた。

「きゃん！」

リカも落とし穴にはまり、てゐを見失った。

「竹林を熟知してるだけに抜かり無いか。だが……」

ホルトは銃を拾い直すとリカを引き上げ、てゐとは違う方向へ行った。

必死に逃げる事だけを考えて駆け出してる。

あともう少しでてゐるは失敗してしまった。筈に足を取られたのだ。走る事に集中し過ぎて小さい筈に気づけなかった。おもいつきり前のめりになって転び、勢いで楓の身体もほうり出された。

「痛た……ハッ！」

痛みを気にせず飛ばされた楓に駆け出する。竹が揺れていたの
で竹にぶつかって止まったのだろう。

「やべえ！　だ、大丈夫だね……」

一瞬近づくのを躊躇ってしまったが、一刻を争う今は考えてる場合でない。すぐに背負おうと首に手を回した時だった。

「うっ……ううっ……」

「へ？」

今の今まで決して意識は戻らず、生きた植物人間であった楓の目が開いた。

「……竹林……？」

「うっそ！　まさか竹に当たった衝撃で意識が回復した!？」

信じられないが、事実、常盤楓は意識を取り戻した。

だがどちらにせよ喜ぶ暇など無い。今すぐ逃げなければ。

「意識が回復した？　ほう、それは良かったじゃないですか。貴女自身の目で自分の死を見られるのですから」

てゐるも聞いた事がない男性の声。有り得ない。距離にしても計算

じゃ後二分はあったはずなのに。

「いいですねえ。その絶望に満ちた表情！ 想定外の事実に恐怖する姿！」

てるも楓も声の発信者を見ている。楓はまだぼやけて見えているが、徐々に焦点が定まり、はっきりとその目に姿を映し出した時、

「あ、あんたはキョウジ！」

身体の内側から闘志が湧き出てきた。身体各器官が一瞬にして活性化し、立ち上がりとしたのだが、

「あっ」

ドサツと倒れた。腕に、足に力が入らない。ガクガクする腕で何とか上半身を起こして竹に寄り掛かった。

当然である。約一ヶ月間意識だけはあったとはいえ身体は寝たきりだった。その間筋力は衰える。たった今身体が目覚めたばかりであり、とても戦えそうな状態じゃない。

「おやおや、目覚めたから用心しようと思ってたが、ずっと寝たきりだったみたいで、なら近づいても大丈夫か」

楓を見下すように見つめるキョウジは銃を構えて一歩近づいた。

もうてるも恐怖で動けない。蛇に睨まれた蛙の如く、あわあわと口をパクパクさせながら見ていた。

上部をカシヤンとスライドさせ、拳銃を楓に向けて、

「死になさい」

銃声と共に銃弾は放たれた。

だが外れた。楓はそこにいなかった。てゐも消えた。

しかしキョウジは今度は驚かなかった。ほんの数十メートル先にいるのが分かったから。

てゐは何が起きたか分からなかった。気づいたら楓に抱えられて敵から離れていた。

「い、今のは…」

「今……私のスペルカード……『迅符 剣劇一閃 逡巡』で……数十メートル移動出来ました……」

楓は呼吸が荒いまま説明した。超高速で移動できるスペルカードだ。しかし、負荷は身体が慣れてない状態では耐えられず数十メートルで息が上がり倒れた。

「ハア……ハア……私はもう無理です……。あなただけ……逃げて下さい……その為に使ったんですから……」

「な!?! 患者を見捨てて自分だけ逃げろって言うのか!?!」

普段のてゐなら絶対発言しない言葉だ。たった今助けられたから生じた言葉なのか、てゐにも分からなかったが、ここまで来たのだから見捨てたくはなかった。

「人里だってすぐだ! とにかく背負うからね!」

「違います!」

その発言は背負われるのを拒んだのか、それとも別の事なのか。

「あなたは……伝えなくてはならない! 永遠亭で、ここで何が起きたのかを……! 伝えるだけが……あなたの役目です。だから私はあなたを助けた……!」

もう敵は迫ってる。これ以上問答していればどちらとも殺される。

「早く……私は……大丈夫だから……!」

てゐに無理に笑顔を見せて言った。てゐの目は完全に涙腺が崩壊した。

「わ、私は、人間を幸運にする程度の能力だから、あんたに幸運を渡すわ」

「……ありがとう」

「絶対、助けるから!」

てゐは楓を置いて一気に駆け出してこの場を去った。

見届けた楓は痛む身体を引きずりながら、さっきと同じように上半身を起こして竹に寄り掛かった。今度は頭も支えるようにして。

今回はすぐ隣にも竹があった。

（銃は内ポケット……気づかれない内に……）

楓は腕を動かして制服のボタンを外して内ポケットをまさぐり、銃を取り出すと後ろに隠した。

「見つけましたよ。本当に悪運が強いですねえ」

「キョウジ……」

再び相対した二人。圧倒的にキョウジ優勢なのに対して楓は自然と笑みを浮かべた。

「……何笑ってんだ？」

「別に」

楓の笑みが癪に障ったかいらついたキョウジ。

「いいか。お前は今から死ぬ。そして我々は速やかに元の世界に戻る。これで我がRRFの勝利は確固たるものとなる！それが分からないのか？」

「RRFの確固たる勝利か……フフッ」

楓にはそれが滑稽に聞こえてつい笑った。

「て、てめえ！ 何笑ってんだ！」

「だってそもそもRRFは全部先輩の部隊に足止めされてるのに、私を殺しただけでそんな自信は何処から来るかなって思ったからっ

い……」

「だが、あんたも主戦力の一人だ。あんたが抜ければPMCなど簡単に捻り潰してあげれますよ」

「……ふ、ふふっ……」

キョウジは既に勝ったつもりでいるらしい。全く先輩を知らないと分かると笑いを抑えるのに精一杯になった。

「もう勝ったつもりでいるわけ？ 不確定な未来にどんだけ希望載せてんのよ。馬鹿じゃないの？」

「て、てめえ、さっきから黙って聞いていれば好き勝手言いやがって！」

楓の挑発に苛立ちが募り、今にも引き金を引きそうだが楓は逆に狙ってた。一瞬の勝負に持ち込めれば相打ちかもしれない。そう考えていた。

「私を殺したただけではRRFは負け続けるのよ」

「黙れ！ 黙れ！ 畜生ッ！ あんたも先輩とやらも殺してあげますよ！ 残酷にね！」

キョウジは楓の頭を狙い、銃を撃った。

でも楓は頭を狙う事を予測済みだった。だから引き金が引かれる瞬間に少し頭を動かしてかわした。

同時に竹に固定していた銃をあらわにした。身体が弱っても引き金を引ける力があるし、竹で固定すれば銃はブレない。

「なっ！？」

「あんたの負けだ、キョウジ」

楓の銃が発砲された。

第37話 静かに消えた（前書き）

後半が恐ろしい程の自己解釈となっています。理解できたら多分相当ですよ。

第37話 静かに消えた

銃は撃った。それは事実。キョウジは弾丸を避けられて一瞬怯んだ。その瞬間に私は撃った。

キョウジに固定した銃の弾丸は確実に当たったはずだ。

なのに……

なのに……

なんであいつは平然と立ってるの？

何で？

何で？

何で私の身体が出血してる訳？

……そうか。撃たれたのはあいつじゃなく、私だったのか……。

それでも私は銃を撃ったはず……。発砲音は二つ。確かに二つだった。あいつは……。

迷いの竹林の端に当たるこの場所で楓とキョウジは相対した。キョウジは拳銃を仕舞った。

（銃を竹に固定して撃つて来るとは……私も挑発に乗りすぎて見抜けなかったようだ。しかし残念ながら、勝ったのは我々だったな）

キョウジには傷一つない制服を軽く叩いてついた埃を落とした。

楓はさっきと変わらない体勢だった。ただ違う点を挙げるなら、男子学生が着る学ランのボタンを外した部分の奥、白いブラウスが徐々に赤に染まっている事。背後にある支えの竹にも血が流れ地面に垂れている。真正面に弾痕はない。背中に弾痕がある。

「へっへーん、心臓ど真ん中♪」

楓の背後から現れたのはリカ。銃から硝煙が出ていた。続いてホルト。さらにキョウジの背後からチカ。これでRRFメンバーが揃った。

「始末したか」

「私がやったんだよー。褒めて褒めて♪ キョウジさん」

ホルトが横目で楓を見て言うとうち自分の手柄を自慢してキョウジに称賛を求めた。

「褒めるのは後にします。まず脱出しなければ。我々は目立ち過ぎました」

「キョウジさん。楓はかろうじて生きてますが、どのようになさいますか？」

キョウジは安全を求め脱出を提案するとチカが楓の状態を報告した。楓はピクリとも動かない。

「ほっというてももうじき死ぬでしょう。チカ、周りを感知して安全なルートを探しなさい」

「畏まりました」

R R Fメンバーはチカの先導のもと誰にも見つかる事なく迷いの竹林を脱出し、姿を眩ませた。

ただ一人残された楓。致命傷なのがよく分かった。それでも必死に手を動かした。

ゆっくりな動作でポケットから取り出したのは信号弾。

（あの子はもう逃げきれたかしら？ もう何しても間に合わない。せめてこの場所だけでも、私の存在だけでも、稟君、来てくれるよね……？）

もうすぐ死ぬ。身体も動かない。でも腕だけは動いた。何かを伝えたい強い意思が動かしている。

信号弾を上空に発砲した。きっと敵は来ない。まだ意識があるうちに、まだ目が見えるうちに、会いたいと願いながら。

「な、何よこれ！」

霊夢は永遠亭の惨劇を目の当たりにした。途中の竹林では破壊された鉄の物体。ぐったりしている多くの兎。そして永遠亭には迫撃砲でえぐられた穴。障子やら家具やらが散乱した庭に永琳と鈴仙が部屋で倒れている。

誰がどうみても襲撃されたのが分かるこの惨状に啞然とするも、すぐに永琳と鈴仙を叩き起こした。

「ちょっとあんた達何をしていたのよ！」

「ん……霊夢……？　ハッ！　患者は！？」

霊夢に叩き起こされバツと立ち上がった永琳は周りの惨状に霊夢同様啞然とした。

「一体何が起きたのよ！　あんたともあろう者がどうしたのよ！」

「外来人テロリストよ。あいつらに眠らされた」

「眠らされたって?!」

テロリストと聞いた瞬間、霊夢の顔が陰しくなった。永琳は屋敷中に催眠ガスが放たれていたことを話した。

「私の計算ミスだわ。相手がここまで裏を掻くとは……」

「う……ん……し、師匠……？　ハッ、私いつの間に寝て……って、な、なんじゃこりゃあ！」

永琳の説明中に鈴仙も目が覚めて周りの惨状に驚いた。

「て、てゐは！？　患者もいない！」

鈴仙はてると患者がいない事に気がつくとすぐに永遠亭を飛び出し竹林に向かった。永琳も霊夢もついていった。

「てるーっ！ 何処にいるのーっ！」

竹林に向かって大声を上げる。すると竹林から泣きながらるが現れた。三人ともてるが泣くなど微塵にも思ってなかったから驚いたが、逆に事の深刻さを物語っていた。

「てる！？ どうしたの！」 「鈴仙！ お師匠様！ 霊夢！ 今すぐ患者の元に来てくれないと患者が殺されるよぉー！」

てるの発言に三人は衝撃を受けた。だが、永琳だけ別の思考に切り替えててるに問い質した。

「てる。あなたまさか患者を見捨てて逃げ帰って来たんじゃないわよね！」

「ち、違います！ 患者の意識が回復して私を逃がしてくれたんですよ！」

その瞬間、てるに飛び掛かったのは鈴仙でも永琳でもなく霊夢だった。

「楓の意識が戻ったって本当！？」

「ほ、本当だよ！ でなきゃ私も殺されてたんだから！」

「場所を言いなさい！ 竹林の何処よ！」

一刻も早く会いたい霊夢はてるの肩を掴んで揺らした。

「わ、分かったから！　すぐ案内すr」

パン！

四人の動作が停止し、空を見上げた。空には緑色の煙があった。

「あれは確か信号弾。患者はあそこよ！」

永琳が叫ぶと霊夢は上空に飛び、煙の出所を探した。

「見つけた！」

霊夢は地上から尾を引いた煙を見つけるとそこまで近づいた後で一気に降下した。

地面に降り立ったのはいいが、地面からの煙は既に風に運ばれてすぐに楓を見つけれなかった。

「楓！　いるんでしょ！　返事なさい！」

叫びながら周りを捜す霊夢。茂みの奥を掻き分けた時、竹に寄る人影が見えた。

「楓、楓なの！？」

人影を確認して近寄った霊夢は次の瞬間、言葉を失った。

身体は竹に寄り掛かりながら頭は垂れてぐらぐらと揺れ、周りには赤い血が滴っている。

霊夢は一種の悍ましさを感じた。妖怪退治なら例え妖怪を殺しても身体は消滅するから別に気にした事など一度もない。

人間は初めて見た。あまりにもグロテスクで、見る者に嫌悪感を漂わせ吐き気も催しそうだった。

霊夢はぐっと我慢して楓に近づく。触るのには抵抗があったが、勇気を出して顔をペチッと叩いた。

「楓！　しっかり！」

「ん……、ううんー……」

かろうじて楓は生きていた。楓の目は虚ろだが霊夢をしっかりと映し出した。

「霊夢……」

「楓、気がついたのね！　今すぐ医者来るからそれまで」

「ゴメン……間に合わない」

パアと明るくなった霊夢の顔は再び不安と恐怖と共に楓に向けられた。

「自分で……分かる……後……数分しかもたない」

弱々しい声を紡いで霊夢に自分の状態を伝えた。その時霊夢は気づいた。楓が喋る度に服の赤が濃くなっている事に。まだ血が出る。

「楓、もう喋らないで。医者がもうすぐ来るから」

喋らせたら出血が酷くなる。霊夢はもう喋らせないように口を塞ごうとしたが、出来なかった。

「稟君に……会いたい……」

霊夢の心を揺さぶった。胸がズキンとした。まったく関係ないはずなのに。

「稟に……会いたいの？」

「死ぬ前に……一目見ておきたい……」

知らず知らず霊夢は泣いていた。涙は頬を伝わって落ち、足元の血溜まりと混じった。

「だったら生きなさいよ！ 稟に会いたいなら、死ぬって言わないでよ！ 生きて会いなさいよ！ 頼むから……、もう死ぬなんて……言わないでよ……」

霊夢は楓が生きるように叫んだ。でも虚しいだけ。そのうち声も小さくなって、顔を沈めて、涙だけは流し続けた。

不意に誰かが霊夢の頭を撫でた。

「泣かないで。……私は大丈夫……だから、ね？」

楓が血だらけの手の平で頭を撫でて、ニコツと笑顔で霊夢を慰めた楓。どうして笑顔でいられるのか、どうして大丈夫って言えるのか、霊夢には分からなかった。

「霊夢ッ！」

竹林の奥からようやく永琳達が姿を見せた。霊夢は涙を拭い、怒った。

「遅いじゃない！ 早く手当しなさい！」

だが、永琳は患者を見た瞬間に動きを止めた。鈴仙もてゐも同じように止まった。

「な、何してんのよ……？ 早く手当しないと」

「霊夢。もう手遅れよ」

永琳は正直に言った。霊夢は固まったかのように動けなくなり、口だけ動いた。

「あ、あんた、何言ってるの？ 医者でしょ？ 医者なら早く手当しなさいよ」

「ここは迷いの竹林。設備もなければ延命できる薬もない。出血量から見てもう限界よ」

永琳の言った事が信用出来ない。でも永琳は客観的に、それでも残酷な事実を突き付けた。

そして何より彼女は外来人であり、死んでしまおうがまるっきり幻想郷に影響は無い。

でも信じたくなかった。楓の死が間近なのを受け入れたくなかった。どうしても彼女の願いを叶えてやりたかった。

「なんで……なんでなの……」

膝を付き、手を地面に付けて、崩れ落ちた。誰も何も言わなかった。

「……霊夢……」

楓の弱々しい声が入った。

「楓!!」

霊夢は身体を上げると振り返り、楓の身体を掴んで永遠亭に持つていこうと考えたが、鈴仙に羽交い締めされた。

「れ、鈴仙、離さないよ!」

「落ち着いて下さい! 何する気ですか!？」

「私が楓を一気に永遠亭に運ぶ!」

「駄目です! もう間に合いませんし、今動かしたら死期を早めるだけです!」

羽交い締めされながらも必死になって楓をどうにかしようとする霊夢を見て、クスリと笑った。

「私なんかの為に泣いちゃって……」

「泣いてなんかない! ふざけてる場合じゃないでしょ!」

「大丈夫……。私がいなくても……。希望があるから……」

鈴仙に抵抗していた霊夢の動きが止まった。

「稟君は……。普通の人間に見えるけど……。何かを秘めてる……。もしかしたら……」

楓の声は弱く途切れ途切れ。いつ事切れてもおかしくない。

「霊夢……。伝えて……。あなたなら勝てるって……」

もう霊夢も誰もが楓の言葉に耳を傾けるだけしか出来なかった。

「皆……………ありがとう」

長い空白が続き、感謝を述べると、楓の虚ろいでいた瞳が瞼を閉じられた事で見えなくなった。

「楓？」

羽交い締めから解放された霊夢は地面に手をつきながら楓に近づいた。

「稟に会いたいんでしょ？ 目を開けなさいよ。もうすぐ来るから」

優しく楓に語りかけた。でも瞼は上がらない。

「ねえ？ どうせまた意識だけ生きてるとかなんでしょ？」

そう信じたかった。神社に置いてある（稟が今持つてるとは知らない）通信機からいつもどおり声は聞こえるはず。そう信じたかった。

霊夢の肩に誰かの手が乗った。永琳の手だった。

永琳は首を振った。永琳も哀れむような瞳をしていた。鈴仙もてゐも同じだ。

霊夢は永琳にしがみついた。もう誰でも良かったかもしれない。

声を押し殺すように啜り泣いた。

竹林の間から差し込む日の光は楓の顔を照らし、その微笑みは幻想で神秘的な趣を感じさせた。

全ては、悪夢は現実となった。永遠亭の惨状を知ったのはにとりの工房を出て僅か三分後だった。

後どれくらい早ければ真実を見れたのか？　むしろ真実を見れないのが良かったのか？

どっちにしたって事実を決して変わらない。

鈴仙とてゐるが庭に散らかったがらくたを片付けている場面に出くわした。

事情が知りたいが為に地上に降り立ったが、二人とも俺を見た瞬間に言葉に詰まったように見えた。

「一体何があった！？　教えてくれないか？」

だが二人とも目を反らしたり俯いたりとして俺と視線を合わせてくれなかった。何も言わないから不安ばかりが増えていく。

ふと、縁側に永琳が現れたのを見て叫んだ。

「永琳さんっ！」

「あなたは…」

声の方向に向けてくれたはいいものの、永琳も同様に俯くように何も喋らなかった。

「どうして誰も言わないんだ？　これだけの惨劇なのに何でだ!？」

真実が知りたいのに誰も口を閉ざす事に不安と苛立ちが混ざり合い、情緒不安定となっていた。

「誰……?」

叫び声が聞こえたのか障子を開けて外を確認しようとしていた霊夢と瞬間的に目が合った。

「霊夢ッ！」

「稟ッ!？」

反射的に霊夢に駆け寄った。そのおかげで悪夢の事実を垣間見た。

「霊夢、一体何が……!」

霊夢が開けた障子から部屋を見た。

誰かが布団に寝ていた。そして顔に白い布が敷かれて。まるで誰かが死んだみたいだと思い……。

そこからは無我夢中だったと思う。霊夢を押し退けて部屋に入り、亡くなった人を見てみた。服の袖は見覚えのある学ラン。幻想郷でこれ来ている人はたった一人。

「そ……、そん……な……」

絶対大丈夫と信じていた。でも現実はどうなった。運命はこうな
った。

脳裏に言葉がフラッシュバックした。

『傭兵という職業柄、明日死ぬかもしれない。傭兵でいる限り、ど
んな場所でも戦争と同じ。死は何時でも私に降り懸かる。だからあ
なたに頼みたい』

尻餅をついた。腰が抜けたそうだ。その時発生した微風が白い布
をめくり上げた。

事実は決定的となった。常盤楓本人であった。

「う、うう、うわあああああああああつ!!!!」

頭を抱えて畳みに擦り付けて号泣した。常盤楓の死に対する悲し
みよりも、後悔の念が心を支配した。

なぜ通信機で来るように言われた時すぐに行かなかったのか？
それ以前になぜあの花火の音の時点で行かなかったのか？ なぜ霊
夢に任せてしまったのか？ なぜ故障と思いにとりの工房へ行っ
てしまったのか？

思えば今日の全ての行為が後悔の行動でしかなかった。

さらに俺は己の非力さを呪った。

仮に来たとしてテロリストに勝てただろうか？ 楓を守り通せられただろうか？ 誰一人傷つける事なく事態を終息させられただろうか？

答えはNO。あまりにも呆気ない結論。

レミリアの言った大きく動き出す運命とはこれだったのか？ それは分からない。

ただずっとうずくまるように号泣し、泣き止むまで霊夢も誰も手出ししなかったし声も掛けなかった。

――

夜。常盤楓が死亡してから約八時間が経過した。時刻にして亥の刻。上空では綺麗な半月が浮かんでいた。

迷いの竹林では壊された480mm高射式迫撃砲を直すべくスチュアートが一人作業をしていた。

「こんな夜にまで修復ですか？ スチュアート」

背後から聞き慣れない女性の声が聞こえた。瞬間的に背中の砲塔を構えて振り返り、発射した。だが砲弾は無人の竹林に飛んでいき、

竹に着弾した。

「こっちだ。M3スチュアート」

「だ、誰だデメェ！」

叫びながらも一度振り返ると修復中の砲台に座り、スチュアートを見下ろす形で女性はいた。女性の周りには全身鏡の大きさがあ
る六角形の鏡が二枚浮いていた。

「この幻想郷に來た経緯は問わないが、貴様は幻想郷にいるべき存在ではない」

女性がずっと手を挙げると二枚の六角形の鏡はスチュアートに迫ってきた。敵と判断したスチュアートは鏡を破壊すべく砲弾をセツトして発射した。

だが鏡に触れた瞬間砲弾は180。反転。スチュアートに帰ってきた。

「ギャヒイイ！」

スチュアートは被弾し、爆発した砲弾でだぼだぼセーラー服の一部が破れ、皮膚に火傷が残る。悲鳴を上げて後ずさるスチュアートは得意のチェンソーを取り出した。

「切る 切る 斬る 斬る 伐る 伐る きる Kill Kill
I You！」

電鋸『テリブルトラップ』

弾幕ではないが、鉄をも斬れる特別性チェーンソーを振り回して一気に女性に近づいた。それを見て女性はニヤリとした。

「おおおおお！ Kill More Enemy！」

チェーンソーがまさに女性に振り下ろされようとした時だった。

女性はあることか左手でチェーンソーの刃を掴んだ。起動中のチェーンソーは容赦なく女性の手の平をざっくり斬り、鮮血がチェーンソーを赤く染め上げる。

だが女性は悲鳴一つ上げずに刃を掴み続けた。

（おのれえ！ チェーンソーの刃を止める気だなあ！）

普通なら思い付かないが、そう考えたスチュアートはさらにチェーンソーに負荷を掛けて腕を縦に真つ二つにしようとした。

だがチェーンソーは鉄に弾かれたような音、更には火花を散らすも数ミリ食い込んだ刃は進まなかった。

「左手は機械義手だからな」

女性は左手の圧力を高めて掴んでいた刃にヒビを入れさせ、そのままバキッと折った。

幻想郷に来て今まで誰にも折られた事がなかった自慢のチェーンソーが折られた。

スチュアートは恐怖した。尻餅について後ずさる。

「な、何だよお前？ 人間じゃねえのか？！」

「人間だ。ちよいと異常な人間だがな。P－38から依頼を受けてな」

P－38と聞いたスチュアートは更に表情が青ざめた。

「お前……なんで?! あいつら知ってるんだ?!」

P－38とはスチュアートが聞きたくない単語である。元の世界と関連しているからだ。

「質問に答える義理はない。あんたは幻想郷から消え、元の世界へ帰る。これが私の仕事だ」

位相『無限合鏡平行干渉』

女性が宣言すると二枚の鏡がスチュアートの左右に配置された。いわゆる合わせ鏡をスチュアートを軸に作った。

何をされるか分からないスチュアートは体勢を立て直して逃げようとした。応援が必要だと考えたが、叶わなかった。

「ぐおあ！」

スチュアートの身体に電撃が走り動けなくなった。運動機関がショートしたのか指一つ動かせず倒れた。

「アンドロイドは核となる主要部分を停止させれば事足りる。貴様は逃げられない」

女性是不憫な目でスチュアートを見下す。そして冷酷に言い放った。

「貴様の存在がこれを招いたんだ。砲台を作らなければ利用されずに済んだのに……。敗因は貴様だ。だから楓は死んだ」

「や、やめろ！」

「そもそも竹林ではなく別の場所ならきつと変わってただろうに……」

「うわああああ！」

直接スチュアートの心理を揺さぶり、罪悪感を募らせる。耐え切れなくなったスチュアートは絶叫した。

女性はスチュアートを掴むと二枚の鏡を合わせたまま近づける。

合わせ鏡とは理論的に「無限に続いている」と評される。

しかし実際には、有限個の像しか見ることはできない。

なぜなら一枚目の像が、二枚目以降の像を隠してしまうからだ。

合わせ鏡をしても真正面から向かえば全て重なって一つの像しか見えない。

これを避けるために鏡や像の位置関係をずらすと、有限回の反射で像は鏡からはみ出てしまう。これは光が漏れ出ているとも考えられ、奥が暗く見えるのはその為でもある。

僅かでもずれば完全な合わせ鏡として成立しないのだ。

しかし、彼女は特定の鏡を操る能力。彼女はその鏡なら自由自在に通過でき、鏡の世界——すなわち無人の平行世界へと行き来できる。鏡は物理的概念やエネルギーを跳ね返し、相手を映し出して同じ存在の分身を作るだけでなく、「相手そのものを引きずり込め

る」のだ。

そして合わせ鏡により、何度も投影された平行世界へ干渉し、結果として平行世界の境界を越える。

これはある世界を軸に位相が徐々にズレる事により別空間へ干渉できると考えて貰いたい。位相がズレてから軸となった世界の鏡を操り、鏡の面を完全に重ねれば完了だ。

完全に重なった鏡に映る景色を見た者は誰もいない。これが別世界と繋ぐ鍵なのだ。

「幻想郷を軸に位相をずらし、19XX年の世界へ運ぶ。……発動」

女性とスチュアートは鏡に入り、鏡は完全に重なった。

十五分経った頃に重なり合った鏡は離れ、片側の鏡の向きが変わり女性は再び幻想郷に降り立った。

「よつと。一枚ならただその平行世界にしか行けないが、二枚あればあらゆる世界に行ける……我ながらチートな能力よ……なんてな」

自分自身の能力に冗談混じりで感嘆した女性は一枚の鏡を小さくして仕舞うともう一枚の鏡に入る。

鏡に入った後で鏡は手鏡サイズまで小さくなると上空に飛び出した。向かう先は永遠亭。

ひっそりと闇夜に溶け込む永遠亭は半月の明かりのみが照らす。女性^メは楓の遺体^レが安置されている部屋に鏡ごと侵入した。鏡越しに見た楓を見るとため息が出た。

「まったく、世話が焼ける。通信機使って殴って貰うようお願いすれば装置が解除されたというのに。あーあ、楓にはまだ早過ぎたかしら？」

楓の行動を批難するような愚痴を言った後で部屋に降り立った。

第38話 悲報（前書き）

繋ぎの話なので短い上に駄文状態です。ハイ。

第38話 悲報

「駄目です！ 見つかりません！」

「そんなはずないわ！ 生命機能は全て停止！ 死んだのに動けるなんて有り得ない！」

「てゐ、そっちは！？」

「竹林全部を兎達も手伝ったけど駄目だった！」

永遠亭は永琳、鈴仙、てゐと兎達が慌ただしく東奔西走していた。それもそのはず、常盤楓の遺体とスチュアートが忽然と姿を消したからだ。

「ど、どど、どうでしょう？！ 人里まで延ばしましょうか？！」

鈴仙は昨日からの出来事で判断が正常でない様子だ。しかし、永遠亭周囲を約二時間も捜し回ったのだから範囲を広げるなら妥当ではあったが、

「いえ。これは他言無用よ。私達で何とかするしかない」

永琳はこの事実をあくまで永遠亭のみで解決させ、事実を隠蔽させるようにした。あまりにも不可解な現象が知り渡れば混乱を招いてしまう。

（でも一夜にして消えるなんて裏が有るはずなのに全く見当が付かない。誰が何の目的で？）

楓の遺体回収なら外来人テロリストが候補に上がるが、テロリストは楓の殺害が目的であり、わざわざ遺体を回収する必要があるだ

ろうか？ 無いとは言いきれないがあの後再び行方を眩ましたからあまり考えにくい。

スチュアートは単に竹林を離れた可能性があるとも考え深くは探らなかった。

――

『外来人テロリスト、永遠亭を襲撃！ 幻想郷初の死者発生！』

事件の翌日、幻想郷でこの見出しで始まる文々。新聞を見た者全員、人妖問わず、衝撃を与えた。注目を集められ、この事件をきっかけにより一層の警戒を各地で強化し始めた。

人里に関しては簡易な関所を設けて人里に出入りする人間や妖怪をチェックするようになった。

「妹紅、私は永琳達や霊夢達にどんな顔をしていいか分からん……」

寺子屋の休憩室で慧音は妹紅に自分の愚かさをぶちまけた。

慧音はテロリストを見抜けなかった事で永遠亭襲撃を誘導してしまった事に相当な責任を感じていた。

「慧音！ いくらなんでも自分ばかりを責めなくてもいいだろ！ 私にだって責任はあるんだ！」

「いや、妹紅はまだ新聞を読んでなかったから知らなかった。だけど私は読んだにも関わらずこの有様！」

パンツと卓袱台を叩き、湯呑みが畳に転がった。妹紅はなんとかして宥めようとするも、慧音は人里の守護者として重大なミスをしたのだ。そう簡単に傷を癒せるはずがない。

「……済まん、妹紅。しばらく一人にしてくれないか？」

「……それを了承するとても？」

慧音は目を見開いて妹紅を見た。慧音の言葉を反対するとは思ってなかった。

「何も一人で自分を責める必要なんかないだろ？　何も出来ないが、私は傍にいとく」

そのまま胡座をかいて居座る妹紅。慧音は視線を外して何も無い卓袱台を見つめたまま何も言わなかったが、心底妹紅に感謝した。

（ありがとな、妹紅。こんな時でも傍にいてくれて）

――

これ以上に暗い雰囲気と重苦しい空気が流れているのは博麗神社。当然原因は俺にある。あの日から俺は貸してくれている部屋を締め切り、一切外に出なかった。これで三日目だ。

俺が人の死を間近で体験したのは二度目だ。一度目は病気で亡くなったおふくろだ。この時はどれほど泣いたか分からないが、今はそれ以上に悲しいのだ。

自分の手が届きそうな距離で自分の無力を感じ、助けられなかった。完全にネガティブ思考で精神は完全に負のスパイラルをさ迷っ

ていた。

「……」

「今日もか……」

「重い空気が伝わりますね……」

縁側でほんの数ミリだけ障子をずらして俺の部屋の様子を見ているのは霊夢、魔理沙、早苗だ。

魔理沙と早苗は文々。新聞を見て真っ先に来てくれたが、てんで相手にしなかった。というより立ち入るのにさえ躊躇してしまうほど重い空気が伝わっていたそうだ。

時々声を掛けてくれる事もあるが、全て無視した。

向こうとしては重い空気をどうにかしたいのと元気づけようとしているのだろうが、そうされたらあの日を思い返して俺自身が耐え切れなさそうで怖かった。

俺はいつの間にか部屋に立て掛けてあった六角形の鏡を見て自分の姿を見ていた。

初めて幻想郷に来た日を除けば三ヶ月間、霊夢が香霖堂から調達して来てくれた紺の和服を着ている。これ以外に服は学生服がリュックにあるだけ。最初訪れた時の洋服は既に香霖堂に売り払ってる（洋服は珍しいから結構高値で売り払えた）。

鏡を見て言うのもなんだが、相当やつれてるのが自分の顔を見て分かる。

いずれにしろ、俺は立ち直れるのか自分ですら分からない。情けない。

しかし、この引きこもりは唐突に終わった。

翌日の事だ。

「神霊『夢想封印』ッ！」

霊夢が外から突然スペルカード宣言をし、七色の光の玉が俺に襲い掛かった。

突然でもあったが、避ける気もなく、そのまま全弾命中し、衝撃で庭に放逐された。

まともに受け身すらとらず地面に背中を強打し、痛みが全身に伝わる。

かといって霊夢に反抗する気も立ち上がる気もなくそのままの状態で空を仰ぎ見た。

「こんなされても何も言わないわけ？」

顔を覗き込むように霊夢が隣に立つ。苛立っているのがよく分かる。

「何時まで腑抜ける気よ。私達には迷惑だっるのが分からない訳？」

俺は答えない。でも自覚はしていた。こんな事してるだけなら迷惑がかかる事くらい。

霊夢は無言のまま宙に浮き、再びスペルカードを取り出した。

「宝具『陰陽鬼神玉』」

宣言と同時に空から巨大陰陽玉が落ちてきた。

もうどうでもいい……そんな気持ちが支配し始めるともう目の前の弾幕に押し潰されて幻想郷から消えたいと思った。

自分で望んでおきながらあまりにも自分勝手過ぎる。こうなるはずではなかったと後悔したところで無駄なら、もう諦めたい。

ズンッ！

巨大陰陽玉はど真ん中に入った。脅威的な重量に何故か熱を持った陰陽玉に潰されてなお自分の事しか考えなかった。

幻想郷において弾幕では死ねないのが常識であるが故に俺は普通に生きていた。ただかなり内臓が圧迫されて気持ち悪かった。

だが間髪入れずに霊夢は襟を掴むと神社に向けて俺を放り投げた。壁に激突した俺はそのまま縁側に倒れた。

「迷惑だと言ってるのが分からないかしら？ いい？ これが最後よ。もしそれでも動かないなら神社から、いや幻想郷から出ていって貰うからね！」

霊夢は本気なようだ。もう一枚スペルカードを取り出そうとしている。でも俺にはもう無理なんだ。縁側で寝そべったままこのまま

何もしなければ強制送還。でももういいか。こんな時でも自分自身しか考えてないし。

「夢符『二重結k……「霊夢」っ!？」

声を掛けた瞬間に霊夢の動きが発動寸前で止まった。俺は今なんで声を掛けたのだろうか。霊夢の何かを見たような気がしたのだが……。

ああ、目を見たんだ。苛立ちの形相をしているのに、目だけ、瞳だけに哀しみが顕れているのを見たんだ。

「泣いてるのか……？」

「えっ？」

霊夢はバツと目の辺りに手をやった。霊夢自身も気づいてなかったのか。

「い、いや、違う！ こ、これは！ た、たまたま目に砂埃が入って！ 泣いてるわけじゃないわよ！」

必死に目を擦ってごまかそうとしているが、涙は涙腺を越えようと多く溜まっている。

ようやく気が付いた。目が覚めた。俺は何を考えてたんだ。自分で勝手に考えて、人を泣かせてしまうとはなんと愚かな行為をしてしまった。

ああ、思い出した。自分自身がどうなろうと考えるのは自由だが、他人の気持ちを考えずに泣かせるなら帰れって言われた記憶が蘇った。

俺は縁側から立ち上がり、庭に降り立つ。

霊夢も驚きを隠せないでいた。さっきまでうんともすんとも動こうとしない俺が立ち上がったのだから。

「稟……」

だが、次に霊夢はさらに混乱しそうになる。

俺は真正面から霊夢に抱き着いた。突然の行動に赤面しながら抵抗するも、俺は決して離そうとしなかった。

「ちょ、ちょっと稟!？」

「ゴメン。俺はたった今一番してはならない事をしてしまった」

霊夢の耳元で俺は謝罪した。

「俺は……自分自身の事しか考えていなかった。だから今君を泣かせた。それは俺にとって最もしてはならない行為だ。人を傷付けてまで自分自身しか考えないなんて最低だよ。俺は君にそうしてしまっただ」

霊夢にはよく分らないと思うが、誠意だけは伝われば十分だと思ひ、続けた。

「俺は君にいくら謝っても謝りきれないと思ってる。許せるようなもんじゃない。でも……君のおかげで迷いは吹っ切れた。あんな俺

を四日間置いてくれて感謝してる」

できる限りの誠意で言葉を紡ぐ。他人から聞けば滑稽極まりない言い方しかしてないが、思い付かない。だから必死に探して言い続けようとしたが、

「良かった……」

霊夢が言葉を遮って言った。

同時に霊夢も抱き返してきた。巻かれた両腕から力が伝わる。これで分かった。霊夢はこんなに心配してくれていたのに。

後は無言で、ただ抱擁し合っていた。

当然、神社の陰から俺達を見守る方がいらっしやったようで。

「お熱いご様子で……」

「うわー、うわー、うわー」

「毎度毎度いいネタをありがとうございます」

呆れながら魔理沙が、顔を赤らめながら早苗が、今最もいてほしくない文がカメラを構えてバッチリ目撃していました。

無論、翌日の文々。新聞にでかかと一面が張り出され、霊夢と一緒に文を懲らしめたのは別の話。

第39話 仙界道場 i n 隙間 n o t スキマ (前書き)

八割が自己解釈です。ネタは浮かばないわ模試は散々たる結果ばかり……。。

第39話 仙界道場 in 隙間 not スキマ

「ちーかよーるなー！ これから先はお前達が入って良い場所ではない！ この先は崇高なる道士が住まう仙界への入口である！」

「あんたじゃ話にならないから主人を呼びなさい」

現在、俺は霊夢と博麗神社の裏山のある場所に向かう途中である。

なぜこうなったのか、その経緯は楓が残した一枚の手紙から始まる。

霊夢のおかげで吹っ切れた俺は弔い合戦を決意した。それから二日後、

「どーも、清く正しい射命丸です。ってそんな嫌そうな顔しないで下さいよお。今日はこれを届けに来ただけですぐ帰りますから」

と、文から封筒を受け取った。宛先は俺だったようだが、驚いた事に後ろには常盤楓とあった。丁寧に日付まで書いてあり、人里での感覚だと三週間前にあたる。確か紅魔館のパーティーの前辺りだろうか。

最初は開けるのが怖かった。ひょっとしたら遺書か何かの類かもしれないと思ってしまった。でも吹っ切れた俺は怖がる場合ではないっ！ 意を決して中身を見た。

『ツルハシスキルの潜在能力が勝利の鍵。

P・S 修業ガンバ！ 弾幕も出せば万事解決！』

たったこれだけだった。他に紙は入ってないか、実はどこかめくられて別の文が現れるかを探してみたがそんなものはなかった。

ツルハシスキルの潜在能力……って何だ？ スキルをパワーアップさせる事か？ 潜在能力ってたいいそんなものだし。修業ガンバって、これ修業すれば得られるって事か？

なんか面倒臭いことになってしまった。そして手紙を不運にも霊夢に見られてしまい、

「じゃあ稟が修業出来そうな場所を探すわよ」

と半ば強制的に連れ出された。

しかし、修業場所はそう簡単に見つからない。勿論修業だけあって外来人テロリストを避けねばならず、それに見合う広さを持つ場所はない。

人里へ向かう途中でいろいろ考え始めたようだが、俺は白玉楼はどうかと聞いてみた。冥界なら敵も知らないだろう。だが霊夢は俺も予想だにしない返答をした。

「それが……境界が修復された上に前より異常に堅固になって冥界に行く事すら出来なくなったのよ」

「それって、つまり……隔離？」

境界が修復された事で白玉楼へ通ずる空から行けなくなったのだ

と言った。しかも事件の翌日辺りから既に修復が完了していたらしい。

境界修復と言えば八雲紫だが、今現在この幻想郷に八雲紫は存在しない。仕事を継いでいる八雲藍なら修復はできるかもしれない。でも何故冥界と現世との境界を修復したのか？ 全く理解出来なかった。白玉楼側が文々。新聞の記事を見て思い付いたのか、別の要因か。そして幽々子と妖夢はどうなっているのだろうか？ 現場に行けない以上は推測するしかない。今は修業場所を考えるか。

「他にあったかしら？ 広くて見つかりにくい場所は……」

霊夢は利用出来そうな場所を一つ一つ思い浮かべては立ち止まって俺に聞いてくる。

俺もいくつかは候補を上げるが悉く却下される。二人で出したのは紅魔館、迷いの竹林、地霊殿、霧の湖、無縁塚、無名の丘、太陽の畑、妖怪の山、守矢神社、玄武の沢……。

環境もだがどこも把握されてるかもしれないと思うと気が遠くなりそうだ。

「マジで場所無いぞ。どうする？」

「あーちよっと待って……。えーっと……有頂天に……」

指を額に当てて懸命に思い出そうとする。すると何かを思い付いたらしく、突然後ろを向いて博麗神社へと引き返し始めた。

「霊夢？ 人里には？」

何を思い付いたのか分からないので戸惑いつつも聞くが、霊夢は

返さなかった。

博麗神社を越えて裏山にまで入り、そして腕が水平に固まったお札の貼られた少女の最初の言葉を聞いた。

はっきり申し上げよう。俺はこの子を知らない。いつ幻想郷の住人になったのだろうか？　そもそも幻想郷の住人なのか？

「どなたですか？」

「我々は崇高な霊廟……いや、仙界を守るために生み出された戦士である」
キョンシー

キョンシーって……。確かに2036年じゃワードすら上がらない。うーん、まあ忘れ去られたから幻想郷にいるのだと思うのだが……。

「お前は誰だ？」

「あ、俺か？　俺は」

と言いかけたところで霊夢に制された。脳みそ腐ってるから言っても無駄よ、と注意された。

「それよりあんたの主人は何処よ」

「主人って………誰だっけ」

「あー、自分で注意しときながらこいつに聞いた私が馬鹿だった」

呆れるのを越えてうんざりする霊夢。脳みそが腐ってるなら普通身体も腐るのだが、このキョンシーはやけに血色がいい。肌の色は

死人だけだ。

と考えていると近くの大木からガリガリと音がしたかと思うと大木のど真ん中は円形に切り抜かれ、その奥に人を覗かせた。

「あらあら……人間がこんな所に……ってあら？　博麗の巫女？」

はい。次に現れた人は左手にあります大木を切り抜いて通ってきました。大木の後ろにいたのならわざわざ切る必要があるかとツツコミそうになりましたが、あら不思議。通ってきた穴がいつの間にかありませんじゃないですか。

青い半袖ワンピースに半透明の羽衣を纏っている……俺は一瞬天女かと思った。まあ、あれだ、古典でやる羽衣伝説を思い出したからだ。

「ちょうど良かった。仙界の場所を捜してたのよ」

俺はこの人も知らないが、霊夢は面識あるようだ。

「仙界に？　何故豊聡耳様の所に？　それに仙界でしたら一度招いたと聞いておりますが？」

「あん時は神子といたけど、行き方を教えて貰ってないのよ。だからあんたに頼んで来るようにして貰いたいわけ」

話を聞く限り霊夢は修業場所として仙界という場所を利用するつもりらしい。全く想像つかないし話にもついていけない。

「前の無礼も詫びる意味で善処はしますが……こちらは？」

「彼は桜之宮稟って言って、訳ありで修業場所を捜してるの。なんか素質があるらしいから」

こちらに視線を向けてきた天女らしき人物に霊夢が説明する。

「あら、この方も仙人になりたいというのですね？」

「『も』って、私は仙人にならないし稟も違うわよ」

「あら？ 残念ね。貴方達なら素晴らしい仙人になれたのにねえ」

どうやら素質と聞いて仙人修業する人だと思っただけ。となればこの天女らしき人物は仙人なのか？ まあ、話についていけないからこうやって事の成り行きを見守るしかないが……。

「私は霍青娥。今は仙人をやっています。こちらは私の可愛い部下の宮古芳香。可愛いでしょ？」

霍青娥という人物は先程のキョンシー娘を撫でながら自己紹介してくれた。宮古芳香というキョンシー娘は「うお、お……、お」と呻き声かすら分からない声を発していた。

「それよりさっさと案内してくれないかしら？」

「案内の必要はもうないじゃない？」

ようやく進むかと思いきや、まさかの拒否！？ さっき善処しますって言いましたよね！？

「後ろに大きな岩があるでしょう？ そこのヒビ割れの隙間から入れますよ」

言われた通り後ろを振り向けば成る程、身長約三倍の岩に無数のヒビが入っている。

……おや？ あのキョンシー娘こと芳香の後ろに岩は無かったはずだよな？ つまり芳香は仙界とまったく違う方向で俺達と対峙したことになる。脳みそ腐ってるから方向間違えたのかな？

「ヒビがあるっていつでも入り方が分からないんだけど……」

確かに入り方が分からなければそこですと言われても行けない。飛べない者に空から行けますよと教えるのと同じだ。だが霍青娥はニコツと微笑み、

「心配いりません。そのまま突っ込めばいいんですよ。こんな感じに……ねっ！」

「きゃ!？」

霍青娥は霊夢の肩を掴むや否や岩のヒビに向けていきなり突き飛ばした。バランスを失った霊夢の軌道上にいた俺も反応しきれずそのまま霊夢とぶつかっていっしょに岩目掛けて倒れた。

「後は豊聡耳様が導いて下さるわ」

最後にこう聞いた後、視界が暗転した。

――

「う、こゝは？」

気が付けば霧が濃い神秘的な山間が並ぶ景色にでかい道場らしき建物がどんと居座るように建っていた。

何と言うか、漢文やっけると俗世を離れた世界で仙人の修業をする的な話がよくある。舞台となるのがたいてい山奥の秘境だとか、今見てる景色もそんな感じである。

今、膝立ちだが霧が濃くて少し足元が見えないのが何とも不安を煽ってしまい、地面があるか確かめる為に手を伸ばしてみた。

「ひゃあん!？」

悲鳴が上がった。同時に俺の額からビーズ並の大きさの汗が流れ落ちた。まさかとは思ったが、正直この場面で典型的なフラグを立ててしまったのは堪えられそうにない気がした。

だが伝えねばなるまい。霧で見えなかったので感触でしかないが、最初は地面に触れたと思った。少し膨らみがある感じで一瞬は岩場の突起みたいだと思ったが、岩にしては少し柔らかかった。そして全てを悟った。

素早く手を引き、膝立ちのまま後ずさりした。これから起こる出来事にきつと恐怖しているのか、顔から血の気が引いて青ざめているのが分かる。

「りいーんーんーん？」

先程膝立ちでいた場所からなんとも言えない重いプレッシャーのような言葉が響いた。

霧からうつすらと姿を現したのは霊夢。当然笑顔でこちらを見る。瞬間的に恐怖心が増大した。

俺は情けながら尻餅をつきながら後ずさる。後ろがどうなってるのか分からない未開の地ではやってはならない行為だが、本能が後ずさるよう命令する。無意識に 情報『スキルミル』が発動し、今まで経験した事の無い警戒レベルが頭に流れる。

「ま、待ってくれ。あれは事故だ。わ、わざとじゃ、決してわざとじゃ……」

無駄と分かっているのに典型的な言い訳をして手の平を前に出して止まるよう促す自分がいる。

笑顔の割に目だけが笑わない霊夢は無言のままスツとスペルカードを取り出した。その枚数三枚。

「変態は……滅すべし！！ 神霊『夢想封印』、宝具『陰陽鬼神玉』、神技『八方鬼縛陣』！」

スペルカード三枚同時発動という偉業を成し遂げた霊夢の攻撃は全弾が俺に向かい、そして俺は最初で最後……いや、最期の奇跡の目撃者となつて

「……」

気が付けば見知らぬ天井。多分道場に運ばれたのだろう。俺の顔

を覗き込む二人の姿。

片方は霊夢。もう片方は独特の髪型に「和」の文字が入ったヘツドホンをしている。霊夢同様腋出しノースリーブにスカート。手には笏を持っている。

「気が付きましたか」

「ああ、良かった」

笏を持つ人物に呼応して霊夢の顔が綻ぶ。というかこうなった原因は霊夢、あなたにあるんですからそんな顔をする権利はありませんよ？

「……貴方は一体何をしたんですか？」

「……………えっ？ 今私に言ったの？」

反応鈍い。笏を持つ人物が明らかに霊夢に顔向けてるでしょ。気づきなさいよ。

とはいえずっとこうしてるわけにもいかないので上半身を起こそうとする。すると、

「い、痛え!？」

全身に痛みが走る。そりゃあれだけの弾幕受けれや気絶してる間に回復なんて都合の良い話があるわけない。常識的に。

「だ、大丈夫？」

「誰のせいでこうなったと思ってるんですか!」

少々苛立ちを乗せて霊夢にきつく言い放つ。

「わ、私だってわざとじゃないのよ。……確かにあの時はぶちのめしたかった気分だった、でもあそこまでする気は無かったのよ？」

「じゃあもう少し冷静になれませんか!? 大体霊夢は聞く耳持たずに行動が先走り過ぎなんですよ! 三枚同時なんて奇跡の目撃者の代償にしては明らかに大きいでしょうが!？」

「何よその言い掛かり! 人が謝ってるのに!」

「誠意が全然無い謝罪は無意味に等しい! 正式に謝罪しない限り俺は謝ったと認めない!」

「ただの詭弁じゃない! 大体人がちゃんと反省して謝ってるのに認めないってあんただんだけプライド高いのよ!」

「だから俺は——」

起きて早々ヒートアップする口喧嘩。笏を持つ人物もさすがに介入出来ず終わるのをただ待った。

結果どうなったのかと言えば、置き去りにされました。

霊夢が去ってから急に心細くなった。

「……まあ、自業自得か」

ハハッと自嘲気味に独り言を呟いた。

「あまり後ろ向きに考えては崇高な仙人にはなれませんよ」

「あ、いや、仙人になりに来たわけじゃないんですが」

いつの間にか先程の笏を持った人物が傍に現れる。見た目はあれ

だが、内側に秘めるカリスマのオーラは凄い。相当徳のある方だと思った。

「ええ、分かっております。君は自分の内なる能力を開花させる為に仙界へ来たのでしょうか？」

「あ、霊夢から聞きましたか」

「それですが、君の十ある欲を全て見た私は君の過去や未来も見えました」

十ある欲を見て過去や未来も見えた？　　どういう能力なのだろうか？

「自己紹介がまだでしたね。私は豊聡耳神子。最近幻想郷で復活し、この仙界へ引っ越したばかりの者です」

まあ幻想郷に関して元の世界でそれなり知識を得た俺が知らないのだから当然だ。

しかし、復活と言う事は生前は幻想郷ではないという事に？　いや待て。じゃあ復活ってやっぱり一度死んで生き返った人って事？

「そう。私は一度眠りにつき幻想郷で目覚めた。すなわち尸解仙と同じなのです。君は確か外の世界から来た外来人と聞いております。ならば生前の私の伝説を幾つか知っているでしょう」

「生前の伝説……ですか？」

俺の頭は整理に追われて聞いている余裕があまりないのだが……。

「私は生前、十人の言葉を同時に理解する事が出来ました」

……聞いた事ある。歴史の授業で。つまりこの人物、いや、この

方は!?

「っと、あまり無駄話してては先に進みませんね。このくらいにしますか」

と話を打ち切られてしまう。……とりあえず徳の高い方という事にしましょうか。

それから霊夢からいくらか話を聞き、霊夢に対してお詫びも兼ねて俺に道場の一部屋を貸してくれる事になったと話してくれた。

ついでに仙界について少し教えて貰った。何でも俺と霊夢が通り抜けたような小さい隙間から無限に広がる世界がここらしい。隙間があれば何処でもいらいすが、仙界へ行くという目的を持たない限りは行けないだそうだ。

確かにここならテロリストを気にせず修業できる訳だ。

肝心の修業内容だが、この道場には豊聡耳神子以外に物部布都、蘇我屠自古が住居、たまに霍青娥が訪れるらしいが、彼女達は一切関わらないで（ただし食事など最低限の世話は引き受けてくれる）、別の誰かが仙界に来て俺の修業を手伝うという内容だった。

主にツルハシスキルを駆使して弾幕に挑むみたいな感じだ。

身体を十分休ませてようやくダメージが消えた所で、神子が相手が来た事を告げに来た。

そして部屋を開けて入って来たのは……、

「あら、稟じゃない。久しぶりー」

間延びした声。何で貴女が最初なんですか？

第40話 奔走する仲間達（前書き）

一日一時間の制約でなんとか出来ました……。
今回は梨音、工場長、それともう一人の計三人の視点です。

第40話 奔走する仲間達

あたしが幻想郷に来てから約三、四週間が経った。

この間あたしはずっとアリスさんの家で過ごした。最初はどうかと不安だったけど、初日の脅しが効果的だったのかとても優しくなった。

あ、自慢じゃないけど一度だけ本を盗もうとした魔理沙さんを追い返した事がある。追い返したというより撃退かな？

あの時は偶然書庫のある部屋に行った時に本棚を漁る魔理沙さんに遭遇した。ご丁寧に足元の大きな袋に本を入れる瞬間もバッチリ目撃。だから大声で注意した。

「何してるんですか！」

「おわっ！？ あ、アリスか！？ ……ってなんだ梨音じゃないか」

大声に驚いて手持ちの本をドサツと落として振り向いたが、あたしを見るなりホッと胸を撫で下ろす。何か軽く侮られてる気がして少しイラッとした。明らかに盗もうとしている場面に出くわしたのだから、あたしは厳しく追及した。

「魔理沙さん、勝手に本を盗むのは良くないですよ」

「盗むんじゃないくて、借りてるだけだぜ」

「借りるんだったらアリスさんから許可して貰えばいいじゃない」

勿論魔理沙さんがそれに応じるはずはない。アリスさんから魔理

沙さんの性格とかを聞いてるから、後はどう対処するかだ。

「いや、だってアリスいないし、私も研究で今必要なんだ」

言い訳しながら足で袋をズルズル後ろに押して、でも決して後ろを見ずに後ずさる。それに呼応してあたしも一歩前出る。

「私はちゃんと後で許可を貰うつもりだから心配しなくていいぞ」
「駄目です。許可を貰ってから借りて下さい。アリスさんに言いますよ？」

「わ、分かった。それだけは勘弁してくれ」

交渉の末にようやく魔理沙さんも動きを止めて承諾した。

「あ、アリス」

魔理沙さんがドアを見て呟くと、アリスさんがいると思ったあたしは振り向いた。

「アリスさん。今魔理沙さんが本を……」

でもそれは嘘だった。アリスさんはいなかった。

「隙あり！ 死ぬまで借りるだけだからな！」

あたしが再び振り向いた時には既に袋を担いで窓から脱出しようとする魔理沙さんを見た。

「じゃ、アリスによろしくな」

顔だけをあたしに向けてウインクすると魔理沙さんは窓から外に飛び降りた。

「ん？　おお？」

でも魔理沙さんは何故か窓から離れなかった。というより窓に触れた手と足が固定されて動けない感じだった。

あたしは窓にくっついて身動きが取れない魔理沙さんに近づき、袋を握ってる左手から袋を取り上げた。窓に乗っかってるのと自分の身長差から背伸びしながらだったけど。

「お、おい！　梨音、まさかお前の仕業なのか！？」

「魔理沙さん、していい事と悪い事があるのをご存知ですか？」

「それは分かるが……説教の前に説明してもらえると……」

勿論説明抜きで固定されたままの魔理沙さんに説教をしてやった。事の善悪に関してはお父様からそのまんま聞かされた事を魔理沙さんに言った。

身動きの取れない魔理沙さんは素直にあたしの言葉を聞く以外に選択肢はありません。「こんな少j……じゃなくて少年に説教されるとは……」とか呟いたけど無視した。

結局は魔理沙さんを解放したあと風魔法で彼方にまで吹き飛ばした。能力で完全に強力な魔法が使えるみたいな感じだから違和感なく使いこなせた。

魔理沙さんには教えなかったけど、窓にはあたしが書いた魔法陣が設置されていて、それに触れるかあたしが任意に発動させるかで起動する。魔理沙さんをつらえたのは氷魔法。

能力で魔法が使えるのでアリスさんの指導のもとで魔法陣による遠隔操作や基本的な属性の組み合わせなどを学び、ここまで形作れたから良かった。

後日、あたしはアリスさんと紅魔館の大図書館に連れられた。曰く「能力の魔法はさらに強力にできるかもしれないし、私達も参考になる」だそうだ。

「まず貴方の能力はどのくらいが上限か見極めてからいろいろと指導するわ。まずはその小悪魔に試してみなさい」

「ば、パチュリー様あ！ だから私を縛ったんですか！？ 実験体にしないで下さいよ！」

図書館の管理人であり生粋の魔女のパチュリーさんが柱に縛られた手足をばたつかせて猛抗議する小悪魔さんを指さす。

「使い魔だし、あれでも悪魔であるから結構頑丈よ。遠慮しないでいいわ」とは言われたけど……なんか小悪魔さんって可哀相な立場にいるんだな……。

二人とも私の魔法に興味津々らしく、じっとあたしを見つめるように観察する。あう、あ、あまり注目されると恥ずかしいし緊張するんだけど……。

あたしの能力は頭で念じれば使えるみたいだけど、魔力を消費す

る……のは当然だが、それで意識が朦朧だとか疲れがなんて事は無かった。

だから二人はあたしの限界が何処までかを見極める必要がある。上限を知ればどの程度の魔法が最適かを測る為にも役立つし、それに伴う魔力の消費量や身体への影響も考えられる。

ところが、魔法を念じたつもりが何故か樽が出て来た。

「「「えっ？」」」

自分でも呆気にとられたが、二人も同じだった。空中に召喚された樽は重力に従い、小悪魔さんの頭上にそのまま激突した。

「へぶっ!?!? ……きゅうく……」

あ、気絶した。重かったのかな? そして樽は壊れずにそのままころころと転がり、本棚に当たって止まった。

「……梨音?」

「あたしにもよく分からないんですけど……」

傍に寄ったアリスさんが横目であたしをちらっと見たけどあたしも分からないから多分困ったような表情に見えたかも。

パチュリーさんが近づいて樽を触った瞬間だった。

樽がボンッと爆発し、パチュリーさんを吹き飛ばし、本棚の端の下段は本ごと木っ端微塵となった。

「ば、パチュリーさん！？　大丈夫ですか！？」
「パチュリー！？」

吹き飛ばされたパチュリーさんは山積みの本に激突し、「むつきゅ！」となんとも言えない悲鳴と共に本の雪崩に巻き込まれた。

すぐに本を退かしてパチュリーさんを助け出した。……あれ？
さっき盛大に吹き飛ばされたはずなのにあんまり火傷とかがない。

「う……？」

「パチュリーさん？」

本人も外傷があまり無い事に疑問を感じていたらしい。すつと立ち上がって自分の身体を確認したが、やはり目立つ怪我とかあんまり無かった。

「パチュリー？　まともに喰らったけど大丈夫なの？」

「私も……よく分からないけど……」

「ご、ごめんなさい！」

アリスさんが再度パチュリーさんが無事か確認する間に何度も謝った。

たいしたことないとは言うが、それより向こうの方が気になった。

「うん……？　ああ！　本棚があ！」

気が付いた小悪魔さんが木っ端微塵の本棚の一部に大声を上げてあたし達も見てみた。

まるで爆発した部分のみが見事にくり抜かれたようにぽっかりと

穴が空いて、それなのに本は一冊も落ちてない。

あれだけ派手な爆発だったけど良かったと思うもつかの間、

「むきゅううあああーっ?!?!?」

「あ! あの場合は確かアリマリ同人誌とパチエマリ同人誌を纏めてた部分じゃないですか!」

「ぬあ、ぬあんですってえーっ?!?!?」

三者三様の反応にあたしはパチュリーさんに全力で謝った。

今回の騒動を兼ねた結論としては、勇者スキルって純粋魔法以外にも何か出来るらしい。

召喚した樽は爆弾樽で、対物効果が強い分対人効果はあまりないと分かった。あたしも自分の能力を上手く扱えるようになって稟君をサポートしていきたい。

稟君は稟君なりに幻想郷で頑張ってる。だから同じ仲間として、いや、お父様からの言葉を借りて同じ同志として、あたしも幻想郷の魔女と魔法使いと頑張っていこう。

それがあたしの精一杯の勇気だから。

――

妖怪の山にある河城にとりの工房で寝泊まりする俺は偶然にも日

記帳を見つけた。こうみえて現実世界でも日記だけは毎日欠かさず書いている。どうせ普通にしても面白みがないから、日記風に俺の今を回想するぜ。

だがまず最初に言うぞ。俺は川内肇だ！ 工場長はあくまであだ名だ！ ここ間違えるなよ！ テスト？ なにそれ？ 美味しいの？

さて、まずはにとりからの出会いから書こう。

何となく釣りをしたい気分だったので、まだ博麗神社にいた早苗さんから釣りが出来る場所がないかを聞いたら妖怪の山から霧の湖に注ぐ川で魚がいると聞いて早速高機動車を飛ばした。

釣竿はベースとなる頑丈な木の棒に能力でコーティングした頑丈な物を、餌は適当なミミズや虫。小魚でも釣ればそれも餌にして大物を狙うつもりだった。

川に到着すると、流れる水のせせらぎがなんとも心地良い。妖怪の山では天狗に見つかると思われ、追いかかれて事前には早苗さんから許可書みたいな紙をいただいている。あんな優しい美人と住んでるとは妬ましい限りだ。あのリア充野郎！

釣りを開始して十分くらい。釣れるのは小さな川魚ばかりで大物は到底釣れそうにない。しかし、諦め悪いのも俺の性格。さらに粘ってみた。

開始して三十分。竿が比べようのないしなり具合となり、遂に来たと思ったが、残念ながら釣れたのは魚でも川の主でもなく桜之宮

だった。

聞くところじゃあ川で溺れていたところに偶然釣針が刺さったとか。しかも助けてやったのにお礼も言わずにけなされる。

工場の作業員が着てそうな服を着ている俺はハートが硝子なんだよ。マジで分かって欲しい。

傷心の俺を救ったのはもう一度来たアタリ。俺は再び胸を踊らせた。流石に二の舞はないだろと安心し、そのしなり具合から完全に来たと思い、心おきなく釣りあげた。

だが、上に力を加えすぎたので獲物は空高く跳び上がった。

瞬間的に俺は見た。釣りあげられた獲物は人の形だった。シルエットだから正体は分からない。ただ分かったのは、その獲物に顔を踏まれた事だ。

確かブーツだった。釣りあげられたシルエットが履いていたのか？ その感触は水の如く冷たかった。

結局骨折り損で桜之宮から変人呼ばわりされた俺は傷心のまま高機動車へ戻った。

そこで河城にとりと邂逅した。

高機動車を観察する一人の美少女がいたのだ。しかも周りに工具が散らばってた。観察に熱中していて俺には気づいていない。後ろから声をかけたら奇妙な鳴き声？ みたいな声をあげた。確か「ひゅい！？」だった。なにこれ可愛い。

話によれば自分はエンジニアで高機動車を見て興奮して見入ったそうだ。俺の持ち物かを聞いてきた時、自信を持って俺が作ったと答えた。にとりは驚愕して信じなかったが、俺は即興で金属を精製し、簡単なオブジェを作った。それでにとりは俺の技術を認め、泊まる場所がないなら工房に来ないかと誘われた。

勿論美少女からの誘いに二つOK。かくしてにとりの工房で寝泊まりする事となった。

勿論ただ寝泊まりさせてくれるはずもなく、技術発展に高機動車を解体させて構造を見せて欲しいと頼んできた。高機動車は犠牲となったのだ。ま、時間と道具さえあればいつでも作れるから別にどうってことない。ただミニガンは危険なので金属を分解して処理した。

このくらいか？ まさか三ページ使うとは。

この日は工房で高機動車に使われる技術をにとりに教えた。メインは機動力に使われた超電導。説明するたびににとりは目を輝かせて熱心に聞いてくれた。健気で可愛い。そういや河童って恒温？ それとも変温？ 液体窒素とか使うからなあ。

この日は他の仲間達と授業があり、にとりに講師をして貰えないかと尋ねられた。

聞いた話だと基本河童は機械工業技術が幻想郷一発達している。

しかし、河童全員がにとりみたいに自由に扱える訳ではないので、にとりやにとり程ではないが上手く扱える河童達が他の河童達に教えているとの事だ。

ボランティアではあるが何もしないよりかはと思い承諾した。

可愛い美少女達に技術を教えるとはまさに至福の時間とも言えよう。しかも俺が引き受けたグループは皆勉強意欲が高いおかげですいすい進んだ。勿論幻想郷が持つ技術のバランスを考えて、あくまで俺の時代の技術は教えなかった。

俺の天職はここにあった！ 河童娘最高！

この日はにとりに頼まれてにとりが新しく開発した機械のチェックを行った。だが俺は千慮の一失を犯してしまい、機械は金属の塊と化した。

当然激怒したにとりは俺を椅子に縛り付け、修復をさせた。そんな時にでかい花火の打ち上げ音が聞こえた。

俺は昔時代劇で見た関節を外して縄を抜けるというのをを試してみたら、意外と出来た。試してみるもんだな。

縄を抜けた後、無理矢理関節を繋げてそつとドアを開けた時、桜之宮と新聞記者と名乗る天狗の射命丸文に出会った。

（地の文の）桜之宮の言動にツツコンだおかげでにとりにバレてのびーるアームで逆戻り。畜生。

でも珍しい出来事にも遭遇した。俺にあんだけ冷たかった桜之宮が新聞記者に土下座したのだ！ 遂に世界の天地はひっくり返ってしまったのかと思った。

その後一瞬にして飛び立ってしまい、俺は再びにとりの監視のもと機械修復に精を出した。

この日、新聞を見て驚いたのは幻想郷にテロリストがいたというのだ。しかも一人が殺害されて、その人は桜之宮と関係が深かったそうだ。

俺はテロリストがどんなに危険か知ってる。今この幻想郷にいる奴らは知らんが、テロリストってのはたいていくくでもないことばかりしやがる。数百万人が犇めくニューヨークのど真ん中に核を押し込みやがったテロリストも俺の世界にいたしな。おかげでAC（アメリカ大陸）合衆国は対テロ徹底抗戦宣言とかしたな。

話を戻すが俺は思った。友が悲しみに沈んでいる時に助け出すのが親友ではないのかと！

だが今の俺には桜之宮を慰められる程の友ではない。ならばこの妖怪の山で己を鍛えようではないか。

それが駄目なら潔く消えるでしょう。遺灰は紅海によりしくとでも遺書に書いとうか。

って縁起でもねえ事は日記に合わねえな。まあ、戒めの意味であえて消さないでおこう。さて、後は機械のチェックをしてから明日に備えよう。明日はにとりと少し遠出するからな。

私はずっと博麗神社にいる。あの日を境に博麗神社から一步も外に出てない。いや、出られないが正しいか。

「ん……はあ……」

で、この楓の上司？ とかいう奴と一緒に住む事となった。

「あ……んっ……」

とはいえ四六時中いる訳ではない。一日の四分の三はいない。

「やっ……も……」

まあ初日から数日は私にいろいろ話す為にずっといたんだけど……。

「もう……無理い……駄目え……」

「んー、まだよ。霊夢って固いのねえ」

「あんっ……それ以上はあ……」

「ほらほら、力抜かないと」

あー、ちなみに初日は身体を慣らす為の柔軟運動とかをさせられた。筋肉を和らげて身体の疲れを癒すとか言ってたけど痛いったら

ありやしない。

「うっ……もう……上がらない……」

「そうねえ。四十度が限界かしら？」

何だったかしら？ ああそうそう、確か「えびぞり」とかいふ運動をした時のだ。

仰向けに倒れて背中にコイツがのっかって私の腕を掴んで上半身を起こすやつ。

他のも痛いけど、こればかりは背骨が軋みそうな感じがして不安になった。しかも容赦ないから尚更だ。ようやく解放されるとそのままパタッと倒れ伏した。

「ハァー……ハァー……」

「あらら、無理にしたわけじゃないんだけどねえ……身体固いのね。てっきり柔軟な身体かと思ってたんだけど」

本当にコイツは何を考えてるのか分からない。稟以上に得体の知れない外来人。

「あんたってS？」

「ややSよ」

わざとなのか本気なのかも分からない。

コイツから八雲紫について知った。稟が以前に聞いてきた妖怪の名前らしいけど、コイツは紫がいなくなった幻想郷をサポートする

為に來たと言った。

「以前……といっても結構前だけど、平行世界への移動中に無理矢理入って來たのが彼女なの。それで紆余曲折を経て親睦を深めたのよ」

話は掴めないし、八雲紫がどんな妖怪か分からない私は想像でしかないが、話をしているそいつの表情は愉しい思い出を語るように見えた。

私はコイツが気に喰わない。料理は美味しいのは認めるが、なにかと厳しい筋トレばかりさせられる。

能力を制限されて腕立て伏せやら腹筋やらをさせられた。当の本人は縁側で寝そべって本を見てる。でも反抗したりは出来ない。あいつの頭上に鏡が浮いている以上は私の行動は映る。弾幕も能力も出せない今は黙々とノルマを達成していった。運動した後のご飯は格別だからたいいてい許すけど。

数日経ったある日の事。私はあいつの運動能力が人並み外れた持ち主だと知った。博麗神社を昼から夕方まで何十週も走り続けたのだから。私は飛んで追い掛けたけど。

え？　なんで私があいつを追い掛けたのかって？

あいつが全面的に悪いし、走りながら挑発するんだから当然よね？

「はぁー、疲れた」

毎日の運動ノルマを達成した時、私の服は汗でべたついていた。
この時あいつはいなかったから、身体でも洗おうかなと考えて『
台所の流しに向かった』。

身体を洗うわけだから当然服は全部脱いで流しの中でタワシと石
鹸使って身体を洗った。

「霊夢？ こっちにいる……の……」

後は察しの通り。流しで身体を洗う私を窓の隙間からあいつが見
ていた。

目が合ってから重い沈黙がしばらく続いたかと思うと、

「ぎやははははは！ ひゃ、ひゃ、あはははははっ！ ひい、ひい
！」

と腹を抱えて大爆笑された。同時に私の中で何かが切れた。

「み、見てんじゃねえええーっ！」

素早く服を着て追いかけてここが始まった訳だ。

「な、流しで身体洗うとか！ ガス止められた貧乏学生じゃないん
だからさあ！ あっははははは！」

「誰が貧乏学生よ！ 待ちなさいよ！ ぶっ飛ばしてやるからよお
！！！」

「待ってと言われて待つ馬鹿じゃないわよーだ！」

……今思い返して考えたら低レベルな争いだったわね……。ある意味黒歴史。

しかし、毎日楽しくしていた訳でもない。

私は本物の博麗霊夢で稟と一緒にいる方が偽物の私。だがどういうわけか、偽物が経験した出来事は私の頭に入ってくる。

「偽物とはいえ、鏡で映し出した正真正銘もう一人の霊夢なんだから、経験は共有されるのよ」

確かに偽物が経験した事は私の頭に入ってくる。紅魔館のパーティーの後もしっかり覚えている。工場長が美鈴に阻止された事。梨音を抱きしめた事。神社でテロリスト対策を話し合った事。稟と一緒に文の家に行った事。

私が動かなくても偽物が見聞きした経験は情報として頭に来るから、あながち楽なものである。

だけど、裏返せば向こうで悲惨な出来事が起きても私はただ事実を知る事しか出来ないのだ。もしそうになったら、その歯痒い思いをどう押し殺せというのだ？

無惨にもそれは現実となった。

楓が死んだあの日はどれだけ私と稟に影響を与えただろうか。

偽物は目の前で死に逝く楓を見ていた。だから私の頭にも事実だけが残った。あの悍ましい光景と共に。

でも私はまだ希望があった。だって今ここには楓の上司がいるのだから。

あいつはちようど部屋の卓袱台に手帳を広げて何かを書いている途中だった。

「どうかしたのか、霊夢？」

私に振り向きもせずにボールペン？　とかいう字を書ける道具を走らせながら聞いてきた。

正直偽物同様今すぐ泣きたかったけど、ぐっと堪えて言った。

「……楓が死んだわ……」

瞬間、振り向きはしないもののボールペンの動きが止まった。

「迷いの竹林で……テロリスト達に……」

「……そうか。わざわざ報告ありがとう」

そう言うのと再びボールペンを走らせ始めた。

俄かに信じられなかった。自分の部下が死んだというのにまるで興味ありません的な感じで受け流された。

「あんた、楓が死んだのよ！？」

「ああ、分かった分かった」

今度はペンも止めずに聞き流された。

「あんた、何なのよ!? その態度は!?!? あんたの部下が死んだのよ!」

「だから何? 私に楓への哀悼の言葉を言わせたいって事?」

さも平然と返す。あまりにも冷たく、いや、冷酷が正しい。

「だいたい、楓が死んだのは楓自身のミスだ。私がとやかく言っても無駄だし。さ、早く部屋から出て。私はまだ作業が残ってるから」

気づかない内に、いや気づいてる。コイツに対して怒りが湧き上がるのが。爪が皮膚に食い込むまで握り拳を固く閉じていた。

「まだいるの? 私はいちいち人の死に構う暇が無いんだ」

「へえ。あんた、人の死を、命をさも当然の如く軽く扱うのねえ」

私の変化に気づいたらしく、ボールペンの動きを止めて卓袱台に置いた。

というより作業が終わってボールペンを置いたようにも見えた。

それが私を苛立たせた。気に喰わない。なんでこんな薄情な奴が楓の上司なんだ? 楓が可哀相じゃない。

口で言っても分からないなら、実力行使しかない。固く閉じた拳を振り上げてあいつを殴ろうとした。

「こっの、分からず屋があ!」

空振り。真っ直ぐ放った拳は座っているあいつに簡単に避けられ、それどころかあいつの左手が私の身体に減り込んでいた。カウンタ―だった。

「うぐっ!？」

重い一撃。腹部を襲う鈍い痛みにうずくまった。あいつは立ち上がると人を見下すような表情をしていた。

「幻想郷の巫女風情がっ! 私達の世界の事情に口を出すんじゃないっ!！」

「っ!？」

一瞬だった。周りの空気が変わった。その変化で初めてあいつがキレたのが分かった。

「いいか! 霊夢にとっても私にとっても人の死を軽んじるべきではないのは分かってる! だが私達はいちいち一人の死に構う暇は無いんだ!」

今までの空気から一変した、威圧感がある。まるで神奈子達が持ち合わせているようなあの威圧感に似ていた。

「霊夢、あなたにとっては人の死を間近で見るのは初めてだし、親しい仲となれば尚更であろう! けどな、私達PMCやRRFにとって場所は変われど戦争をしている事に変わりはないんだっ!」

「……」

「戦争は霊夢達が幻想郷でばかばかやるルール上の決闘とは次元が

違う！ 生死の境界線上で戦う殺し合いだ！ それも一対一ではなく多対多、その規模も万単位！ 私は霊夢の約一・五倍しか生きてないが多くの修羅場をくぐり抜けてきた。当然戦うのだから多くの犠牲、人の死が付き物だ。だがいちいち構ってはいつまでも引きずり、その一瞬の差で自分も死ぬかもしれない。私達は死よりも生に執着する。楓もその覚悟で幻想郷に来た。霊夢、あなたはその覚悟を踏みにじろうとしているのが分からないかしら！」

何も言えない。私には到底理解出来ない話であるから詭弁にしか聞こえない。でもコイツは本気だ。だから何も言えなかった。

「いずれ目的を達成したR R Fは近い内に博麗神社に現れる。だから私は霊夢を隔離した。いくら幻想郷最強でも、所詮形式上の決闘。本気で人を殺した事のないあなたには太刀打ち出来るはずがないわ。楓も私も幻想郷保全に行動しているのよ。分かったかしら！」

私はコクんと頷いた。多分何も考えてなかった。

言いたいだけ言った後、「少し様子を見てくる」と、鏡の外側に出ていった。

一人残された私は、その場で泣いた。我慢していた悲しみが出たのもあるが、なにより私の心に敗北感だけが残っていた。だから悔し泣きだったのだろう。それも嗚咽が出る程の。

私の予想通り稟もショックで引きこもってたけどなんとか立ち直ってくれた。

稟は仙界でしばらく修業するようだ。そんな折にあいつは私に数枚の紙を渡して来た。

「何の紙よ？」

「今から霊夢を幻想郷に戻す」

って事は私はもとの幻想郷に帰れるって訳！？ やっと解放される！

「あ、ただし一時的だけ。長く居すぎるとバランスが崩れる」

「え？ じゃ私は帰れないの？」

「逃げようとしても必ず連れ戻すから。でないと幻想郷自体消滅するわよ？」

やっぱりうまい話はないのか……。

「で、話戻すけどこれは何？」

「ちょっとした情報を書いた紙。今からそれを幻想郷の北側周辺に配って貰いたい」

話が見えない。だいたいちょっとした情報って何よ？

「具体的には紅魔館と守矢神社、間欠泉地下センター経由の地霊殿、八雲邸に配って貰いたい。もう一人の霊夢はそこ以外の主要場所を回るから」

「なんで私がしないといけない訳？」

だったら他に頼めばいいのに。私が二人いる事が危険ならしなくていいものを。

「霊夢だからこそ頼んでいるのよ。あ、でも配るだけで余計なお喋りとか寄り道無しで極力人妖に会わないようにね。こっそり置いておくとかすればいいから」

ていうか一方的に話すなよ。なんで駄目な訳よ？ 説明は長いし途中は端折るし、ため息が出る。

「ハア……面倒臭いけど……」

「待った。最後に、絶対にもう一人の霊夢に会わない事。そこはなんとか調整はしておくけど……全く同じ人物が至近距離で会えばその空間の歪みは一瞬で頂点に達して存在もろとも消えるから」

「あんたの能力ってホントに面倒臭いわ……」

結局、幻想郷保全とRRFへの対抗策としか説明してくれず、私は一時的に幻想郷へ戻る事になった。

そういや、コイツの名前聞いてないや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302s/>

東方介入伝

2011年12月29日01時57分発行